



Informatica® PowerExchange
10.5.2

インストール&アップグ レードガイド

本ソフトウェアおよびマニュアルは、使用および開示の制限を定めた個別の使用許諾契約のもとでのみ提供されています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。

米政府の権利プログラム、ソフトウェア、データベース、および関連文書や技術データは、米国政府の顧客に配信され、「商用コンピュータソフトウェア」または「商業技術データ」は、該当する連邦政府の取得規制と代理店固有の補足規定に基づきます。このように、使用、複製、開示、変更、および適応は、適用される政府の契約に規定されている制限およびライセンス条項に従うものとし、政府契約の条項によって適当な範囲において、FAR 52.227-19、商用コンピュータソフトウェアライセンスの追加権利を規定します。

Informatica、Informatica ロゴ、PowerCenter、および PowerExchange は、米国およびその他の国における Informatica LLC の商標または登録商標です。Informatica の商標の最新のリストは、次の Web サイトにあります <https://www.informatica.com/trademarks.html>。その他の企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

オプトアウトの権利の制限の下、本ソフトウェアによって、本ソフトウェアがデプロイされているコンピューティングおよびネットワーク環境に関する情報、デプロイメントのデータ使用状況およびシステム統計情報が米国の Informatica に自動的に送信されます。この送信は Informatica のプライバシーポリシーの下にサービスの一部と見なされ、Informatica は、<https://www.informatica.com/in/privacy-policy.html> のプライバシーポリシーに従って、この情報を使用または処理します。使用状況の収集は、Administrator ツールで無効にすることができます。

本ソフトウェアまたはドキュメンテーション（あるいはその両方）の一部は、第三者が保有する著作権の対象となります。必要な第三者の通知は、製品に含まれています。

特許については、<https://www.informatica.com/legal/patents.html> を参照してください。

本マニュアルの情報は、予告なしに変更されることがあります。このドキュメントで問題が見つかった場合は、infa_documentation@informatica.com までご報告ください。

Informatica 製品は、それらが提供される契約の条件に従って保証されます。Informatica は、商品性、特定目的への適合性、非侵害性の保証等を含めて、明示的または黙示的ないかなる種類の保証をせず、本マニュアルの情報を「現状のまま」提供するものとします。

目次

序文	9
Informatica のリソース.....	9
Informatica Network.....	9
Informatica ナレッジベース.....	9
Informatica マニュアル.....	9
Informatica 製品可用性マトリックス.....	10
Informatica Velocity.....	10
Informatica Marketplace.....	10
Informatica グローバルカスタマサポート.....	10
 第 1 章 : PowerExchange のインストールとアップグレードの概要	11
インストールとアップグレードガイドの範囲.....	11
PowerExchange の概要.....	12
PowerExchange のコンポーネント.....	12
PowerExchange エージェント.....	13
PowerExchange Condense.....	13
PowerExchange 環境変更キャプチャルーチン (environmental change capture routine: ECCR)	13
PowerExchange リスナ.....	13
PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用)	14
PowerExchange ロgger (z/OS 用)	14
PowerExchange Navigator.....	14
PowerExchange コンポーネントのインストール.....	14
 第 2 章 : インストール計画	16
インストール計画の概要.....	16
PowerExchange のインストール場所.....	17
PowerExchange のソフトウェア要件.....	17
IBM i のソフトウェア要件.....	17
Linux、UNIX、および Windows のソフトウェア要件.....	18
Amazon RDS データソースのソフトウェア要件.....	22
z/OS のソフトウェア要件.....	23
その他の Informatica 製品でサポートされる PowerExchange のソースとターゲット.....	25
Windows の PowerExchange の 32 ビット実行可能ファイルと 64 ビット実行可能ファイル.....	28
PowerExchange ライセンスキー.....	29
PowerExchange ライセンスキーの取得方法.....	29
PowerExchange ライセンスキーの入力.....	29
PowerExchange と PowerCenter の相互運用性.....	30
Informatica サービスと PowerExchange の相互運用性製品.....	31
PowerExchange と Informatica Intelligent Cloud Services データ統合サービスとの相互運用性.....	31

PowerExchange と PowerExchange CDC Publisher との相互運用性.	32
PowerExchange と Informatica Data Archive の相互運用性.	33
PowerExchange 間の相互運用性.	33
ダウンロードした PowerExchange インストールファイルの構成.	33
第 3 章 : アップグレード計画.	35
アップグレード計画の概要.	35
PowerExchange データの管理方式.	35
アップグレードシナリオ.	36
既存のインストール場所と既存のデータの場所のシナリオ.	37
新しいインストール場所と既存のデータの場所のシナリオ.	37
新しいインストール場所と新しいデータの場所のシナリオ.	37
データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行.	38
同じバージョンレベルでの PowerExchange システム間のリソースの移行.	39
IBM i での新しいバージョンレベルへのデータマップの移行.	39
IBM i での新しいバージョンレベルへのキャプチャ登録と抽出マップの移行.	39
Linux、UNIX および Windows での新しいバージョンレベルへのデータマップの移行.	39
Linux、UNIX および Windows での新しいバージョンレベルへのキャプチャ登録と抽出マッ プの移行.	40
z/OS での新しいバージョンレベルへのデータマップの移行.	40
z/OS での新しいバージョンレベルへのキャプチャ登録と抽出マップの移行.	41
第 4 章 : IBM i での PowerExchange のインストールとアップグレード.	43
IBM i インストールの概要.	43
IBM i へのフルインストールの実行.	44
IBM i に PowerExchange をインストールする前に.	44
IBM i へのフルインストールのタスクフロー.	45
PowerExchange の IBM i へのインストール.	46
IBM i に PowerExchange をインストールした後に.	53
PowerExchange の IBM i でのアップグレード.	53
IBM i で PowerExchange をアップグレードする前に.	54
PowerExchange の IBM i でのアップグレード.	54
IBM i で PowerExchange をアップグレードした後に.	55
IBM i へのホットフィックスのインストール.	56
IBM i にホットフィックスをインストールする前に.	56
IBM i へのホットフィックスのインストールのタスクフロー.	57
IBM i へのホットフィックスのインストール.	57
パラメータファイルの保存.	59
インストールログファイルの表示.	59
PowerExchange の IBM i でのアンインストール.	59

第 5 章 : Linux および UNIX での PowerExchange のインストールとアップグレード	61
Linux および UNIX のインストールの概要	61
Linux または UNIX へのフルインストールの実行	61
Linux または UNIX に PowerExchange をインストールする前に	61
フルインストールのタスクフロー	63
Linux または UNIX への PowerExchange のインストール	64
Linux または UNIX に PowerExchange をインストールした後に	69
Linux または UNIX へのアップグレードインストールの実行	71
Linux または UNIX に PowerExchange をアップグレードする前に	71
Linux または UNIX へのアップグレードインストールのタスクフロー	72
Linux または UNIX に PowerExchange をアップグレードした後に	72
Linux または UNIX へのホットフィックスのインストール	73
Linux または UNIX にホットフィックスをインストールする前に	73
Linux または UNIX へのホットフィックスのインストールのタスクフロー	74
Linux または UNIX へのホットフィックスのインストール	74
ローカライズされた環境用の PowerExchange の構成ファイル	76
第 6 章 : Windows での PowerExchange のインストールとアップグレード	77
Windows へのインストールの概要	77
Windows へのフルインストールの実行	78
Windows に PowerExchange をインストールする前に	78
フルインストールのタスクフロー	80
PowerExchange のインストール	80
Windows に PowerExchange をインストールした後に	83
Windows へのアップグレードインストールの実行	84
Windows で PowerExchange をアップグレードする前に	84
Windows への PowerExchange のアップグレード	84
Windows で PowerExchange をアップグレードした後に	84
Windows での PowerExchange ホットフィックスのインストール	85
Windows にホットフィックスをインストールする前に	85
Windows へのホットフィックスのインストールのタスクフロー	86
Windows へのホットフィックスのインストール	86
ローカライズされた環境用の PowerExchange の構成ファイル	87
Windows での PowerExchange のアンインストール	88
第 7 章 : z/OS での PowerExchange のインストールとアップグレード	90
z/OS のインストールの概要	90
z/OS のセキュリティ	90
インストールエラーと起動エラー	91
z/OS へのフルインストールの実行	91

z/OS へのフルインストールを実行する前に.	91
z/OS へのフルインストールのタスクフロー.	92
PowerExchange データセットの領域に関する要件.	93
段階 I: PowerExchange の基本ソフトウェアのインストール.	96
段階 II: PowerExchange CDC ソフトウェアのインストール.	107
段階 III: 特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアのインストール.	110
段階 IV: 以前にコピーされた RUNLIB メンバの削除.	111
z/OS に PowerExchange をインストールした後に.	112
z/OS でのアップグレードの実行.	112
z/OS でアップグレードする前に.	113
z/OS でのアップグレードのタスクフロー.	113
段階 I: PowerExchange の基本ソフトウェアのアップグレード.	114
段階 II: PowerExchange CDC ソフトウェアのアップグレード.	126
段階 III: 特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアのアップグレード.	127
段階 IV: アップグレード後の作業.	130
z/OS でアップグレードした後に.	132
z/OS へのホットフィックスのインストール.	132
z/OS にホットフィックスをインストールする前に.	132
z/OS へのホットフィックスインストールのタスクフロー.	133
段階 I: z/OS へのホットフィックスのインストール.	133
段階 II: 特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアの更新.	138
段階 III: ホットフィックスインストール後の作業.	139
z/OS Installation Assistant リファレンス.	139
[PowerExchange z/OS Installation Assistant へようこそ] ページ.	140
[フルインストール] ページ.	140
[グローバルパラメータ] ページの選択 (フルインストール)	140
データセットグループの詳細ページの選択.	142
[全般的なパラメータ] ページ.	145
[データソース] ページ.	148
[CDC 共通パラメータ] ページ.	149
[Adabas パラメータ] ページ.	151
[Datacom パラメータ] ページ.	153
[DB2 パラメータ] ページ.	154
[DB2 CDC パラメータ] ページ.	156
[IDMS パラメータ] ページ.	158
[IDMS CDC パラメータ] ページ.	159
[IMS パラメータ] ページ.	160
[IMS CDC パラメータ] ページ.	161
[MQ Series パラメータ] ページ.	162
[VSAM パラメータ] ページ.	163
[Runlib JCL の作成] ページ.	164
[メインフレームへのファイルの転送] ページ.	165

[ファイル転送ステータスの表示] ページ	166
[新リリースへのアップグレード] ページ	166
[既存のパラメータのインポート] ページ	167
[パラメータの確認] ページ	168
[グローバルパラメータ] ページの確認 (既存のデータセット名を使用したアップグレード)	168
[グローバルパラメータ] ページの確認 (新しいデータセット名を使用したアップグレード)	169
データセットグループの詳細ページの選択 (既存のデータセット名でのアップグレード)	170
データセットグループの詳細ページの選択 (新しいデータセット名でのアップグレード)	172
[データセットのバックアップ] ページ	174
[ホットフィックスインストール] ページ	175
[グローバルパラメータ] ページ (ホットフィックス)	175
[データセットグループの詳細] ページ (ホットフィックス)	176
付録 A: アップグレードに関する考慮事項	178
アップグレードに関する考慮事項の概要	178
PowerExchange と PowerCenter のアップグレードの連携	179
CDC セッションのリスタートに関する考慮事項	179
アップグレードに関する考慮事項 PowerExchange 10.5.1 に関する	181
IBM i での PowerExchange へのアップグレードに関する考慮事項	181
PowerExchange 10.5 のアップグレードに関する考慮事項	181
CICS TS 5.6 をサポートする CICS/VSAM ECCR プログラムの新しい SAMPLIB メンバ	181
IMS 同期 CDC 用の PowerExchange ECCR CRG.LOAD ライブラリの更新されたコンポーネント	182
IMS 同期 CDC ソースを使用したセッションのターゲットの再実体化	182
アップグレードに関する考慮事項 PowerExchange 10.4 に関する	183
IMS 同期 CDC 用の PowerExchange ECCR CRG.LOAD ライブラリの更新されたコンポーネント	183
PowerExchange 10.2 HotFix 2 のアップグレードに関する考慮事項	183
CICS/TS 5.5 をサポートする CICS/VSAM ECCR プログラムの新しい SAMPLIB メンバ	184
PowerExchange ロgger CDCT ファイルに追加されたチェックサム	184
PowerExchange 10.2 HotFix 1 のアップグレードに関する考慮事項	184
IMS 同期 CDC 用の PowerExchange ECCR CRG.LOAD ライブラリの更新されたコンポーネント	184
CICS/TS 5.4 をサポートする CICS/VSAM ECCR プログラムの新しい SAMPLIB メンバ	185
PowerExchange 10.2 のアップグレードに関する考慮事項	185
i5/OS での PowerExchange へのアップグレードに関する考慮事項	185
IMS 同期 CDC 用の PowerExchange ECCR CRG.LOAD ライブラリの更新されたコンポーネント	185
付録 B: PowerExchange 環境	187
PowerExchange 環境の概要	187
i5/OS 上の PowerExchange 環境	188
i5/OS 上の PowerExchange データライブラリとデータファイル	188
i5/OS 上の PowerExchange データを指す設定パラメータ	189

i5/OS 上の PowerExchange 起動コマンドのファイルパラメータ.	190
Linux、UNIX、および Windows 上の PowerExchange 環境.	190
Linux、UNIX、および Windows 上の PowerExchange データファイルとディレクトリ.	191
Linux、UNIX、および Windows 上の PowerExchange ファイルを参照する設定パラメータ.	192
Linux、UNIX、Windows で、PowerExchange のライセンスファイル、構成ファイル、メッ セージログファイルをポイントする環境変数.	192
Linux、UNIX、および Windows 上のデータファイルを指す起動コマンドパラメータ.	193
z/OS 上の PowerExchange 環境.	193
z/OS 上の PowerExchange データセット.	194
z/OS 上の PowerExchange データを指す DD 文.	196

付録 C : IBM i への手動インストール. 198

IBM i 手動インストールの概要.	198
IBM i へのフルインストールの実行.	198
IBM i に PowerExchange をインストールする前に.	198
IBM i へのフルインストールのタスクフロー.	200
PowerExchange の IBM i へのインストール.	200
IBM i に PowerExchange をインストールした後に.	207
PowerExchange の IBM i でのアップグレード.	207
アップグレードする前に IBM i で PowerExchange を.	208
PowerExchange の IBM i でのアップグレード.	208
IBM i で PowerExchange をアップグレードした後に.	209
IBM i へのホットフィックスのインストール.	210
IBM i にホットフィックスをインストールする前に.	210
IBM i へのホットフィックスのインストールのタスクフロー.	211
IBM i へのホットフィックスのインストール.	211

索引. 214

序文

『*Informatica® PowerExchange® Installation* インストールおよびアップグレードガイド』を使用して、PowerExchange 製品のインストールおよびアップグレード方法およびホットフィックスの適用方法を学習します。このガイドには、PowerExchange のインストールまたはアップグレード実行の計画情報も含まれています。

Informatica のリソース

Informatica は、Informatica Network やその他のオンラインポータルを通じてさまざまな製品リソースを提供しています。リソースを使用して Informatica 製品とソリューションを最大限に活用し、その他の Informatica ユーザーや各分野の専門家から知見を得ることができます。

Informatica Network

Informatica Network は、Informatica ナレッジベースや Informatica グローバルカスタマサポートなど、多くのリソースへの入口です。Informatica Network を利用するには、<https://network.informatica.com> にアクセスしてください。

Informatica Network メンバーは、次のオプションを利用できます。

- ナレッジベースで製品リソースを検索できます。
- 製品の提供情報を表示できます。
- サポートケースを作成して確認できます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica ナレッジベース

Informatica ナレッジベースを使用して、ハウツー記事、ベストプラクティス、よくある質問に対する回答など、製品リソースを見つけることができます。

ナレッジベースを検索するには、<https://search.informatica.com> にアクセスしてください。ナレッジベースに関する質問、コメント、ご意見の連絡先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルポータルでは、最新および最近の製品リリースに関するドキュメントの膨大なライブラリを参照できます。マニュアルポータルを利用するには、<https://docs.informatica.com> にアクセスしてください。

製品マニュアルに関する質問、コメント、ご意見については、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) までご連絡ください。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス (PAM) には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。Informatica PAM は、<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices> で参照できます。

Informatica Velocity

Informatica Velocity は、Informatica プロフェッショナルサービスが開発したヒントとベストプラクティスのコレクションで、多数のデータ管理プロジェクトから得た実体験に基づいています。Informatica Velocity には、世界中の組織と連携してデータ管理ソリューションを計画、開発、デプロイ、管理する Informatica コンサルタントによる集合知を表しています。

Informatica Velocity リソースには、<http://velocity.informatica.com> からアクセスしてください。Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica Marketplace

Informatica Marketplace は、お使いの Informatica 製品を拡張したり強化したりするソリューションを検索できるフォーラムです。Marketplace で、Informatica デベロッパーやパートナーからの多数のソリューションを活用すれば、生産性を向上したり、プロジェクトでの実装時間を短縮したりできます。Informatica Marketplace は、<https://marketplace.informatica.com> からアクセスしてください。

Informatica グローバルカスタマサポート

電話または Informatica Network を介してグローバルカスタマサポートに連絡できます。

各地域の Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica Web サイト (<https://www.informatica.com/services-and-training/customer-success-services/contact-us.html>) を参照してください。

Informatica Network のオンラインサポートリソースを見つけるには、<https://network.informatica.com> にアクセスして eSupport オプションを選択します。

第 1 章

PowerExchange のインストールとアップグレードの概要

この章では、以下の項目について説明します。

- [インストールとアップグレードガイドの範囲, 11 ページ](#)
- [PowerExchange の概要, 12 ページ](#)
- [PowerExchange のコンポーネント, 12 ページ](#)

インストールとアップグレードガイドの範囲

このガイドでは、PowerExchange のインストールとアップグレードの手順を説明しています。また、前提条件や計画情報も扱っています。

このガイドでは、以下の種類のインストールを実行するための、順を追った手順を説明しています。

- **フルインストール。**すべての PowerExchange ソフトウェアがインストールされます。PowerExchange を初めてインストールする場合、または新しい場所にインストールする場合は、フルインストールを実行します。
- **アップグレードインストール。**既存のインストールの上に PowerExchange の新しいリリースがインストールされます。
- **ホットフィックスインストール。**PowerExchange リリースに対するホットフィックスが同じリリースレベルの既存のインストールの上にインストールされます。

以下の種類のオペレーティングシステム向けの手順が説明されています。

- IBM i (旧 i5/OS)
- Linux および UNIX
- Windows
- z/OS

このガイドではまた、インストールやアップグレードを実行する前に検討すべき以下の計画トピックも扱っています。

- PowerExchange のコンポーネント。このトピックは、新しい PowerExchange ユーザーに該当します。
- サポートされている各データベースおよびオペレーティングシステムのソフトウェア要件。このトピックは、すべての PowerExchange ユーザーに該当します。
- ライセンスキー。このトピックは、すべての PowerExchange ユーザーに該当します。

- PowerExchange の、PowerCenter(R)および旧リリースの PowerExchange との相互運用性。このトピックは、PowerExchange の初めてのインストールまたは新しいリリースへのアップグレードを予定しているすべてのユーザーを対象としています。
- PowerExchange 環境。PowerExchange のデータファイルとディレクトリ、設定パラメータ、環境変数、および各オペレーティングシステムの PowerExchange 環境を構成するその他の要素について説明しています。
- アップグレード計画。さまざまなアップグレードシナリオにおいて PowerExchange データを保持するための方法および手順について説明します。このトピックは、すべての PowerExchange ユーザー、特に新しい PowerExchange リリースにアップグレードするユーザーを対象としています。PowerExchange を初めてインストールするユーザーも、将来のアップグレードができるだけ簡易に行えるように、この情報を使用して環境を計画することができます。
- アップグレードに関する考慮事項。特定の PowerExchange リリースへのアップグレードおよび PowerCenter のアップグレードの連携に関する考慮事項について説明します。この項目は、新しい PowerExchange リリースにアップグレードする PowerExchange ユーザーを対象としています。

注意: システムに対するインストールは、一度に種類のみ実行します。software フォルダーと patches フォルダーの両方にソフトウェアをインストールすると、インストールが正しく動作しません。

PowerExchange の概要

PowerExchange を使用すると、データソースとデータターゲットを同期させることができます。

PowerExchange は、以下の基本機能を実行します。

- バルクデータ移動。データターゲットの実体化または完全リフレッシュを行うには、この機能を使用します。この機能を使用すると、異なるプラットフォーム間で大量のデータを効果的に移動できます。ただし、バルクデータ移動操作を頻繁に行うと、容量、時間、担当者のリソースに関して高くつく可能性があります。
- 変更データキャプチャ (change data capture: CDC)。データソースに変更をキャプチャして近似リアルタイムまたは非同期でターゲットに適用するには、この機能を使用します。PowerExchange CDC でキャプチャできるのは、データソースに加えられた挿入、更新、削除による変更です。PowerExchange CDC のパフォーマンスに与える影響、およびソースデータベース、テーブル、ファイルの可用性に与える影響は最小限です。

PowerExchange には、次の 2 種類の CDC が用意されています。

- 同期 CDC。変更を実行するトランザクションに統合することによって、リアルタイムで行われます。
- 非同期 CDC。データベースログファイルから変更をキャプチャします。

各種データターゲットに対してバルクデータ移動およびデータ変更を可能にするため、PowerExchange は PowerCenter と共に動作します。

PowerExchange のコンポーネント

PowerExchange では、使用中のオペレーティングシステムと実行中の機能 (CDC、バルクデータ移動、またはその両方) に応じて、以下のコンポーネントのいくつかまたはほとんどが使用されます。

PowerExchange エージェント

z/OS システムでは、PowerExchange エージェントがキャプチャ登録情報の検証、いくつかの種類の ECCR への登録情報の提供、およびグローバルキューと CDC コンポーネント間のデータフローの管理を行います。

キャプチャ登録を提供する ECCR は、以下のとおりです。

- DB2 for z/OS
- IMS 同期
- バッチ VSAM
- CICS/VSAM

他の ECCR は、CCT データセットからキャプチャ登録情報を直接読み取ります。PowerExchange エージェントでは、すべての ECCR について、キャプチャ登録情報が検証されます。

また、各種 PowerExchange CDC コンポーネントでグローバルキューおよびデータフローも管理されます。

z/OS で CDC を実行する場合は、PowerExchange エージェントを使用する必要があります。

PowerExchange Condense

i5/OS または z/OS システムでは、PowerExchange Condense が変更データを要約ファイルに格納し、必要に応じてそれを圧縮します。要約ファイルは、正常に完了した Unit of Work (UOW) のみを、終了時間に基づく時系列順に格納します。抽出セッションが実行されている場合、変更データは、変更ストリームからではなく、要約ファイルから抽出されます。複数の Condense ジョブを同時に実行できます。

i5/OS および z/OS では、PowerExchange Condense の使用はオプションです。Linux、UNIX、または Windows では、PowerExchange ロggerを使用します。

PowerExchange 環境変更キャプチャルーチン (environmental change capture routine: ECCR)

z/OS システム上で、ECCR がデータソースから変更データをキャプチャし、キャプチャされた変更を記録用に PowerExchange ロggerに渡します。PowerExchange には、z/OS 上のデータソースのタイプごとに ECCR が用意されています。ソースタイプに応じて、ECCR は、変更が加えられた時点でそれを同期にキャプチャするか、データベースログから非同期にキャプチャします。

z/OS で CDC を実行する場合は、データソースの ECCR を使用する必要があります。

PowerExchange リスナ

PowerExchange Listener は、プラットフォーム全体にわたるアクティビティの調整、要求の開始、サードパーティのアプリケーションからの要求の処理を行います。

具体的には、PowerExchange Listener は以下の機能を実行します。

- 非リレーショナルソースと DB 2 テーブル（オプション）のバルクデータ移動ジョブおよび CDC のデータマップを管理します。
- CDC データソースのキャプチャ登録および抽出マップを管理します。
- データベース行のテストを行うために、PowerExchange Navigator でバルクデータと変更データを使用できるようにします。
- PowerCenter セッションの実行時に、PowerCenter でバルクデータと変更データを使用できるようにします。

- 別のノードにある他の PowerExchange Listener と対話し、PowerExchange Navigator、PowerCenter Integration Service、データソース、および PowerExchange 処理がオフロードされるすべてのシステム間の通信を促進します。

データソースまたはデータターゲットが PowerExchange を使用しているシステム上にない場合は、データにアクセスできる PowerExchange リスナも実行する必要があります。

バルクデータ移動および CDC を実行する場合は、PowerExchange Listener を使用する必要があります。

PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）

PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）は、変更データをキャプチャして PowerExchange ロgger のログファイルに格納します。ログファイルには、正常にコミットされた UOW だけが、終了時間に基づく時系列順に格納されます。抽出セッションが実行されるときに、データベースログからではなく、PowerExchange ロgger ログファイルから変更データが抽出されます。

Linux、UNIX、または Windows では、PowerExchange ロgger の使用はオプションです。i5/OS または z/OS では、PowerExchange Condense を使用します。

PowerExchange ロgger（z/OS 用）

PowerExchange ロgger（z/OS 用）は、ロgger に接続している ECCR からキャプチャした変更データを受信し、その変更データをログデータセットに格納します。その時点で、変更データはリアルタイム抽出または PowerExchange Condense ジョブで使用できるようになります。

z/OS で CDC を実行する場合は、PowerExchange ロgger を使用する必要があります。

PowerExchange Navigator

PowerExchange Navigator は、バルクデータの抽出や変更データのキャプチャ元であるデータソース用に、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップを定義および管理するためのグラフィカルユーザーインターフェース (GUI) です。

PowerExchange は、この定義を使用して処理するデータソースを判断します。キャプチャ登録および抽出マップは、CDC のみに関係します。バルクデータ移動操作の実行およびキャプチャ登録用のメタデータの提供には、データマップが必要となります。

PowerExchange コンポーネントのインストール

インストールする必要がある PowerExchange コンポーネントは、実行する機能（バルクデータ移動操作、CDC 処理、またはその両方）によって異なります。

以下の表に、バルクデータ移動または CDC の実行に必要なコンポーネントと、コンポーネントのカスタマイズに関連する PowerExchange ドキュメントへの参照を示します。

コンポーネント	バルク	CDC	参照
PowerExchange エージェント	-	X	『PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)』
PowerExchange Condense	-	X オプション	- 『PowerExchange CDC ガイド (i5/OS 版)』 - 『PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)』

コンポーネント	バルク	CDC	参照
各データソースの PowerExchange 環境変更キャプ チャルーチン (environmental change capture routine: ECCR)	-	X	『PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)』
PowerExchange Listener	X	X	<ul style="list-style-type: none"> - 『PowerExchange リファレンスマニュアル』 - 『PowerExchange バルクデータ移動ガイド』 - 『PowerExchange CDC ガイド (i5/OS 版)』 - 『PowerExchange CDC ガイド (Linux、UNIX、Windows 用)』 - 『PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)』
PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用)	-	X オプション	『PowerExchange CDC ガイド (Linux、UNIX、Windows 用)』
PowerExchange ロgger (z/OS 用)	-	X	『PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)』
PowerExchange Navigator	X	X	<ul style="list-style-type: none"> - PowerExchange ナビゲータユーザガイド - 『PowerExchange リファレンスマニュアル』

第 2 章

インストール計画

この章では、以下の項目について説明します。

- [インストール計画の概要, 16 ページ](#)
- [PowerExchange のインストール場所, 17 ページ](#)
- [PowerExchange のソフトウェア要件, 17 ページ](#)
- [Windows の PowerExchange の 32 ビット実行可能ファイルと 64 ビット実行可能ファイル, 28 ページ](#)
- [PowerExchange ライセンスキー, 29 ページ](#)
- [PowerExchange と PowerCenter の相互運用性, 30 ページ](#)
- [Informatica サービスと PowerExchange の相互運用性製品, 31 ページ](#)
- [PowerExchange と Informatica Intelligent Cloud Services データ統合サービスとの相互運用性, 31 ページ](#)
- [PowerExchange と PowerExchange CDC Publisher との相互運用性, 32 ページ](#)
- [PowerExchange と Informatica Data Archive の相互運用性, 33 ページ](#)
- [PowerExchange 間の相互運用性, 33 ページ](#)
- [ダウンロードした PowerExchange インストールファイルの構成, 33 ページ](#)

インストール計画の概要

製品を正しくインストールして使用するには、PowerExchange を初めてインストールする前または新しいリリースにアップグレードする前に、インストール計画の情報を確認する必要があります。

次の計画タスクを実行します。

- オペレーティングシステム、データソース、およびターゲットが、PowerExchange のリリースに指定されているバージョンとメンテナンスの要件を満たし、使用目的のとおり動作することを確認します。
注: データソースという用語は、一般に PowerExchange がデータを読み込むリレーショナルデータベースおよび非リレーショナルソースを表します。データターゲットという用語は、一般に PowerExchange がデータを書き込むリレーショナルデータベースおよび非リレーショナルターゲットを表します。
- ライセンスキーを取得する。
- PowerExchange のインストールを以前のバージョンの PowerExchange または PowerCenter とともに使用する場合は、PowerExchange および PowerCenter の相互運用性に関する情報を確認する。
- 現在および将来の移行ができるだけ簡易に行えるように PowerExchange 環境を計画する。

- 以前の PowerExchange リリースからアップグレードする場合は、アップグレード計画とアップグレードに関する考慮事項の情報を確認する。「付録 A, 「アップグレードに関する考慮事項」 (ページ 178)」を参照してください。

PowerExchange のインストール場所

以下の各システムに PowerExchange をインストールします。

- 各 PowerExchange データソースまたはターゲットシステム
- PowerExchange Navigator を実行する Windows システム
- PowerCenter Client または Informatica Developer クライアントシステム
- PowerCenter Integration Service または Data Integration Service システム

PowerExchange のソフトウェア要件

オペレーティングシステムのトピックを確認して、使用しているオペレーティングシステムとデータソースが、実行する機能についてサポートされていることを確認します。

製品要件およびサポート対象プラットフォームの詳細については、次の Informatica Network で Product Availability Matrix を参照してください。

<https://network.informatica.com/community/informatica-network/product-availability-matrices>

IBM i のソフトウェア要件

PowerExchange は、バルクデータ移動および CDC 向けに、以下の 64 ビットバージョンの IBM i (i5/OS) オペレーティングシステムをサポートしています。

- 7.4
- 7.3
- 7.2

以下の表に、PowerExchange が IBM i でバルクデータ移動および CDC をサポートするデータソースまたはターゲットのバージョンを示します。

データソースまたはターゲット	バージョン	バルク	CDC
DB2 for IBM i	7.4 7.3 7.2	X	X (ソースのみ)
フラットファイル	-	X	サポートされていません。

DB2 for IBM i バージョン 7.2 の制限: 以下の制限は、DB2 for IBM i バージョン 7.2 にのみ適用されます。

- DB2 for IBM i 7.2 ソースに DB2400C アクセス方式を使用し、DBMOVER ファイルで SECURITY=(2,x)を指定する場合、ODBC を使用するバルクデータ移動操作およびデータベース行テストは次のような SQL エラーによって失敗する。

PWX-02302 CLI SQLState=42977. Native=-7022. User USER1 not the same as current user USER2.

この制限は、DB2400C アクセス方式が IBM i 7.2 で使用する DB2 インタフェースへの IBM の変更に関連しています。

- PowerExchange CDC は、DB2 の制限により、Row and Column Access Control (RCAC) ルールに従わない。RCAC ルールが適用されているテーブルのジャーナルエントリを PowerExchange が処理しようとした場合、カラムや行がルールに基づいてマスクまたはフィルタ処理されることはありません。RCAC ルールは、DB2 for IBM i 7.2 で導入されました。

QCCSID が 65535 に設定された IBM i サーバーで PowerExchange を正常に実行するには、ユーザープロファイルに有効な CCSID または LOCALE を設定する必要があります。ユーザープロファイルの LOCALE の値が *SYSVAL に設定されている場合、QLOCALE のシステム値を使用してこの設定を管理できます。

Linux、UNIX、および Windows のソフトウェア要件

Linux、UNIX、または Windows システムが、実行する予定の PowerExchange 機能のオペレーティングシステムおよびデータソース要件を満たしていることを確認します。また、オペレーティングシステムとデータソースに必要なメンテナンスを適用します。

サポートされる AIX のバージョン、データソース、ターゲット

PowerExchange は、64 ビットの IBM Power システム上で、バルクデータ移動と CDC 向けに、以下のバージョンの AIX オペレーティングシステムをサポートしています。

- 7.2
- 7.1 TL2 (最小の認証)

CDC では、bos.adt.debug パッケージをインストールして libptools_ptr.a ライブラリを取得する必要があります。このライブラリは、PowerExchange 登録グループおよびキャプチャ登録を作成するために必要です。IBM の Web サイトからパッケージをダウンロードします。

以下の表に、PowerExchange が AIX でサポートするデータソースまたはターゲットを示します。

データソースまたはターゲット	データソースまたはターゲットバージョン	バルク	CDC
Db2 for Linux, UNIX, and Windows	11.5 11.1 ¹ 10.5	X	X (ソースのみ)
フラットファイル	-	X	サポートされていません。
Oracle	19c 18c 12c R2	X	X (ソースのみ)

1. Db2 for Linux, UNIX, and Windows 11.1 のサポートは、このプラットフォームの IBM サポートに従います。

サポートされる HP-UX のバージョンとデータソース

PowerExchange は、64 ビット Itanium マシン上の HP-UX バージョン 11.31 オペレーティングシステムを、Oracle CDC ソースの REDO ログ専用のプラットフォームとしてサポートします。

Oracle Redo ログを HP-UX システムに常駐させることはできますが、PowerExchange リスナおよび PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）は、サポートされる別のオペレーティングシステムを使用したリモートマシンで実行する必要があります。

以下の表に、サポートされる Oracle のソースのバージョンを示します。

Data Source	データソースのバージョン	バルク	CDC
Oracle ¹	19c 18c 12c R2	サポートされていません。	X（ソースのみ）
1. Oracle CDC の場合、サポートされているリモートハードウェアで PowerExchange リスナと PowerExchange ロggerを実行し、それらを HP-UX の Oracle REDO ログにアクセスするように設定します。			

サポートされる Red Hat Enterprise Linux のバージョンおよびデータソースとターゲット

64 ビットの Opteron と EM64T マシンでは、PowerExchange は、バルクデータ移動と CDC 用の次の 64 ビット Red Hat Enterprise Linux バージョンをサポートしています。

- バージョン 8
- バージョン 7.4
- バージョン 6.5

注: サポートは、Vmware ESXi v4 を使用する物理マシンと仮想マシンの両方について提供されます。

zSeries では、PowerExchange は次の Linux バージョンをサポートします。

- バージョン 7.5 - Oracle のみ
- バージョン 6.9 - Oracle のみ

以下の表に、Red Hat Enterprise Linux でサポートされるデータソースまたはターゲットを示します。

データソースまたはターゲット	データソースまたはターゲットのバージョン	バルク	CDC
Db2 for Linux, UNIX, and Windows 用の Db2Db2 for Linux, UNIX, and Windows	11.5 11.1 ¹ 10.5	X	X（ソースのみ）
フラットファイル	-	X	サポートされていません。
MySQL Enterprise Edition および Community Edition ²	8.0 5.7	サポートされていません。	X（ソースのみ）

データソースまたはターゲット	データソースまたはターゲットのバージョン	バルク	CDC
Oracle	21c 19c 18c 12c R2	X	X (ソースのみ)
PostgreSQL	13.x 12.1 11.4 10.x	サポートされていません。	X (ソースのみ)
SAP S/4HANA ³	2.x	サポートされていません。	X (ソースのみ)

1. Db2 for Linux, UNIX, and Windows 11.1 のサポートは、このプラットフォームの IBM サポートに従います。
 2. MySQL Enterprise Edition は、Informatica がパッケージした MySQL 用の DataDirect ODBC ドライバで動作確認済みです。MySQL Community Edition は、MySQL ネイティブ ODBC ドライバでの動作を確認済みです。このドライバは PowerExchange CDC には付属していません。
 3. トリガーベースの SAP S/4HANA CDC の場合、SAP ライセンス要件に準拠するために、SAP Enterprise ライセンスが必要です。

サポートされる Solaris のバージョンおよびデータソースとターゲット

PowerExchange は、64 ビット SPARC システム上の Oracle Solaris バージョン 11 オペレーティングシステムを、Oracle CDC のソース REDO ログ専用のプラットフォームとしてサポートします。

Oracle Redo ログを Solaris システムに常駐させることはできますが、PowerExchange リスナおよび PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) は、サポートされる別のオペレーティングシステムを使用したリモートマシンで実行する必要があります。

以下の表に、サポートされる Oracle のソースのバージョンを示します。

Data Source	データソースのバージョン	バルク	CDC
Oracle ¹	19c 18c 12c R2	サポートされていません。	X (ソースのみ)

1. Oracle CDC の場合、サポートされているリモートハードウェアで PowerExchange ロgger と PowerExchange リスナを実行し、それらを Solaris の Oracle ログにアクセスするように設定します。

サポートされる SUSE Linux のバージョンとデータソースおよびターゲット

PowerExchange は、バルクデータ移動と CDC 用の 64 ビット Opteron EM64T マシン上の次の SUSE Linux Enterprise Server バージョンをサポートしています。

- バージョン 15
- バージョン 12 SP2

サポートは、VMware ESXi v4 を使用して物理マシンと仮想マシンの両方について提供されます。

以下の表に、SUSE Linux 上でサポートされるデータソースまたはターゲットを示します。

データソースまたはターゲット	データソースまたはターゲットのバージョン	バルク	CDC
Db2 for Linux, UNIX, and Windows	11.5 11.1 ¹ 10.5	X	X (ソースのみ)
フラットファイル	-	X	サポートされていません。
Oracle ²	19c 18c 12c R2	X	X (ソースのみ)
PostgreSQL	13.x 12.1 11.x 10.x	サポートされていません。	X (ソースのみ)

1. Db2 for Linux, UNIX, and Windows 11.1 のサポートは、このプラットフォームの IBM サポートに従います。
2. Oracle CDC の場合、サポートされているリモートハードウェアで PowerExchange ロgger と PowerExchange リスナを実行し、それらを SUSE Linux の Oracle ログにアクセスするように設定します。

サポートされる Windows のバージョン、データソース、ターゲット

PowerExchange は、バルクデータ移動と CDC 用の 64 ビット Opteron および EM64T Windows マシン上の次の Windows バージョンをサポートしています。

- Windows 2019
- Windows 2016

物理マシン、および VMware ESXi v4 を使用した仮想マシンに対して、サポートが提供されます。

以下の表に、Windows 上でサポートされているデータソースまたはターゲットを示します。

データソースまたはターゲット	データソースまたはターゲットのバージョン	バルク	CDC
フラットファイル	-	X	サポートされていません。
Db2 for Linux, UNIX, and Windows ¹	11.5 11.1 ¹ 10.5	X	X (ソースのみ)
Microsoft SQL Server	2019 2017 2016 2014 SP2 ² 2012 SP4 ²	X	X (ソースのみ)

データソースまたはターゲット	データソースまたはターゲットのバージョン	バルク	CDC
MySQL Enterprise Edition および Community Edition ³	8.0 5.7	サポートされていません。	X (ソースのみ)
Oracle	21c 19c 18c 12c R2	X	X (ソースのみ)
PostgreSQL	13.x 12.1 11.4 10.x	サポートされていません。	X (ソースのみ)
SAP S/4 Hana ⁴	2.x	サポートされていません。	X (ソースのみ)

1. Db2 for Linux, UNIX, and Windows 11.1 のサポートは、このプラットフォームの IBM サポートに従います。
 2. SQLServer バージョンの動作確認済みの最小サービスパックレベル。
 3. MySQL Enterprise Edition は、Informatica がパッケージした MySQL 用の DataDirect ODBC ドライバで動作確認済みです。Community Edition は、MySQL ネイティブ ODBC ドライバでの動作を確認済みです。このドライバは PowerExchange CDC には付属していません。
 4. トリガーベースの SAP S/4HANA CDC の場合、SAP ライセンス要件に準拠するために、SAP Enterprise ライセンスが必要です。

サポートされる PowerExchange Navigator 用 Windows のバージョン

PowerExchange Navigator が実行されているマシンでは、次の Windows バージョン（64 ビットのみ）がサポートされています。

- Windows 2019
- Windows 2016
- Windows 10

Amazon RDS データソースのソフトウェア要件

次の表に、クラウドの Amazon Relational Database Service (RDS) でサポートされているデータソースを示します。

Data Source	データソースのバージョン	バルク	CDC
Amazon RDS for MySQL	8.0 5.7	サポートされていません。	X (ソースのみ)
Amazon RDS for Oracle ¹	19c 12c R2	サポートされていません。	X (ソースのみ)

z/OS のソフトウェア要件

z/OS でのバルクデータ移動操作または CDC 処理については、サポートされる z/OS のバージョンとデータソースのリストを確認します。また、オペレーティングシステムとデータソースに必要なメンテナンスを適用します。

サポートされる z/OS のバージョン、データソース、ターゲット

PowerExchange は、バルクデータ移動および CDC 向けに、以下のバージョンの z/OS オペレーティングシステムをサポートしています。

- 2.5
- 2.4
- 2.3
- 2.2
- 2.1

注: zCloud は、PowerExchange ユーザー専用の z/OS LPAR を zCloud がプロビジョニングする場合に、PowerExchange パッチおよび CDC 接続でサポートされます。IP アドレスとポートアドレスが PowerExchange クライアントとの通信用に開いていることを確認します。

以下の表に、z/OS でバルクデータ移動と CDC 用にサポートされるデータソースとターゲットを示します。

データソースまたはターゲット	データソースまたはターゲットのバージョン	バルク	CDC
Adabas ¹	8.5.x 8.4.x 8.3.x	X	X (ソースのみ)
CA Datacom (ソースのみ)	15.1 15	X (ソースのみ)	X (ソースのみ)
CA IDMS (ソースのみ)	19 18.5	X (ソースのみ)	X (ソースのみ)
DB2 for z/OS ¹	12 11	X	X (ソースのみ)
IMS ¹	15 14 13	X	X (ソースのみ)
シーケンシャルファイル	z/OS バージョンと同じ	X	サポートされていません。
VSAM	z/OS バージョンと同じ	X	X ²

データソースまたはターゲット	データソースまたはターゲットのバージョン	バルク	CDC
CICS/VSAM - CICS トランザクションサーバー (ソースのみ)	5.6 5.5 5.4 5.3 5.2 5.1	VSAM バルクデータ移動を使用。	X (ソースのみ)
1. これらのデータソースのメンテナンス要件を参照してください。 2. PowerExchange Batch VSAM CDC は、レコードレベル共有 (RLS) モードで開いている/VSAM ファイルをサポートしません。			

Adabas のメンテナンス要件

Adabas バルクデータ移動と CDC 用の場合、Predict 製品が z/OS バージョンによってサポートされるサポート対象バージョンであり、Adabas バージョンに必要なメンテナンスがあることを確認してください。

以下の表に、Predict 製品で最低限必要なバージョンを示します。

製品	バージョン
Predict	8.3.1

Db2 for z/OS のメンテナンス要件

使用する Db2 for z/OS のバージョンによっては、PowerExchange CDC が適切に機能するように、使用している Db2 for z/OS システムに IBM APAR を適用する必要があります。

以下の表は、PowerExchange CDC の必須または推奨される APAR の一覧です。

APAR 番号	APAR タイトル	D2 バージョン
PI67145	AN IFI 306 READS REQUEST BECOMES DEADLOCKED READING A COMPRESSED LOG RECORD FROM AN ARCHIVE LOG TAPE 注: 圧縮ディクショナリの拡張する必要がある LOG レコードが、同じテープボリューム上にある場合に発生します。	Db2 11
PM93957	IFCID306 によって返されるログレコード LRSN が、データ共有グループのホストメンバでシーケンス外になる可能性 注: DB2 のデータ共有環境に適用します。	Db2 11

ヒント: IFCID 0306 に関連する APAR のうち、使用している Db2 for z/OS バージョンを対象とした APAR を IBM の Web サイトで確認し、ここに記載した以外にもお客様さまの CDC 環境に必要なメンテナンス情報があれば入手することを推奨します。

IMS のメンテナンス要件

IMS ソースで IMS 同期 CDC を実行する場合は、一覧表示されている APAR に対する修正を IMS サブシステムに適用します。

次の表に、APAR 要件を IMS バージョンごとに示します。

IMS バージョン	APAR 番号	APAR の説明
14	PI56632	DL/I SSA にコマンドコード A と非キーフィールドが含まれている場合に、AJ ステータスコードが受信された。
13	PI49955	DL/I SSA にコマンドコード A と非キーフィールドが含まれている場合に、AJ ステータスコードが受信された。
13	PI26816	前の呼び出しでステータス GE が受信された後、コマンドコード A によってデータベースの先頭にリセットされない。

その他の Informatica 製品でサポートされる PowerExchange のソースとターゲット

PowerExchange では、処理に関する次の Informatica 製品のデータを提供します。

Data Engineering Integration

この製品は、次のタイプの PowerExchange バルクデータのソースとターゲットにアクセスできます。

- Adabas
- DB2 for i (i5/OS)
- DB2 for z/OS
- フラットファイル
- IMS

Data Quality

この製品は、次のタイプの PowerExchange バルクデータのソースにアクセスできます。

- Adabas
- Db2 for i
- DB2 for z/OS
- フラットファイル
- IMS
- VSAM

エンタープライズデータ統合 - PowerCenter

この製品は、バッチ処理と CDC で次のタイプの PowerExchange のソースとターゲットにアクセスできます。

- Adabas (バッチソースとターゲット、CDC ソース)
- Datacom (バッチソースおよび CDC ソースのみ)
- Db2 for i (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- Db2 for z/OS (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- DB2 LUW (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- フラットファイル (バッチソースのみ)

- IDMS (バッチソースおよび CDC ソースのみ)
- IMS (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- Microsoft SQL Server (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- MySQL (CDC ソースのみ)
- Oracle (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- PostgreSQL (CDC ソースのみ)
- SAP HANA (CDC ソースのみ)
- VSAM (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)

注: PowerCenter ではバルクデータのソースとターゲットの両方と CDC のソースのみにアクセスできません。

Data Integration Hub

この製品は、次のタイプの PowerExchange のソースとターゲットにアクセスできます。

- Adabas (バッチソースとターゲット、CDC ソース)
- Datacom (バッチソースおよび CDC ソースのみ)
- Db2 for i (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- Db2 for z/OS (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- DB2 LUW (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- フラットファイル (バッチソースのみ)
- IDMS (バッチソースおよび CDC ソースのみ)
- IMS (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- Microsoft SQL Server (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- Oracle (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)
- VSAM (バッチソースおよびターゲット、CDC ソース)

注: Data Integration Hub ではバルクデータのソースとターゲットの両方と CDC のソースのみにアクセスできます。

PowerExchange CDC パブリッシャ

この製品は、CDC 用の次のタイプの PowerExchange ソースにのみアクセスできます。

- Adabas
- Datacom
- Db2 for i
- DB2 for z/OS
- DB2 LUW
- IDMS
- IMS
- Microsoft SQL Server
- MySQL
- Oracle

- PostgreSQL
- SAP HANA
- バッチ VSAM および CICS/VSAM

Informatica Intelligent Cloud Services - PowerExchange CDC **コネクタ**

データ統合 PowerExchange CDC コネクタは、PowerExchange が次のソースからキャプチャする変更データへのアクセスを提供します。

- Db2 for i CDC
- Db2 LUW CDC
- DB2 for z/OS CDC
- Microsoft SQL Server CDC
- MySQL CDC
- Oracle CDC
- PostgreSQL CDC
- SAP HANA CDC
- VSAM CDC

Secure Archiving (旧称 Data Archive)

この製品は、次のタイプの PowerExchange バルクデータのソースにアクセスできます。

- Adabas
- Datacom
- フラットファイル
- IDMS
- IMS
- VSAM

注: Secure Archiving では、ソースへアクセスするために PowerExchange ODBC を使用します。

Data Centric Security

このセキュリティソリューションは、次のタイプの PowerExchange バルクデータのソースとターゲットにアクセスできます。

- Adabas
- Db2 for i
- DB2 for z/OS
- フラットファイル
- IMS
- VSAM

Secure Testing - **テストデータジェネレータ**

この Secure Testing ソリューションは次のタイプの PowerExchange バルクデータターゲットにアクセスできます。

- Db2 for i
- DB2 for z/OS

Secure Testing - テストデータ管理

この Secure Testing ソリューションは、次のタイプの PowerExchange バルクデータソースおよびターゲットにアクセスできます。

- Adabas
- Db2 for i
- DB2 for z/OS
- フラットファイル
- IMS
- VSAM

注: Test Data Management は、PowerCenter を介してソースとターゲットにアクセスします。

Secure Testing - テストデータウェアハウス

この Secure Testing ソリューションは次のタイプの PowerExchange バルクデータソースにアクセスできます。

- Db2 for i
- DB2 for z/OS

Windows の PowerExchange の 32 ビット実行可能ファイルと 64 ビット実行可能ファイル

Windows の PowerExchange には、32 ビット実行可能ファイルと 64 ビット実行可能ファイルが含まれています。PowerExchange のインストールプログラムでは、64 ビットマシンには両方のセットの実行可能ファイルがインストールされ、32 ビットマシンには 32 ビット実行可能ファイルのみがインストールされます。

次の表に、各 PowerExchange コンポーネントでどちらの実行可能ファイルが使用されるかを示します。

PowerExchange のコンポーネントまたは機能	32 ビット実行可能ファイル	64 ビット実行可能ファイル
PowerExchange Navigator	-	X
PowerExchange バルクデータ移動	-	X
PowerExchange 変更データキャプチャ (CDC)	-	X
PowerExchange ユーティリティ	X (32 ビットマシンの DTLREXE のみ)	X (DTLREXE を含むすべてのユーティリティ)
PowerCenter Client での PowerExchange のサポート	X	-
Informatica Developer での PowerExchange のサポート	-	X

PowerExchange のコンポーネントまたは機能	32 ビット実行可能ファイル	64 ビット実行可能ファイル
PowerCenter 統合サービスおよびデータ統合サービスでの PowerExchange のサポート	-	X
ODBC Administrator のサポートと PowerExchange ODBC ドライバ	X (32 ビットアプリケーション用の PowerExchange ODBC 接続をサポート)	X
z/OS Installation Assistant	-	X

重要: PowerExchange 32 ビット実行可能ファイルは、PowerCenter Client が実行されるシステムで使用する必要があります。PowerCenter Client は、32 ビットアプリケーションです。

PowerExchange ライセンスキー

PowerExchange コンポーネントを実行するには、ライセンスキーが必要です。ライセンスキーは、16 進数の文字から構成される 64 文字の文字列です。

ライセンスキーは、以下のように 4 文字ごとにハイフンで区切られます。

1234-ABCD-1234-EF01-5678-A9B2-E1E2-E3E4-A5F1-A9B2-1234-E3D4-95F1

注: 以前は、PowerExchange では 44 文字のライセンスキーを使用していました。現在でも、PowerExchange は有効期限が切れていない 44 文字のキーを使用できます。

ライセンスキーでは、大文字と小文字は区別されません。

ライセンスキーは、特定の期間有効です。PowerExchange はライセンスキーを使用して、オペレーティングシステムとデータソースへのアクセスを制御できます。すべての必要なコンポーネントに対して有効なライセンスキーを取得するまで、PowerExchange ソフトウェアをインストールしないでください。

PowerExchange ライセンスキーの取得方法

インストールファイルを Informatica 電子ソフトウェアダウンロード (ESD) サイトからダウンロードした場合、ライセンスキーは Informatica からの電子メールメッセージで提供されます。

PowerExchange ライセンスキーの入力

PowerExchange ライセンスキーは、インストール時または新しいライセンスキーを取得するときに入力します。以下の場合にキーを入力します。

- PowerExchange を初めてインストールするとき、インストールを完了するためにライセンスキーを入力する必要があります。インストールプログラムによって、製品のインストール先システムにライセンスキーファイルが作成されます。
- 既存の PowerExchange インストールの新しいライセンスキーを取得した場合は、新しいキーでシステム上のライセンスキーファイルを更新します。
- PowerExchange ソフトウェアをアップグレードした場合は、新しいバージョンのインストール時に新しいキーでシステム上のライセンスキーファイルを更新します。

- 既存の PowerExchange インストールの追加の製品オプションを購入した場合は、追加のオプションで提供される新しいキーでシステム上のライセンスキーファイルを更新します。

ライセンスキーがないか、または既存のライセンスキーに問題が発生した場合は、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。

POC（Proof of Concept）の一時ライセンスの有効期限が切れた場合には、フルライセンスを購入できます。一時ライセンスの有効期限は POC 契約に記載されています。FTP サイトからのダウンロードで PowerExchange インストールファイルを入手した場合は、E-mail メッセージにも有効期限が記載されます。

PowerExchange と PowerCenter の相互運用性

PowerCenter には PowerExchange Client for PowerCenter (PWXPC) が付属しています。PWXPC を使用して PowerExchange に接続するには、PowerCenter と PowerExchange のバージョンに互換性があることを確認する必要があります。

以下の表に、PowerExchange (PWX) と PowerCenter (PC) のバージョンのサポートされる組み合わせを示します。

PWX バージョン ¹	PWC 10.2.0 ²	PWC 10.4.0	PWC 10.4.1	PWC 10.5	PWC 10.5.1	PWX 10.5.2
10.2.0	○	×	×	×	×	いいえ
10.4.0	○	はい	×	×	×	いいえ
10.4.1	○	○	はい	×	×	いいえ
10.5	○	○	○	はい	×	いいえ
10.5.1	○	○	○	○	はい	×
10.5.2	○	○	○	○	○	はい

1. PowerExchange 10. *n*.1 以降の「HotFix」バージョンは、利用可能な最新の PowerCenter 10 で動作確認済みです。 *n*.1 以降の HotFix バージョン。

2. 最新の PowerCenter 10.5.2 リリースは、PowerExchange の最終メジャーリリース 10.5 で動作確認済みです。

制限:

- PowerCenter のバージョンが PowerExchange のバージョンと同じでない場合、PowerCenter では PowerExchange のすべての機能を利用できません。
- Informatica ドメインで PowerExchange リスナサービスまたは PowerExchange ロガーサービスを実行している場合、Informatica ドメインが PowerExchange と同一のバージョン、リリース、変更 (*v.r.m*) レベルである必要があります。

異なるバージョンの Informatica ドメインと PowerExchange を実行するには、dtllst または PWXCCL コマンドラインプログラムのそれぞれを実行することにより、PowerExchange リスナまたは PowerExchange ロガー（Linux、UNIX、Windows 用）を起動する必要があります。

Informatica サービスと PowerExchange の相互運用性製品

Developer tool から PowerExchange に接続するには、PowerExchange と Informatica サービスのバージョンに互換性があることを確認します。例えば、PowerExchange 10.5 は Informatica サービス 10.5 と互換性があります。

以下の表に、PowerExchange (PWX) と Informatica サービス (INFA) のバージョンのサポートされる組み合わせを示します。

PWX バージョン ¹	INFA 10.2.0	INFA 10.4.0	INFA 10.4.1	INFA 10.5	INFA 10.5.1	INFA 10.5.2 ²
10.2.0	○	×	×	×	×	いいえ
10.4.0	×	○	×	×	×	いいえ
10.4.1	×	×	○	×	×	いいえ
10.5	×	×	×	○	×	いいえ
10.5.1	×	×	×	×	○	×
10.5.2	×	×	×	×	×	○

1. PowerExchange 10。n、n+1 の「HotFix」バージョンは、利用可能な最新の Informatica サービス 10 で動作確認済みです。n、n+1 の HotFix バージョン。

2: Informatica サービス 10.5.2 リリースは、PowerExchange の最終メジャーリリース 10.5 で動作確認済みです。

PowerExchange と Informatica Intelligent Cloud Services データ統合サービスとの相互運用性

CloudCDC コネクタを使用して Informatica Intelligent Cloud Services データ統合サービスから PowerExchange に接続するには、PowerExchange のバージョンと現在の Informatica Intelligent Cloud Services データ統合サービスのバージョンとの間に互換性があることを確認してください。

以下の表に、PowerExchange CDC と Informatica Intelligent Cloud Services データ統合サービス (CDI) のバージョンのサポートされる組み合わせを示します。

PWX バージョン ¹	CDI R37 - 2021 年 7 月	CDI R38 - 2021 年 10 月	CDI R39 - 2022 年 4 月
10.2.0 ²	○	○	○
10.4.0	○	○	はい
10.4.1	○	○	はい

PWX バージョン ¹	CDI R37 - 2021 年 7 月	CDI R38 - 2021 年 10 月	CDI R39 - 2022 年 4 月
10.5	○	○	はい
10.5.1	×	○	はい
10.5.2	×	○	はい
<p>1. Informatica Intelligent Cloud Services は、常に現在のバージョンのみを維持します。PowerExchange 10.x は、移行パスとしてバージョン 8.x よりも前の PowerCenter を許容します。n。 $n+1$ の「HotFix」は、使用可能な最新の Cloud データ統合のリリースで動作確認済みです。</p> <p>2. PowerExchange 10.2.0 では、Cloud データ統合から PowerExchange へのアクセスを許可するために EBF が必要です。EBF は、10.2.0 HotFix1 と HotFix2 に含まれています。</p>			

PowerExchange と PowerExchange CDC Publisher との相互運用性

PowerExchange CDC Publisher から PowerExchange に接続するには、PowerExchange と PowerExchange CDC Publisher のバージョンに互換性があることを確認します。例えば、PowerExchange 10.5.2 は PowerExchange CDC Publisher 1.3 と互換性があります。

以下の表に、PowerExchange (PWX) と PowerExchange CDC Publisher のバージョンのサポートされる組み合わせを示します。

PWX バージョン ¹	CDC Publisher 1.2	CDC Publisher 1.3
10.2.0	○	○
10.4.0	○	はい
10.4.1	○	はい
10.5	×	○
10.5.1	×	○
10.5.2	×	○
<p>1. PowerExchange 10。 n。 $n+1$ の「HotFix」バージョンは、利用可能な最新の PowerExchange CDC Publisher バージョンで動作確認済みです。</p>		

PowerExchange と Informatica Data Archive の相互運用性

PowerExchange ODBC を使用して、Informatica Data Archive から PowerExchange に接続するには、Data Archive と PowerExchange のバージョンに互換性があることを確認する必要があります。

以下の表に、Data Archive リリースでの使用がサポートされる PowerExchange (PWX) ODBC バージョンを示します。

PWX ODBC バージョン	DA 6.4.4	DA 6.5	DA 6.5 HF1
10.2.0	○	○	○
10.4.0	×	×	いいえ
10.4.1	×	×	いいえ
10.5	○	○	はい
10.5.1	○	○	はい
10.5.2	○	○	はい

PowerExchange 間の相互運用性

PowerExchange は、バージョンとリリースレベルが同じ他の PowerExchange と通信できます。変更レベルと Hotfix レベルは異なっていても構いません。異なるバージョンまたはリリースレベルの PowerExchange 間で通信を行うことはできません。

バージョン、リリース、変更レベルは以下の形式で示されます。

PowerExchange *version.release.modification*

例えば、PowerExchange 10.5 Navigator およびリスナは、PowerExchange 10.5.1 リスナと通信できます。ただし、PowerExchange 10.5 Navigator およびリスナは、PowerExchange 10.4.1 リスナと通信できません。

ダウンロードした PowerExchange インストールファイルの構成

Informatica からダウンロードした PowerExchange インストール.zip ファイルには、サポート対象のオペレーティングシステム別に整理されたインストールソフトウェアが含まれています。

Informatica は FTP リンクを提供しており、このリンクを使用して Informatica Electronic Software Download サイトから Informatica インストール zip ファイルをダウンロードできます。zip ファイルをローカルマシンのディレクトリにダウンロードし、使用しているオペレーティングシステム用のインストールソフトウェアを抽出します。

完全なリリースの場合、ダウンロードしたインストールファイル名は `PExchangevrn.zip` の形式になり、ここで *v*、*r*、*m* はそれぞれ PowerExchange のバージョン、リリース、および変更レベルを表します。変更 (m) レベルが 0 の場合、変更値はファイル名から省略されます。インストールファイルを抽出すると、次のディレクトリに各オペレーティングシステム用のインストールソフトウェアが作成されます。

```
software
  i5os
  unix
    aix
    linux
  windows
  zos
```

各オペレーティングシステムディレクトリには、インストーラへのアクセスに使用する .exe または .tar ファイルが含まれています。

ホットフィックスリリースの場合、ダウンロードしたインストールファイル名の形式は `PExchangevrnHFn.zip` です。このファイルには、2 つの zip ファイルが含まれており、1 つはホットフィックスを含む完全インストール用、もう 1 つは前回のベースリリース以降の PowerExchange 変更のみです。これらのファイルのいずれかを抽出すると、各オペレーティングシステム用のインストールソフトウェアが作成されます。たとえば、ダウンロードした `PExchange102HF2.zip` ファイルには、次の zip ファイルが含まれています。

- `powerexchange_v1020_02_cd.zip`。このファイルには、ホットフィックスとともに完全インストールが含まれています。
- `powerexchange_V1020_hotfix2_cd.zip`。このファイルには、ホットフィックスに含まれている前回ベースリリース以降の変更のみが含まれています。

これらのファイルのいずれかを解凍すると、完全なベースリリースの場合と同様に、インストールソフトウェアがオペレーティングシステムごとに個別のディレクトリに置かれます。以下に例を示します。

```
i5os
unix
  aix
  linux
windows
zos
```

インストールファイルについて詳しくは、このガイドの該当するオペレーティングシステムの章を参照してください。ホットフィックスのリリースについては、ホットフィックスリリースノートを参照してください。

第 3 章

アップグレード計画

この章では、以下の項目について説明します。

- [アップグレード計画の概要, 35 ページ](#)
- [PowerExchange データの管理方式, 35 ページ](#)
- [アップグレードシナリオ, 36 ページ](#)
- [データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行, 38 ページ](#)

アップグレード計画の概要

PowerExchange をアップグレードする場合は、以下の各システム上でアップグレードインストールを実行する必要があります。

- 各 PowerExchange データソースまたはターゲットシステム
- PowerExchange Navigator を実行する Windows システム
- PowerCenter Client または Informatica Developer クライアントシステム
- PowerCenter Integration Service または Data Integration Service システム

アップグレードの計画に役立つよう、この章では、既存の PowerExchange データファイルを保持する方法について説明します。また、さまざまな移行シナリオについて説明し、各シナリオで従う基本的な手順を示します。

この章を確認することに加えて、「[付録 A, 「アップグレードに関する考慮事項」 \(ページ 178\)](#)」に説明されているアップグレードに関する考慮事項も参照してください。各オペレーティングシステムの PowerExchange 環境の詳細説明については、「[付録 B, 「PowerExchange 環境」 \(ページ 187\)](#)」を参照してください。

PowerExchange データの管理方式

PowerExchange では、多くの PowerExchange データファイルおよびライブラリの場所を設定できます。PowerExchange をインストールして設定する場合には、データファイルとライブラリを PowerExchange ソフトウェアとは分離するよう環境をセットアップすることをお勧めします。

PowerExchange データを保持するためのこの方法には、次の利点があります。

- 新しい PowerExchange バージョンへのアップグレードが簡単になります。
- カスタマイズしたファイルがアップグレード時に失われたり上書きされたりしません。

- PowerExchange データのバックアップが簡単になります。

PowerExchange 環境をセットアップする際は、次の方法を検討します。

- PowerExchange ソフトウェアとは分離した PowerExchange データのライブラリを作成します。オペレーティングシステムとデータファイルに応じて、ライブラリを自分で作成することも、ライブラリの場所をインストールプログラムに対して指定することもできます。

例えば、Linux、UNIX、または Windows では、コンフィギュレーションファイルをインストールディレクトリの親ディレクトリ、または別のディレクトリに保存できます。

- コンフィギュレーションファイルおよびカスタマイズするその他のファイルについては、名前を変更するか、コピーします。例えば、バージョン番号をファイル名に追加できます。この方法では、特定のリリースのコンフィギュレーションファイルを簡単に識別できます。また、一部のオペレーティングシステムでは、この方法により、コンフィギュレーションファイルがインストールプログラムによって上書きされないようになります。

データを設定した後、カスタマイズしたファイルを指すように次の項目を更新します。

- 設定パラメータ
- Linux、UNIX、および Windows の環境変数
- z/OS 上の PowerExchange ジョブおよび開始タスクの JCL の DD 文
- スクリプトまたはオートメーションの PowerExchange 起動コマンド

PowerExchange のコードとデータ、およびそのデータを指す項目をどの程度まで分離できるかは、オペレーティングシステムによって異なります。

アップグレードシナリオ

PowerExchange をアップグレードする場合、要件と環境に応じて、次のいずれかの方法を採用できます。

- 既存のインストール場所と既存のデータの場所。PowerExchange の新しいリリースを、同じマシン上の既存のインストールと同じ場所にインストールします。PowerExchange では、現在の場所にある既存のデータファイルを使用します。

このオプションは、製品の 1 つのバージョンだけを実行する場合に、i5/OS 以外のプラットフォームで使用できます。

- 新しいインストール場所と既存のデータの場所。PowerExchange の新しいリリースを、既存のインストールと同じマシン上の新しい場所にインストールします。PowerExchange では、現在の場所にある既存のデータファイルを使用します。

このオプションは、製品の 1 つのバージョンだけを実行している場合に、Linux、UNIX、Windows、または z/OS 上の PowerExchange をアップグレードするときに使用できます。Windows でこのオプションを使用する場合は、まず、既存の PowerExchange リリースを削除する必要があります。

- 新しいインストール場所と新しいデータの場所。PowerExchange の新しいリリースを、既存のリリースと同じマシン上の新しい場所にインストールします。新しいインストールでは、新しい場所のデータファイルを使用します。

このオプションは任意のオペレーティングシステムで使用できます。PowerExchange の複数のバージョンを実行している場合、または IBM i (i5/OS) 上の PowerExchange をアップグレードする場合は、このオプションを使用する必要があります。Windows でこのオプションを使用する場合は、まず、既存の PowerExchange リリースを削除する必要があります。

以下の各トピックスでは、シナリオごとに、ソフトウェアのインストール、データファイルのコピー、および設定パラメータとその他の変数の編集に関する基本的なフローについて説明します。

既存のインストール場所と既存のデータの場所のシナリオ

このシナリオでは、PowerExchange ソフトウェアを以前のインストールと同じ場所にインストールし、PowerExchange データファイルには既存の場所を使用します。

インストール後、設定パラメータとその他の変数がデータの正しい場所を指していることを確認します。

次の手順を使用します。

1. PowerExchange データファイルおよびライブラリを保管用にバックアップします。
2. 新しいリリースにアップグレードする場合は、このガイドの手順に従ってください。これらの手順では、ソフトウェアを以前のインストールと同じ場所にインストールします。

新しい PowerExchange リリースを z/OS にインストールする場合は、z/OS Installation Assistant で **【既存のデータセット名を使用したアップグレード】** オプションを選択します。

3. 設定パラメータ、環境変数、および DD 文が既存のデータ環境を指していることを確認します。既存のデータの場所を使用しているので、これらの値はすでに正しい値になっているはずです。

新しいインストール場所と既存のデータの場所のシナリオ

このシナリオでは、PowerExchange ソフトウェアを以前のインストールとは異なる場所にインストールしますが、PowerExchange データファイルには同じ場所を使用します。

インストール後、設定パラメータとその他の変数がデータの正しい場所を指していることを確認します。

次の手順を使用します。

1. PowerExchange データファイルおよびライブラリのバックアップをとります。
2. このガイドのフルインストールを実行するための手順に従います。以前のインストールの場所とは異なるインストール場所を指定します。

新しい PowerExchange リリースを z/OS にインストールする場合は、z/OS Installation Assistant で **【新しいデータセット名を使用したアップグレード】** を選択します。この方法では、データライブラリの新しいセット全体が割り当てられることになります。

i5/OS では、PowerExchange 環境全体が再作成されることになります。

設定パラメータ、環境変数、および DD 文が既存のデータ環境を指していることを確認します。

新しいインストール場所と新しいデータの場所のシナリオ

このシナリオでは、PowerExchange ソフトウェアを以前のインストールとは異なる場所にインストールし、PowerExchange データファイルには新しい場所を作成します。

その後、可能な限り、新しいリリースで使用する以前のリリースの PowerExchange データファイルを新しいデータの場所にコピーします。また、データの新しい場所を指すように設定パラメータとその他の変数を更新します。

この方法は、一部の PowerExchange データには適用できません。例えば、PowerExchange ロgger（z/OS 用）のアクティブログおよびアーカイブログに新しいデータセット名を使用し、既存のデータをコピーすることはできません。PowerExchange ロgger（z/OS 用）の場合、既存の名前を維持するか、既存のキャプチャデータをすべて放棄するかのどちらかです。

次の手順を使用します。

1. このガイドのアップグレードインストールではなくフルインストールの手順に従います。以前のインストールの場所とは異なるインストールディレクトリを指定します。

新しい PowerExchange リリースを z/OS にインストールする場合は、z/OS Installation Assistant でフルインストールオプションを使用します。z/OS では、このオプションを使用した場合、以前にキャプチャした変更データを保持することはできません。z/OS で以前にキャプチャした変更データを保持する必要がある場合は、[「新しいインストール場所と既存のデータの場所のシナリオ」 \(ページ 37\)](#)の手順に従う必要があります。

2. PowerExchange データファイルおよびライブラリを以前のインストールから新しい環境にコピーします。ただし、z/OS 上の CDC にはこの方法を使用できません。
3. 新しいデータ環境を指すように、設定パラメータ、環境変数、オートメーションとスクリプト、および DD 文を設定します。

データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行

PowerExchange の新しいバージョンにアップグレードした後、必要に応じてデータマップ、抽出マップ、およびキャプチャ登録を移行します。

DTLURDMO ユーティリティを使用してこれらのリソースをコピーすることを推奨します。DTLURDMO を使用すると、リソースは PowerExchange のアップグレードされるバージョンで必要な形式でコピーされます。また、DTLURDMO によって、バージョンを識別するこれらのリソース内のヘッダ情報がアップデートされます。

また PWXUMAP ユーティリティを使用して、移行されるデータマップ、抽出マップ、スキーマを一覧表示するレポートを生成できます。これにより、DTLURDMO によってソースシステムとターゲットシステムの両方でコピーされるマップを確認できます。

移行するリソースの手順はオペレーティングシステムによって異なります。また、手順は、ソースとターゲットシステムが同じバージョンレベルにあるかどうかによっても異なります。PowerExchange のバージョン、リリース、および変更レベルは *v.r.m* で表します。ここで *v* はバージョンレベルを表します。

次のシナリオを検討してください。

- 同じバージョンレベル内でのアップグレード後のリソースの移行。例: PowerExchange 10.1 から PowerExchange 10.2 へのアップグレード。

このシナリオでは、DTLURDMO を使用して、古い PowerExchange リスナ環境から新しい環境にリソースをコピーします。新しい場所にリソースをコピーするためにオペレーティングシステムのコマンドを最初に使用する必要はありません。

- 新しいバージョンレベルへのアップグレード後のリソースの移行。例: PowerExchange 9.6.1 から PowerExchange 10.0.0 へのアップグレード。

DTLURDMO では、異なるバージョンレベルでの PowerExchange リスナ環境間でリソースのコピーすることはできません。ユーティリティは、SOURCE 文と TARGET 文を使用して 2 つのリスナの NODE 文を示します。リスナが異なるリリースレベルにある場合、システムはバージョンの不一致を示すエラーメッセージを返します。代わりに、ソースがローカルでターゲットがより高いバージョンの PowerExchange リスナである DTLURDMO を使用します。1 つの環境から高いバージョンにあるターゲット環境にリソースをコピーするには、コピーユーティリティを使用してターゲットシステムのステージングファイルにリソースをコピーしてから、DTLURDMO を使用してターゲットシステムのリソースをアップグレードします。

DTLURDMO は常に高いバージョン環境から実行する必要があります。

注: z/OS では、JCL をサブミットして同じジョブにある両方のタスクを実行します。

同じバージョンレベルでの PowerExchange システム間のリソースの移行

データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップを同じバージョンレベルとして 1 つの PowerExchange システムから別の PowerExchange システムに移行するには、『*PowerExchange ユーティリティガイド*』の「DTLURDMO Utility」の章の手順に従ってください。

IBM i での新しいバージョンレベルへのデータマップの移行

IBM i 上で PowerExchange の新しいバージョンレベルにアップグレードした後、データマップを移行するには、以下の手順を実行します。

1. 古いバージョンの STDATAMAPS ディレクトリから新しいバージョンの STDATAMAPS ディレクトリにデータマップファイルをコピーします。
2. 所定の場所にあるデータマップをアップグレードするには、次のように、dtlurdm.ini 入力文を使用して新しいバージョンに対して DTLURDMO を実行します。

```
USER user_id;  
EPWD epwd;  
SOURCE LOCAL;  
TARGET LOCAL;  
DETAIL;  
REPLACE;  
DM_COPY;
```

IBM i での新しいバージョンレベルへのキャプチャ登録と抽出マップの移行

IBM i 上で PowerExchange の新しいバージョンレベルにアップグレードした後、キャプチャ登録と抽出マップを移行するには、以下の手順を実行します。

1. 古いバージョンの *datalib* ライブラリの CCT ファイルを新しいバージョンの *datalib* ライブラリにコピーします。
2. 所定の場所にあるキャプチャ登録と抽出マップをアップグレードするには、以下の dtlurdm.ini 入力文を使用して新しいバージョンに DTLURDMO を実行します。

```
USER user_id;  
EPWD epwd;  
SOURCE LOCAL;  
TARGET LOCAL;  
DETAIL;  
REPLACE;  
REG_COPY;  
CREATXMAPS;  
KEEPREGTAG;
```

Linux、UNIX および Windows での新しいバージョンレベルへのデータマップの移行

Linux、UNIX、または Windows 上で PowerExchange の新しいバージョンレベルにアップグレードした後、データマップを移行するには、以下の手順を実行します。

1. 古いバージョンの DBMOVER ファイルの DMX_DIR 文に定義されているディレクトリから、新しいバージョンの DBMOVER ファイルの DMX_DIR 文に定義されているディレクトリにデータマップファイルをコピーします。

2. 所定の場所にあるデータマップをアップグレードするには、次のように、dtlurdm.ini 入力文を使用してターゲットシステム上で DTLURDMO を実行します。

```
USER user_id;
EPWD epwd;
SOURCE LOCAL;
TARGET LOCAL;
DETAIL;
REPLACE;
DM_COPY;
```

Linux、UNIX および Windows での新しいバージョンレベルへのキャプチャ登録と抽出マップの移行

Linux、UNIX および Windows 上で PowerExchange の新しいバージョンレベルにアップグレードした後、キャプチャ登録と抽出マップを移行するには、以下の手順を実行します。

1. 古いバージョンの DBMOVER ファイルの CAPT_PATH 文に定義されているディレクトリから、新しいバージョンの DBMOVER ファイルの CAPT_PATH 文に定義されているディレクトリに CCT ファイルをコピーします。
2. 所定の場所にあるキャプチャ登録と抽出マップをアップグレードするには、以下の dtlurdm.ini 入力文を使用して新しいバージョンに DTLURDMO を実行します。

```
USER user_id;
EPWD epwd;
SOURCE LOCAL;
TARGET LOCAL;
DETAIL;
REPLACE;
REG_COPY;
CREATXMAPS;
KEEPREGTAG;
```

z/OS での新しいバージョンレベルへのデータマップの移行

z/OS 上で新しいバージョンレベルにキャプチャ登録と抽出マップを移行するには、JCL 文をサブミットしてデータマップをアップグレードし、それらを新しい場所にコピーします。次に示す内容に似た JCL 文を使用します。

```
//DTLURDMO JOB 'PWX INSTALL',MSGLEVEL=(1,1),MSGCLASS=X,
//          NOTIFY=&SYSUID,CLASS=A,REGION=0M
//LIBSRCH   JCLLIB ORDER=<HLQ>..V1020.RUNLIB
//*
//*
//*****
//*
//* LIBSRCH IS REQUIRED AS SET STATEMENTS WILL BE INCLUDED DEPENDING
//* UPON THE SELECTIONS MADE FROM WITHIN THE INSTALL PROCESS
//*
//*****
//INCS1 INCLUDE MEMBER=GENBULK
//*
//RUN       EXEC PGM=DTLURDMO
//*
//STEPLIB   DD DISP=SHR,DSN=&HLQ..LOADLIB
//          DD DISP=SHR,DSN=&SCERUN
//*
//DTLMSG    DD DSN=&HLQ..DTLMSG,DISP=SHR
//* IF USING MESSAGE OVERRIDE THEN CUSTOMIZE BELOW
//*DTLMGO DD DISP=SHR,DSN=&RUNLIB(DTLMGO)
//DTLCFG    DD DSN=&HLQ..RUNLIB(DBMOVER),DISP=SHR
//DTLKEY    DD DSN=&HLQ..RUNLIB(LICENSE),DISP=SHR
//DTLSGN    DD DSN=&HLQ..RUNLIB(SIGNON),DISP=SHR
//DTLLOG    DD SYSOUT=*
//DTLLOG01 DD SYSOUT=*
```



```
//DTLCAMAP DD DSN=&HLQVS..DTLCAMAP,DISP=SHR
//DATAMAP DD DSN=<HLQ>.V961.V1.DATAMAPS,DISP=SHR
//DTLAMCPR DD DSN=&HLQVS..CCT,DISP=SHR
//SYSOUT DD SYSOUT=*
//SYSPRINT DD SYSOUT=*
//CEEDUMP DD SYSOUT=*
//*
//* SAMPLE SYSIN
//*
//SYSIN DD *
USER <user id>;
PWD <pwd>;
SOURCE LOCAL;
TARGET NODE1;
REPLACE;
DETAIL;
DM_COPY;
SELECT ;
/*
```

z/OS での新しいバージョンレベルへのキャプチャ登録と抽出マップの移行

z/OS 上で新しいバージョンレベルにキャプチャ登録と抽出マップを移行するには、JCL 文をサブミットしてキャプチャ登録と抽出マップをアップグレードし、それらを新しい場所にコピーします。次に示す内容に似た JCL 文を使用します。

```
//DTLURDMO JOB 'PWX INSTALL',MSGLEVEL=(1,1),MSGCLASS=X,
//          NOTIFY=&SYSUID,CLASS=A,REGION=0M
//LIBSRCH   JCLLIB ORDER=<HLQ>.V1020.RUNLIB
//*
//*
//*****
//*
//* LIBSRCH IS REQUIRED AS SET STATEMENTS WILL BE INCLUDED DEPENDING
//* UPON THE SELECTIONS MADE FROM WITHIN THE INSTALL PROCESS
//*
//*****
//INCS1 INCLUDE MEMBER=GENBULK
//*
//RUN        EXEC PGM=DTLURDMO
//*
//STEPLIB DD DISP=SHR,DSN=&HLQ..LOADLIB
//          DD DISP=SHR,DSN=&SCERUN
//*
//DTLMSG DD DSN=&HLQ..DTLMSG,DISP=SHR
//* IF USING MESSAGE OVERRIDE THEN CUSTOMIZE BELOW
//*DTLMGO DD DISP=SHR,DSN=&RUNLIB(DTLMGO)
//DTLCFG DD DSN=&HLQ..RUNLIB(DBMOVER),DISP=SHR
//DTLKEY DD DSN=&HLQ..RUNLIB(LICENSE),DISP=SHR
//DTLSGN DD DSN=&HLQ..RUNLIB(SIGNON),DISP=SHR
//DTLLOG DD SYSOUT=*
//DTLLOG01 DD SYSOUT=*
//DTLCAMAP DD DSN=&HLQVS..DTLCAMAP,DISP=SHR
//DATAMAP DD DSN=&HLQVS..DATAMAPS,DISP=SHR
//DTLAMCPR DD DSN=OLDVERS.V1.CCT,DISP=SHR
//SYSOUT DD SYSOUT=*
//SYSPRINT DD SYSOUT=*
//CEEDUMP DD SYSOUT=*
//*
//* SAMPLE SYSIN
//*
//SYSIN DD *
USER <user id>;
PWD <PWD>;
SOURCE LOCAL;
TARGET NODE1;
REPLACE;
```

```
DETAIL;  
REG_COPY;  
CREATEXMAPS LOC=TARGET;  
SELECT ;  
/*
```

第 4 章

IBM i での PowerExchange のインストールとアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [IBM i インストールの概要, 43 ページ](#)
- [IBM i へのフルインストールの実行, 44 ページ](#)
- [PowerExchange の IBM i でのアップグレード, 53 ページ](#)
- [IBM i へのホットフィックスのインストール, 56 ページ](#)
- [パラメータファイルの保存, 59 ページ](#)
- [インストールログファイルの表示, 59 ページ](#)
- [PowerExchange の IBM i でのアンインストール, 59 ページ](#)

IBM i インストールの概要

IBM i オペレーティングシステム（以前の i5/OS）に PowerExchange をインストールする場合、PowerExchange IBM i インストーラを実行して、フルインストール、アップグレード、またはホットフィックスインストールを実行できます。

IBM i インストーラで実行可能なタスクは、以下のとおりです。

- 単一のプロセスでの IBM i オペレーティングシステムへの PowerExchange インストールでは、変数を設定し、PowerExchange パラメーターとデータセット名を変更します。
- PowerExchange ライセンスキーを追加または更新します。
- ソフトウェアライブラリのバイナリファイルを IBM i システムのソフトウェアライブラリに移動します。
- IBM i システムで DBMOVER 構成ファイルをカスタマイズします。

注: IBM i での PowerExchange のアップグレードでは、フルインストールと同じ手順を使用します。

PowerExchange を IBM i に手動でインストールするには、[付録 C, 「IBM i への手動インストール」 \(ページ 198\)](#)で説明されているタスクを実行します。

IBM i へのフルインストールの実行

PowerExchange を初めてインストールする場合、または新しい場所にインストールする場合は、フルインストールを実行します。

IBM i に PowerExchange をインストールする前に

PowerExchange をインストールする前に、インストール前の要件が満たされていること、および指定された前提となる作業を実行したことを確認します。

一般的なインストール前の要件

[第 2 章, 「インストール計画」 \(ページ 16\)](#) の情報を使用して、以下のタスクを実行します。

- IBM i インストーラを使用するには、64 ビット Windows コンピュータに PowerExchange をインストールします。IBM i インストーラは、64 ビットの Windows システム上でのみ実行します。
- IBM i インストーラを実行するシステムに Java Standard Edition Runtime Environment (JRE) がインストールされていることを確認してください。
- PowerExchange で、使用しているオペレーティングシステムおよびデータソースのバージョンおよびリリースレベルがサポートされていることを確認します。
- 有効なライセンスキーを取得します。
- 新しい PowerExchange リリースが PowerCenter インストールで動作できることを確認します。
- 以前のリリースからアップグレードして PowerExchange の複数のリリースを実行する場合は、新しい PowerExchange リリースが既存の PowerExchange インストールで動作できることを確認します。
- 以前のリリースからアップグレードする場合は、インストール前に必要なアップグレード作業を実行します。詳細については、[第 3 章, 「アップグレード計画」 \(ページ 35\)](#) を参照してください。

ユーザー ID の要件

オプションで、PowerExchange のインストールの所有者または管理者のユーザー ID を作成します。IBM i プラットフォームの異なる場所からソースデータとターゲットデータにアクセスするのに十分な権限と特権がユーザー ID に付与されていることを確認します。

この製品をインストールするには、必要な権限を持つユーザープロファイルでログインしている必要があります。以下のいずれかのユーザープロファイルを使用します。

- IBM が提供する QSECOFR ユーザープロファイル
- *SECOFR に設定された USRCLS パラメータおよび*USRCLS に設定された SPCAUT パラメータにより定義されるユーザープロファイル
- USRCLS パラメータが*SECOFR に設定されていない場合、少なくとも以下の SPCAUT 値を含んでいるユーザープロファイル: *SECADM、*ALLOBJ、および*JOBCTL

ディスク容量の要件

十分なディスク領域があることを確認します。PowerExchange には、約 140MB のディスク領域が必要です。送受信されるファイルの数とデータベースの数に応じて、追加のディスク容量が必要になる場合があります。

IBM i システム値の要件

PowerExchange では、PowerExchange バルクデータ移動または CDC セッションの実行時に発生する可能性のあるランタイムエラーやその他の予期しないエラーを回避するために、IBM i システムで特定のシステム値を正しく設定する必要があります。

以下のシステム値を設定します。

QCCSID - コード化された文字セット ID

PowerExchange でメタデータ情報を正しく処理するには、IBM のガイドラインに従って QCCSID システム値を設定する必要があります。

システムにインストールされた言語に基づき QCCSID を設定します。2 バイトの文字セット (DBCS) システムでは、QCCSID を混合 CCSID に設定します。非 DBCS システムでは、QCCSID を 1 バイト文字セット (SBCS) の CCSID に設定します。詳細については、IBM Knowledge Center の Web サイトを参照してください。

QCCSID がシステムの正しい値ではなくデフォルト値の 65535 を使用できるようにした場合、DB2 テーブルにアクセスしようとすると、PowerExchange メタデータ要求が次のようなメッセージとともに失敗します。

SQL0332 - Character conversion between CCSID 1200 and CCSID 65535 not valid.

このエラーは、マルチバイト値を格納できるように列を GRAPHIC として定義した場合に、マルチバイト CCSID システムで発生します。

QSHRMEMCTL - 共有メモリ制御

PowerExchange は、メモリマッピング機能を使用して実行中のタスク間で情報を受け渡します。この機能を使用するには、QSHRMEMCTL を 1 に設定します。

IBM i へのフルインストールのタスクフロー

IBM i で PowerExchange のフルインストールを実行するには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了 チェ ック	タスク	必須またはオ プション
	「手順 1. IBM i インストーラおよび保存ファイルの抽出」 (ページ 46)	必須
	「手順 2. IBM i インストーラの実行」 (ページ 46)	必須
	「手順 3. ライセンスキーの入力」 (ページ 49)	必須
	「手順 4. DBMOVER 構成ファイルオプションの設定」 (ページ 50)	オプション
	「手順 5. オブジェクトの所有権の変更 (オプション)」 (ページ 52)	オプション
	「手順 6. リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリの作成 (オプション)」 (ページ 52)	オプション
	「手順 7. PowerExchange ユーザー権限の設定」 (ページ 52)	必須
	「手順 6. インストールのテスト」 (ページ 53)	推奨

PowerExchange の IBM i へのインストール

IBM i で PowerExchange のフルインストールを行うには、以下の手順を実行します。

IBM i インストーラーを実行するとき、インストールに使用するライブラリ名とユーザー名を次のフィールドで指定します。

- **Condense ライブラリ:** PowerExchange Condense が使用されている場合、PowerExchange Condense ファイルを含むライブラリ。
- **データライブラリ:** PowerExchange データライブラリ。
- **ソフトウェアライブラリ:** PowerExchange ソフトウェアライブラリ。
- **ユーザー名:** PowerExchange を実行するユーザー ID。

すべてのライブラリは、System Auxiliary Storage Pool (ASP 1)、またはデバイス名によって識別される Independent Auxiliary Storage Pool (IASP) のいずれかに存在している必要があります。

ヒント: テストや本番稼働などで複数の PowerExchange リリースを実行する場合は、各リリースを別のライブラリにインストールします。これを行うことで、インストールした新しいリリースで既存のリリースを上書きすることを防ぎます。これにより異なるリリースが共存できます。

手順 1. IBM i インストーラおよび保存ファイルの抽出

IBM i インストーラーを抽出し、ファイルを 64 ビット Windows コンピューターに保存します。IBM i インストーラーは、保存ファイルを IBM i サーバーに転送し、PowerExchange ソフトウェアをそこにインストールできます。

PowerExchange では、PowerExchange インストールのために以下の自己解凍式 zip ファイルが提供されます。

`pxwvrm_i5os.exe`

`vrm` 変数は、PowerExchange のバージョンおよびリリース番号を表します。

zip ファイルを解凍する場合は、ファイルを解凍する Windows マシンでターゲットの場所を指定します。

zip ファイルを解凍すると、ターゲットの場所には以下のファイルが含まれます。

- **IBM i 保存ファイル。** ターゲットの場所の `savefiles` ディレクトリにある PowerExchange ソフトウェアを含む保存ファイル。ファイル名のフォーマットは以下のとおりです。

`pxwvrm.savf`

- **IBM i インストーラ。** IBM i インストーラの実行に使用する `pxwins.exe` ファイル。

手順 2. IBM i インストーラの実行

IBM i インストーラを実行して、ソフトウェアを IBM i システムに転送し、PowerExchange for IBM i を構成できます。IBM i インストーラは、PowerExchange がインストールされている Windows コンピュータで実行します。

重要: コンピュータが次の要件を満たしていることを確認します。

- コンピュータは 64 ビット Windows オペレーティングシステムを使用している。32 ビットシステム上でインストーラを実行しようとすると、インストールは失敗します。
- ディスプレイは、1280 x 960 以上の解像度に設定されている。
- Java Runtime Environment (JRE) バージョン 8 以降がインストールされている。

1. 以下のいずれかの方法を使用して、PowerExchange IBM i インストーラを起動します。

- ファイルエクスプローラで、PowerExchange インストールディレクトリに移動し、pwxins.exe ファイルを探します。pwxins.exe をダブルクリックして、インストーラを起動します。
 - Windows のコマンドウィンドウで、PowerExchange のインストールディレクトリに移動します。pwxins.exe と入力し、Enter キーを押してインストーラを起動します。
2. **【ローカルファイル名】** フィールドに、抽出した IBM i 保存ファイルの名前を入力します。
 3. **【IBM i 接続】** で、以下の接続情報を入力します。

サーバー

PowerExchange をインストールする IBM i サーバーの名前。

ユーザー

PowerExchange のインストールの所有者または管理者のユーザー ID。IBM i システムのさまざまな場所からソースデータとターゲットデータにアクセスするための権限と特権がユーザー ID に付与されていることを確認します。この製品をインストールするには、必要な権限を持つユーザープロファイルでログインする必要があります。以下のいずれかのユーザープロファイルを使用します。

- IBM が提供する QSECOFR ユーザープロファイル
- *SECOFR に設定された USRCLS パラメータおよび*USRCLS に設定された SPCAUT パラメータにより定義されるユーザープロファイル
- USRCLS パラメータが*SECOFR に設定されていない場合、少なくとも以下の SPCAUT 値を含んでいるユーザープロファイル: *SECADM、*ALLOBJ、および*JOBCTL

パスワード

【ユーザー】 フィールドで指定されたユーザー ID と結びついているパスワード。

パスワードの表示

パスワードの入力時にその内容を表示するには、このチェックボックスを選択します。パスワードを隠すには、このチェックボックスの選択を解除します。

4. **【IBM i 保存ファイル】** で、保存ファイルを IBM i システムに作成するための以下の情報を入力します。

名前

IBM i システムに作成された保存ファイルの名前。

ライブラリ

IBM i ライブラリ。ここに保存ファイルが作成されます。

既存の置換

保存ファイルが既に IBM i システムに存在し、インストーラでそれを置き換える場合は、このチェックボックスを選択します。

5. **【PowerExchange 環境】** で、IBM i システムで PowerExchange 環境を設定するための以下の情報を入力します。

オブジェクトライブラリ

IBM i システム上の PowerExchange ソフトウェアライブラリの名前。

ASP デバイス

Independent Auxiliary Storage Pool (IASP) 内の PowerExchange を実行する場合、PowerExchange ライブラリが含まれるように Auxiliary Storage Pool (ASP) グループを指定します。

注: すべての PowerExchange ライブラリは、System Auxiliary Storage Pool (ASP 1)、またはデバイス名によって識別される IASP のいずれかに存在している必要があります。

注: **[PowerExchange 環境]** にあるフィールドは、**[ローカルファイル名]** に IBM i 保存ファイルを入力するまでは利用できません。

6. **[環境を作成]** チェックボックスを選択して、データライブラリ、システムオブジェクト、PowerExchange ライセンスキー、DBMOVER ファイルを設定します。

以下のフィールドが利用可能になります。

データライブラリ

構成ソースファイル、キャプチャ登録のデータファイル、要約ファイル、メッセージログファイル、メッセージキュー、および PowerExchange ジョブの説明などのオブジェクトが含まれる PowerExchange データライブラリの名前。

説明

データライブラリ、Condense ライブラリ、および抽出マップライブラリを作成するとき PowerExchange が使用する簡単な説明。

システムオブジェクトを作成

PowerExchange のランタイム環境を制御するために、システムオブジェクトの事前定義リストを使用して環境を作成する場合は、このチェックボックスを選択します。インストーラは以下のオブジェクトタイプを作成します。

- **クラス。** PowerExchange ジョブのランタイム属性を定義するクラス。
- **出力キュー。** PowerExchange ジョブからスプールされるファイル出力を格納する出力キュー。
- **サブシステムの説明。** ジョブキューと結び付いているサブシステムの説明。
- **ジョブキューサブシステムのジョブキューの名前。**
- **ジョブの説明** PowerExchange 環境用に作成されたシステムオブジェクトとライブラリの定義に使用するジョブの説明。

[システムオブジェクトを作成] を選択しない場合、IBM i インストーラを実行する前に PowerExchange の適切なランタイム環境を作成する必要があります。

PowerExchange ライセンスキーを設定

新たなインストーラで PowerExchange ライセンスキーを入力するか既存のライセンスキーを更新するには、このチェックボックスを選択します。このキーは、IBM i システムに転送されます。このオプションを選択して **[OK]** をクリックすると、**[IBM i - PowerExchange ライセンスキーを設定]** ダイアログボックスが表示されます。

PowerExchange DBMOVER ファイルを設定

IBM i システムに DBMOVER 構成ファイルを設定するには、このチェックボックスを選択します。このオプションを選択して **[OK]** をクリックすると、**[PowerExchange DBMOVER ファイルを設定]** ダイアログボックスが表示されます。

7. **[CDC を設定]** チェックボックスを選択して、変更データキャプチャライブラリ名を入力します。

以下のフィールドが利用可能になります。

Condense ライブラリ

PowerExchange Condense 要約ファイル、ロックファイル、CFGCOND(CAPTPARM)コンフィギュレーションメンバ、および CHECKPOINT、CMDHANDLER、COLLECTOR、CONDENSE、CONTROLLER、DUMP の各メッセージキューを含んでいるライブラリの名前。PowerExchange では、通常の操作の間に、このライブラリのファイルが削除されます。このため、Informatica グローバルカスタマサポートに問い合わせずにこのライブラリにその他のファイルを置かないでください。

ライブラリを抽出

抽出マップファイルを含んでいる PowerExchange キャプチャライブラリの名前。

ジャーナル出口シーケンス

出口点 QIBM_QJO_DLT_JRNRCV について PowerExchange ジャーナルレシーバの削除出口プログラムの登録に使用される一意の 4 桁の数字。システムで使用されていない値を指定します。出口点に対して現在登録されている数を決定するには、WRKREGINF コマンドを使用してからオプション 8 を選択します。デフォルトは 1000 です。

出口ライブラリ

環境を IASP にインストールしている場合に必要になる PowerExchange ジャーナル出口プログラムライブラリの名前。IBM i システムでは、PowerExchange により提供されるジャーナル出口プログラムが、IASP ではないライブラリに常駐する必要があります。

8. **【リモートデータベースを設定】** チェックボックスを選択する場合は、適切な値を入力して PowerExchange がリモートシステムに接続できるようにします。

リモートデータベースを設定

PowerExchange ソフトウェアのインストール場所からリモートにあるシステム上の Db2 for i データベースにアクセスする場合は、このチェックボックスを選択します。

- **システム名。** リモート IBM i システムの名前。
- **データベース名。** リモートの Db2 for i データベースの名前。
- **ASP デバイス。** PowerExchange 環境が Independent ASP のリモートデータベースからテーブルおよびテーブルメタデータにアクセスする必要がある場合は、リモートサーバー上の Independent ASP の名前を指定します。指定しない場合は、このフィールドを空白のままにします。
- **OS レベル。** リモートシステム上の IBM i オペレーティングシステムのバージョン。

9. **【OK】** をクリックして、インストールプロセスを実行します。

以降の手順は、選択した構成オプションによって異なります。

- **【PowerExchange ライセンスキーを設定】** チェックボックスを選択した場合、**【PowerExchange ライセンスキーを設定】** ダイアログボックスが表示されます。詳細については、[「手順 3. ライセンスキーの入力」 \(ページ 49\)](#)を参照してください。
- **【PowerExchange DBMOVE ファイルを設定】** チェックボックスを選択した場合は、**【PowerExchange DBMOVE ファイルを設定】** ダイアログボックスが表示されます。詳細については、[「手順 4. DBMOVE 構成ファイルオプションの設定」 \(ページ 50\)](#)を参照してください。
- どちらのオプションも選択しなかった場合、インストールプロセスが開始され、進捗バーがインストールの進行状況を示します。インストールプロセスが完了すると、IBM i インストーラはインストールの正常な完了を示すメッセージを表示します。

10. インストールが完了したら、IBM i インストーラの右上隅にある **【閉じる】** ボタン (X) をクリックしてウィンドウを閉じます。

ヒント: ウィンドウ内のすべての情報をクリアするには、ウィンドウ下部の **【リセット】** ボタンを使用します。

手順 3. ライセンスキーの入力

【PowerExchange ライセンスキーを設定】 チェックボックスを選択した場合、IBM i インストーラで **【OK】** をクリックすると、**【PowerExchange ライセンスキーを設定】** ダイアログボックスが表示されます。

1. **【ライセンスキー】** フィールドに、64 ビットライセンスキーを入力します。以下に例を示します。
1234-ABCD-1234-EF01-5678-A9B2-E1E2-E3E4-A5F1-A9B2-1234-E3D4-95F1
2. **【OK】** をクリックして、ライセンスキーを保存します。

[PowerExchange DBMOVER ファイルを設定] チェックボックスを選択した場合は、
[PowerExchange DBMOVER ファイルを設定] ダイアログボックスが表示されます。それ以外の場合、
インストールプロセスが開始し、進捗バーがインストールの進行状況を示します。

3. インストールが完了したら、[閉じる] ボタン (X) をクリックしてウィンドウを閉じます。

手順 4.DBMOVER 構成ファイルオプションの設定

オプションで、IBM i サーバーの DBMOVER 構成ファイルパラメータを設定できます。

[PowerExchange DBMOVER ファイルを設定] チェックボックスを選択した場合、IBM i インストーラで
[OK] をクリックすると、[PowerExchange DBMOVER ファイルを設定] ダイアログボックスが表示されま
す。

1. ダイアログボックスで、IBM i システム上の PowerExchange リスナ用の以下のパラメータを入力します。

ポート番号

PowerExchange リスナが作業要求をリスンする TCP/IP ポート番号。有効な値は 1~65535 です。デ
フォルトは 2480 です。

資格情報の大文字小文字の区別

オペレーティングシステムユーザー ID およびパスワード用に PowerExchange が使用する文字の大
小文字の区別。有効な値は以下のとおりです。

- **A.** PowerExchange は、認証用のユーザー ID とパスワードを次のように処理しオペレーティング
システムに渡します。
 1. PowerExchange はユーザー ID を大文字に変換します。
 2. PowerExchange は、大文字と小文字が混在したパスワードを処理するようにオペレーティ
ングシステムが設定されているかどうかを確認します。設定されていれば、PowerExchange は
ユーザー ID を大文字で、パスワードを入力時の大文字/小文字のままで、オペレーティングシ
ステムに渡して認証を行います。設定されていない場合、PowerExchange はパスワードを大
文字に変換し、ユーザー ID とパスワードをオペレーティングシステムに渡して認証を行いま
す。
- **D.** PowerExchange は、大文字に変換したユーザー ID とパスワードを認証用にオペレーティ
ングシステムに渡します。
- **S.** PowerExchange は、ユーザー ID を大文字に変換し、パスワードは入力した文字のままにし
ます。続いて、ユーザー ID とパスワードをオペレーティングシステムに渡して認証を行います。

デフォルトは **D** です。

セキュリティレベル

PowerExchange がオペレーティングシステムの有効なユーザー ID とパスワードまたはパスフレーズ
の入力をユーザーに要求するかどうかを制御します。また、PowerExchange がユーザー入力資格情
報をチェックして、ファイルおよびデータベースリソースへのアクセスおよび特定の
PowerExchange コマンドの発行を制御するかどうかを管理します。次のいずれかのオプションを選
択します。

- **0.** PowerExchange は、オペレーティングシステムの有効なユーザー ID とパスワードを指定する
ことをユーザーに要求せず、ユーザーが入力した資格情報を無視します。PowerExchange は、
PowerExchange リスナまたは PowerExchange Condense タスクが実行されているユーザー ID
を使用して、ファイルリソースへのアクセスを制御します。PowerExchange はこのユーザー ID
をデータベースシステムに渡します。
- **1.** PowerExchange はユーザーにオペレーティングシステムの有効なユーザー ID とパスワードま
たは PowerExchange パスフレーズを指定することを要求します。PowerExchange は、タスクの

開始時にこれらの資格情報をチェックします。その後、PowerExchange はファイルリソースへのアクセスを、オプション 0 と同じ方法で制御します。ファイルアクセスについては、PowerExchange は PowerExchange リスナまたは PowerExchange Condense タスクを実行するユーザー ID を使用し、このユーザー ID をデータベースシステムに渡します。

- **2.** 最も厳密なレベルのセキュリティを提供します。PowerExchange はユーザーに有効なオペレーティングシステムユーザー ID とパスワードまたはパスフレーズを指定することを要求します。PowerExchange は、タスクの開始時にこれらの資格情報をチェックします。PowerExchange リスナサブタスクプロセスは、指定されたユーザー ID とパスワードまたはパスフレーズで実行されます。PowerExchange はこのユーザー ID とパスワードまたはパスフレーズを使用して、PowerExchange ファイルへのアクセスを制御します。また、PowerExchange はこのユーザー ID とパスワードまたはパスフレーズをデータアクセスのためにデータベースシステムに渡します。PowerExchange は、セキュリティオブジェクトを使用して、Linux、UNIX、または Windows システムから発行される PowerExchange リスナまたは PowerExchange Condense プロセスに対してどのユーザーが pwxcmd コマンドを実行できるかを制御します。セキュリティオブジェクトは、SNDLSTCMD インターフェース、PowerExchange Navigator、または DTLUTSK ユーティリティから発行される PowerExchange リスナ LISTTASK コマンドおよび STOPTASK コマンドをどのユーザーが実行できるかも制御します。

デフォルトは **0** です。

選択的なサインオン

PowerExchange リスナへの接続をユーザーに許可するための、PowerExchange の選択的サインオンファイルの使用を制御します。次のいずれかのオプションを選択します。

- **N.** PowerExchange は選択的サインオンファイルを使用しません。
- **Y.** PowerExchange は選択的サインオンファイルで ALLOW および IP サブパラメータを指定して USER 文を使用し、PowerExchange リスナに接続できるユーザーを制限します。

デフォルトは **N** です。

注: **Y** を指定して、SECURITY 文の最初のパラメータを **1** に設定した場合、PowerExchange はサインオンファイルの USER 文で TASKCNTRL パラメータを使用して、PowerExchange ナビゲータから発行された PowerExchange リスナ LISTTASK および STOPTASK コマンドへのアクセスを制御します。

ジャーナル名

登録されたテーブルの変更データを含み、PowerExchange による変更データの抽出元となるジャーナルのジャーナル名。

ジャーナルライブラリ

登録済みソーステーブルの変更データを含んでいるジャーナルのライブラリ名。

インスタンス

ソースインスタンスのユーザー定義の名前。この名前は、登録グループの **【コレクション識別子】** プロパティで指定した名前に一致する必要があります。

PowerExchange Condense を稼働している場合、この名前は、CAPTPARM メンバの DBID パラメータで指定された名前にも一致する必要があります。

インストールしている環境から複数の PowerExchange リスナを実行する場合は、IBMi サーバーの CFG ファイルの DBMOVER メンバに LISTENER 文を追加します。詳細については、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照してください。

2. **[OK]** をクリックして、インストールプロセスを実行します。
進捗バーがインストールの進行状況を示します。インストールプロセスが完了すると、IBM i インストーラはインストールの正常な完了を示すメッセージを表示します。
3. インストールが完了したら、**[閉じる]** ボタン (X) をクリックしてウィンドウを閉じます。

手順 5.オブジェクトの所有権の変更（オプション）

出荷されたライブラリから作成され、PowerExchange ソフトウェアおよびライブラリをインストールしたユーザー ID によって所有されるオブジェクトの所有権を変更できます。PowerExchange を実行するユーザー ID とは異なるユーザー ID を使用してインストールする場合はこの手順を実行します。

PowerExchange ソフトウェアライブラリ (*dtllib*) およびデータライブラリ (*datalib*) でこのユーザー ID を変更するには、次のコマンドを入力します。

```
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('dtllib' 'pwxusr')
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('datalib' 'pwxusr')
```

PowerExchange CDC で使用される PowerExchange Condense ライブラリ (*condlib*) および抽出マッピングライブラリ (*cpplib*) のユーザー ID を変更するには、以下のコマンドを入力します。

```
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('condlib' 'pwxusr')
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('cpplib' 'pwxusr')
```

手順 6.リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリの作成（オプション）

この手順は、DB2400C DB2 Call Level Interface (CLI) アクセスメソッドを使用する場合にのみ実行します。

以下のコマンドを使用して、リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリまたは作業するエントリを指定します。

WRKRDBDIRE

リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリは、PowerExchange リスナを実行している IBM i システム上のローカルデータベースまたはリモートデータベースです。このコマンドは、*LOCAL を含む、IBM i システム上のすべてのローカルおよびリモートエントリを指定します。

リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリが存在しない場合は、作成する必要があります。CLI アクセス方法では、リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリが、アクセスするデータベースの名前を取得する必要があります。

手順 7.PowerExchange ユーザー権限の設定

PowerExchange リスナとユーザーのセキュリティオプションを設定します。

PowerExchange リスナを対話式で実行する場合は、このトピックで示すコマンドを実行する前に、現在のジョブのライブラリリストに PowerExchange ソフトウェアライブラリ (*dtllib*) およびデータライブラリ (*datalib*) が含まれていることを確認します。

セキュリティのためにリモートプラットフォームから提供されるユーザー ID およびパスワードを PowerExchange リスナで使用する場合は、DBMOVER 構成ファイルの SECURITY 文の最初のパラメータをゼロ以外の値に変更します。

ジョブを実行する前に、PowerExchange ユーザー ID (*pwxusr*) に以下のオブジェクトの*EXECUTE 権限があることを確認します。

- QSYGETPH
- QSYRLSPH
- QWTSETP
- QCLRPGMI

これらのオブジェクトに EXECUTE 権限を付与するには、次のコマンドを実行します。

```
GRTOBJAUT OBJ(QSYGETPH) OBJTYPE(*PGM) AUT(*EXECUTE) USER(pwxusr)
GRTOBJAUT OBJ(QSYRLSPH) OBJTYPE(*PGM) AUT(*EXECUTE) USER(pwxusr)
GRTOBJAUT OBJ(QWTSETP) OBJTYPE(*PGM) AUT(*EXECUTE) USER(pwxusr)
GRTOBJAUT OBJ(QCLRPGMI) OBJTYPE(*PGM) AUT(*EXECUTE *READ) USER(pwxusr)
```

また、PowerExchange Listener を実行するには、ユーザー ID はすべてのユーザープロファイルに対する *READ 権限を持っている必要があります。*READ 権限を付与するには、以下のコマンドを実行します。

```
GRTOBJAUT OBJ(remote_id) OBJTYPE(*USRPRF) AUT(*READ) USER(pwxusr)
```

手順 6. インストールのテスト

インストールをテストするには、IBM i インストーラで指定した PowerExchange ソフトウェアライブラリにある PowerExchange DTLINFO ユーティリティを使用します。

DTLINFO ユーティリティを実行するには、以下のコマンドを入力します。

```
CALL DTLINFO
```

以下の情報が、現在の PowerExchange のインストールについて表示されます。

- バージョン
- リリースおよびリリースレベル
- ビルドの日付と時刻

DTLINFO の詳細については、『PowerExchange ユーティリティガイド』を参照してください。

IBM i に PowerExchange をインストールした後に

PowerExchange のインストールが完了したら、以下のインストール後の作業を実行します。

- 以前のリリースからアップグレードする場合、新機能および変更内容については『PowerExchange リリースガイド』を参照してください。
- 必要に応じて、前回のリリースから PowerExchange のデータファイルと構成ファイルをコピーします。
- バルクデータ移動または変更データキャプチャ（change data capture: CDC）を行う前に、PowerExchange を構成します。

PowerExchange の設定の詳細については、以下の文書を参照してください。

- バルクデータ移動の設定については、『PowerExchange バルクデータ移動ガイド』を参照してください。
- CDC の設定については、『PowerExchange 変更データキャプチャガイド for i5/OS』を参照してください。
- DBMOVE コンフィギュレーションファイルのパラメータについては、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。

PowerExchange を設定し、オプションで PowerExchange データをコピーしたら、PowerExchange Listener、および必要に応じて PowerExchange Condense を開始できます。PowerExchange タスクの起動および停止の詳細については、『PowerExchange コマンドリファレンス』を参照してください。

関連項目：

- [「IBM i への前回のリリースからのデータファイルと構成ファイルのコピー」](#)（ページ 55）
- [「データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行」](#)（ページ 38）

PowerExchange の IBM i でのアップグレード

IBM i にインストールされている既存の PowerExchange をアップグレードするには、フルインストールの手順に従います。詳細については、『[IBM i へのフルインストールの実行](#)』（ページ 44）を参照してください。また、以下の事前準備タスク、アップグレードの考慮事項、事後の必須タスクも確認してください。

関連項目：

- [「IBM i へのホットフィックスのインストール」 \(ページ 56\)](#)

IBM i で PowerExchange をアップグレードする前に

IBM i で PowerExchange をアップグレードする前に、以下の事前準備タスクを実行します。

1. PowerExchange のすべてのタスクを停止します。
2. PowerExchange ソフトウェアライブラリ (*dtllib*) をバックアップします。このライブラリには、PowerExchange のプログラム、メッセージ、およびライセンスキーが含まれます。CFG ファイルの DBMOVER メンバで DMX_DIR 文を指定した場合は、指定される場所にライブラリをバックアップします。
3. CDC を使用する場合は、以下のライブラリをバックアップします。
 - データライブラリ (*datalib*)。IBM i インストーラまたは CRTWPXENV コマンドを実行すると、PowerExchange によってこのライブラリが作成されます。このライブラリには、CFG ファイル、キャプチャ登録を含む CCT ファイル、および PowerExchange Condense ファイルに関する情報を含んでいる CDCT ファイルが含まれています。
 - 抽出ライブラリ (*cpplib*)。このライブラリには、抽出マップが含まれています。CFG ファイルの DBMOVER メンバの CPX_DIR 文は、このライブラリを指します。
4. PowerExchange Condense を使用する場合は、CFG ファイルの CAPTPARM メンバで以下のパラメータにより参照されるディレクトリをバックアップします。
 - CHKPT_BASENAME。PowerExchange Condense がチェックポイントファイルの生成に使用するライブラリとベースファイルの名前。
 - COND_DIR。このパラメータで指定されるライブラリには、PowerExchange Condense によって作成された要約ファイルが含まれています。

注: PowerExchange Condense をコールドスタートする場合は、CHKPT_BASENAME パラメータおよび COND_DIR パラメータで指定されるライブラリをバックアップする必要はありません。

PowerExchange の IBM i でのアップグレード

PowerExchange には IBM i のアップグレードインストールオプションはありません。フルインストールを実行する必要があります。フルインストールを実行する場合、以下のライブラリの新しいコピーを含めた新しい PowerExchange 環境を作成します。

- STDATAMAPS。データマップのデフォルト PowerExchange ライブラリ名。DBMOVER 構成ファイルで DMX_DIR 文を使用して、データマップライブラリの名前を上書きできます。
- ソフトウェアライブラリ (*dtllib*)。PowerExchange ソフトウェアおよびリソースファイルを含んでいるライブラリ。IBM i インストーラの実行時に、既存のライブラリを使用するかまたはライブラリを作成できます。
- データライブラリ (*datalib*)。IBM i インストーラを実行すると、PowerExchange によってこのライブラリが作成されます。このライブラリには、CFG ファイル、キャプチャ登録を含む CCT ファイル、および PowerExchange Condense ファイルに関する情報を含んでいる CDCT ファイルが含まれています。
- 抽出ライブラリ (*cpplib*)。CDC 抽出マップの PowerExchange ライブラリ名。IBM i インストーラを実行すると、PowerExchange によってこのライブラリが作成されます。CFG ファイルの DBMOVER メンバで CPX_DIR 文を定義して、抽出ライブラリの名前を上書きできます。
- Condense ライブラリ (*condlib*)。要約ファイルを含んでいる PowerExchange Condense ライブラリ。IBM i インストーラを実行すると、PowerExchange によってこのライブラリが作成されます。CFG ファイルの CAPTPARM メンバで COND_DIR パラメータを定義するかまたはインストーラで、PowerExchange Condense ライブラリの名前を上書きできます。PowerExchange Condense は、変更データをこのライブラリの要約ファイルに書き込みます。

- チェックポイントファイル。PowerExchange Condense のチェックポイントファイル。ライブラリおよびこれらのファイルのファイル名プレフィックスを指定するには、CFG ファイルの CAPTPARM メンバで CHKPT_BASENAME パラメータを指定します。

関連項目：

- [「IBM i へのフルインストールの実行」 \(ページ 44\)](#)

IBM i で PowerExchange をアップグレードした後に

PowerExchange のアップグレードが完了したら、以下のインストール後の作業を実行します。

- 新機能および変更内容については『*PowerExchange リリースガイド*』を参照してください。
- 必要に応じて、前回のリリースから PowerExchange のデータファイルと構成ファイルをコピーします。
- 必要に応じて、バルクデータ移動または変更データキャプチャ (change data capture: CDC) を行う前に PowerExchange を構成します。

関連項目：

- [「IBM i への前回のリリースからのデータファイルと構成ファイルのコピー」 \(ページ 55\)](#)
- [「データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行」 \(ページ 38\)](#)

IBM i への前回のリリースからのデータファイルと構成ファイルのコピー

PowerExchange のインストールが完了した後で、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップ、構成ファイル、および PowerExchange Condense のチェックポイントファイルと要約ファイルを、以前のリリースから新しい PowerExchange 環境のライブラリにコピーまたは移行できます。この情報をコピーすることにより、既存のすべてのバルクおよび CDC マップの定義、および変更データを含む要約ファイルを維持します。

バルクデータ移動の場合、*datalib*/CFG ファイルの DBMOVE メンバを以前のリリースのインストールから新しいインストールにコピーします。

CDC では、PowerExchange Condense をウォームスタートして使用する場合、次のライブラリ、ファイル、およびメンバを以前のリリースのインストールから新しいインストールにコピーします。

- *datalib*/CFG ファイルの DBMOVE メンバ。
- *condlib* ライブラリの FULL および PART で始まるすべてのファイル (変更データを含む要約ファイルを含む)。
- PowerExchange Condense チェックポイントファイル。CFG ファイルの CAPTPARM メンバの CHKPT_BASENAME パラメーターが参照します。

新しい環境で PowerExchange Condense をコールドスタートする場合、*datalib*/CFG ファイルの DBMOVE メンバをコピーするだけです。新たなファイルをコピーする必要はありません。

DTLURDMO ユーティリティを使用して、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップを移行できます。詳細については、[「データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行」 \(ページ 38\)](#)を参照してください。

PowerExchange の構成

必要に応じて、バルクデータ移動または変更データキャプチャ (change data capture: CDC) を行う前に PowerExchange を構成します。

構成情報の詳細については、以下の文書を参照してください。

- バルクデータ移動の設定については、『*PowerExchange バルクデータ移動ガイド*』を参照してください。

- CDC の設定については、『*PowerExchange CDC ガイド (i5/OS 版)*』を参照してください。
- DBMOVER コンフィギュレーションファイルのパラメータについては、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照してください。

PowerExchange を設定した後、PowerExchange Listener、および必要に応じて PowerExchange Condense をリスタートできます。PowerExchange タスクの起動および停止の詳細については、『*PowerExchange コマンドリファレンス*』を参照してください。

追加のリスナの構成

PowerExchange for IBM i を使用すると、複数のリスナを同じ環境から同時に実行できます。デフォルトでは、PowerExchange リスナは、インストールプロセス中に作成する LISTENER と呼ばれるメッセージキューを介してサーバーと通信します。追加のリスナでは、リスナを開始する前にメッセージキューを作成する必要があります。

次のコマンドをテンプレートとして使用して、メッセージキューを作成します。

```
CRMSGQ MSGQ(DATALIB/MYMSGQNAM) TEXT('My PWX Listener Message Queue') FORCE(*NO) SIZE(3 1 *NOMAX) AUT(*CHANGE)
ALWALR(*NO) CCSID(*HEX) MSGQFULL(*SNDMSG)
```

メッセージキューは、インストールプロセス中にデータライブラリに指定されたものと同じライブラリに作成する必要があります。Windows 上の IBM i インストーラまたは CRTPWXENV コマンドのいずれかを使用して作成します。

IBM i へのホットフィックスのインストール

IBM i の既存の PowerExchange 環境にホットフィックスをインストールして、修正と拡張機能のバンドルを取得します。ホットフィックスのバージョンとインストールされた PowerExchange のバージョンは同じである必要があります。

PowerExchange では、ホットフィックスをインストールしても、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップなどの新しいデータライブラリは作成されません。したがって、これらのデータセットの内容を移行する必要がないため、インストール処理が簡単になります。

PowerExchange ホットフィックスは累積的であるため、利用可能な最新のホットフィックスをインストールすると、同じ PowerExchange バージョンの以前のホットフィックスでの変更を取得できます。

関連項目：

- [「PowerExchange の IBM i でのアップグレード」 \(ページ 53\)](#)

IBM i にホットフィックスをインストールする前に

ホットフィックスをインストールする前に、以下の事前準備タスクを実行します。

1. PowerExchange のすべてのタスクを停止します。
2. PowerExchange ソフトウェアライブラリ *dtllib* をバックアップします。このライブラリには、PowerExchange のプログラム、メッセージ、およびライセンスキーが含まれます。CFG ファイルの DBMOVER メンバで DMX_DIR 文を指定する場合は、指定される場所にライブラリをバックアップします。

3. CDC を使用する場合は、以下のライブラリをバックアップします。
 - データライブラリ (*datalib*)。IBM i インストーラまたは CRTPWXENV コマンドを実行すると、PowerExchange によってこのライブラリが作成されます。このライブラリには、CFG ファイル、キャプチャ登録を含む CCT ファイル、および PowerExchange Condense ファイルに関する情報を含んでいる CDCT ファイルが含まれています。
 - 抽出ライブラリ (*cpxlib*)。このライブラリには、抽出マップが含まれています。CFG ファイルの DBMOVER メンバーの CPX_DIR 文は、このライブラリを指します。
 4. PowerExchange Condense を使用する場合は、CFG ファイルの CAPTPARM メンバで以下のパラメータにより参照されるディレクトリをバックアップします。
 - CHKPT_BASENAME。PowerExchange Condense がチェックポイントファイルの生成に使用するライブラリとベースファイルの名前。
 - COND_DIR。このパラメータで指定されるライブラリには、PowerExchange Condense によって作成された要約ファイルが含まれています。
- 注:** PowerExchange Condense をコールドスタートする場合は、CHKPT_BASENAME パラメータおよび COND_DIR パラメータで指定されるライブラリをバックアップする必要はありません。

IBM i へのホットフィックスのインストールのタスクフロー

IBM i に PowerExchange のホットフィックスをインストールするには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了チェック	タスク	必須またはオプション
	「手順 1. Windows での保存ファイルの抽出」 (ページ 57)	必須
	「手順 2. IBM i インストーラの実行」 (ページ 58)	必須
	「手順 3. ホットフィックスがインストールされていることの確認」 (ページ 58)	推奨
	「手順 4. PowerExchange タスクの再起動」 (ページ 59)	必須

IBM i へのホットフィックスのインストール

IBM i に PowerExchange のホットフィックスをインストールするには、次の手順を完了します。

手順 1. Windows での保存ファイルの抽出

PowerExchange では、ホットフィックスの保存ファイルを含む単一の自己解凍式実行可能 zip ファイルが提供されます。zip ファイルは、CD イメージの patches/i5os ディレクトリにあります。zip ファイル名のフォーマットは以下のとおりです。

```
pwxxrm_hotfixn_i5os.exe
```

変数 *xrm* は、バージョン、リリース、変更レベル、および変数 *n* はホットフィックスの番号です。具体的なファイル名の詳細については、PowerExchange のホットフィックスの『*PowerExchange* リリースノート』を参照してください。

自己解凍式 zip ファイルを Windows コンピュータの一時ディレクトリに解凍します。

手順 2. IBM i インストーラの実行

IBM i インストーラーを使用して、PowerExchange ソフトウェアを IBM i システムに転送し、PowerExchange 設定オプションを更新できます。

- 以下のいずれかの方法で IBM i インストーラーを起動します。
 - ファイルエクスプローラで、PowerExchange インストールディレクトリに移動し、pwxins.exe ファイルを探します。pwxins.exe をダブルクリックして、インストーラーを起動します。
 - Windows のコマンドウィンドウで、PowerExchange のインストールディレクトリに移動します。pwxins.exe と入力し、Enter キーを押してインストーラーを起動します。
- 【ローカルファイル名】** フィールドに、Windows コンピュータに抽出した IBM i 保存ファイルの名前を入力します。

詳細については、[「手順 1. Windows での保存ファイルの抽出」 \(ページ 57\)](#)を参照してください。
- オプションで、PowerExchange ソフトウェアライブラリの所有権を変更する場合は、**【ユーザー名】** および **【パスワード】** フィールドにユーザー ID とパスワードを入力します。それ以外の場合は、完全インストールで入力したのと同じユーザー ID とパスワードを使用します。

ユーザー ID は、[「ユーザー ID の要件」 \(ページ 44\)](#)で説明されている要件に適合する必要があります。
- ライセンスキーの更新が必要な場合は、**【PWX ライセンスキーを設定】** チェックボックスを選択します。
- DBMOVE 設定オプションの更新が必要な場合は、**【IBM i DBMOVE ファイルを設定】** チェックボックスを選択します。
- CDC 用にリモートシステム上の DB2 for i メタデータにアクセスするように IBM i システムを設定した場合は、**【リモートデータベースを設定】** チェックボックスをオンにします。次に各フィールドに入力し、PowerExchange がリモートシステムに接続できるようにします。
- 【OK】** をクリックして、インストールプロセスを実行します。

以降の手順は、選択した構成オプションによって異なります。

 - 【PWX ライセンスキーを設定】** チェックボックスを選択した場合、**【PWX ライセンスキーを設定】** ダイアログボックスが表示されます。詳細については、[「手順 3. ライセンスキーの入力」 \(ページ 49\)](#)を参照してください。
 - 【IBM i DBMOVE ファイルを設定】** チェックボックスを選択した場合は、**【IBM i DBMOVE ファイルを設定】** ダイアログボックスが表示されます。詳細については、[「手順 4. DBMOVE 構成ファイルオプションの設定」 \(ページ 50\)](#)を参照してください。
 - どちらのオプションも選択しなかった場合、インストールプロセスが開始され、進捗バーがインストールの進行状況を示します。インストールプロセスが完了すると、IBM i インストーラーはインストールの正常な完了を示すメッセージを表示します。
- インストールが完了したら、IBM i インストーラーの右上隅にある **【閉じる】** ボタン (X) をクリックして、ウィンドウを閉じます。

ヒント: ウィンドウ内のすべての情報をクリアするには、ウィンドウ下部の **【リセット】** ボタンを使用します。

手順 3. ホットフィックスがインストールされていることの確認

DTLINFO ユーティリティを実行して、PowerExchange の現在のバージョンとホットフィックスレベルが一致することを確認します。

DTLINFO ユーティリティの詳細については、『PowerExchange ユーティリティガイド』を参照してください。

手順 4.PowerExchange タスクの再起動

ホットフィックスのインストール前に停止した PowerExchange タスクを再起動します。

このようなタスクには、PowerExchange Listener タスクや PowerExchange Condense タスクなどがあります。

詳細については、『PowerExchange コマンドリファレンス』を参照してください。

パラメータファイルの保存

IBM i インストーラー用のパラメータファイルを保存して、パラメータを他のインストールに転送したり、後のアップグレードで使用するためにパラメータを保存することができます。

パラメータファイルを保存する前に、IBM i インストーラーに必要なパラメータをすべて入力する必要があります。

1. IBM i インストーラーから、**[ファイル]** > **[保存]** の順に選択します。
[構成ファイルの保存] ダイアログボックスが開きます。
2. ディレクトリを選択し、パラメータファイルのファイル名を入力します。
3. ファイルを保存するには、**[保存]** をクリックします。

インストールログファイルの表示

IBM i インストーラーからのインストールの実行時に発生した問題を診断するには、インストールログファイルを表示します。

ログを表示するには、少なくとも 1 度はインストールを実行する必要があります。

1. IBM i インストーラーから、**[ツール]** > **[インストールログの表示]** の順に選択します。
[インストールログファイルの表示] フォームが開きます。
2. ファイルリストからログファイルを選択し、**[表示]** ボタンをクリックします。
[ログファイルの表示] フォームが開きます。
3. ファイルの表示が終了したら、**[OK]** をクリックしてフォームを閉じます。

PowerExchange の IBM i でのアンインストール

この手順を使用して IBM i で PowerExchange をアンインストールします。リモートキャプチャ登録を追加した場合は、ローカルマシンとリモートマシンの両方で該当する手順を実行します。

1. PowerExchange のすべてのタスクを停止します。
2. スプールされたファイルをすべて PowerExchange 出力キューからクリアします。

IBM i インストーラーで **[システムオブジェクトを作成]** オプションを選択すると、インストーラーは QGPL ライブラリに出力キューを作成します。IBM i インストーラーを使用せずにシステムオブジェクトを作成した場合は、出力キューの場所はジョブの説明または SMBJOB コマンドのいずれかにあります。

3. ENDSBS コマンドを発行して、PowerExchange サブシステムを終了します。サブシステムの名前は、IBM i インストーラで PowerExchange データライブラリに指定した値です。
4. インストールプロセス時に作成されたライブラリを、データマッピングライブラリを含めてすべて削除します。
5. PowerExchange データライブラリに指定した名前を持つ QGPL ライブラリのオブジェクトを削除します。
6. インストールプロセス時に作成されたユーザープロファイルを削除します。

第 5 章

Linux および UNIX での PowerExchange のインストール とアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [Linux および UNIX のインストールの概要, 61 ページ](#)
- [Linux または UNIX へのフルインストールの実行, 61 ページ](#)
- [Linux または UNIX へのアップグレードインストールの実行, 71 ページ](#)
- [Linux または UNIX へのホットフィックスのインストール, 73 ページ](#)

Linux および UNIX のインストールの概要

この章では、フルインストール、アップグレード、およびホットフィックスのインストールの手順を含め、Linux または UNIX で PowerExchange をインストールする手順について説明します。

注: PowerExchange のインストール手順は、特に記載されている場合を除き、Linux と UNIX の両方に適用されます。

Linux または UNIX へのフルインストールの実行

PowerExchange を初めてインストールする場合、または新しい場所にインストールする場合は、フルインストールを実行します。

Linux または UNIX に PowerExchange をインストールする前に

PowerExchange をインストールする前に、インストール前の要件が満たされていること、および指定された前提となる作業を実行したことを確認します。

一般的なインストール前の要件

インストール前の全般的な要件を実行するには、このガイドの情報を確認してください。

このガイドを使用して完了できるタスクは、次のとおりです。

- PowerExchange で、使用しているオペレーティングシステムおよびデータソースのバージョンおよびリリースレベルがサポートされていることを確認します。
- 有効なライセンスキーを取得します。
- 新しい PowerExchange リリースが PowerCenter インストールで動作できることを確認します。
- 以前のリリースからアップグレードして PowerExchange の複数のリリースを実行する場合は、新しい PowerExchange リリースが既存の PowerExchange インストールで動作できることを確認します。
- 以前のリリースからアップグレードする場合は、必要なアップグレード作業を実行します。

ユーザー ID の作成と特権の付与

Linux または UNIX のインストール用のユーザー ID を作成します。

ユーザー ID を作成するには、以下の手順を実行します。

1. インストールのための新しいユーザー ID を作成して、このソフトウェアの所有者または管理者になります。インストール手順では、このユーザー ID は pwxuser と呼びます。適切なシステム管理ツールを使用して、pwxuser ユーザー ID を作成します。
2. ホームディスクを定義します。
3. Linux または UNIX プラットフォームの異なる場所からデータにアクセスするのに十分な権限および特権を pwxuser に付与します。

ディスク容量の要件

このインストールに必要なディスク容量が使用できることを確認します。

以下のディスク容量が必要です。

- PowerExchange のインストールには、約 150MB のディスク容量が必要です。ディスク容量のその他の要件は、送受信されるファイルおよびデータベースレコードによって異なります。
- PowerExchange のインストールには、一時ファイル用に 200MB のディスク容量が必要です。UNIX では、インストールスクリプトにより、/tmp ディレクトリに一時ファイルが書き込まれます。これらのファイルの場所を指定するには、TMP 環境変数または InstallAnywhere IATEMPDIR 環境変数を設定します。

Java 要件

Linux または UNIX に PowerExchange をインストールする前に、Java Development Kit (JDK) がインストールされていることを確認して、INFA_JDK_HOME 環境変数を設定します。

以下の表に、PowerExchange が各プラットフォームで必要とする Java バージョンを示します。

プラットフォーム	Java メジャーバージョン	Java マイナーバージョン
AIX	1.8.0	pap64
Linux	1.8.0_77	-
Solaris	1.7.0_45	-

ログインシェル（例えば、.bashrc スタートアップファイルや.cshrc スタートアップファイルなど）で、INFA_JDK_HOME 環境変数を Java Development Kit (JDK) が含まれるディレクトリに設定します。ログインシェルがこの環境変数にアクセスできることを確認します。

X Window Server

PowerExchange のインストールでグラフィカルユーザーインタフェース (GUI) オプションを選択した場合は、システムにグラフィックを表示するためにグラフィック表示サーバーを用意する必要があります。グラフィック表示サーバーが用意されていない場合に、PowerExchange をインストール GUI を使用してインストールしようとする、エラーメッセージが表示されます。

UNIX では、X Window サーバーが典型的なグラフィック表示サーバーです。グラフィカルモードを使用して PowerExchange をインストールするコンピュータに X Window サーバーがインストールされていない場合は、別のコンピュータにインストールされている X Window サーバーを使用できます。そのためには、DISPLAY 環境変数を別のコンピュータの X Window サーバーにリダイレクトします。

DISPLAY 環境変数を別のコンピュータの X Window サーバーにリダイレクトするには、以下のコマンドのいずれかを使用します。

- C シェル：
setenv DISPLAY=<TCP/IP node of XWindows server>:0
- Bourne/Korn シェル：
export DISPLAY="<TCP/IP node of XWindows server>:0"

例えば、TCP/IP ノードが 10.1.50.23 のコンピュータに X Window サーバーがインストールされている場合は、以下のコマンドを使用します。

- C シェル：
setenv DISPLAY 10.1.50.23:0
- Bourne/Korn シェル：
export DISPLAY="10.1.50.23:0"

X Window サーバーがインストールされているコンピュータの IP アドレスがわからない場合は、ネットワーク管理者に問い合わせてください。DISPLAY 環境変数のリダイレクトの詳細については、UNIX ベンダのマニュアルを参照してください。

X Window サーバーが、PowerExchange インストール GUI で使用しているフォントをサポートしていない場合は、GUI のボタンラベルの表示が崩れることがあります。

AIX の前提条件 (CDC)

AIX で、PowerExchange はライブラリ libptools_ptr.a に依存します。AIX 5.3 以前では、そのライブラリはデフォルトでインストールされていました。AIX 6.1 以降で、そのライブラリは bos.adt.debug パッケージをインストールした場合にのみ使用できます。このパッケージは IBM の Web サイトからダウンロードできます。

フルインストールのタスクフロー

Linux または UNIX で PowerExchange のフルインストールを実行するには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了 チェ ック	タスク	必須またはオプション
	「手順 1.Linux または UNIX システムへの TAR ファイルの転送」 (ページ 64)	必須
	「手順 2. TAR ファイルからのファイルの解凍」 (ページ 65)	必須

完了 チェ ック	タスク	必須またはオプション
	「手順 3A：コンソールモードでの PowerExchange インストールスクリプトの実行」 (ページ 65).	オプション。手順 3A または 3B のどちらかを実行
	「手順 3B：グラフィカルモードでの PowerExchange インストールスクリプトの実行」 (ページ 66).	オプション。手順 3A または 3B のどちらかを実行
	「手順 4.PATH 環境変数の設定」 (ページ 66)	必須
	「手順 5.Linux または UNIX での Oracle 用のロケールの設定」 (ページ 66).	Oracle または DB2 for Linux, UNIX, or Windows のデータソースではオプション
	「手順 6.Microsoft SQL Server 用のプラットフォーム固有のタスクの実行」 (ページ 67)	Microsoft SQL Server をデータソースとして使用し、Linux システムで PowerExchange リスナを実行する場合は必須
	「手順 7.MySQL 用のプラットフォーム固有のタスクの実行」 (ページ 68)	MySQL をデータソースとして使用し、Linux システムで PowerExchange リスナを実行する場合は必須
	「手順 8.インストールのテスト」 (ページ 69)	推奨
	「手順 9.一時ファイルとディレクトリの削除」 (ページ 69)	オプション

Linux または UNIX への PowerExchange のインストール

以下の手順を完了して、Linux または UNIX で PowerExchange のフルインストールを実行します。

手順 1.Linux または UNIX システムへの TAR ファイルの転送

この手順では、CD イメージから TAR ファイルを Linux または UNIX システムに転送します。

PowerExchange は、各プラットフォームに対するソフトウェアが含まれている単一の TAR ファイルを提供しています。TAR ファイルの名前は、プラットフォームによって異なります。TAR ファイルは、CD イメージの以下のいずれかのディレクトリにあります。

- ホットフィックスリリースのフルインストールの場合は、CD イメージの **software/unix/operating_system** ディレクトリ。
- メインリリースのフルインストールの場合は、CD イメージの **unix/operating_system** ディレクトリ。

以下の表に、TAR ファイルを含むサブディレクトリ、TAR ファイル名の形式、および各プラットフォームのバイナリの種類を示します。

サブディレクトリ	ファイル名	バイナリの種類
aix	pxwvrn_aix64.tar	AIX (64 ビット)
linux	pxwvrn_linux_em64t.tar pxwvrn_suse11_x64.tar	RedHat Linux (64 ビット)、SUSE Linux Enterprise Server 12 (64 ビット) SUSE Linux Enterprise Server 11 (64 ビット)
solaris	pxwvrn_solaris_sp64.tar	Solaris (64 ビット)

変数 *vrn* は、バージョン、リリース、変更レベルです。正確なファイル名の詳細については、PowerExchange のホットフィックスの『PowerExchange リリースノート』を参照してください。

注: 統合されたホットフィックス更新がある PowerExchange のバージョンは、ファイル名の形式がソフトウェアの基本バージョンとは異なります。正確なファイル名の詳細については、PowerExchange のホットフィックスの『PowerExchange リリースノート』を参照してください。

TAR ファイルを UNIX または Linux システムに転送する手順

1. **pxwuser** としてログインして、必要に応じてアクセス先のファイルおよびデータベースをサポートするように *.profile* を編集します。
2. この PowerExchange のインストール用の一時ディレクトリを、たとえば以下のように作成します。
`mkdir pxw_install`
3. このディレクトリを現在の作業ディレクトリに設定します。
`cd pxw_install`
4. FTP を BINARY モードで使用して、TAR ファイルを現在の作業ディレクトリに転送します。

手順 2. TAR ファイルからのファイルの解凍

`tar` コマンドを使用して、手順 1 で作成したディレクトリに TAR ファイルのすべてのファイルを解凍します。

Linux または UNIX のプラットフォームのタイプごとに、正確な構文が異なる場合があります。ただし、以下の一般的な構文は、ほとんどのプラットフォームに当てはまります。

```
tar -xvf file_name.tar
```

手順 3A: コンソールモードでの PowerExchange インストールスクリプトの実行

PowerExchange は、コンソールモードでコマンドプロンプトまたはグラフィカルモードからインストールできます。この手順では、コンソールモードで PowerExchange をインストールします。

PowerExchange をコンソールモードでインストールするには：

1. `install.sh` ファイルの場所を確認します。
2. コマンドプロンプトで、以下のコマンドを入力します。
`sh install.sh`
3. インストールウィザードの指示に従います。

手順 3B：グラフィカルモードでの PowerExchange インストールスクリプトの実行

この手順では、グラフィカルモードで PowerExchange をインストールします。

PowerExchange は、コンソールモードでコマンドプロンプトから、またはグラフィカルモードで PowerExchange のインストールのグラフィカルユーザーインターフェース（GUI）を使用してインストールできます。PowerExchange をグラフィカルモードでインストールするには、X Window サーバーを構成して実行している必要があります。X Window システムの詳細については、X Window のマニュアルを参照してください。

PowerExchange をグラフィカルモードでインストールするには：

1. X Window システムが実行していることを確認します。
2. install.sh ファイルの場所を確認します。
3. コマンドプロンプトで、以下のコマンドを入力します。

```
sh install.sh -i gui
```
4. インストールウィザードの指示に従います。

関連項目：

- [「X Window Server」](#)（ページ 63）

手順 4.PATH 環境変数の設定

PowerExchange 実行可能ファイルおよび共有ライブラリを実行時に正常にロードするには、Linux または UNIX システムでパスおよびライブラリパス環境変数を編集し、ファイルおよびライブラリがインストールされたディレクトリを指すようにします。

また、PowerExchange がさまざまなランタイムコンポーネントを探そうことができるように PWX_HOME 環境変数を設定します。

以下の表に、設定する必要がある Linux および UNIX 環境変数を示します。

変数	プラットフォーム	例
PWX_HOME[PWX_HOME]	すべて	PWX_HOME=/usr/pwxuser/vvrm
PATH	すべて	PATH=/usr/pwxuser/vvrm
LIBPATH	AIX	LIBPATH=/usr/pwxuser/vvrm
LD_LIBRARY_PATH	Solaris	LD_LIBRARY_PATH=/usr/pwxuser/vvrm
LD_LIBRARY_PATH	Linux	LD_LIBRARY_PATH=/usr/pwxuser/vvrm

環境変数が正しいことを確認するには、ログオフしてからもう一度ログオンします。

手順 5.Linux または UNIX での Oracle 用のロケールの設定

Linux または UNIX システムで Oracle データベースとともに PowerExchange を使用する場合、ロケールおよびコードページ用に追加の環境変数を設定する必要がある場合もあります。

Linux および UNIX オペレーティングシステムは、通常、複数以上のコードページがインストールされていますが、デフォルトでそのうちの 1 つが使用されます。

LANG、LC_CTYPE、または LC_ALL 環境変数を表示して、現在のコードページに対応する言語およびロケールに関する情報を取得できます。例えば、C シェルで以下の LOCALE コマンドを発行する場合があります。

LOCALE

コマンドによって以下のサンプル出力が生成されます。

```
LANG="C"
LC_CTYPE="C"
LC_NUMERIC="C"
LC_TIME="C"
LC_ALL="C"
```

この出力例で、「C」は「ASCII」を表します。

LOCALE コマンドの出力に LANG および LC_ALL が設定されていないことが示された場合は、UNIX 管理者に問い合わせてこれらの環境設定の正しい設定を確認します。また、これらの環境変数がエクスポートされていることを確認します。

言語を英語に変更し、さらに当該システムで Latin1 コードページを使用する必要がある場合は、以下のコマンドを発行します。

```
setenv LANG en_US.iso88591
```

この場合、以下のサンプル出力に示すようにロケールが Latin1（ISO 8859 1）に変更されます。

```
LANG="en_US.iso88591"
LC_CTYPE="en_US.iso88591"
LC_NUMERIC="en_US.iso88591"
LC_TIME="en_US.iso88591"
LC_ALL="en_US.iso88591"
```

UNIX システムのロケールまたはコードページの変更に関する詳細については、UNIX のマニュアルを参照してください。

手順 7。Oracle 用のプラットフォーム固有のタスクの実行

zLinux システム上で Oracle を実行する場合は、次のエクスポートコマンドを実行して、libnnz10.so と libclntsh.so ライブラリを事前にロードします。

```
export LD_PRELOAD=$ORACLE_HOME/lib/libnnz10.so:$ORACLE_HOME/lib/libclntsh.so
```

手順 6. Microsoft SQL Server 用のプラットフォーム固有のタスクの実行

Microsoft SQL Server をデータソースとして使用して Linux システムで PowerExchange リスナを実行するには、PowerExchange が SQL Server システムに接続するために提供する Linux で DataDirect ODBC ドライバを設定する必要があります。

1. ODBCINI および ODBCINST 環境変数を DataDirect ODBC のインストールディレクトリに設定します。

インストールディレクトリが *pxw_base_installation/ODBCversion* の場合、次の構文を使用して値を設定します。

```
$ ODBCINI=pxw_base_installation/ODBCversion/odbc.ini; export ODBCINI
$ ODBCINST=pxw_base_installation/ODBCversion/odbcinst.ini; export ODBCINST
```

2. 共有ライブラリの環境変数を設定します。以下の構文を使用します。

```
$ LD_LIBRARY_PATH=${LD_LIBRARY_PATH}:pxw_base_installation/ODBCversion/lib;
export LD_LIBRARY_PATH
```

3. 既存の odbcinst.ini ファイルを編集します。

"[DataDirect 8.0 SQL Server Wire Protocol]"セクションの"Driver"パスが正しいことを確認します。

エントリは次のようになる必要があります。

```
Driver=pxw_base_installation/ODBCversion/lib/DWsqls28.so
```

手順 7. MySQL 用のプラットフォーム固有のタスクの実行

MySQL をデータソースとして実行し、PowerExchange Listener を Linux システム上で実行する場合、手順にそってソースシステムを設定する必要があります。

1. 変更キャプチャ処理が行われるシステムに MySQL mysqlbinlog ユーティリティがインストールされていることを確認します。この場所は、ソースデータベースに対してローカルでもリモートでもかまいません。この要件を満たす構成は次のとおりです。

- MySQL ソースデータベースサーバーで PowerExchange と mysqlbinlog ユーティリティを実行します。
- MySQL ソースデータベースサーバーから離れたマシンで PowerExchange と mysqlbinlog ユーティリティを実行します。Path 環境変数に mysqlbinlog パスを指定するか、dbmover 構成ファイルの MYSQL CAPI_CONNECTION 文で、MYSQLBINLOG パラメータに mysqlbinlog フルパスとファイル名を指定します。

2. PowerExchange キャプチャが Linux システムで実行される場合、PowerExchange が ODBC ドライバを使用して MySQL サーバーに接続できるように、そのシステムで ODBC を構成します。以下の手順を実行します。

- a. ODBCINI と ODBCINST の環境変数を設定します。

次のエクスポート文を使用します。

```
export ODBCINI=$PWX_HOME/ODBC7.1/odbc.ini
export ODBCINST=$PWX_HOME/ODBC7.1/odbcinst.ini
```

- b. 共有 LD_LIBRARY_PATH 環境変数を設定します。

以下の文を使います。

```
LD_LIBRARY_PATH=${LD_LIBRARY_PATH}:$PWX_HOME/ODBC7.1/lib;
export LD_LIBRARY_PATH
```

- c. odbc.ini と odbcinst.ini ファイルの ODBC ドライバ情報を更新します。

たとえば、次の文を追加します。

```
Driver=pwx_home/ODBC7.1/lib/DWmysql27.so
```

pwx_home 変数は、PowerExchange が使用する DataDirect インストールへのローカルパスを表します。

3. 次のいずれかの方法で、MySQL ソースデータベース上で PowerExchange が必要とするオプションでバイナリログを有効にします。

- コマンドラインから MySQL データベースサーバーを起動する場合は、次のコマンドを入力します。

```
mysqld --server-id[=server_id] --log-bin[=base_name] --binlog-format[=row] --binlog-row-image[=full]
```

- MySQL データベースサーバーを Windows 上のサービスまたは Linux 上のデーモンとして起動すると、.ini または .cnf 構成ファイルにデータベース構成設定を指定できます。デフォルトファイル my.ini は、MySQL インストールディレクトリにあります。バイナリログを有効にするには、MySQL 設定ファイルに次の行を追加します。

```
[mysqld]
server-id=server_id
log-bin=base_name
binlog-format=row
binlog-row-image=full
```

メモ:

- MySQL 5.7.x では、server-id 値に 0 より大きい数値を使用する必要があります。
- Informatica では、オプションの log-bin パラメータを指定して、バイナリログファイルのシーケンスのベース名を指定することを推奨しています。バイナリログファイル名を作成するために、MySQL は

新しいバイナリログが作成されるたびにインクリメントされる数値サフィックスをベース名に追加します。ベース名を指定しない場合、MySQL はデフォルトのベース名 `host_name-bin` を使用します。

- PowerExchange では、行イメージタイプが full の row-based バイナリログが必要です。binlog-format パラメータが row に設定され、binlog-row-image パラメータが full に設定されていることを確認します。これらの値はデフォルト値です。

4. PowerExchange が MySQL データベースに接続するために使用できる MySQL ユーザーを作成します。次の SQL 文を使用します。

```
CREATE USER 'pwx_user'@'%' IDENTIFIED BY 'password';
```

5. CDC に必要な以下の権限を PowerExchange ユーザーに付与します。

```
GRANT SELECT ON database_name.* TO 'pwx_user'@'%';  
GRANT REPLICATION CLIENT ON *.* TO 'pwx_user'@'%';
```

ユーザーがリモート MySQL サーバー上のバイナリログにアクセスする必要がある場合は、次の追加権限を付与します。

```
GRANT REPLICATION SLAVE ON database_name.* TO 'pwx_user'@'%';
```

手順 8. インストールのテスト

インストールをテストするには、PowerExchange DTLINFO ユーティリティを使用します。

DTLINFO ユーティリティを実行するには、以下のコマンドを入力します。

```
dtlinfo
```

以下の情報が、現在の PowerExchange のインストールについて表示されます。

- バージョン
- リリースおよびリリースレベル
- ビルドの日付と時刻

DTLINFO の詳細については、『PowerExchange ユーティリティガイド』を参照してください。

手順 9. 一時ファイルとディレクトリの削除

インストールが完了したら、手順 1 で作成した一時ディレクトリとそのコンテンツを削除できます。

Linux または UNIX に PowerExchange をインストールした後に

PowerExchange のインストールが完了したら、以下のインストール後の作業を実行します。

- 新機能および変更内容については、『PowerExchange リリースガイド』を参照してください。
- 必要に応じて、前回のリリースから PowerExchange のデータと構成ファイルを移行します。
- 必要に応じて、バルクデータ移動または変更データキャプチャ (change data capture: CDC) を行う前に PowerExchange を構成します。

関連項目：

- [「Linux または UNIX への前回のリリースからの PowerExchange データのコピー」 \(ページ 70\)](#)
- [「データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行」 \(ページ 38\)](#)

Linux または UNIX への前回のリリースからの PowerExchange データのコピー

マシンで新しい PowerExchange リリースのアップグレードと新しい PowerExchange 環境の作成を行っている場合は、前回のリリースから PowerExchange のデータを新しい場所にコピーできます。

以下の PowerExchange データをコピーします。

- DBMOVER コンフィギュレーションファイルをコピーします。
- PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）を使用する場合、コンフィギュレーションファイル（pwxcl または dtlca）の EXT_CAPT_MASK パラメータで指定されるディレクトリをコピーします。このディレクトリには PowerExchange ロgger のログファイルがあります。グループ定義ファイルを使用する場合、各 GROUP 文の *external_capture_mask* 位置パラメータに指定されたディレクトリをバックアップします。

注: これらのディレクトリは、PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）をコールドスタートする予定があれば、バックアップする必要はありません。

関連項目：

- [「データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行」](#)（ページ 38）

PowerExchange の構成

バルクデータ移動または変更データキャプチャ（change data capture: CDC）を行う前に、PowerExchange を構成します。

構成情報の詳細については、以下の文書を参照してください。

- バルクデータ移動の設定については、『*PowerExchange バルクデータ移動ガイド*』を参照してください。
- CDC の設定については、『*Linux、UNIX、Windows 用 PowerExchange CDC ガイド*』を参照してください。
- dbmover.cfg 構成パラメータについては、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照してください。

PowerExchange を設定した後、PowerExchange Listener、および必要に応じて PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）を起動できます。PowerExchange タスクの起動および停止の詳細については、『*PowerExchange コマンドリファレンス*』を参照してください。

ローカライズされた環境用の PowerExchange の構成ファイル

PowerExchange のインストールプログラムは、英語およびローカライズされた環境で使用するためのサンプル構成ファイルをインストールします。ローカライズされた環境のサンプル構成ファイルには、その環境に必要なコードページとメッセージファイルを指定する文が含まれます。

PowerExchange は、次のサンプル構成ファイルを提供します。

ファイル名	環境
dbmover.cfg	英語
dbmover_bz.cfg	ポルトガル語
dbmover_ja.cfg	日本語

ファイル名	環境
dbmover_ko.cfg	韓国語
dbmover_sc.cfg	簡体字中国語

Linux または UNIX へのアップグレードインストールの実行

ここでは、Linux または UNIX へのアップグレードインストールの実行方法について説明します。PowerExchange の新しいバージョンを前のバージョンと同じディレクトリにインストールする場合は、このトピックの指示に従います。

関連項目：

- [「Linux または UNIX へのフルインストールの実行」 \(ページ 61\)](#)
- [「Linux または UNIX へのホットフィックスのインストール」 \(ページ 73\)](#)

Linux または UNIX に PowerExchange をアップグレードする前に

PowerExchange ソフトウェアをインストールまたはアップグレードする前に、以下のタスクを完了します。

1. PowerExchange のすべてのタスクを停止します。
2. 必要に応じて、フォールバックを提供するために現在の PowerExchange インストールディレクトリをバックアップします。
3. dbmover コンフィギュレーションファイルで DMX_DIR パラメータを指定する場合は、それが指すディレクトリをバックアップします。
4. CDC を使用する場合は、以下の dbmover.cfg パラメータで指定されたディレクトリをバックアップします。
 - CAPT_PATH。キャプチャ登録を保持する CCT ファイル、および PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) が使用するファイルが入っているディレクトリが指定されます。
 - CAPT_XTRA。抽出マップが入っているディレクトリが指定されます。
5. PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を使用する場合、コンフィギュレーションファイル (pwxcl または dtlca) の EXT_CAPT_MASK パラメータで指定されるディレクトリをバックアップします。このディレクトリには PowerExchange ロgger のログファイルがあります。グループ定義ファイルを使用する場合、各 GROUP 文の *external_capture_mask* 位置パラメータで指定されているディレクトリをバックアップします。

注: これらのディレクトリは、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) をコールドスタートする予定があれば、バックアップする必要はありません。
6. 前提条件を確認します。

関連項目：

- [「Linux または UNIX に PowerExchange をインストールする前に」 \(ページ 61\)](#)

Linux または UNIX へのアップグレードインストールのタスクフロ

Linux または UNIX 版 PowerExchange をアップグレードするための以下のタスクは、フルインストールのためのタスクのサブセットになっています。

Linux または UNIX 版 PowerExchange をアップグレードするには、以下のタスクチェックリストを使用します（インストール先は旧バージョンと同じとします）。

完了 チェ ック	タスク	必須またはオプション
	「手順 1.Linux または UNIX システムへの TAR ファイルの転送」 (ページ 64)	必須
	「手順 2. TAR ファイルからのファイルの解凍」 (ページ 65)	必須
	「手順 3A： コンソールモードでの PowerExchange インストールスクリプトの実行」 (ページ 65)	オプション。手順 3A または 3B のどちらかを実行
	「手順 3B： グラフィカルモードでの PowerExchange インストールスクリプトの実行」 (ページ 66)	オプション。手順 3A または 3B のどちらかを実行
	「手順 6.Microsoft SQL Server 用のプラットフォーム固有のタスクの実行」 (ページ 67)	Microsoft SQL Server をデータソースとして使用し、Linux システムで PowerExchange リスナを実行する場合は必須
	「手順 7.MySQL 用のプラットフォーム固有のタスクの実行」 (ページ 68)	MySQL をデータソースとして使用し、Linux システムで PowerExchange リスナを実行する場合は必須
	「手順 8.インストールのテスト」 (ページ 69)	推奨
	「手順 9。一時ファイルとディレクトリの削除」 (ページ 69)	オプション

Linux または UNIX に PowerExchange をアップグレードした後に

新機能および変更内容については『PowerExchange リリースガイド』を参照してください。

必要に応じて、バルクデータ移動操作または CDC 処理を行う前に PowerExchange を設定します。構成情報の詳細については、以下の文書を参照してください。

- バルクデータ移動の設定については、『PowerExchange バルクデータ移動ガイド』を参照してください。
- CDC の設定については、『Linux、UNIX、Windows 用 PowerExchange CDC ガイド』を参照してください。
- dbmover.cfg 構成パラメータについては、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。

PowerExchange を設定した後、PowerExchange Listener、および必要に応じて PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）をリスタートできます。PowerExchange タスクの起動および停止の詳細については、『PowerExchange コマンドリファレンス』を参照してください。

ローカライズされた環境用の PowerExchange の構成ファイル

PowerExchange のインストールプログラムは、英語およびローカライズされた環境で使用するためのサンプル構成ファイルをインストールします。ローカライズされた環境のサンプル構成ファイルには、その環境に必要なコードページとメッセージファイルを指定する文が含まれます。

PowerExchange は、次のサンプル構成ファイルを提供します。

ファイル名	環境
dbmover.cfg	英語
dbmover_bz.cfg	ポルトガル語
dbmover_ja.cfg	日本語
dbmover_ko.cfg	韓国語
dbmover_sc.cfg	簡体字中国語

Linux または UNIX へのホットフィックスのインストール

ここでは、既存の PowerExchange 環境にホットフィックスをインストールする方法について説明します。ホットフィックスのバージョンと既存の PowerExchange のバージョンは同じである必要があります。

ホットフィックスは、PowerExchange ソフトウェアのサブセットを提供します。既存の PowerExchange 環境の一番上にインストールします。PowerExchange では、ホットフィックスをインストールしても、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップなどの新しいデータファイルは作成されません。したがって、これらのファイルの内容を移行する必要がないため、ホットフィックスのインストール処理が簡単になります。

PowerExchange のホットフィックスは累積的であるため、インストールする必要があるのは利用できる最新のホットフィックスだけです。

関連項目：

- [「Linux または UNIX へのアップグレードインストールの実行」 \(ページ 71\)](#)

Linux または UNIX にホットフィックスをインストールする前に

ホットフィックスをインストールする前に、以下のタスクを完了します。

1. PowerExchange のすべてのタスクを停止します。
2. PowerExchange インストールディレクトリをバックアップします。
3. dbmover コンフィギュレーションファイルで DMX_DIR パラメータを指定する場合は、それが指すディレクトリをバックアップします。
4. CDC を使用する場合は、次に示す dbmover コンフィギュレーションファイルのパラメータで指定されたディレクトリをバックアップします。
 - CAPT_PATH. キャプチャ登録用の CCT ファイル、および PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) が使用するファイルが入っているディレクトリが指定されます。

- CAPT_XTRA。抽出マップが入っているディレクトリが指定されます。
5. PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) を使用する場合、コンフィギュレーションファイル (pwxcl または dtlca) の EXT_CAPT_MASK パラメータで指定されるディレクトリをバックアップします。このディレクトリには PowerExchange ロgger のログファイルがあります。グループ定義ファイルを使用する場合、各 GROUP 文の *external_capture_mask* 位置パラメータで指定されているディレクトリをバックアップします。
- 注:** これらのディレクトリは、それが CAPT_PATH と同じである場合、または PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) をコールドスタートする予定がある場合は、バックアップする必要はありません。

Linux または UNIX へのホットフィックスのインストールのタスクフロー

Linux または UNIX 上に PowerExchange のホットフィックスをインストールするには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了 チェック	タスク	必須またはオプション
	「手順 1.Linux または UNIX システムへの TAR ファイルの転送」 (ページ 74)	必須
	「手順 2. ホットフィックスインストールファイルの解凍」 (ページ 75)	必須
	「手順 3. ライセンスおよび DBMOVER コンフィギュレーションファイルの確認」 (ページ 75)	必須
	「手順 4.AIX システムでの slibclean コマンドの実行」 (ページ 75)	AIX では必須
	「手順 5.ホットフィックスがインストールされていることの確認」 (ページ 75)	推奨
	「手順 6.PowerExchange タスクの再起動」 (ページ 76)	必須

Linux または UNIX へのホットフィックスのインストール

以下の手順を完了して、Linux または UNIX に PowerExchange のホットフィックスをインストールします。

手順 1.Linux または UNIX システムへの TAR ファイルの転送

この手順では、CD イメージから TAR ファイルを Linux または UNIX システムに転送します。

FTP を使用して、ホットフィックスインストール用 TAR ファイルを BINARY モードで Linux または UNIX システム上にある現在の PowerExchange インストールディレクトリに転送します。

PowerExchange は、各プラットフォームに対するソフトウェアが含まれている単一の tar ファイルを提供しています。tar ファイルは、CD イメージの **patches/unix** ディレクトリにあります。tar ファイルの名前は、プラットフォームによって異なります。

以下の表に、tar ファイルを含むサブディレクトリ、tar ファイル名の形式、および各プラットフォームのバイナリの種類を示します。

サブディレクトリ	ファイル名	バイナリの種類
aix	pwvxrm_hotfixn_aix64.tar	AIX (64 ビット)
linux	pwvxrm_hotfixn_linux_em64t.tar pwvxrm_hotfixn_suse11_x64.tar	RedHat Linux (64 ビット)、SUSE Linux Enterprise Server 12 (64 ビット) SUSE Linux Enterprise Server 11 (64 ビット)
solaris	pwvxrm_hotfixn_solaris_sp64.tar	Solaris (64 ビット)

変数 *vrn* は、バージョン、リリース、変更レベル、および変数 *n* はホットフィックスの番号です。正確なファイル名の詳細については、PowerExchange のホットフィックスの『*PowerExchange* リリースノート』を参照してください。

手順 2. ホットフィックスインストールファイルの解凍

tar コマンドを使用して、TAR ファイルのすべてのファイルをインストールディレクトリに解凍します。

Linux または UNIX のプラットフォームのタイプごとに、正確な構文が異なる場合があります。ただし、以下の一般的な構文は、ほとんどのプラットフォームに当てはまります。

```
tar -xvf file_name.tar
```

手順 3. ライセンスおよび DBMOVER コンフィギュレーションファイルの確認

PowerExchange インストールディレクトリに license.key ファイルと dbmover.cfg ファイルを格納する場合は、それらが正確で、ホットフィックスのインストールによる影響を受けていないことを確認します。必要に応じて、バックアップからこれらのファイルをコピーします。

ヒント: 新しいリリースへのアップグレードを簡単に行うには、PowerExchange インストールディレクトリ以外のディレクトリに license.key ファイルと dbmover.cfg ファイルを格納します。環境変数または起動コマンドのオプションを使用して、license.key ファイルと dbmover.cfg ファイルの場所を指定できます。環境変数と PowerExchange タスクの起動コマンドのオプションの詳細については、『[Linux、UNIX、および Windows 上の PowerExchange 環境](#)』（ページ 190）を参照してください。

手順 4. (zLinux のみ) mkliblinks.sh スクリプトの実行

zLinux で、いくつかのモジュールに必要なリンクを回復するには、mkliblinks.sh スクリプトを実行します。このスクリプトは、PowerExchange インストールディレクトリにあります。

手順 4.AIX システムでの slibclean コマンドの実行

DTLINFO ユーティリティと PowerExchange リスナで正しいホットフィックス番号がレポートされていることを確認するには、AIX システムにインストールしている場合は slibclean コマンドを実行します。このコマンドを実行するには、root または sudo 権限が必要です。

手順 5. ホットフィックスがインストールされていることの確認

DTLINFO ユーティリティを実行して、PowerExchange の現在のバージョンとホットフィックスレベルが一致することを確認します。

DTLINFO ユーティリティの詳細については、『*PowerExchange ユーティリティガイド*』を参照してください。

手順 6.PowerExchange タスクの再起動

ホットフィックスのインストール前に停止した PowerExchange タスクを再起動します。

このようなタスクには、PowerExchange リスナのタスクや PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）などがあります。

詳細については、『*PowerExchange コマンドリファレンス*』を参照してください。

ローカライズされた環境用の PowerExchange の構成ファイル

PowerExchange は、英語およびローカライズされた環境で使用するためのサンプル構成ファイルを提供します。ローカライズされた環境のサンプル構成ファイルには、その環境に必要なコードページとメッセージファイルを指定する文が含まれます。

前のリリースからホットフィックスのサンプル構成ファイルが更新されている場合、インストールプログラムはサンプルファイルをインストールする際にファイル名に「_sample」を追加して、前にインストールされたファイルが上書きされないようにします。

PowerExchange は、HotFix に必要な場合に、次のサンプル構成ファイルを提供します。

ファイル名	環境
dbmover.cfg_sample	英語
dbmover_bz.cfg_sample	ポルトガル語
dbmover_ja.cfg_sample	日本語
dbmover_ko.cfg_sample	韓国語
dbmover_sc.cfg_sample	簡体字中国語

第 6 章

Windows での PowerExchange のインストールとアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [Windows へのインストールの概要, 77 ページ](#)
- [Windows へのフルインストールの実行, 78 ページ](#)
- [Windows へのアップグレードインストールの実行, 84 ページ](#)
- [Windows での PowerExchange ホットフィックスのインストール, 85 ページ](#)
- [Windows での PowerExchange のアンインストール, 88 ページ](#)

Windows へのインストールの概要

この章では、フルインストール、アップグレード、ホットフィックスインストールの手順を含め、Windows で PowerExchange をインストールする手順について説明します。

PowerExchange インストールプログラムは、Windows 32 ビットシステムまたは Windows 64 ビットシステム上で動作する PowerExchange のインストールまたはアップグレードを実行します。

Windows では、32 ビットおよび 64 ビットの PowerExchange 実行可能ファイルが用意されています。PowerExchange のインストールプログラムでは、64 ビットマシンには両方のセットの実行可能ファイルがインストールされ、32 ビットマシンには 32 ビット実行可能ファイルがインストールされます。64 ビットマシンでは、インストールプログラムが、PowerExchange Navigator をインストールするかどうかを確認します。

以下の表に、PowerExchange の一部のコンポーネントと機能について、使用されている実行可能ファイル (32 ビット、64 ビット、または両方) を示します。

PowerExchange のコンポーネントまたは機能	32 ビット実行可能ファイル	64 ビット実行可能ファイル
PowerExchange Navigator	-	X
PowerExchange バルクデータ移動	-	X
PowerExchange 変更データキャプチャ (CDC)	-	X
PowerExchange ユーティリティ	X (32 ビットマシンの DTLREXE のみ)	X (DTLREXE を含むすべてのユーティリティ)

PowerExchange のコンポーネントまたは機能	32 ビット実行可能ファイル	64 ビット実行可能ファイル
PowerCenter Client での PowerExchange のサポート	X	-
Informatica Developer での PowerExchange のサポート	-	X
PowerCenter 統合サービスおよびデータ統合サービスでの PowerExchange のサポート	-	X
ODBC Administrator のサポートと PowerExchange ODBC ドライバ	X (32 ビットアプリケーション用の PowerExchange ODBC 接続をサポート)	X
z/OS Installation Assistant	-	X

Windows へのフルインストールの実行

PowerExchange を初めてインストールする場合、新しい場所にインストールする場合、PowerExchange をアップグレードする場合は、フルインストールを実行します。

Windows に PowerExchange をインストールする前に

PowerExchange をインストールする前に、インストール前の要件が満たされていること、および指定された前提となる作業を実行したことを確認します。

一般的なインストールの要件

PowerExchange をインストールする前に、以下のタスクを実行してください。

- PowerExchange で、使用しているオペレーティングシステムおよびデータソースのバージョンおよびリリースレベルがサポートされていることを確認します。
- 有効なライセンスキーを取得します。
- 新しい PowerExchange リリースが PowerCenter インストールで動作できることを確認します。
- 以前のリリースからアップグレードして PowerExchange の異なるリリースレベルを異なるシステムで実行する場合は、新しい PowerExchange リリースが既存の PowerExchange インストールで動作できることを確認します。詳細については、[「PowerExchange 間の相互運用性」 \(ページ 33\)](#)を参照してください。
- 以前のリリースからアップグレードする場合は、必要な移行作業を実行します。詳細については、[「Windows で PowerExchange をアップグレードする前に」 \(ページ 84\)](#)を参照してください。
- 以前のリリースからアップグレードする場合は、必要に応じて、以前のリリースを Windows システムからアンインストールします。

Windows での PowerExchange のアンインストールの詳細については、[「Windows での PowerExchange のアンインストール」 \(ページ 88\)](#)を参照してください。

- システムバックアップ変数 PATH のバックアップを作成します。PowerExchange のパスがシステム変数 PATH の先頭に付加されます。PATH 変数の最大長を超えると、変数は切り詰められます。

ディスク容量の要件

PowerExchange を Windows にインストールするには、360MB のディスク容量が必要です。

ODBC に関する考慮事項

PowerExchange Open Database Connectivity (ODBC) ドライバをインストールする必要があるかどうかを判断します。PowerCenter や Data Archive などの Informatica の別の製品から ODBC を使用して PowerExchange にアクセスする場合は、PowerExchange をインストールした後にこれらのドライバをインストールする必要があります。

ヒント: PowerCenter と PowerExchange を統合するには、PowerExchange Client for PowerCenter (PWXPC) を PowerExchange ODBC の代わりに使用することをお勧めします。PWXPC は追加機能を提供しています。詳細については、『*PowerCenter 用の PowerExchange インタフェース*』を参照してください。

PowerExchange のインストールでは、次のシン ODBC ドライバの 32 ビットバージョンと 64 ビットバージョンを提供します。

- **Informatica PowerExchange Unicode ドライバ。** このドライバを使用して、マルチバイト文字が含まれるメタデータを取得します。
- **Informatica PowerExchange ドライバ。** このドライバを使用してデータソースにアクセスします。

PowerExchange ODBC ドライバを次のマシンにインストールします。

- ODBC を使用して PowerCenter Designer (32 ビットアプリケーション) にメタデータをインポートするか、PowerCenter でデータをプレビューする場合は、32 ビット PowerExchange ODBC ドライバを PowerCenter Client マシンにインストールします。
- ODBC を使用するワークフローを実行する場合は、64 ビット PowerExchange ODBC ドライバを PowerCenter 統合サービスまたはデータ統合サービスのマシンにインストールします。

PowerExchange 環境変数の考慮事項

PowerExchange 環境変数を定義すると、PowerExchange メッセージログファイル、構成ファイル、ライセンスファイルの場所を指定できます。これらのファイルをデフォルトの場所から移動し、環境変数を使用して新しい場所をポイントすると、アップグレードとファイルの特定が簡単になります。

以下の表に、環境変数とそれらが指すファイルを示します。

環境変数	指すデータ
DETAIL_LOGPATH	PowerExchange メッセージログファイル
PWX_CONFIG	PowerExchange DBMOVER 構成ファイル
PWX_LICENSE	PowerExchange ライセンスキー

次の表に、32 ビット PowerExchange 環境と 64 ビット PowerExchange 環境の PowerExchange メッセージログファイル、DBMOVER 構成ファイル、ライセンスキーファイルのデフォルトの場所を示します。

PowerExchange ファイル	32 ビット PowerExchange でのデフォルトの場所	64 ビット PowerExchange でのデフォルトの場所
メッセージログファイル	現在の作業ディレクトリ	現在の作業ディレクトリ
DBMOVER 構成ファイル	インストールディレクトリの bin32 サブディレクトリ	インストールディレクトリ
ライセンスキーファイル	インストールディレクトリの bin32 サブディレクトリ	インストールディレクトリ

PowerExchange の 32 ビット Windows バージョンと 64 ビット Windows バージョンを同一マシンで実行することがあります。たとえば、PowerCenter Developer と PowerCenter Integration Server を同一マシンで実行するなどです。この場合、Developer クライアントは 32 ビット PowerExchange 実行可能ファイル呼び出してメタデータにアクセスし、統合サービスは 64 ビット PowerExchange 実行可能ファイル呼び出して、PowerExchange ソースに接続するワークフローを実行します。

PowerExchange 環境変数を定義して PowerExchange ファイルをポイントすると、環境変数は、32 ビットと 64 ビットの両方のバージョンの PowerExchange によって使用されるファイルに適用されます。PowerExchange の 32 ビットバージョンと 64 ビットバージョンで DBMOVER やメッセージログファイルを別々に維持する場合は、デフォルトの場所を維持し、環境変数を定義しません。Windows システムでは、DBMOVER 構成ファイルで LOGPATH 文を定義し、PowerExchange メッセージログファイルの一意のパスとディレクトリを指定することもできます。また、DETAIL_LOGPATH 環境変数に値を指定する場合、この環境変数は LOGPATH 文を上書きします。

フルインストールのタスクフロー

Windows で PowerExchange のフルインストールを実行するには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了 チェック	タスク	必須またはオプション
	「手順 1. 必要な権限があるユーザーとしてのログイン」 (ページ 81)	必須
	「手順 2. インストールプログラムの実行」 (ページ 81)	必須
	「手順 3. Path 環境変数の確認または設定」 (ページ 81)	必須
	「手順 4. PowerExchange ODBC ドライバのインストール (オプション)」 (ページ 82)	PowerExchange ODBC を使用する必要がある場合のみ必須
	「手順 5. インストールのテスト」 (ページ 83)	推奨

PowerExchange のインストール

Windows で PowerExchange のフルインストールを行うには、以下の手順を実行します。

手順 1. 必要な権限があるユーザーとしてのログイン

インストールプログラムを実行するには、Administrator ユーザーとしてログインするか、Administrators グループに属するユーザー ID を使用します。Administrator 権限がない場合、インストールプログラムによって PowerExchange Listener サービスはインストールされません。

手順 2. インストールプログラムの実行

PowerExchange ソフトウェアを Windows 上にインストールし、Windows サービスとして PowerExchange リスナを追加するために PowerExchange に用意されている zip ファイルを使用します。zip ファイルは、CD イメージの software/windows ディレクトリにあります。

PowerExchange を Windows 32 ビットシステムまたは 64 ビットシステムにインストールするには：

1. Windows プラットフォーム用の zip ファイルの内容を一時フォルダーに抽出します。
zip ファイルの名前は pwxvrm_win_x64.zip です。変数 *vrm* は、PowerExchange のバージョン、リリース、および変更レベルです。
注: 統合されたホットフィックス更新がある PowerExchange のバージョンは、ファイル名の形式がソフトウェアの基本バージョンとは異なります。正確なファイル名の詳細については、PowerExchange のホットフィックスの『*PowerExchange* リリースノート』を参照してください。
zip ファイルの内容を展開するときは、展開先フォルダーに以下のフォルダーとファイルが含まれるように、その構造を保持します。
 - プロパティフォルダー
 - Server フォルダー
 - ソースフォルダー
 - install.bat ファイル
2. install.bat を実行します。
インストールインタフェースが開始されます。
3. 言語を選択するよう要求するメッセージが表示されたら、言語を選択して **[OK]** をクリックします。
4. **[導入]** ページで、**[次へ]** をクリックします。
5. **[ライセンスキーの入力]** ページで、ライセンスキーを入力してから、**[次へ]** をクリックします。
ライセンスキーがわからない場合は、『[「PowerExchange ライセンスキー」 \(ページ 29\)](#)』を参照してください。
6. **[インストールディレクトリ]** ページでデフォルトのインストールディレクトリを受け入れるか、または **[選択]** をクリックしてインストールディレクトリまでブラウズします。
PowerExchange Navigator をインストールしない場合は、当該チェックボックスをオフにします。
[次へ] をクリックします。
7. **[インストール前の要約]** ページで、インストール情報を確認します。情報が正しい場合は、**[インストール]** をクリックします。
8. **[インストール後のサマリ]** ページで、**[完了]** をクリックします。

手順 3. Path 環境変数の確認または設定

Path 環境変数を確認または設定します。インストールプログラムは、PowerExchange インストールディレクトリをパスに含めるよう Path 環境変数を更新します。PowerExchange インストールディレクトリが含まれていないと、PowerExchange Navigator のヘルプなどの PowerExchange の機能を使用できない場合があります。

1. **[スタート] > [コントロールパネル] > [システム] > [システムの詳細設定]** をクリックします。

2. **【環境変数】** をクリックします。
3. Path 環境変数を確認または変更するには、以下の手順を実行します。
 - **【システム環境変数】** で、**【Path】** を選択して **【編集】** をクリックします。
 - **【変数値】** ボックスで、Path 環境変数に PowerExchange インストールディレクトリの正しいパスが含まれていることを確認します。パスが含まれていない場合は、セミコロン区切りのパスのリストに PowerExchange インストールディレクトリを追加します。デフォルトのインストール場所を受け入れた場合は、以下のデフォルトパスを使用します。
 C:\Informatica\PowerExchangev.r.m
4. **【OK】** をクリックします。
5. **【OK】** をクリックします。

手順 4.PowerExchange ODBC ドライバのインストール（オプション）

ODBC を使用して、PowerCenter、または PowerExchange と統合された別の Informatica 製品からアクセスする場合は、PowerExchange Open Database Connectivity (ODBC) ドライバをインストールします。

1. 管理者特権でコマンドプロンプトを実行するには、以下のアクションを実行します。
 - **【スタート】** > **【すべてのプログラム】** > **【アクセサリ】** を選択します。
 - **【コマンドプロンプト】** を右クリックして **【管理者として実行】** を選択します。
2. 次のいずれかのディレクトリに移動します。
 - 64 ビット ODBC ドライバをインストールするには、基本 PowerExchange インストールディレクトリに移動します。
 - 32 ビット ODBC ドライバをインストールするには、PowerExchange インストールディレクトリのサブディレクトリ bin32 に移動します。

32 ビットおよび 64 ビットの ODBC ドライバの詳細については、[「ODBC に関する考慮事項」](#)（ページ 79）を参照してください。
3. コマンドプロンプトで、以下のコマンドを入力します。
 dtlodbci add
 このコマンドでは、両方の ODBC ドライバがインストールされ、以下のメッセージが表示されます。
 PWX-00607 DTLODBCI VRM x.x.x Build Vxxx started.
 PWX-02322 ODBC driver "Informatica PowerExchange" added.
 PWX-02322 ODBC driver "Informatica PowerExchange Unicode" added.
4. **【Windows ODBC データソースアドミニストレータ】** を使用して、PowerExchange ODBC データソースを定義します。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。

注意事項:

- 管理者特権がないユーザーが dtlodbci プログラムを実行すると、実際にはエントリが追加または削除されていないにもかかわらず追加または削除されているように見える場合があります。
- 管理者特権でコマンドプロンプトを実行する代わりに、dtlodbci プログラムが常に管理者特権で実行されるように Windows を設定することもできます。以下の手順を実行します。
 1. 適切な dtlodbci.exe ファイルが含まれるディレクトリに移動します。
 2. **dtlodbci.exe** を右クリックして、**【プロパティ】** を選択します。
 3. **【互換性】** タブで、**【管理者としてこのプログラムを実行する】** を選択します。

手順 5. インストールのテスト

DTLINFO ユーティリティを使用して、PowerExchange のインストールをテストします。ユーティリティを実行するには、コマンドプロンプトで以下のコマンドを入力します。

dtlinfo

このコマンドによって、現在の PowerExchange のインストールのバージョン、リリース、変更レベル、およびビルドの日付と時刻についての情報が表示されます。DTLINFO の詳細については、『PowerExchange ユーティリティガイド』を参照してください。

Windows に PowerExchange をインストールした後に

PowerExchange のインストールが完了したら、以下のインストール後の作業を実行します。

- 新機能および変更内容については『PowerExchange リリースガイド』を参照してください。
- 必要に応じて、前回のリリースから PowerExchange のデータと構成ファイルを移行します。
データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行の詳細については、『[データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行](#)』（ページ 38）を参照してください。
- バルクデータ移動または CDC を行う前に、PowerExchange を構成します。構成情報の詳細については、以下の文書を参照してください。
 - バルクデータ移動の設定については、『PowerExchange バルクデータ移動ガイド』を参照してください。
 - CDC の設定については、『PowerExchange CDC Guide for z/OS』、『PowerExchange 変更データキャプチャガイド for i5/OS』、または『Linux、UNIX、Windows 用 PowerExchange CDC ガイド』を参照してください。
 - dbmover.cfg 構成パラメータについては、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。

PowerExchange を設定した後、PowerExchange Listener サービスまたは PowerExchange Listener、および必要に応じて PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）を起動できます。PowerExchange タスクの起動および停止の詳細については、『PowerExchange コマンドリファレンス』を参照してください。

ローカライズされた環境用の PowerExchange の構成ファイル

PowerExchange のインストールプログラムは、英語およびローカライズされた環境で使用するためのサンプル構成ファイルをインストールします。ローカライズされた環境のサンプル構成ファイルには、その環境に必要なコードページとメッセージファイルを指定する文が含まれます。

PowerExchange は、次のサンプル構成ファイルを提供します。

ファイル名	環境
dbmover.cfg	英語
dbmover_bz.cfg	ポルトガル語
dbmover_ja.cfg	日本語
dbmover_ko.cfg	韓国語
dbmover_sc.cfg	簡体字中国語

Windows へのアップグレードインストールの実行

ここでは、Windows へのアップグレードインストールの実行方法について説明します。同一の Windows マシンで複数のバージョンの PowerExchange を実行することはできません。新しいリリースにアップグレードするには、既存のリリースを置き換える必要があります。

Windows で PowerExchange をアップグレードする前に

PowerExchange ソフトウェアをインストールまたはアップグレードする前に、以下のタスクを完了します。

1. PowerExchange のすべてのタスクを停止します。
2. 必要に応じて、フォールバックを提供するために現在の PowerExchange インストールディレクトリをバックアップします。
3. dbmover.cfg で DMX_DIR パラメータを指定する場合は、それが指すディレクトリをバックアップします。
4. CDC を使用する場合は、次の dbmover.cfg パラメータで指定されたディレクトリをバックアップします。
 - CAPT_PATH。キャプチャ登録を保持する CCT ファイル、および PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）が使用するファイルが入っているディレクトリが指定されます。
 - CAPT_XTRA。抽出マップが入っているディレクトリが指定されます。
5. PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）を使用する場合、pwxcccl ファイルまたは dtlca ファイルの EXT_CAPT_MASK パラメータで指定されるディレクトリをバックアップします。このディレクトリには PowerExchange ロgger のログファイルがあります。グループ定義ファイルを使用する場合、各 GROUP 文の *external_capture_mask* 位置パラメータで指定されているディレクトリをバックアップします。

注: これらのディレクトリは、PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）をコールドスタートする予定があれば、バックアップする必要はありません。

Windows への PowerExchange のアップグレード

Windows で PowerExchange の新しいリリースにアップグレードするには、フルインストールを実行します。

関連項目：

- [「Windows へのフルインストールの実行」](#)（ページ 78）

Windows で PowerExchange をアップグレードした後に

新機能および変更内容については『*PowerExchange リリースガイド*』を参照してください。

必要に応じて、バルクデータ移動または変更データキャプチャ（change data capture: CDC）を行う前に PowerExchange を構成します。構成情報の詳細については、以下の文書を参照してください。

- バルクデータ移動の設定については、『*PowerExchange バルクデータ移動ガイド*』を参照してください。
- CDC の設定については、『*Linux、UNIX、Windows 用 PowerExchange CDC ガイド*』を参照してください。
- dbmover.cfg 構成パラメータについては、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照してください。

PowerExchange を設定した後、PowerExchange Listener または PowerExchange Listener サービス、および必要に応じて PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）をリスタートできます。PowerExchange タスクの起動および停止の詳細については、『*PowerExchange コマンドリファレンス*』を参照してください。

ローカライズされた環境用の PowerExchange の構成ファイル

PowerExchange のインストールプログラムは、英語およびローカライズされた環境で使用するためのサンプル構成ファイルをインストールします。ローカライズされた環境のサンプル構成ファイルには、その環境に必要なコードページとメッセージファイルを指定する文が含まれます。

PowerExchange は、次のサンプル構成ファイルを提供します。

ファイル名	環境
dbmover.cfg	英語
dbmover_bz.cfg	ポルトガル語
dbmover_ja.cfg	日本語
dbmover_ko.cfg	韓国語
dbmover_sc.cfg	簡体字中国語

Windows での PowerExchange ホットフィックスのインストール

ここでは、既存の PowerExchange 環境にホットフィックスをインストールする方法について説明します。ホットフィックスのバージョンと既存の PowerExchange のバージョンは同じである必要があります。

ホットフィックスは、PowerExchange ソフトウェアのサブセットを提供します。既存の PowerExchange 環境の一番上にインストールします。PowerExchange では、ホットフィックスをインストールしても、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップなどの新しいデータファイルは作成されません。したがって、これらのファイルの内容を移行する必要があるため、ホットフィックスのインストール処理が簡単になります。

PowerExchange のホットフィックスは累積的であるため、インストールする必要があるのは利用できる最新のホットフィックスだけです。

Windows にホットフィックスをインストールする前に

ホットフィックスを適用する前に、以下のタスクを実行します。

1. 実行中の以下の PowerExchange のタスクをすべて停止します。
 - PowerExchange リスナ
 - PowerExchange リスナサービス
 - PowerExchange ナビゲータ
 - PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用)
 - このコンピュータで PowerExchange を使用した PowerCenter の抽出
2. PowerExchange インストールをバックアップします。デフォルトで、PowerExchange は以下の場所にインストールされています。
C:\Informatica\PowerExchange*.r.m
3. dbmover.cfg で DMX_DIR パラメータを指定する場合は、それが指すディレクトリをバックアップします。

4. CDC を使用する場合は、以下の dbmover.cfg パラメータで指定されたディレクトリをバックアップします。
 - CAPT_PATH。キャプチャ登録用の CCT ファイル、および PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）が使用するファイルが入っているディレクトリが指定されます。
 - CAPT_XTRA。抽出マップが入っているディレクトリが指定されます。
 5. PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）を使用する場合、pwxcl ファイルまたは dtlca ファイルの EXT_CAPT_MASK パラメータで指定されるディレクトリをバックアップします。このディレクトリには PowerExchange ロgger のログファイルがあります。グループ定義ファイルを使用する場合、各 GROUP 文の *external_capture_mask* 位置パラメータで指定されているディレクトリをバックアップします。
- 注:** これらのディレクトリは、PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）をコールドスタートする予定があれば、バックアップする必要はありません。

Windows へのホットフィックスのインストールのタスクフロー

Windows 上に PowerExchange のホットフィックスをインストールするには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了チェック	タスク	必須またはオプション
	「手順 1. インストールプログラムの実行」 (ページ 86)	必須
	「手順 2. ライセンスおよび DBMOVER コンフィギュレーションファイルの確認」 (ページ 87)	必須
	「手順 3. ローカライズされた PowerExchange Navigator ヘルプファイルのコピー」 (ページ 87)	オプション
	「手順 4. ホットフィックスがインストールされていることの確認」 (ページ 87)	推奨
	「手順 5. PowerExchange タスクの再起動」 (ページ 87)	必須

Windows へのホットフィックスのインストール

Windows に PowerExchange のホットフィックスをインストールするには、次の手順を完了します。

手順 1. インストールプログラムの実行

PowerExchange では、Windows のホットフィックスを含む単一の自己解凍式実行可能 zip ファイルが提供されます。zip ファイルは、CD イメージの **patches/windows** ディレクトリにあります。

自己解凍式のインストールファイルを PowerExchange インストールディレクトリに解凍します。インストールファイルの名前は、pwxvrm_hotfix*n*_win_x64.exe です。

変数 *vrm* は、バージョン、リリース、変更レベル、および変数 *n* はホットフィックスの番号です。正確なファイル名の詳細については、PowerExchange のホットフィックスの『*PowerExchange リリースノート*』を参照してください。

手順 2. ライセンスおよび DBMOVER コンフィギュレーションファイルの確認

PowerExchange インストールディレクトリに license.key ファイルと dbmover.cfg ファイルを格納する場合は、それらが正確で、ホットフィックスのインストールによる影響を受けていないことを確認します。必要に応じて、バックアップからこれらのファイルをコピーします。

ヒント: 新しいリリースへの移行を簡単に行うには、PowerExchange インストールディレクトリ以外のディレクトリに license.key ファイルと dbmover.cfg ファイルを格納します。環境変数または起動コマンドのオプションを使用して、license.key ファイルと dbmover.cfg ファイルの場所を指定できます。環境変数と PowerExchange タスクの起動コマンドのオプションの詳細については、「[Linux、UNIX、および Windows 上の PowerExchange 環境](#)」(ページ 190)を参照してください。

手順 3. ローカライズされた PowerExchange Navigator ヘルプファイルのコピー

PowerExchange Navigator マシンにホットフィックスをインストールした場合、ローカライズされた PowerExchange ヘルプファイルは別の helpdoc_ language フォルダに格納されます（英語のヘルプの場合は helpdoc_en フォルダ、ブラジルポルトガル語のヘルプの場合は helpdoc_bz フォルダなど）。PowerExchange Navigator でヘルプをシステムの正しい言語で表示するには、すべてのヘルプファイルを汎用 helpdoc フォルダにコピーします。

手順 4. ホットフィックスがインストールされていることの確認

DTLINFO ユーティリティの dtlinfo.exe を実行して、PowerExchange の現在のバージョンとホットフィックスレベルが一致することを確認します。

DTLINFO ユーティリティの詳細については、『PowerExchange ユーティリティガイド』を参照してください。

手順 5. PowerExchange タスクの再起動

ホットフィックスのインストール前に停止した PowerExchange タスクを再起動します。

このようなタスクには、PowerExchange Listener、PowerCenter 抽出ワークフロー、PowerExchange ロgger（Linux、UNIX、Windows 用）などがあります。

詳細については、『PowerExchange コマンドリファレンス』を参照してください。

ローカライズされた環境用の PowerExchange の構成ファイル

PowerExchange は、英語およびローカライズされた環境のためのサンプル構成ファイルを提供します。ローカライズされた環境のサンプル構成ファイルには、その環境に必要なコードページとメッセージファイルを指定する文が含まれます。

前のリリースからホットフィックスのサンプル構成ファイルが更新されている場合、インストールプログラムはサンプルファイルをインストールする際にファイル名に「_sample」を追加して、前にインストールされたファイルが上書きされないようにします。

PowerExchange は、HotFix に必要な場合に、次のサンプル構成ファイルを提供します。

ファイル名	環境
dbmover.cfg_sample	英語
dbmover_bz.cfg_sample	ポルトガル語

ファイル名	環境
dbmover_ja.cfg_sample	日本語
dbmover_ko.cfg_sample	韓国語
dbmover_sc.cfg_sample	簡体字中国語

Windows での PowerExchange のアンインストール

Windows から PowerExchange をアンインストールするには、以下の手順を実行します。

9.0.1 より前のバージョンの PowerExchange をアンインストールするには、Windows の【コントロールパネル】からプログラムを削除します。

PowerExchange 9.0.1 以降をアンインストールするには、次のアクションを実行します。

1. PATH 環境変数に Java Runtime Environment (JRE) へのパスが含まれていることを確認します。

例えば、JRE が Informatica クライアントの下にインストールされている場合があります。

C:\Informatica\9.6.1\clients\java\jre\bin

2. Windows の【スタート】メニューから、**Informatica PowerExchange v.r.m** フォルダを展開し、**[PowerExchange v.r.m]** をクリックします。

例えば、**[Informatica PowerExchange 10.1.1] > [PowerExchange 10.1.1 のアンインストール]** をクリックします。

アンインストールプログラムによって、PowerExchange コンポーネントをすべて削除することを確認するメッセージが表示されます。**[次へ]** をクリックして続行します。

注意事項:

- プログラムグループが【スタート】メニューにない場合は、*pxw_installation_directory\Uninstaller_pwx* ディレクトリの Uninstaller.exe 実行可能ファイルをダブルクリックできます。
- Java VM の読み込み中に Windows エラー 2 が発生したことを報告するメッセージが表示されてアンインストーラが初期化に失敗する場合は、PATH 環境変数に JRE への現在のパスが含まれていることを確認します。次に、【スタート】メニューの【コマンドプロンプト】を右クリックして、**[管理者として実行]** を選択します。PowerExchange の Uninstaller.exe ファイルが格納されているディレクトリに移動 (cd) します。次に、JRE インストールをポイントする LAX_VM パラメータを使用して、Uninstaller.exe を実行します。以下に例を示します。

```
Uninstaller.exe LAX_VM "C:\Program Files\Java\jre1.8.0_77\bin\java.exe"
```

3. **[次へ]** をクリックします。

続行する前にすべての PowerExchange サービスを停止するように求めるプロンプトが表示されます。

4. 以下のいずれかのアクションを実行します。
 - 実行中の PowerExchange サービスがない場合は、**[続行]** クリックしてアンインストールを続行します。
 - 実行中の PowerExchange サービスがある場合は、**[OK]** をクリックして前のウィンドウに戻り、サービスを停止します。
5. バイナリファイルのみをアンインストールするか、PowerExchange をシステムから完全に削除するかを選択します。

バイナリファイルのみをアンインストールする場合、以下の項目が削除されます。

- PowerExchange バイナリ
- PowerExchange バイナリへのパス（PATH 環境変数から）
- PowerExchange リスナサービス

PowerExchange をシステムから完全に削除する場合、前述の項目に加えて PowerExchange Navigator が作成したレジストリエントリも削除されます。

第 7 章

z/OS での PowerExchange のインストールとアップグレード

この章では、以下の項目について説明します。

- [z/OS のインストールの概要, 90 ページ](#)
- [z/OS へのフルインストールの実行, 91 ページ](#)
- [z/OS でのアップグレードの実行, 112 ページ](#)
- [z/OS へのホットフィックスのインストール, 132 ページ](#)
- [z/OS Installation Assistant リファレンス, 139 ページ](#)

z/OS のインストールの概要

PowerExchange on z/OS をインストールする際、z/OS Installation Assistant を実行してフルインストール、アップグレード、またはホットフィックスインストール行うことができます。

z/OS Installation Assistant では、以下のタスクを実行できます。

- 変数を設定し、PowerExchange パラメータと z/OS インストールのデータセット名を 1 回の処理で変更する。
- ソフトウェアライブラリのバイナリファイルを z/OS システム上の BINLIB ライブラリに移動する。
- カスタマイズした実行時ライブラリメンバを z/OS システム上の RUNLIB ライブラリに移動する。

z/OS Installation Assistant の実行後、z/OS Installation Assistant が z/OS システムに作成した一連のジョブをサブミットして、インストールを完了する必要があります。

重要: z/OS Installation Assistant は、64 ビット Windows システム上でのみ実行されます。32 ビットシステム上で z/OS Installation Assistant を実行しようとすると、インストールは失敗します。

z/OS のセキュリティ

PowerExchange には、z/OS データベースおよびファイルに対するアクセス権が必要です。これらは通常、IBM の資源アクセス制御機能 (RACF)、CA ACF2、CA Top Secret などのセキュリティ製品で保護されています。

z/OS Installation Assistant を実行する際、PowerExchange 管理者のユーザー ID を入力します。PowerExchange 管理者は、ライブラリの定義、インストールジョブの実行、データソースのカスタマイズ、ライブラリの許可を行います。

インストール後、追加のセキュリティオプションを設定できます。PowerExchange のセキュリティオプションおよび DBMOVER コンフィギュレーションメンバ内の SECURITY 文の詳細については、『*PowerExchange* リファレンスマニュアル』を参照してください。

インストールエラーと起動エラー

PowerExchange では、z/OS でのインストールエラーと起動エラーの原因に関する情報が含まれる、インストールエラーメッセージが発行されます。

PowerExchange の起動エラーの最も一般的な原因は、DBMOVER コンフィギュレーションメンバの LISTENER 文および NODE 文での正しくない IP アドレスまたはポート番号です。

z/OS へのフルインストールの実行

PowerExchange を z/OS に初めてインストールするか別の場所にインストールする場合、または既存のインストールを更新して CDC ソフトウェアを追加する場合は、フルインストールを実行します。z/OS Installation Assistant ウィザードを使用してください。

z/OS Installation Assistant では入力内容を使用し、Windows システムで一部のファイルの JCL とパラメータがカスタマイズされます。z/OS Installation Assistant では、z/OS システムの BINLIB ライブラリと RUNLIB ライブラリにファイルを転送できます。

z/OS システムでは、少なくとも SETUPBLK ジョブをサブミットする必要があります。SETUPBLK ジョブにより、以下のタスクが実行されます。

- PowerExchange LOADLIB の拡張パーティションデータセット（PDSE）を割り当てます。
- PowerExchange パーティションデータセット（PDS）とデータセット DBRMLIB、DTLDATA、DTLDEMO、DTLEXPL、DTLLOG、DTLMSG、PROCLIB、SRCLIB が割り当てられます。
- TSO/E RECEIVE が使用されて、分散 PDSE、PDS とデータセット DBRMLIB、DTLDATA、DTLMSG、LOADLIB、SRCLIB が拡張されます。
- 必要に応じて、他のインストールジョブをサブミットします。**[自動サブミット]** オプション（**[全般的なパラメータ]** ページ）を選択すると、z/OS Installation Assistant で選択したオプションに基づいて、SETUPBLK ジョブがこれらのジョブをサブミットします。選択しなかった場合は、すべてのジョブを手動でサブミットする必要があります。
- RUNLIB ライブラリの JOBCARD メンバ内の JOB カードを他のインストールジョブに追加します。

CDC を実行する場合は、その他のジョブをサブミットする必要があります。

z/OS へのフルインストールを実行する前に

z/OS へのフルインストールを実行する前に、次のタスクを実行する必要があります。

- PowerExchange で、使用しているオペレーティングシステムおよびデータソースのバージョンおよびリリースレベルがサポートされていることを確認します。詳細については、[「サポートされる z/OS のバージョン、データソース、ターゲット」](#)（ページ 23）を参照してください。
- z/OS Installation Assistant が 64 ビット Windows システムにインストールされていることを確認します。32 ビットシステムで z/OS Installation Assistant を実行しようとする場合インストールは失敗します。
- 有効なライセンスキーを取得します。
- Windows マシンに Microsoft .NET Framework がインストールされていない場合は、PowerExchange のインストールディレクトリで dotnetfx35.exe をダブルクリックしてインストールします。

- 新しい PowerExchange リリースに、Linux、UNIX、Windows の PowerCenter リリースとの互換性があることを確認します。詳細については、[「PowerExchange と PowerCenter の相互運用性」](#) (ページ 30) を参照してください。
- 新しい PowerExchange インスタンスを環境内に既存のその他の PowerExchange インスタンスとともに実行する計画である場合は、すべての PowerExchange インスタンスの *version.release.modification* レベルに互換性があることを確認します。詳細については、[「PowerExchange 間の相互運用性」](#) (ページ 33) を参照してください。
- 以前のリリースからアップグレードする場合は、該当するアップグレードの問題をすべて解決していることを確認します。

z/OS へのフルインストールのタスクフロー

z/OS 上に PowerExchange をインストールするには、PowerExchange の基本ソフトウェアをインストールします。また、必要に応じて、PowerExchange 変更データキャプチャ (Change Data Capture: CDC) ソフトウェアおよび選択したデータソース用の PowerExchange ソフトウェアもインストールします。

PowerExchange のフルインストールを実行するには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了 チ ェ ッ ク	タスク	必須またはオプション
	段階 I: PowerExchange の基本ソフトウェアのインストール	必須
	「手順 1. BINLIB および RUNLIB ライブラリの割り当て」 (ページ 97)	必須
	「手順 2. Windows システムへの z/OS インストールファイルの抽出」 (ページ 97)	必須
	「手順 3. フルインストールのための z/OS Installation Assistant の実行」 (ページ 98)	必須
	「手順 4. RUNLIB ライブラリの JOBCARD メンバの編集」 (ページ 106)	必須
	「手順 5. RUNLIB ライブラリの XJOBS メンバの確認」 (ページ 106)	必須
	「手順 6. PowerExchange の基本ソフトウェアのジョブのサブミット」 (ページ 106)	必須
	「手順 7. CSNBSYD および CSNBSYE プログラムが含まれるライブラリのシステムリンクリストへの追加 (オプション)」 (ページ 106)	オプション。この手順は、PowerExchange で z/OS の Cryptographic Services ICSF を使用してユーザー名およびパスワードの AES-128 暗号化を行う場合に実行します。
	「手順 8. APF リストへの必要なライブラリの追加」 (ページ 107)	必須
	「手順 9. PowerExchange リスナユーザー ID (RACF ユーザー) への OMVS セグメントの追加」 (ページ 107)	RACF を使用する場合は必須

完了 チ ェ ッ ク	タスク	必須またはオプション
	段階 II：PowerExchange CDC ソフトウェアのインストール	CDC を使用する場合は必須
	「手順 10. CDC ジョブのサブミット」 (ページ 108)	CDC を使用する場合は必須
	「手順 11. XIZZZ998 ジョブのサブミット」 (ページ 108)	CDC を使用する場合は必須
	「手順 12. PROCLIB ライブラリへの PowerExchange エージェント プロシージャのコピー」 (ページ 109)	CDC を使用する場合は必須
	「手順 13. APF リストへの PowerExchange ロードライブラリの追加」 (ページ 109)	CDC を使用する場合は必須
	「手順 14. PowerExchange エージェントユーザー ID (RACF ユーザー) への OMVS セグメントの追加」 (ページ 109)	CDC と RACF を使用する場合は必須
	「手順 15. PowerExchange エージェントの起動」 (ページ 109)	CDC を使用する場合は必須
	「手順 16. SETUPCC2 ジョブのサブミット」 (ページ 110)	CDC を使用する場合は必須
	段階 III：特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアのインストール	一部のデータソースでは必須
	「手順 17. DB2 for z/OS データソース用ソフトウェアのインストール」 (ページ 110)	DB2 for z/OS データソースでは必須
	「手順 18. IDMS データソースのソフトウェアのインストール (オプション)」 (ページ 111)	IDMS データソースではオプション
	「手順 19. IMS 同期 CDC データソース用ソフトウェアのインストール」 (ページ 111)	PowerExchange CRG.LOAD ライブラリを使用する場合、IMS 同期 CDC データソースでは必須
	段階 IV：以前にコピーされた RUNLIB メンバの削除	オプション
	「手順 20. XIZZZ999 ジョブのサブミット (オプション)」 (ページ 112)	オプション

PowerExchange データセットの領域に関する要件

z/OS システム上で、バルクデータ移動および CDC に使用するデータセット、PDS、および PDSE を割り当てるインストールジョブを実行します。これらのジョブの一部は、他のジョブ（SETUPBLK ジョブなど）によって自動的にサブミットされます。

ヒント: PowerExchange データセットを割り当てるための十分な空き領域が z/OS システム上に存在することを確認するには、システム管理者に連絡してください。必要な領域は、ハードウェアと直接アクセス記憶装置 (DASD) のタイプによって異なります。

インストール時に割り当てられる PowerExchange データセット

3390 DASD 上に PowerExchange の基本ソフトをインストールする際、インストールジョブによって割り当てられるデータセットを以下の表に示します。

DD 名	説明	領域単位 (3390)	領域量 (プライマリ、セカンダリ)	ディレトリ ブロック	DCB 特性
DATAMAPS	PowerExchange データマップを含む VSAM データ。	TRK	(15、15)	-	VSAM
DBRMLIB	バルクおよび CDC 用の PowerExchange DB2 DBRM を含む PDS。	TRK	(10、10)	10	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE 27920
DTLDATA	DTLDEMO 内のデモ用のデモデータを含む PDS。	CYL	(5、5)	10	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE 27920
DTLDEMO	デモ JCL を含む PDS。	CYL	(5、5)	5	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE 27920
DTLEXPL	保守作業、問題解決、PowerExchange ユーティリティ用のサンプル JCL を含む PDS。 AAYINDEX メンバは、DTLEXPL 内の各メンバを記述します。	TRK	(5、5)	10	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE 27920
DTLLOG	PowerExchange Listener のメッセージログとして使用できるシーケンシャルデータセット。 代替の PowerExchange ロギングも使用できます。詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。	CYL	(5、5)	0	RECFM VB LRECL 1024 BLKSIZE 23476
DTLMSG	PowerExchange メッセージを含むシーケンシャルデータ。	TRK	(5、15)	0	RECFM VB LRECL 1024 BLKSIZE 23476
LOADLIB	一括アクセスに必要な PowerExchange ロードモジュールおよび CDC の一部のロードモジュールを含む PDSE ロードライブラリ。	CYL	(80,15)	100	RECFM U LRECL 0 BLKSIZE 23440

DD 名	説明	領域単位 (3390)	領域量 (プライ マリ、セ カンダ リ)	ディ レク トリ ブロ ック	DCB 特性
PROCLIB	PowerExchange 開始タスクプロシージャを含む PDS。	TRK	(3、5)	5	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE 27920
SRCLIB	コードサンプルおよびサンプル出口を含む PDS。	TRK	(15、15)	5	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE 27920

インストール時に割り当てられる PowerExchange CDC データセット

以下の表に、インストールジョブによって 3390 DASD 上に割り当てられる CDC 用の追加データセットを示します。

データセット	説明	領域単位 (3390)	領域量 (プライ マリ、セ カンダ リ)	ディ レク トリ ブロ ック	DCB 特性
CCT	キャプチャ登録を含む VSAM データセット。	TRK	(15、15)	-	VSAM
CDCT	PowerExchange Condense 情報を含む VSAM データセット。	TRK	(15、15)	-	VSAM
CDEP	キャプチャ抽出履歴情報を含む VSAM データセット。	TRK	(15、15)	-	VSAM
CRG.LOAD	IMS 同期 CDC のロードモジュールを含むロードライブラリ。	CYL	(15、15)	90	RECFM U LRECL0 BLKSIZE 23440
DBRM	DB2 CDC 用の DB2 DBRM モジュールを含む一時ロードライブラリ。内容はインストール中に DBRMLIB にコピーされます。	TRK	(20、15)	45	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE 27920
DTLCAMAP	抽出マップを含む VSAM データセット。	TRK	(15、15)	-	VSAM
ERDS01	緊急再起動データセットとして PowerExchange ロgger で使用される VSAM データセット。	TRK	(30、0)	-	VSAM
ERDS02	緊急再起動データセットとして PowerExchange ロgger で使用される VSAM データセット。	TRK	(30、0)	-	VSAM

データセット	説明	領域単位 (3390)	領域量 (プライマリ、セカンダリ)	ディレトリ ブロック	DCB 特性
LOAD	PowerExchange CDC のロードモジュールを含むロードライブラリ。	CYL	(75、15)	100	RECFM U LRECL0 BLKSIZE 23746
PRILOG.DS01 PRILOG.DS02 PRILOG.DS03	プライマリアクティブログデータセットとして PowerExchange ロggerで使 用される VSAM データセット。	CYL	(15、0)	-	VSAM
SAMPLIB	PowerExchange CDC 用のサンプル JCL とパラメータを含む PDS。	TRK	(50、15)	45	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE 27920
SECLOG.DS01 SECLOG.DS02 SECLOG.DS03	セカンダリアクティブログデータセットとして PowerExchange ロggerで使 用される VSAM データセット。	CYL	(15、0)	-	VSAM
SR2TOTAL	IDMS CDC 情報を含むシーケンシャルデ ータセット。	CYL	(1、1)	0	RECFM VB LRECL 80 BLKSIZE 23476
SR2OUT	IDMS CDC 情報を含むシーケンシャルデ ータセット。	CYL	(5、5)	0	RECFM VB LRECL 80 BLKSIZE 23476
USERLIB	PowerExchange CDC の制御パラメータ を含むロードライブラリ。	TRK	(5、15)	45	RECFM U LRECL0 BLKSIZE 23440

段階 I: PowerExchange の基本ソフトウェアのインストール

フルインストールのこの段階では、BINLIB ライブラリと RUNLIB ライブラリを z/OS システムで割り当て、z/OS インストールファイルを Windows システムの一時ディレクトリに抽出して、そのディレクトリから z/OS Installation Assistant を実行します。次に、z/OS Installation Assistant が z/OS システムに転送したカスタマイズ済みインストールジョブを実行し、PowerExchange の基本ソフトウェアをインストールします。

すべての PowerExchange ユーザーは、この段階の z/OS のインストールについての手順を完了する必要があります。

手順 1.BINLIB および RUNLIB ライブラリの割り当て

z/OS システムでは、z/OS Installation Assistant からファイルを受け取る BINLIB および RUNLIB ライブラリを割り当てる必要があります。

事前定義のライブラリ名である BINLIB と RUNLIB を、任意の高位修飾子と組み合わせて使用します（例：PWX.SYSTEMA.PROD.RUNLIB）。z/OS システム上でインストールジョブを実行すると、これらのライブラリのメンバが割り当てられます。

▶ 次のいずれかの方法で、BINLIB ライブラリと RUNLIB ライブラリを割り当てます。

- Interactive System Productivity Facility (ISPF) Option 3.2 を使用する。
- 次のサンプルに示すような、RUNLIB ライブラリ割り当て用 JCL を使用する。

```
//ALLOC      EXEC PGM=IEFBR14
//DS1 DD DSN=HLQ..RUNLIB,
//          DISP=(NEW,CATLG,DELETE),SPACE=(CYL,(20,10,50),RLSE),
//          DCB=(BLKSIZE=nn,RECFM=FB,LRECL=80,DSORG=PS),
//          VOL=SER=volume_serial_number
```

ヒント: これらのライブラリを割り当てるときに、使用する高位修飾子（HLQ）をメモしておきます。

z/OS Installation Assistant の【ユーザーが変更可能なデータセット（VSAM 以外）】グループ（【データセットグループの詳細】 ページ）で、この値を HLQ 値として入力する必要があります。

以下の表に、3390 直接アクセス記憶装置（DASD）上に BINLIB ライブラリおよび RUNLIB ライブラリを割り当てる際に使用するパラメータを示します。

ライブラリ	説明	領域単位 (3390)	領域量 (プライマリ、セカンダリ)	ディレクトリブロック	DCB 特性
BINLIB	TSO/E 送信形式のソフトウェアライブラリを含む PDS。	CYL	(160,10)	10	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE（任意の有効値を指定可能。LRECL 値の倍数を指定することが多い）
RUNLIB	PowerExchange をインストールするジョブ、PowerExchange を設定および実行するジョブ、設定データを含む PDS。 AAINDEX メンバは、RUNLIB 内の各メンバを記述します。	CYL	(10,1)	50	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE（任意の有効値を指定可能。LRECL 値の倍数を指定することが多い）

手順 2.Windows システムへの z/OS インストールファイルの抽出

PowerExchange for z/OS は、自己解凍式実行可能ファイルとして出荷されます。このファイルを Windows システム上の一時ディレクトリに解凍します。

1. Windows のコマンドプロンプトから、インストールファイルの解凍先にする一時ディレクトリを作成します。例えば、pxw_mvs という名前の一時ディレクトリを作成するには、次のコマンドを実行します。

```
mkdir pxw_mvs
```

2. 以下に示す z/OS 用の製品のインストール実行プログラムを検索して実行してください。

```
pxwvrzm_zos.exe
```

`vrn` 変数は、PowerExchange の *version.release.modification* 番号です。例えば、`pw961_zos.exe` は、z/OS 用の PowerExchange 9.6.1 をインストールする実行プログラムの名前です。

WinZip Self-Extractor から、ファイルの解凍先となるディレクトリを要求するプロンプトが表示されます。

3. **[WinZip Self-Extractor]** ダイアログボックスで、**[参照]** をクリックします。
4. **[フォルダの参照]** ダイアログボックスで、作成しておいた一時ディレクトリに移動してから、**[OK]** をクリックします。
5. **[WinZip Self-Extractor]** ダイアログボックスで、**[解凍]** をクリックします。
WinZip Self-Extractor により、いくつかのファイルがルートディレクトリに配置され、ファイルも含む binary および runlib サブディレクトリが作成されます。ファイルが正常に解凍されたことを示すメッセージボックスが表示されます。
6. メッセージボックスで、**[OK]** をクリックします。
7. **[WinZip Self-Extractor]** ダイアログボックスで、**[閉じる]** をクリックします。

手順 3.フルインストールのための z/OS Installation Assistant の実行

PowerExchange のフルインストールを実行するには、64 ビット Windows システム上で、z/OS Installation Assistant ウィザードを実行する必要があります。

以前のインストール時に使用した INSTPARM ファイルが存在しない場合、z/OS Installation Assistant はまず、デフォルト値のみが設定された INSTPARM ファイルを作成します。z/OS Installation Assistant により、この InstParm ファイルはユーザーの入力値で更新されます。z/OS Installation Assistant の各ページの操作中に、任意のページで **[保存]** をクリックして InstParm ファイルに入力内容を保存できます。

また、z/OS Installation Assistant では、現在のインストールに対応する INPARM`nn` ファイルを Windows システムの XRunlib ディレクトリに作成します。ここで `nn` は、00~99 の 2 桁の数字です。z/OS Installation Assistant を実行するたびに、INPARM`nn` の `nn` の値が 1 だけ増分された名前で新しいファイルが作成されます。`nn` は、99 に達すると 00 にリセットされ、再度 INPARM00 からファイルが作成されます。z/OS Installation Assistant が完了すると、INPARM`nn` ファイルが z/OS システム上の RUNLIB ライブラリに転送されます。

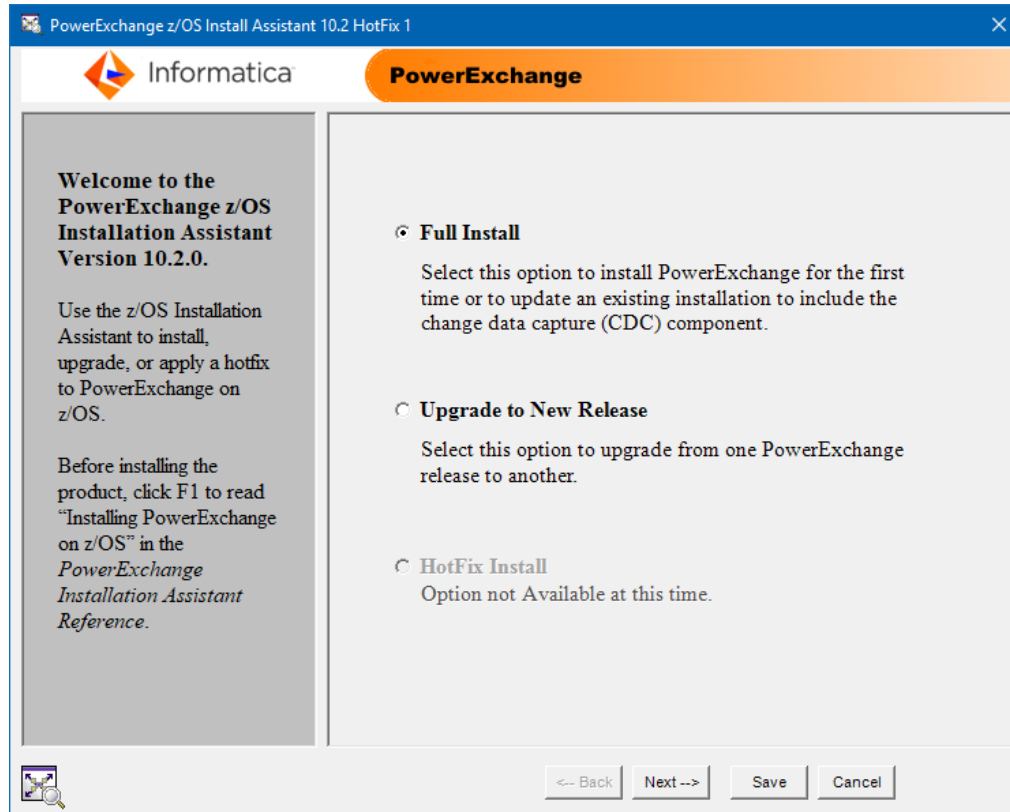
ヒント: 後で PowerExchange をアップグレードしたり、ホットフィックスを適用する際に使用できるように、カスタマイズした InstParm ファイルを保持しておいてください。

z/OS Installation Assistant の一部のページでは、**[詳細パラメータ]** をクリックして詳細パラメータを定義したり、**[デフォルトの復元]** をクリックしてデフォルト値を復元したりできます。ただし、詳細パラメータを定義した場合、**[デフォルトの復元]** ボタンを使用してデフォルト値に戻すことはできません。

重要: 64 ビット Windows システム上で z/OS Installation Assistant を実行する必要があります。32 ビットシステム上でウィザードを実行しようとする、インストールは失敗します。

1. z/OS のインストールファイル（直前のトピックの"pwx_mvsv"ディレクトリ）の抽出先一時ディレクトリで、**MVS_Install.exe** を右クリックし、**【管理者として実行】** を選択します。

z/OS Installation Assistant が開始されます。



2. **【フルインストール】** を選択し、**【次へ】** をクリックします。
3. 新規インストールを実行する場合で、InstParm ファイルが存在しないときは、メッセージが表示され、同ファイルがデフォルト値で作成されることが通知されます。**【OK】** をクリックして、Windows システム上に InstParm ファイルを作成します。
4. **【フルインストール】** ページで **【次へ】** をクリックします。

[グローバルパラメータの選択] ページが表示されます。

PowerExchange z/OS Install Assistant 10.2 HotFix 1

Informatica PowerExchange

Full Install

- Global Parameters
- Data Set Group Details
- General Parameters
- Data Sources
 - CDC Common Parameters
 - Adabas
 - Datacom
 - DB2
 - DB2 CDC
 - IDMS
 - IDMS CDC
 - IMS
 - IMS CDC
 - MQ Series
 - VSAM
- Create Runlib JCL
- Transfer Files to Mainframe
- File Transfer Status

Select Global Parameters

Logon ID PowerExchange Agent / Logger Prefix

Default Values

HLQ	<input type="text" value="PWX"/>		
Storage Class	<input type="text"/>	Volume	<input type="text"/>
Mgmt Class	<input type="text"/>	Unit	<input type="text" value="3390"/>
Data Class	<input type="text"/>		

Edit

License Key

License Characters 44 (44 or 64 characters depending on which key used)

<-- Back Next --> Save Cancel

5. データセットのデフォルトの高位修飾子とデフォルトのストレージ設定を入力します。

詳細については、[「\[グローバルパラメータ\] ページの選択 \(フルインストール\)」 \(ページ 140\)](#)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

[データセットグループの詳細の選択] ページが表示され、入力した情報が読み込まれています。

PowerExchange z/OS Install Assistant 10.2 HotFix 1

Informatica PowerExchange

Full Install

- Global Parameters
- Data Set Group Details**
- General Parameters
- Data Sources
 - CDC Common Parameters
 - Adabas
 - Datacom
 - DB2
 - DB2 CDC
 - IDMS
 - IDMS CDC
 - IMS
 - IMS CDC
 - MQ Series
 - VSAM
- Create Runlib JCL
- Transfer Files to Mainframe
- File Transfer Status

Select Data Set Group Details

Data Set Groups

Select the group below to view \ modify

- User Modifiable Data Sets (Non-VSAM)**
- Read-Only Data Sets, Load Libraries and DBRMLIBs
- VSAM Files
- Archive Data Sets
- Log Files
- Condenser Data Sets

User Modifiable Data Sets including RUNLIB, BINLIB, SAMPLIB, DTLDEMO

HLQ:

Storage Class: Volume:

Mgmt. Class: Unit:

Data Class:

6. 各データセットグループに、高位修飾子 (HLQ)、ボリューム、ユニット、ストレージ管理サブシステム (SMS) 情報を入力します。

詳細については、[「データセットグループの詳細ページの選択」 \(ページ 142\)](#)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

[全般的なパラメータの選択] ページが表示されます。

PowerExchange z/OS Install Assistant 10.2 HotFix 1

Informatica PowerExchange

Select General Parameters

LE Run-time Library: SYS1.SCEERUN

☐ Delete Install Members ☐ Auto Submit On ☐ Light Install

TCP/IP Ports

☐ Change Listener Port: 2480

☒ Use Tape / GDG Netport: 32480

☒ Use CDC Netport: 22480

ICU

☐ Select this option to generate ICU custom converters, which is required when extending PowerExchange character set support

USS directory where tar file programs are unpacked: _____

USS directory where ICU CNV files are placed (DTLCFG ICUDATADIR parameter): _____

☐ JES3 Install

AdvancedParms

Restore Defaults

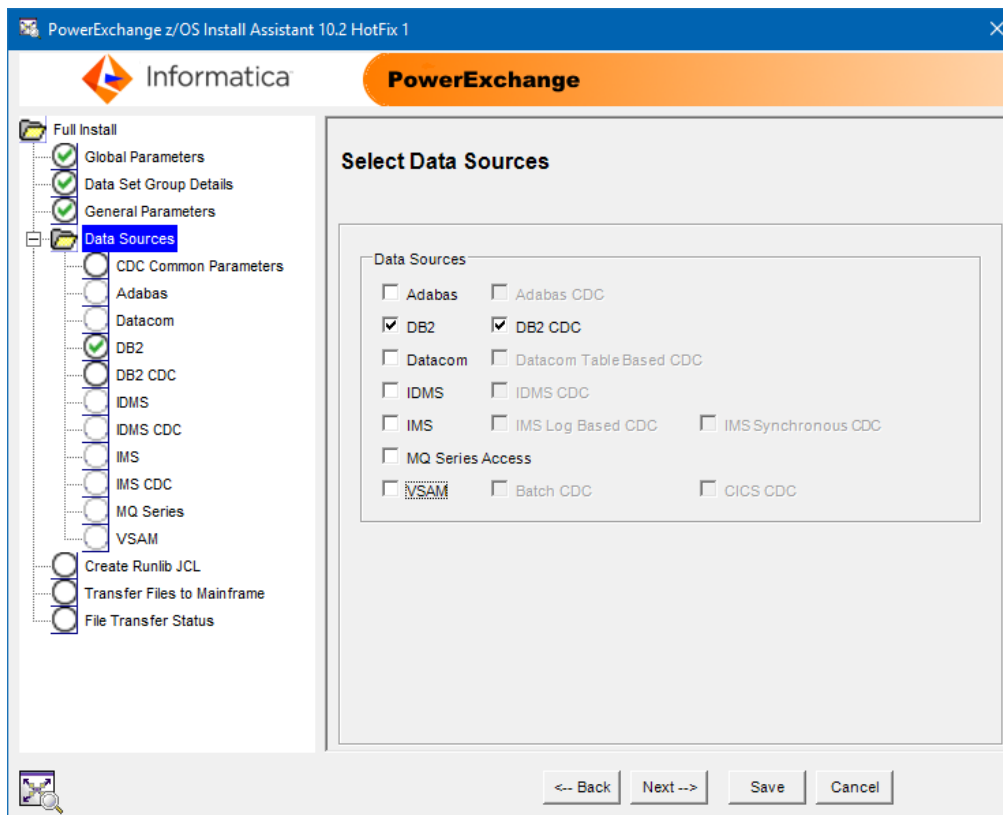
<-- Back Next --> Save Cancel

7. 全般的なパラメータを入力します。

詳細については、「[\[全般的なパラメータ\] ページ](#)」 (ページ 145)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

[データソースの選択] ページが表示されます。



8. バルクデータ移動操作と CDC 操作用の 1 つ以上のデータソースを選択します。
CDC データソースを選択するには、まず、左側の列でバルクデータ移動操作用のデータソースタイプを選択します。
詳細については、[「\[データソース\] ページ」 \(ページ 148\)](#)を参照してください。
[次へ] をクリックします。
CDC データソースを選択した場合は、**[CDC 共通パラメータの選択]** ページが表示されます。
9. CDC 操作の共通パラメータを入力します。
詳細については、[「\[CDC 共通パラメータ\] ページ」 \(ページ 149\)](#)を参照してください。
[次へ] をクリックします。
10. **[データソース]** ページで選択した各データソースのパラメータ設定を入力します。
以下の表に各データソースタイプのパラメータページを示します。

ページ	参照
Adabas パラメータ	「[Adabas パラメータ] ページ」 (ページ 151)
Datacom パラメータ	「[Datacom パラメータ] ページ」 (ページ 153)
DB2 パラメータ	「[DB2 パラメータ] ページ」 (ページ 154)

ページ	参照
DB2 CDC パラメータ	「 [DB2 CDC パラメータ] ページ」 (ページ 156)
IDMS パラメータ	「 [IDMS パラメータ] ページ」 (ページ 158)
IDMS CDC パラメータ	「 [IDMS CDC パラメータ] ページ」 (ページ 159)
IMS パラメータ	「 [IMS パラメータ] ページ」 (ページ 160)
IMS CDC パラメータ	「 [IMS CDC パラメータ] ページ」 (ページ 161)
MQ Series パラメータ	「 [MQ Series パラメータ] ページ」 (ページ 162)
VSAM パラメータ	「 [VSAM パラメータ] ページ」 (ページ 163)

複数のデータソースタイプを選択した場合は、**[次へ]** をクリックして次のページに進みます。
最後のパラメータページで **[次へ]** をクリックすると、**[Runlib JCL の作成]** ページが表示されます。

PowerExchange z/OS Install Assistant 10.2 HotFix 1

Informatica PowerExchange

Create Runlib JCL

Mainframe Libraries (Execution Libraries)

RUNLIB

BINLIB

Click "Next" to create JCL and proceed to the FTP page.

11. RUNLIB および BINLIB ライブラリに関する情報を入力します。
詳細については、[「\[Runlib JCL の作成\] ページ」 \(ページ 164\)](#)を参照してください。
[次へ] をクリックします。

[メインフレームへのファイルの転送] ページが表示されます。

PowerExchange z/OS Install Assistant 10.2 HotFix 1

Informatica PowerExchange

Transfer Files to Mainframe

XRunlib JCL Library Created Successfully

IP Address / Node: xxx.xxx.xxx.xxx

Logon ID: UID001

Password:

☒ Notify Completion of File Transfer

☐ FTP Passive Mode Connect

☒ Mixed Case Password

Client Libraries: Runlib, Binary

Preallocated z/OS Libraries to Which Files are Transferred: PWX.RUNLIB, PWX.BINLIB

Restore Defaults

<-- Back Next --> Save Cancel

また、z/OS Installation Assistant によって、XRunlib フォルダも作成されます。このフォルダには、runlib フォルダのファイルが含まれます。これらのファイルは、ユーザーが入力した値でカスタマイズされます。

12. [メインフレームへのファイルの転送] ページで、ファイルの転送先の z/OS システムに関する情報を入力します。

詳細については、[「\[メインフレームへのファイルの転送\] ページ」 \(ページ 165\)](#)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

[ファイル転送ステータスの表示] ページに、ファイル転送操作のステータスが表示されます。詳細については、[「\[ファイル転送ステータスの表示\] ページ」 \(ページ 166\)](#)を参照してください。

13. ファイル転送が完了したら、[OK] をクリックします。
14. [完了] をクリックします。

注: インストール処理で入力した内容は、Windows のルートインストールディレクトリに InstParm ファイルとして保存されます (まだ保存されていない場合)。また、対応する INPARM nn ファイルが Windows の XRunlib ディレクトリに作成され、FTP で z/OS 上の RUNLIB ライブラリに転送されます。RUNLIB ライブラリ内の INPARM nn メンバのうち、最大の nn 値を持つメンバが、このメンバの最新バージョンです。

手順 4. RUNLIB ライブラリの JOBCARD メンバの編集

z/OS システム上で、自サイトの標準に従って、RUNLIB ライブラリの JOBCARD メンバを編集します。CLASS および MSGCLASS などのパラメータを追加しなければならない場合があります。

RUNLIB ライブラリ内のジョブのうち、更新された JOBCARD を使用するジョブの一覧を確認するには、アップグレード RUNLIB ライブラリ内の XJOBSU メンバを表示します。

1. RUNLIB ライブラリで、JOBCARD メンバを編集します。
2. z/OS Installation Assistant の **【自動サブミットをオン】** オプション（**【全般的なパラメータ】** ページ）を選択した場合は、ジョブの実行方法を制御するために TYPRUN=HOLD 文を追加します。

このパラメータ設定では、ジョブが起動されたら、各ジョブを手動で解放する必要があります。

手順 5. RUNLIB ライブラリの XJOBS メンバの確認

XJOBS メンバには、RUNLIB からサブミットする必要があるインストールジョブが、サブミットする必要がある順に一覧表示されます。また、z/OS Installation Assistant で設定した一部のインストールオプションも含まれています。

- ▶ RUNLIB ライブラリの XJOBS メンバを確認して、次に実行するジョブを特定します。

手順 6. PowerExchange の基本ソフトウェアのジョブのサブミット

SETUPBLK ジョブは、必ずサブミットする必要があります。**【自動サブミットをオン】** を選択しなかった場合や、CDC ソフトウェアをインストールするオプションを選択しなかった場合は、SETUPVSM および XIZZZ998 ジョブもサブミットします。

1. RUNLIB ライブラリで、RUNLIB の JOBCARD メンバ内の JOB カードを SETUPBLK ジョブに追加します。
2. SETUPBLK ジョブをサブミットします。

SETUPBLK ジョブは、シーケンシャルデータセットを割り当て、プロシージャを PROCLIB ライブラリにコピーし、RUNLIB の JOBCARD メンバ内の JOB カードを他のインストールジョブに追加します。

z/OS Installation Assistant で **【自動サブミットをオン】** オプションを選択した場合、SETUPBLK ジョブは、選択したオプションに基づいて他のジョブもサブミットします。

3. **【自動サブミットをオン】** オプションおよび CDC ソフトウェアをインストールするオプションを選択しなかった場合は、次のジョブを手動でサブミットします。

- SETUPVSM。このジョブにより、DATAMAPS データセットが割り当てられます。
- XIZZZ998。このジョブにより、RUNLIB の対応するメンバを使用していくつかのデータセットが設定されます。

注: **【自動サブミットをオン】** および CDC ソフトウェアをインストールするオプションを選択した場合は、SETUPVSM および XIZZZ998 ジョブを後でサブミットします。

- SETUPCC1 ジョブをサブミットした後に SETUPVSM ジョブをサブミットします。詳細については、[「手順 10. CDC ジョブのサブミット」](#)（ページ 108）を参照してください。
- CDC ジョブをサブミットした後に XIZZZ998 ジョブをサブミットします。詳細については、[「手順 11. XIZZZ998 ジョブのサブミット」](#)（ページ 108）を参照してください。

手順 7. CSNBSYD および CSNBSYE プログラムが含まれるライブラリのシステムリンクリストへの追加（オプション）

PowerExchange で z/OS の Cryptographic Services Integrated Cryptographic Service Facility (ICSF) を使用してユーザー名およびパスワードの AES-128 暗号化を実行する場合は、ICSF が有効になっていることを確

認します。また、z/OS のシステムプログラマと連携して、CSNBSYD および CSNBSYE モジュールがシステムリンクリストにあることを確認します。

デフォルトでは、CSNBSYD および CSNBSYE モジュールは CSF.SCSFMOD0 にあります。CSNBSYD および CSNBSYE モジュールが含まれるライブラリがシステムリンクリストにない場合は、z/OS のシステムプログラマと連携して、ライブラリをリストに追加します。

PowerExchange は ICSF（有効化されている場合）を使用してユーザー名とパスワードを暗号化します。ICSF が有効になっていない場合、PowerExchange では、OpenSSL Toolkit の暗号化および解読ルーチンと互換性のある AES-128 の暗号化および解読ルーチンが使用されます。ICSF ではハードウェア支援が使用されるため、その暗号化および解読ルーチンは他のルーチンよりもはるかに高速です。

手順 8. APF リストへの必要なライブラリの追加

許可プログラム機能（APF）リストに、PowerExchange LOADLIB ライブラリおよびその他の必要なライブラリを追加します。

APF リストの更新の詳細については、z/OS システムのプログラミングチームにお問い合わせください。

1. APF リストに LOADLIB ライブラリを追加します。

LOADLIB ライブラリを APF 許可した後、PowerExchange では以下のタスクを実行できます。

- 権限チェックのための RACROUTE セキュリティ呼び出しの発行
- 使用可能なテープドライブがない場合の、テープのマウントの待機
- 他のユーザーにより現在使用中のデータセットの待機
- IDMS スキーマおよびサブスキーマ情報の取得

2. CSNBSYD および CSNBSYE モジュールが含まれるライブラリが APF 許可されていることを確認します。このライブラリがシステムリンクリストに含まれている場合は、システムリンクリストを介してアクセスするすべてのライブラリが APF 許可されていることも確認します。
3. 任意の PowerExchange JCL で STEPLIB DD 文を確認します。特に、RUNLIB ライブラリの STARTLST および PWXLSTNR メンバ内の PowerExchange リスナ JCL を確認してください。

STEPLIB DD 文で連結されているすべてのライブラリを APF 許可します。そうしないと、問題が発生します。

手順 9. PowerExchange リスナユーザー ID（RACF ユーザー）への OMVS セグメントの追加

PowerExchange Listener は、TCP/IP ソケットを使用して通信します。RACF を使用する場合は、この手順を実行して、PowerExchange リスナを実行する RACF ユーザーまたはプロファイルを設定します。

注: RACF を使用していない場合は、使用しているセキュリティ製品のマニュアルを参照してください。

- ▶ PowerExchange Listener を実行する RACF のユーザー ID の OMVS セグメントを定義します。
または、FACILITY クラスプロファイル BPX.DEFAULT.USER を使用してデフォルトの OMVS セグメントを設定します。

段階 II: PowerExchange CDC ソフトウェアのインストール

CDC オプションを購入した場合や z/OS Installation Assistant で CDC データソースを選択した場合は、インストールのこの段階で PowerExchange CDC ソフトウェアをインストールします。

該当しない場合は、[「段階 III: 特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアのインストール」](#)（ページ 110）に進んでください。

z/OS の変更キャプチャ環境では、次のコンポーネントが必要となります。

- PowerExchange リスナ。z/OS Installation Assistant は PowerExchange リスナをインストールします。
- PowerExchange エージェント。PowerExchange エージェントをインストールして起動する必要があります。
- PowerExchange ロgger (z/OS 用)。PowerExchange エージェントを起動すると、PowerExchange エージェントによって PowerExchange ロgger の最後のセットアップジョブが実行されます。
- 環境変更キャプチャルーチン (ECCR)。少なくとも 1 つの ECCR をインストールする必要があります。

手順 10. CDC ジョブのサブミット

z/OS システム上の RUNLIB ライブラリ内の一部の CDC ジョブをサブミットする必要があります。

1. RUNLIB ライブラリ内の次の CDC ジョブをサブミットします。

SETUPCC1

CDC の共通コンポーネントのデータセットを割り当て、入力します。

SETUPVSM

以下の VSAM データセットを割り当てます。

- キャプチャ登録の CCT データセット
- PowerExchange Condense 情報の CDCT データセット
- CDC 抽出情報の追跡用の CDEP データセット
- データマップの DATAMAPS データセット
- 抽出マップの DTLCAMAP データセット
- PowerExchange IDMS ログベース ECCR が使用する PowerExchange ログカタログ (LOGSCAT) VSAM データセット
- PowerExchange Logger のアクティブログおよび緊急再起動データセット
- Adabas ECCR が使用する PowerExchange PLOG カタログ (PCAT) VSAM データセット

SETUPVSM ジョブにより、[「PowerExchange データセットの領域に関する要件」 \(ページ 93\)](#)のデータセットの仕様を使用してキャプチャ処理用の VSAM データセットが作成されます。データセットのサイズは、1 つの z/OS 論理パーティション (LPAR) 上に試験的に PowerExchange 環境を構築するには十分です。

SETUPAGT

EDMSDIR オプションモジュールを構築し、それを USERLIB ライブラリに書き込みます。

2. プロダクション環境で効果的な CDC 実装を作成するには、PowerExchange ロgger のアクティブログデータセットおよびアーカイブログデータセットの数とサイズを検討してください。インストールの完了後に、CDC のすべてのコンポーネントについてデータセットのサイズとパラメータを確認します。

CDC コンポーネントの設定の詳細については、『*PowerExchange CDC Guide for z/OS*』を参照してください。

手順 11. XIZZZ998 ジョブのサブミット

XIZZZ998 ジョブにより、DTLDATA、DTLDEMO、DTLEXPL、および PROCLIB データセットに RUNLIB の適切なメンバが設定されます。

- ▶ z/OS システム上で、XIZZZ998 ジョブをサブミットします。

手順 12. PROCLIB ライブラリへの PowerExchange エージェントプロセスのコピー

入力内容に基づいて PowerExchange エージェントを設定するため、z/OS Installation Assistant によってサンプルプロセス AGENTSTP がカスタマイズされました。

XIZZZ998 ジョブによって、このプロセスが PowerExchange インストール PROCLIB ライブラリにコピーされ、z/OS Installation Assistant の **【CDC 共通パラメータ】** ページで指定した **【エージェント開始タスク ID】** フィールドに基づいて名前が変更されました。

- ▶ カスタマイズされた PowerExchange エージェントプロセスを、PowerExchange インストール PROCLIB から開始されたタスクのシステム PROCLIB ライブラリにコピーします。

手順 13. APF リストへの PowerExchange ロードライブラリの追加

CDC では、PowerExchange ロードライブラリを APF リストに追加する必要があります。

1. APF リストに以下のロードライブラリを追加します。

- *hlq*.LOAD
- *hlq*.LOADLIB (まだ追加していない場合)
- *hlq*.CRG.LOAD (IMS 同期キャプチャを使用する場合)

hlq 変数は、z/OS Installation Assistant の **【シーケンシャルインストールライブラリ】** フィールド (**【データセット名】** ページ) に入力した値です。

APF リストの更新の詳細については、z/OS システムのプログラミングチームに問い合わせてください。

2. PowerExchange リスナの JCL を含めた PowerExchange JCL で、STEPLIB DD 文を確認します。STEPLIB DD 文で連結されているライブラリをすべて許可します。そうしないと、許可が無効になり問題が発生する場合があります。

手順 14. PowerExchange エージェントユーザー ID (RACF ユーザー) への OMVS セグメントの追加

PowerExchange エージェントは、PowerExchange リスナとの通信に TCP/IP ソケットを使用します。RACF を使用する場合は、この手順を実行して、PowerExchange リスナを実行する RACF ユーザーまたはプロファイルを設定します。

注: RACF を使用していない場合は、使用しているセキュリティ製品のマニュアルを参照してください。

- ▶ PowerExchange エージェントを実行する RACF のユーザー ID の OMVS セグメントを定義します。
代わりに、FACILITY クラスプロファイル BPX.DEFAULT.USER を使用してデフォルトの OMVS セグメントを設定することもできます。

手順 15. PowerExchange エージェントの起動

PowerExchange エージェントを起動するには、MVS START コマンドを実行します。

- ▶ 以下のコマンドのいずれかを実行します。

```
S agent_name  
START agent_name
```

agent_name 変数は、開始タスクの PROCLIB ライブラリにある PowerExchange エージェントプロセスのメンバ名です。

PowerExchange エージェントの開始タスク名は、8 文字まで有効であり、RUNLIB ライブラリの AGENTCTL メンバで定義された AgentID パラメータと異なっていてもかまいません。

手順 16. SETUPCC2 ジョブのサブミット

SETUPCC2 ジョブは PowerExchange ロgger の EDMUPARM モジュールを作成して、PowerExchange ロgger 緊急リスタートデータセット内にアクティブなログデータセットを定義します。このジョブは、z/OS Installation Assistant での入力内容に基づいてカスタマイズされています。

1. z/OS 上の RUNLIB ライブラリから、JOB CARD メンバの JOB カードを SETUPCC2 メンバの JCL に追加します。

注: ジョブ名は変更できます。

2. SETUPCC2 ジョブをサブミットします。

段階 III: 特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアのインストール

Adabas、DB2 for z/OS、IDMS データソースを使用する場合は、これらのデータソースの PowerExchange ソフトウェアをインストールします。

該当しない場合は、[「z/OS に PowerExchange をインストールした後に」 \(ページ 112\)](#)に進んでください。

手順 17. DB2 for z/OS データソース用ソフトウェアのインストール

SETUPDB2 ジョブは、PowerExchange for DB2 をインストールするジョブをサブミットします。

1. RUNLIB ライブラリで、JOB CARD メンバ内の JOB カードを SETUPDB2 JCL に追加します。

注: ジョブ名は変更できます。

2. SETUPDB2 ジョブをサブミットします。

このジョブは、XIDDB210 ジョブをサブミットします。XIDDB210 ジョブは、PowerExchange のバルクデータ処理のために DB2 バインドを実行します。このジョブを実行するには、DB2 BINDADD 許可が必要です。

[データソース] ページの **[DB2 CDC]** オプションを選択した場合、SETUPDB2 ジョブは XIDDB220 ジョブもサブミットします。

XIDDB220 ジョブは、以下のタスクを実行します。

- PowerExchange CDC のキャプチャディレクトリデータベース、テーブルスペース、テーブル、インデックスの作成。
 - DB2 ECCR の DB2 バインドを実行する XIDDB225 ジョブのサブミット。このジョブを実行するには、SYSCTRL 許可が必要です。
3. DB2 プランへのアクセスを適切なユーザーに許可します。以下の PowerExchange アドレススペースでは、DB2 プランへのアクセスが必要です。
 - PowerExchange リスナには、XIDDB210 ジョブで指定されたプランに対するアクセス権が必要です。
 - PowerExchange DB2 for z/OS ECCR には、XIDDB225 ジョブで指定されたプランに対するアクセス権が必要です。
 4. Db2 ECCR を実行するユーザー ID に、Db2 ログデータの読み取りに必要な権限があることを確認してください。

注: ECCR は、IFCID 306 READS 要求を発行して Db2 ログデータを読み込みます。READS 要求を発行するために、ECCR では MONITOR TRACE 1 を開始する必要があります。

Db2 ECCR のユーザー ID に SYSOPR、SYSCTL、SYSADM のいずれかの権限がある場合は、さらに権限を許可する必要はありません。

ユーザー ID にこれらのいずれかのシステム権限がない場合は、次の追加の権限をユーザーに付与します。

- START TRACE コマンドを発行するための TRACE 権限。
- MONITOR TRACE がすでにアクティブであるかどうかを決定するために DISPLAY TRACE を発行するための DISPLAY 権限。
- キャプチャする変更を含むログデータを取得するために、READS 要求を発行するための MONITOR2 権限

手順 18.IDMS データソースのソフトウェアのインストール（オプション）

データソースとして IDMS を選択した場合は、オプションで XIDIDM10 ジョブをサブミットします。このジョブは、システム IDMS のロードライブラリを、*hlq.IDMS.LOADLIB* および *hlq.IDMS.DBA.LOADLIB* という名前のこれらのライブラリの PowerExchange コピーにコピーします。

1. RUNLIB ライブラリで、JOB CARD メンバ内の JOB カードを SETUPIDM JCL に追加します。
2. XIDIDM10 ジョブをサブミットします。

DBMOVER 構成ファイルの SECURITY 文の最初のパラメータを 1 か 2 に設定した場合は、PowerExchange リスナが APF 許可を実行する必要があります。しかし、IDMS ロードライブラリは通常、APF 許可されていません。この状況に対処するには、以下の方法のいずれかを使用します。

- z/OS システム上の DBMOVER 構成メンバで PC_AUTH 文を Y に設定します。このように設定すると、PowerExchange で、z/OS プログラム呼び出し（PC）サービスルーチンを使用して PowerExchange リスナで必要とされる APF 許可を得ることができます。IDMS ロードライブラリのコピーの保持および APF 許可を必要としない場合には、この方法を使用します。この方法は、セキュリティが有効な場合に推奨されます。
- XIDIDM10 ジョブを実行して IDMS ロードライブラリをコピーしてから、コピーを APF 許可します。次に、これらのライブラリが PowerExchange リスナの STEPLIB DD 文に指定されていることを確認します。

詳細については、『PowerExchange バルクデータ移動ガイド』を参照してください。

関連項目：

- [「 \[IDMS CDC パラメータ\] ページ」 \(ページ 159\)](#)

手順 19. IMS 同期 CDC データソース用ソフトウェアのインストール

IMS 同期 CDC データソースの場合は、[IMS 同期 CDC] オプションを選択すると、PowerExchange 提供の CRG.LOAD ライブラリがインストールされます。本ソフトウェア、または CHANGE RECORDING FACILITY、DATABASE INTEGRITY PLUS、および Fast Path Online Restructure/EP のうちいずれかの BMC Software 製品を使用できます。これらの中から使用するソフトウェアを選択した上で、いくつかの設定タスクを実行する必要があります。

- ▶ 以下のタスクを完了させます。
 - 現在 IMS 同期 CDC と PowerExchange 提供の CRG.LOAD ライブラリを使用している場合は、フルインストールを実行するときに、IMS 同期 ECCR の IMS データベースリカバリコントロール（DBRC）の設定を再実行します。DBRC の設定の詳細については、『PowerExchange CDC ガイド（z/OS 版）』を参照してください。
 - IMS 同期 CDC の新規ユーザーの場合は、『PowerExchange CDC ガイド（z/OS 版）』に記載されているカスタマイズタスクを実行します。

段階 IV: 以前にコピーされた RUNLIB メンバの削除

必要に応じて、XIZZZ998 ジョブが以前に他のライブラリにコピーした RUNLIB メンバを削除します。

手順 20. XIZZZ999 ジョブのサブミット（オプション）

- ▶ 必要に応じて、XIZZZ999 ジョブをサブミットして、以前コピーされた RUNLIB メンバを削除します。

z/OS に PowerExchange をインストールした後に

z/OS に PowerExchange をインストールした後、PowerExchange を設定する必要があります。

詳細については、以下の文書を参照してください。

- バルクデータ移動の設定については、『*PowerExchange バルクデータ移動ガイド*』を参照してください。
- CDC の設定については、『*PowerExchange CDC Guide for z/OS*』を参照してください。
- DBMOVER コンフィギュレーションファイルの文については、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照してください。

PowerExchange を設定したら、PowerExchange リスナを起動し、必要に応じて、PowerExchange エージェント、PowerExchange ロgger（z/OS 用）、PowerExchange ECCR、および PowerExchange Condense を起動します。PowerExchange タスクの起動および停止の詳細については、『*PowerExchange コマンドリファレンス*』を参照してください。

z/OS でのアップグレードの実行

PowerExchange for z/OS をアップグレードするには、z/OS Installation Assistant を実行します。

z/OS Installation Assistant では、メッセージ、サンプル、ロードライブラリがアップグレードされます。z/OS Installation Assistant では、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップ、キャプチャ済み変更データを含む新しい運用データライブラリは作成されません。したがって、これらのデータセットの内容を新しく割り当てられたデータセットに移行する必要があるため、アップグレード処理が簡単になります。

アップグレード時には、新しいデータセット名または既存のデータセット名を使用する、次のようなオプションがあります。

- 新しいデータソースを既存の PowerExchange 環境に追加し、メッセージ、サンプル、およびロードライブラリに新しいデータセット名を使用するには、**[新しいデータセット名を使用したアップグレード]** オプション（**[新リリースへのアップグレード]** ページ）を選択します。
- メッセージ、サンプル、およびロードライブラリに既存のインストールと同じデータセット名を使用するには、**[既存のデータセット名を使用したアップグレード]** オプション（**[新リリースへのアップグレード]** ページ）を選択します。

z/OS Installation Assistant を実行すると、z/OS システム上にいくつかのジョブが作成されます。アップグレードを完了するには、これらのジョブをサブミットします。

注: アップグレードでは、完全な PowerExchange 環境は作成されません。新しい PowerExchange リリースを既存の PowerExchange リリースと同時に実行するには、フルインストールを実行する必要があります。

PowerExchange CDC 環境の場合、キャプチャ済み変更データが損失する可能性を防ぐためにアップグレードすることをお勧めします。

関連項目：

- [「z/OS へのフルインストールの実行」](#)（ページ 91）

z/OS でアップグレードする前に

z/OS でアップグレードする前に、以下のタスクを実行してください。

- PowerExchange で、使用しているオペレーティングシステムおよびデータソースのバージョンおよびリリースレベルがサポートされていることを確認します。
- ライセンスキーが有効であることを確認します。既存の InstParm ファイルがある場合は、それにライセンスキーが含まれています。アップグレードの一環として、InstParm ファイルをインポートします。新機能を追加する場合は、新しいライセンスキーが必要となることがあります。
- 新しい PowerExchange リリースが PowerCenter インストールと互換性があることを確認します。
- z/OS Installation Assistant が 64 ビット Windows システムにインストールされていることを確認します。32 ビットシステムで z/OS Installation Assistant を実行しようとするインストールは失敗します。

z/OS でのアップグレードのタスクフロー

z/OS 上の PowerExchange をアップグレードするには、PowerExchange の基本ソフトウェアをアップグレードします。また、必要に応じて、PowerExchange CDC ソフトウェアおよび特定のデータソース用の PowerExchange ソフトウェアもアップグレードします。

PowerExchange のアップグレードを実行するには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了 チ ェ ッ ク	タスク	必須またはオプション
	段階 I: PowerExchange の基本ソフトウェアのアップグレード	必須
	「手順 1。PowerExchange へのアクセスの停止」 (ページ 115)	必須
	「手順 2.アップグレード用の BINLIB および RUNLIB ライブラリの割り当て」 (ページ 115)	必須
	「手順 3.Windows でのアップグレード用 z/OS コンポーネントの準備」 (ページ 116)	必須
	「手順 4.z/OS での Installation Assistant の実行によるアップグレード」 (ページ 117)	必須
	「手順 5A.既存のデータセット名を使用したアップグレード (オプション)」 (ページ 120)	オプション。手順 5A または 5B のどちらかを実行
	「手順 5B.新しいデータセット名を使用したアップグレード (オプション)」 (ページ 123)	オプション。手順 5A または 5B のどちらかを実行
	「手順 6. RUNLIB ライブラリの JOBCARD メンバの編集」 (ページ 125)	必須
	「手順 7. RUNLIB ライブラリの XJOBSU メンバの確認」 (ページ 125)	必須
	「手順 8.PowerExchange の基本ソフトウェアのジョブのサブミット」 (ページ 125)	必須

完了 チェ ック	タスク	必須またはオプション
	「手順 9.APF リストへの PowerExchange ロードライブラリの追加」 (ページ 126)	新しいデータセット名を使用する場合は必須
	段階 II：PowerExchange CDC ソフトウェアのアップグレード	CDC を使用する場合は必須
	「手順 10.CDC ジョブのサブミット」 (ページ 126)	CDC を使用する場合は必須
	「手順 11.APF リストへの PowerExchange ロードライブラリの追加」 (ページ 127)	CDC および新しいデータセット名を使用する場合は必須
	段階 III: 特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアのアップグレード	一部のデータソースでは必須
	「手順 12A：SETUDB2U または SETDB2UE ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード」 (ページ 128)	アップグレード前に DB2 for z/OS データソースを使用した場合は必須
	「手順 12B：SETUPDB2 ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード」 (ページ 129)	アップグレード中に DB2 for z/OS データソースを追加した場合は必須
	「手順 13。IDMS データソースのソフトウェアのアップグレード (オプション)」 (ページ 130)	IDMS データソースではオプション
	「手順 14。IMS 同期 CDC データソース用ソフトウェアのアップグレード」 (ページ 130)	PowerExchange CRG.LOAD ライブラリを使用する場合、IMS 同期 CDC ソースでは必須
	段階 IV：アップグレード後の作業の実行	必須
	「手順 15。開始タスクプロシージャのコピーと RUNLIB メンバの更新」 (ページ 130)	新しいデータセット名を使用する場合は必須
	「手順 16. PowerExchange へのアクセスの再開」 (ページ 131)	必須

段階 I：PowerExchange の基本ソフトウェアのアップグレード

アップグレードのこの段階で、z/OS システム上でライブラリを割り当て、Windows システム上で z/OS インストールファイルを解凍し、z/OS Installation Assistant を使用して z/OS システム上で PowerExchange の基本ソフトウェアをアップグレードします。

z/OS Installation Assistant の実行後、z/OS システムで他のタスクを実行する必要があります。

すべての PowerExchange ユーザーがこの段階の手順を実行する必要があります。

手順 1. PowerExchange へのアクセスの停止

アップグレードする前に、一部の PowerExchange および PowerCenter のタスクを停止する必要があります。

1. PowerExchange バルクデータ移動のみを使用している場合は、以下のタスクを停止してください。
 - PowerExchange との間でデータの抽出または書き込みを行うすべての PowerCenter ワークフロー
 - すべての PowerExchange リスナアドレススペース
2. PowerExchange CDC を使用している場合は、以下のタスクを停止してください。
 - PowerExchange との間でデータの抽出または書き込みを行うすべての PowerCenter ワークフロー
 - すべての PowerExchange リスナアドレススペース
 - すべての ECCR アドレススペース
 - すべての PowerExchange Condense アドレススペース
 - すべての PowerExchange ロgger (z/OS 用) のアドレススペース
 - すべての PowerExchange エージェントアドレススペース

注: DB2 for z/OS ECCR を停止するには、ECCR QUIESCE コマンドを使用します。このコマンドは、ECCR が DB2 ログ内において、実行中の UOW が存在しないポイントに到達した後に、ECCR を停止します。

以下の構文を使用して、QUIESCE コマンドを発行します。

```
F job_name,QUIESCE
```

job_name 変数は、ECCR ジョブまたは開始済みタスクの名前です。

処理後の出力には、次の例に示すように、PWXEDM177268I および PWXEDM177012I のメッセージが含まれています。

```
PWXEDM177268I LAST READ DB2 LOG LOCATION=rba_or_lrsn.data_sharing_member_id.sequence_number
PWXEDM177012I ECCR STATUS: LAST DB2 READ LOC rba_or_lrsn.data_sharing_member_id.sequence_number
OLDEST OPEN UOW urid.data_sharing_member_id
```

ECCR の特殊スタートを実行する必要がある場合は、これらのメッセージ内の値が必要になります。詳細については、「[DB2 ECCR 起動時の考慮事項](#)」 (ページ 131) を参照してください。

手順 2. アップグレード用の BINLIB および RUNLIB ライブラリの割り当て

z/OS システムでは、z/OS Installation Assistant からファイルを受け取る BINLIB および RUNLIB ライブラリを割り当てる必要があります。

これらのライブラリには、初めてのインストールで割り当てたライブラリと同じ属性が必要です。ただし、完全修飾されたライブラリ名は、初めてのインストールのものと異なっていてもかまいません。

ライブラリには、BINLIB および RUNLIB の事前定義の PDS 名を使用することをお勧めします。

既存のデータセット名を使用してアップグレードする場合は、ステージング用の BINLIB および RUNLIB ライブラリを割り当てる必要があります。ステージング用の BINLIB および RUNLIB ライブラリに指定する HLQ は、元のインストール先に指定した HLQ と異なる値にする必要があります。z/OS Installation Assistant により、ファイルがステージングライブラリに転送されます。さらに、z/OS Installation Assistant には、ステージングライブラリの内容を既存のライブラリにコピーするためのジョブが用意されています。

- ▶ z/OS システム上で、次のいずれかの方法で、BINLIB ライブラリと RUNLIB ライブラリを割り当てます。
 - ISPF Option 3.2 を使用する。
 - 次のサンプルに示すような、RUNLIB ライブラリ割り当て用 JCL を使用する。

```
//ALLOC      EXEC PGM=IEFBR14
//DS1 DD DSN=HLQ..RUNLIB,
//          DISP=(NEW,CATLG,DELETE),SPACE=(CYL,(20,10,50),RLSE),
//          DCB=(BLKSIZE=nn,RECFM=FB,LRECL=80,DSORG=PS),
//          VOL=SER=volume_serial_number
```

使用する HLQ はメモしておいてください。z/OS Installation Assistant の【ステージングデータセット】または【ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)】グループ (【データセットグループの詳細】ページ) で、この値を HLQ 値として入力する必要があります。

以下の表に、3390 DASD 上の BINLIB ライブラリおよび RUNLIB ライブラリの割り当てに使用するパラメータを示します。

ライブラリ	説明	領域単位 (3390)	領域量 (プライマリ、セカンダリ)	ディレトリ ブロック	DCB 特性
BINLIB	TSO/E 送信形式のソフトウェアライブラリを含む PDS。	CYLS	(160, 10)	10	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE (任意の有効値を指定可能。LRECL 値の倍数を指定することが多い)
RUNLIB	PowerExchange をインストール、設定、および実行するジョブを含む PDS。設定データも含まれます。 AAINDEX メンバは、RUNLIB ライブラリ内の各メンバを記述します。	CYLS	(10,1)	50	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE (任意の有効値を指定可能。LRECL 値の倍数を指定することが多い)

注: PowerExchange のアップグレードプロセスでは、他に以下のライブラリも割り当てられます。

- CRG.LOAD、DBRM、LOAD、および SAMPLIB ライブラリ。
- 新規データセット名を使用したアップグレードを選択する場合、[「PowerExchange データセットの領域に関する要件」 \(ページ 93\)](#)に示されている DATAMAPS 以外のすべてのライブラリ。
- 既存のデータセット名を使用したアップグレードを選択する場合、DBRMLIB、DTLEXPL、DTLMSG、LOADLIB、および SRCLIB の各ライブラリ。

手順 3.Windows でのアップグレード用 z/OS コンポーネントの準備

PowerExchange for z/OS は、自己解凍式実行可能ファイルとして出荷されます。このアップグレードファイルを Windows システム上の一時ディレクトリに解凍します。

1. Windows のコマンドプロンプトから、アップグレードファイルの解凍先となる一時ディレクトリを作成します。例えば、`pxw_mvs_vvrm` という名前の一時ディレクトリを作成するには、以下のコマンドを実行します。

```
mkdir pxw_mvs_vvrm
```

`vrn` 変数は、PowerExchange の *version.release.modification* 番号です。

2. 製品のアップグレード実行可能プログラムを検索して実行します。

実行可能ファイル名の形式は次のとおりです。

```
pxwos26_vvrm.exe
```

`vrn` は、PowerExchange の *version.release.modification* 番号です。例えば、`pxwos26_v961.exe` は、PowerExchange のバージョン 9.6.1 を z/OS にインストールする実行可能プログラムの名前です。

3. **【WinZip Self-Extractor】** ダイアログボックスで、**【参照】** をクリックします。

4. **【フォルダの参照】** ダイアログボックスで、作成した一時ディレクトリを特定します。次に、**【OK】** をクリックします。
5. **【WinZip Self-Extractor】** ダイアログボックスで、**【解凍】** をクリックします。
WinZip Self-Extractor により、いくつかのファイルがルートディレクトリに配置され、ファイルも含む binary および runlib サブディレクトリが作成されます。ファイルが正常に抽出されたことを示すメッセージボックスが表示されます。
6. メッセージボックスで、**【OK】** をクリックします。
7. **【WinZip Self-Extractor】** ダイアログボックスで、**【閉じる】** をクリックします。

手順 4.z/OS での Installation Assistant の実行によるアップグレード

PowerExchange のアップグレードを実行するには、Windows システム上で、z/OS Installation Assistant ウィザードを実行する必要があります。

また、現在のバージョンの PowerExchange の前回のフルインストール時に使用した既存の InstParm ファイルを、Windows 上の作業ディレクトリにコピーします。z/OS Installation Assistant を開始する前に手動でファイルをコピーするか、後続の [z/OS Installation Assistant] ページからファイルをインポートできます。z/OS Installation Assistant の各ページの操作中に、任意のページで **【保存】** をクリックして InstParm ファイルに入力内容を保存できます。

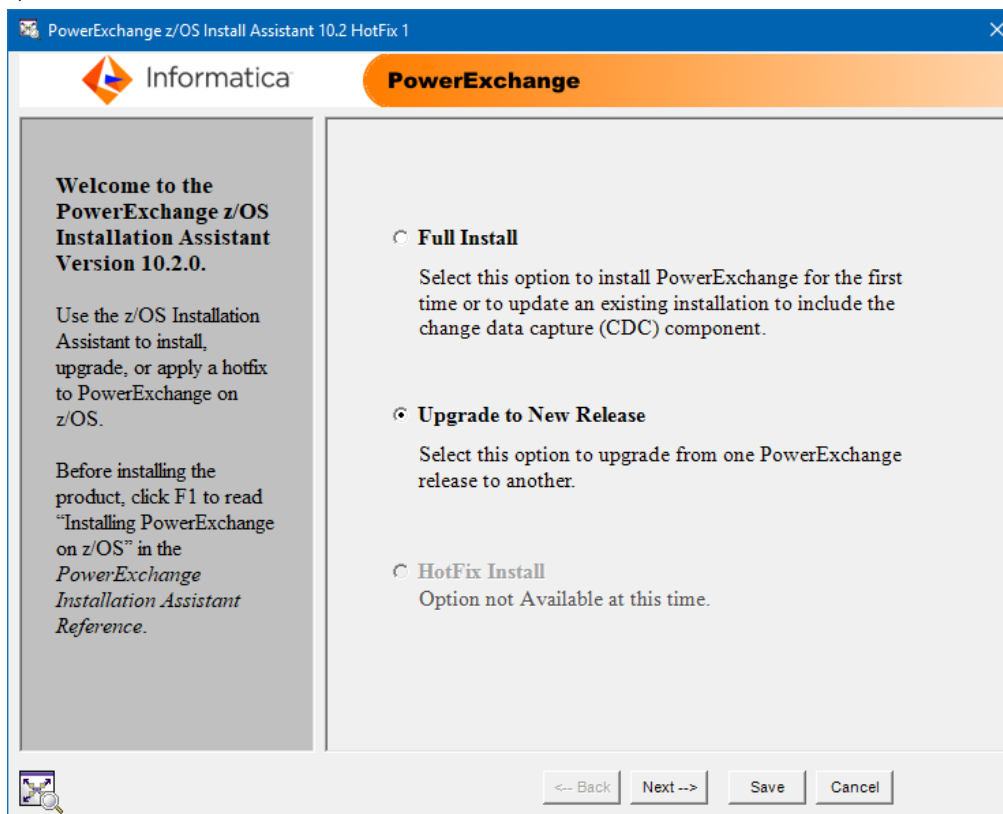
ヒント: 後でアップグレードを実行したり、ホットフィックスを適用する際に使用できるように、InstParm ファイルを Windows 上に保持しておいてください。

一部のページでは、**【詳細パラメータ】** をクリックして詳細パラメータを定義したり、**【デフォルトの復元】** をクリックしてデフォルト値を復元したりできます。ただし、詳細パラメータを定義した場合、**【デフォルトの復元】** ボタンを使用してデフォルト値に戻すことはできません。

重要: 64 ビット Windows システム上で z/OS Installation Assistant を実行する必要があります。32 ビットシステム上でウィザードを実行しようとする、インストールは失敗します。

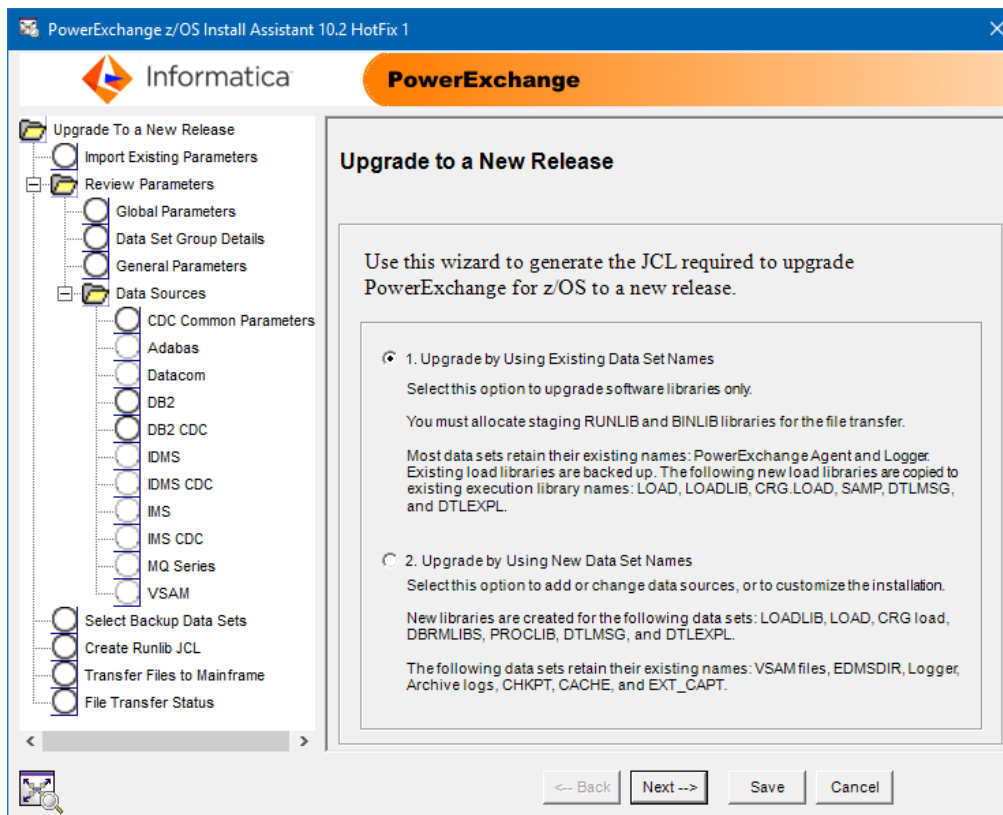
1. z/OS のアップグレードファイル（直前のトピックの "pwx_mvsn" ディレクトリ）の抽出先一時ディレクトリで、**MVS_Install.exe** を右クリックし、**[管理者として実行]** を選択します。

z/OS Installation Assistant が開始されます。



2. **[新リリースへのアップグレード]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。

[新リリースへのアップグレード] ページが表示されます。

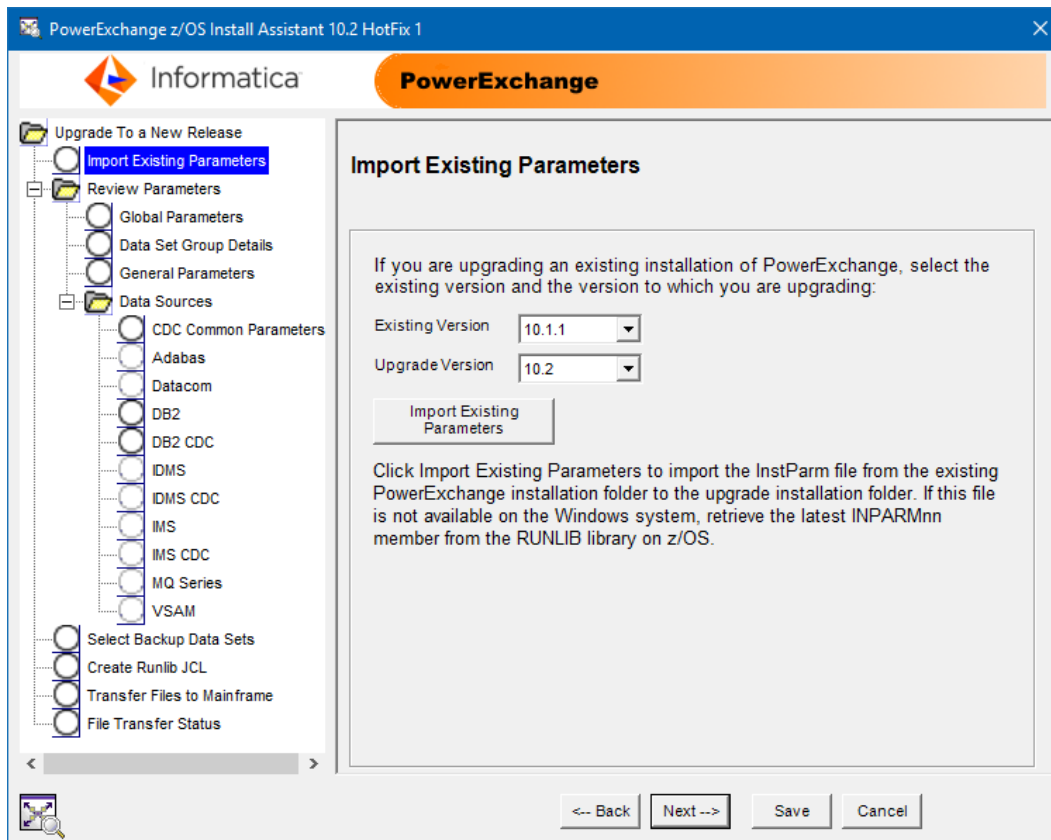


3. 次のいずれかのアップグレードオプションを選択します。

- **既存のデータセット名を使用したアップグレード。**メッセージ、サンプル、およびロードライブラリに、既存のインストール先と同じ名前を使用します。
- **新しいデータセット名を使用したアップグレード。**メッセージ、サンプル、およびロードライブラリに、新しいデータセット名を使用します。

[次へ] をクリックします。

[既存のパラメータのインポート] ページが表示されます。



選択したアップグレードオプションに基づき、以下のいずれかの手順に進みます。

- **【既存のデータセット名を使用したアップグレード】** を選択した場合は、[「手順 5A.既存のデータセット名を使用したアップグレード（オプション）」（ページ 120）](#)を参照します。
- **【新しいデータセット名を使用したアップグレード】** を選択した場合は、[「手順 5B. 新しいデータセット名を使用したアップグレード（オプション）」（ページ 123）](#)を参照します。

手順 5A.既存のデータセット名を使用したアップグレード（オプション）

【既存のデータセット名を使用したアップグレード】 オプションを選択して、メッセージ、サンプル、およびロードライブラリについて既存のインストール先と同じ名前を使用する場合は、次の手順を実行します。

警告: このアップグレードオプションを選択して z/OS Installation Assistant で操作を実行した後に、**【新しいデータセット名を使用したアップグレード】** に切り替えるには、まず、InstParm ファイルを新しいインストールディレクトリにリストアする必要があります。

1. カスタマイズした InstParm ファイルを、既存の PowerExchange インストール先からアップグレードインストールディレクトリに手でコピーしていない場合は、**【既存のパラメータのインポート】** ページで、既存の InstParm ファイルをインポートします。

注: z/OS Installation Assistant での入力内容に基づいて、InstParm ファイルのインストールパラメータが更新されます。

詳細については、[「【既存のパラメータのインポート】 ページ」（ページ 167）](#)を参照してください。

【次へ】 をクリックします。

【パラメータの確認】 ページが表示されます。詳細については、[「【パラメータの確認】 ページ」（ページ 168）](#)を参照してください。

2. **【次へ】** をクリックします。
【グローバルパラメータの確認】 ページが表示されます
3. このページの情報を確認します。
必要に応じて、**【ログオン ID】** または **【ライセンスキー】** を変更します。このページの他の値は変更できません。
詳細については、[「【グローバルパラメータ】 ページの確認（既存のデータセット名を使用したアップグレード）」（ページ 168）](#)を参照してください。
【次へ】 をクリックします。
【データセットグループの詳細の選択】 ページが表示されます。
4. ステージングデータセットとバックアップデータセットの情報を確認します。必要に応じてデータセットグループの詳細を指定します。
詳細については、[「データセットグループの詳細ページの選択（既存のデータセット名でのアップグレード）」（ページ 170）](#)を参照してください。
【次へ】 をクリックします。
【全般的なパラメータの確認】 ページが表示されます
5. 全般的なパラメータを確認します。
詳細については、[「【全般的なパラメータ】 ページ」（ページ 145）](#)を参照してください。
【次へ】 をクリックします。
【データソースの確認】 ページが表示されます。
6. バルクデータ移動操作と CDC 操作で使用するために選択されたデータソースを確認します。
詳細については、[「【データソース】 ページ」（ページ 148）](#)を参照してください。
【次へ】 をクリックします。
注: 既存のデータセット名を使用するアップグレードでは、データソースの追加や削除はできません。データソースを追加または削除するには、フルインストールを実行する必要があります。
CDC データソースを選択した場合は、**【CDC 共通パラメータの確認】** ページが表示されます。
7. CDC 操作の共通パラメータを確認します。
詳細については、[「【CDC 共通パラメータ】 ページ」（ページ 149）](#)を参照してください。
【次へ】 をクリックします。
8. **【データソース】** ページで選択した各データソースのパラメータ設定を入力します。
以下の表に各データソースタイプのパラメータページを示します。

ページ	参照
Adabas パラメータ	「【Adabas パラメータ】 ページ」（ページ 151）
Datacom パラメータ	「【Datacom パラメータ】 ページ」（ページ 153）
DB2 パラメータ	「【DB2 パラメータ】 ページ」（ページ 154）
DB2 CDC パラメータ	「【DB2 CDC パラメータ】 ページ」（ページ 156）
IDMS パラメータ	「【IDMS パラメータ】 ページ」（ページ 158）

ページ	参照
IDMS CDC パラメータ	「 [IDMS CDC パラメータ] ページ」 (ページ 159)
IMS パラメータ	「 [IMS パラメータ] ページ」 (ページ 160)
IMS CDC パラメータ	「 [IMS CDC パラメータ] ページ」 (ページ 161)
MQ Series パラメータ	「 [MQ Series パラメータ] ページ」 (ページ 162)
VSAM パラメータ	「 [VSAM パラメータ] ページ」 (ページ 163)

複数のソースタイプを選択した場合は、**【次へ】** をクリックして次のページに進みます。

注: これらのページのデータソース情報は変更できません。データソース情報を変更するには、新しいデータセット名を使用してアップグレードするか、フルインストールを実行する必要があります。

最後のパラメータページで **【次へ】** をクリックすると、**【データセットのバックアップ】** ページが表示されます。

9. バックアップするデータセットを選択します。

詳細については、[「\[データセットのバックアップ\] ページ」 \(ページ 174\)](#)を参照してください。

【次へ】 をクリックします。

【Runlib JCL の作成】 ページが表示されます。

10. RUNLIB および BINLIB ライブラリに関する情報を入力します。

既存のデータセット名を使用したアップグレードの場合、これらのライブラリは現在の PowerExchange 環境の BINLIB および RUNLIB ライブラリである必要があります。

詳細については、[「\[Runlib JCL の作成\] ページ」 \(ページ 164\)](#)を参照してください。

【次へ】 をクリックします。

【メインフレームへのファイルの転送】 ページが表示されます。また、z/OS Installation Assistant によって、XRunlib フォルダも作成されます。XRunlib フォルダには runlib フォルダのファイル (z/OS Installation Assistant で入力した値でカスタマイズされたもの) が格納されます。

11. **【メインフレームへのファイルの転送】** ページで、ファイルの転送先の z/OS システムに関する情報を入力します。

注: 既存のデータセット名を使用したアップグレードの場合、RUNLIB および BINLIB ライブラリは一時ステージングライブラリです。**【データセット名】** ページの **【ステージングライブラリの HLQ】** フィールドに、これらのライブラリの HLQ を入力しています。

詳細については、[「\[メインフレームへのファイルの転送\] ページ」 \(ページ 165\)](#)を参照してください。

【次へ】 をクリックします。

【ファイル転送のステータス】 ページに、ファイル転送操作のステータスが表示されます。詳細については、[「\[ファイル転送ステータスの表示\] ページ」 \(ページ 166\)](#)を参照してください。

12. ファイル転送が完了したら、**【OK】** をクリックします。

13. **【完了】** をクリックします。

インストール処理で入力した内容は、Windows のルートインストールディレクトリに InstParm ファイルとして保存されます (まだ保存されていない場合)。また、対応する INPARM nn ファイルが Windows の XRunlib ディレクトリに作成され、FTP で z/OS 上の RUNLIB ライブラリに転送されます。RUNLIB ライブラリ内の INPARM nn メンバのうち、最大の nn 値を持つメンバが、このメンバの最新バージョンです。

[「手順 6. RUNLIB ライブラリの JOBCARD メンバの編集」 \(ページ 125\)](#)に進んでください。

手順 5B. 新しいデータセット名を使用したアップグレード（オプション）

[新しいデータセット名を使用したアップグレード] オプションを選択して、メッセージ、サンプル、およびロードライブラリに新しいデータセット名を使用する場合は、次の手順を実行します。

警告: このアップグレードオプションを選択して z/OS Installation Assistant で操作を実行した後に、**[既存のデータセット名を使用したアップグレード]** に切り替えるには、まず、InstParm ファイルを新しいインストールディレクトリにリストアする必要があります。

1. **[既存のパラメータのインポート]** ページで、既存の InstParm ファイルをインポートします。ただし、カスタマイズした InstParm ファイルを既存の PowerExchange インストール先からアップグレードインストールディレクトリに手動でコピーしてある場合は、InstParm ファイルをインポートする必要はありません。

注: z/OS Installation Assistant での入力内容に基づいて、InstParm ファイルのインストールパラメータが更新されます。

詳細については、[「\[既存のパラメータのインポート\] ページ」 \(ページ 167\)](#)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

[パラメータの確認] ページが表示されます。詳細については、[「\[パラメータの確認\] ページ」 \(ページ 168\)](#)を参照してください。

2. **[次へ]** をクリックします。

[グローバルパラメータの確認] ページが表示されます

3. 新しいデータセット名の高位修飾子 (HLQ) を入力し、他の情報を確認します。

詳細については、[「\[グローバルパラメータ\] ページの確認 \(新しいデータセット名を使用したアップグレード\)」 \(ページ 169\)](#)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

[データセットグループの詳細の選択] ページが表示されます。

4. データセットのボリュームおよび単位値を確認します。

新しいデータセットのボリュームおよび単位値は、必要に応じて変更できます。詳細については、[「データセットグループの詳細ページの選択 \(新しいデータセット名でのアップグレード\)」 \(ページ 172\)](#)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

[全般的なパラメータの確認] ページが表示されます

5. 全般的なパラメータを確認します。

詳細については、[「\[全般的なパラメータ\] ページ」 \(ページ 145\)](#)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

[データソースの確認] ページが表示されます。

6. バルクデータ移動操作と CDC 操作で使用するために選択されたデータソースを確認します。必要に応じて、データソースタイプを追加します。

詳細については、[「\[データソース\] ページ」 \(ページ 148\)](#)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

注: 新しいデータセット名を使用するアップグレードでは、データソースを削除できません。データソースを削除するには、フルインストールを実行する必要があります。

CDC データソースを選択した場合は、**[CDC 共通パラメータ]** ページが表示されます。

7. **[CDC 共通パラメータの確認]** ページで、CDC 操作用の共通パラメータを確認します。

詳細については、[「\[CDC 共通パラメータ\] ページ」 \(ページ 149\)](#)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

8. **【データソース】** ページで選択した各データソースのパラメータ設定を入力します。
以下の表に各データソースタイプのパラメータページを示します。

ページ	参照
Adabas パラメータ	「 [Adabas パラメータ] ページ」 (ページ 151)
Datacom パラメータ	「 [Datacom パラメータ] ページ」 (ページ 153)
DB2 パラメータ	「 [DB2 パラメータ] ページ」 (ページ 154)
DB2 CDC パラメータ	「 [DB2 CDC パラメータ] ページ」 (ページ 156)
IDMS パラメータ	「 [IDMS パラメータ] ページ」 (ページ 158)
IDMS CDC パラメータ	「 [IDMS CDC パラメータ] ページ」 (ページ 159)
IMS パラメータ	「 [IMS パラメータ] ページ」 (ページ 160)
IMS CDC パラメータ	「 [IMS CDC パラメータ] ページ」 (ページ 161)
MQ Series パラメータ	「 [MQ Series パラメータ] ページ」 (ページ 162)
VSAM パラメータ	「 [VSAM パラメータ] ページ」 (ページ 163)

複数のソースタイプを選択した場合は、**【次へ】** をクリックして次のページに進みます。

最後のパラメータページで **【次へ】** をクリックすると、**【データセットのバックアップ】** ページが表示されます。

9. バックアップするデータセットを選択します。
詳細については、[「\[データセットのバックアップ\] ページ」 \(ページ 174\)](#)を参照してください。
【次へ】 をクリックします。
【Runlib JCL の作成】 ページが表示されます。
10. RUNLIB および BINLIB ライブラリに関する情報を入力します。
詳細については、[「\[Runlib JCL の作成\] ページ」 \(ページ 164\)](#)を参照してください。
【次へ】 をクリックします。
【メインフレームへのファイルの転送】 ページが表示されます。また、z/OS Installation Assistant によって、XRunlib フォルダも作成されます。XRunlib フォルダには runlib フォルダのファイル (z/OS Installation Assistant で入力した値でカスタマイズされたもの) が格納されます。
11. **【メインフレームへのファイルの転送】** ページで、ファイルの転送先の z/OS システムに関する情報を入力します。
注: 新しいデータセット名を使用したアップグレードの場合、RUNLIB および BINLIB ライブラリは新しいライブラリです。これらのライブラリは、z/OS Installation Assistant が RUNLIB および BINLIB データセットを転送する転送先ライブラリでもあります。**【データセットグループの詳細】** ページで、これらのライブラリの HLQ を入力しています。
詳細については、[「\[メインフレームへのファイルの転送\] ページ」 \(ページ 165\)](#)を参照してください。
【次へ】 をクリックします。
【ファイル転送のステータス】 ページに、ファイル転送操作のステータスが表示されます。詳細については、[「\[ファイル転送ステータスの表示\] ページ」 \(ページ 166\)](#)を参照してください。

12. ファイル転送が完了したら、**【OK】** をクリックします。

13. **【完了】** をクリックします。

注: インストール処理で入力した内容は、Windows のルートインストールディレクトリに InstParm ファイルとして保存されます（まだ保存されていない場合）。また、対応する INPARM nn ファイルが Windows の XRunlib ディレクトリに作成され、FTP で z/OS 上の RUNLIB ライブラリに転送されます。RUNLIB ライブラリ内の INPARM nn メンバのうち、最大の nn 値を持つメンバが、このメンバの最新バージョンです。

[「手順 6. RUNLIB ライブラリの JOBCARD メンバの編集」](#)（ページ 125）に進んでください。

手順 6. RUNLIB ライブラリの JOBCARD メンバの編集

z/OS システム上で、自サイトの標準に従って、アップグレード RUNLIB ライブラリの JOBCARD メンバを編集します。CLASS および MSGCLASS などのパラメータを追加する必要がある場合があります。

RUNLIB ライブラリ内のジョブのうち、更新された JOBCARD を使用するジョブの一覧を確認するには、アップグレード RUNLIB ライブラリ内の XJOBSU メンバを表示します。

1. アップグレード RUNLIB ライブラリで、JOBCARD メンバを編集します。
2. **【全般的なパラメータ】** ページで **【自動サブミットをオン】** オプションを選択した場合は、ジョブの実行方法を制御するために TYPRUN=HOLD 文を追加します。

このパラメータ設定では、ジョブが起動されたら、各ジョブを手動で解放する必要があります。

手順 7. RUNLIB ライブラリの XJOBSU メンバの確認

XJOBS メンバには、RUNLIB からサブミットする必要があるインストールジョブが、サブミットする必要がある順に一覧表示されます。

- ▶ RUNLIB ライブラリの XJOBSU メンバを確認して、次に実行するジョブを特定します。

手順 8. PowerExchange の基本ソフトウェアのジョブのサブミット

バルクデータ移動に必要なライブラリを追加するには、アップグレード RUNLIB ライブラリの SETUBL1E ジョブまたは SETUBL1N ジョブをサブミットします。これらのジョブは、バルクデータ移動に必要なライブラリを追加し、JOB カードを別のジョブに追加します。

使用するジョブは、選択したアップグレードオプションによって異なります。

- **【既存のデータセット名を使用したアップグレード】** を選択した場合は、SETUBL1E を使用します。
- **【新しいデータセット名を使用したアップグレード】** を選択した場合は、SETUBL1N を使用します。

また、XJOBSU メンバに記載されているように、追加のジョブをサブミットします。

1. 新しいデータセット名を使用してアップグレードする場合は、BKUPDSUN ジョブをサブミットします。
このジョブは、**【データセットのバックアップ】** ページで選択されたデータセットのバックアップコピーを作成します。
2. 選択したアップグレードオプションに応じて、JOBCARD メンバ内の JOB カードをアップグレード RUNLIB ライブラリの SETUBL1E または SETUBL1N ジョブに追加します。
3. 以下のいずれかのアクションを実行します。
 - **【既存のデータセット名を使用したアップグレード】** を選択した場合、既存の RUNLIB ライブラリの GENBULK メンバの HLQ 値が、アップグレード RUNLIB ライブラリの GENBULK メンバの HLQ 値と同じであることを確認します。

- **【新しいデータセット名を使用したアップグレード】**を選択した場合、既存の RUNLIB ライブラリの GENBULK メンバの HLQ 値が、アップグレード RUNLIB ライブラリの GENBULK メンバの HLQ 値と異なることを確認します。
4. SETUBL1E ジョブまたは SETUBL1N ジョブをサブミットします。
 5. 既存のデータセット名を使用してアップグレードする場合は、BKUPDSUE ジョブをサブミットします。
このジョブは、選択した現在インストールされているデータセットをバックアップします。
 6. 既存のデータセット名を使用してアップグレードする場合は、INSPWXUE ジョブをサブミットします。
このジョブは、新しく作成されたライブラリを既存の名前にコピーします。

新しいデータセット名を使用したアップグレードを選択した場合は、[「手順 9.APF リストへの PowerExchange ロードライブラリの追加」 \(ページ 126\)](#)に進みます。

既存のデータセット名を使用したアップグレードを選択した場合は、[「段階 II：PowerExchange CDC ソフトウェアのアップグレード」 \(ページ 126\)](#)に進みます。

関連項目：

- [「\[データセットのバックアップ\] ページ」 \(ページ 174\)](#)

手順 9.APF リストへの PowerExchange ロードライブラリの追加

新しいデータセット名を使用したアップグレードを選択し、以前に LOADLIB ライブラリを APF 許可した場合は、新しい LOADLIB を APF リストに追加します。

APF リストの更新の詳細については、z/OS システムのプログラミングチームにお問い合わせください。

LOADLIB ライブラリを APF 許可した後、PowerExchange では以下のタスクを実行できます。

- 権限チェックのための RACROUTE セキュリティ呼び出しの発行
- 使用可能なテープドライブがない場合の、テープのマウントの待機
- 他のユーザーにより現在使用中のデータセットの待機
- IDMS スキーマおよびサブスキーマ情報の取得

段階 II：PowerExchange CDC ソフトウェアのアップグレード

CDC オプションを購入した場合や z/OS Installation Assistant で CDC データソースを選択した場合は、アップグレードのこの段階で PowerExchange CDC ソフトウェアをアップグレードする必要があります。

該当しない場合は、[「段階 III：特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアのアップグレード」 \(ページ 127\)](#)に進んでください。

手順 10.CDC ジョブのサブミット

CDC 操作に必要なデータセットを割り当てるには、選択したアップグレードオプションに基づいて、アップグレード RUNLIB ライブラリの CDC ジョブをサブミットします。

1. SETUCC1E ジョブまたは SETUCC1N ジョブをサブミットして、必要なデータセットを割り当てます。
 - **【既存のデータセット名を使用したアップグレード】** オプションを選択した場合は、SETUCC1E をサブミットします。
 - **【新しいデータセット名を使用したアップグレード】** オプションを選択した場合は、SETUCC1N をサブミットします。

2. 以下の表に示した追加の CDC ジョブをサブミットします。

アップグレードオプション	Jobs	説明
既存のデータセット名を使用したアップグレード	BKUPDSUE、それに続く INSPWXUE 注: BKUPDSUE が正常に終了するまで、INSPWXUE をサブミットしないでください。	BKUPDSUE ジョブは、 【データセットのバックアップ】 ページで選択されたデータセットのバックアップコピーを作成します。 INSPWXUE ジョブにより、既存のソフトウェアライブラリが新しいメンバで設定されます。
新しいデータセット名を使用したアップグレード	XIZZZ998、必要に応じてそれに続く XIZZZ999	XIZZZ998 ジョブは、RUNLIB ライブラリから一時メンバを削除し、JCL を構築します。 オプションの XIZZZ999 ジョブは、JCL が最終的なコピー先ライブラリにコピーされた後、RUNLIB ライブラリからメンバを削除します。

手順 11.APF リストへの PowerExchange ロードライブラリの追加

新規データセット名を使用したアップグレードを選択する場合、PowerExchange ロードライブラリを APF リストに追加する必要があります。

注: 既存のデータセット名を使用したアップグレードを選択した場合は、[「段階 III：特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアのアップグレード」](#) (ページ 127)に進みます。

1. APF リストに以下のロードライブラリの新しいバージョンを追加します。

- *hlq*.LOAD
- *hlq*.LOADLIB
- *hlq*.CRG.LOAD (IMS 同期 CDC を使用する場合)

hlq 変数は、z/OS Installation Assistant の **【読み取り専用データセット、ライブラリのロードおよび DBRMLIB】** グループ ([【データセットグループの詳細】](#) ページ) で入力した HLQ 値です。

APF リストの更新についてサポートが必要な場合は、z/OS システムのプログラミングチームにお問い合わせください。

2. PowerExchange JCL (PowerExchange リスナの JCL も含む) の STEPLIB DD 文で連結されたすべてのライブラリを承認します。

そうしないと、許可が無効になり問題が発生する場合があります。

Adabas CDC、DB2、IDMS、または IMS のデータソースを選択しなかった場合は、[「手順 15. 開始タスクプロシージャのコピーと RUNLIB メンバの更新」](#) (ページ 130)に進んでください。

段階 III：特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアのアップグレード

DB2 for z/OS、IDMS、IMS データソースを使用する場合は、これらのデータソースの PowerExchange ソフトウェアをアップグレードしなければならないことがあります。

新しいデータセット名を使用してアップグレードするオプションを選択し、新しいデータソースを追加した場合は、それらのデータソースのソフトウェアをアップグレードする必要があります。

該当しない場合は、[「段階 IV: アップグレード後の作業」](#) (ページ 130)に進んでください。

RUNLIB ライブラリの XJOBSU メンバは、データソースのソフトウェアをアップグレードするために実行するジョブを記述します。

【既存のデータセット名を使用したアップグレード】 オプションを選択した場合は、環境のタイプに合わせて次の表の手順を実行します。

環境	ステップ
DB2 for z/OS バルクデータ移動および CDC の既存ユーザー	「手順 12A：SETUDB2U または SETDB2UE ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード」 (ページ 128)
IMS 同期 CDC の既存ユーザー	「手順 14。IMS 同期 CDC データソース用ソフトウェアのアップグレード」 (ページ 130)

【新しいデータセット名を使用したアップグレード】 オプションを選択した場合は、環境のタイプに合わせて次の表の手順を実行します。

環境	ステップ
DB2 for z/OS バルクデータ移動および CDC の既存ユーザー	「手順 12A：SETUDB2U または SETDB2UE ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード」 (ページ 128)
DB2 for z/OS バルクデータ移動および CDC の新規ユーザー	「手順 12B：SETUPDB2 ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード」 (ページ 129)
IDMS バルクデータ移動または CDC の新規ユーザー	「手順 13。IDMS データソースのソフトウェアのアップグレード (オプション)」 (ページ 130)
IMS 同期 CDC の既存ユーザー	「手順 14。IMS 同期 CDC データソース用ソフトウェアのアップグレード」 (ページ 130)

手順 12A：SETUDB2U または SETDB2UE ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード

アップグレード前に PowerExchange を使用して DB2 for z/OS のデータを処理した場合は、RUNLIB ライブラリの SETUDB2U または SETDB2UE ジョブを実行して、PowerExchange ソフトウェアを DB2 データソース用にアップグレードする必要があります。

実行するジョブは、z/OS Installation Assistant で選択したアップグレードオプションによって異なります。

- **【新しいデータセット名を使用したアップグレード】** オプションを選択した場合は、SETUDB2U を実行します。
- **【既存のデータセット名を使用したアップグレード】** オプションを選択した場合は、SETDB2UE を実行します。

注意: PowerExchange を使用していた場合のみ、このプロシージャを実行して、アップグレードの前に DB2 for z/OS のデータを処理します。アップグレード中にデータソースとして DB2 を追加した場合、代わりに [「手順 12B：SETUPDB2 ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード」](#) (ページ 129) を実行します。

1. RUNLIB ライブラリで、JOBCARD メンバ内の JOB カードを SETUDB2U または SETDB2UE JCL に追加します。

注: ジョブ名は変更できます。

2. SETUDB2U または SETDB2UE ジョブをサブミットします。

SETUDB2U ジョブは、XIDDB210 ジョブをサブミットします。XIDDB210 ジョブは、PowerExchange DB2 のバルクデータ移動のために DB2 プランと DB2 パッケージをバインドします。このジョブを実行するには、DB2 BINDADD 許可が必要です。

【データソース】 ページの **【DB2 CDC】** オプションを選択した場合、SETUDB2U は XIDDB225 ジョブをサブミットします。XIDDB225 ジョブは、DB2 ECCR の DB2 プランと DB2 パッケージをバインドします。このジョブを実行するには、SYSCTRL 許可が必要です。

SETDB2UE ジョブは SETUDB2U に似た方法で操作します。ただし、SETDB2UE には DB2 バインドを実行するための JCL が含まれます。

3. アップグレード中に DB2 プラン名を変更した場合は、DB2 プランへのアクセスを適切な PowerExchange ユーザーに許可します。

以下の PowerExchange ユーザーアドレススペースでは、DB2 プランへのアクセスが必要です。

- バルクデータ移動の場合、PowerExchange リスナには、XIDDB210 ジョブで指定されたプランに対するアクセス権が必要です。
- CDC の場合、PowerExchange DB2 ECCR には、XIDDB225 ジョブで指定されたプランに対するアクセス権が必要です。

手順 12B：SETUPDB2 ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード

アップグレード中に DB2 for z/OS をデータソースとして追加した場合は、SETUPDB2 ジョブを実行して DB2 データソースのソフトウェアをアップグレードします。

注意: アップグレード中に DB2 をデータソースとして追加した場合にのみ、このプロシージャを実行します。PowerExchange を使用してアップグレード前に DB2 for z/OS のデータを処理していた場合は、代わりに「[手順 12A：SETUDB2U または SETDB2UE ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード](#)」(ページ 128)を実行します。

1. RUNLIB ライブラリで、JOB CARD メンバ内の JOB カードを SETUPDB2 JCL に追加します。

注: ジョブ名は変更できません。

2. SETUPDB2 ジョブをサブミットします。

このジョブは、XIDDB210 ジョブをサブミットします。XIDDB210 ジョブは、DB2 のバルクデータ処理のために DB2 バインドを実行します。このジョブを実行するには、DB2 BINDADD 許可が必要です。

【データソース】 ページの **【DB2 CDC】** オプションを選択した場合、SETUPDB2 は XIDDB220 ジョブもサブミットします。XIDDB220 ジョブは、以下のタスクを実行します。

- PowerExchange for DB2 CDC のキャプチャディレクトリデータベース、テーブルスペース、テーブル、インデックスの作成。
- DB2 ECCR の DB2 バインドを実行する XIDDB225 ジョブのサブミット。このジョブを実行するには、SYSCTRL 許可が必要です。

3. DB2 プランへのアクセスを適切なユーザーに許可します。

以下の PowerExchange アドレススペースでは、PowerExchange for DB2 プランへのアクセスが必要です。

- PowerExchange リスナには、XIDDB210 ジョブで指定されたプランに対するアクセス権が必要です。
- PowerExchange DB2 ECCR には、XIDDB225 ジョブで指定されたプランに対するアクセス権が必要です。

手順 13. IDMS データソースのソフトウェアのアップグレード（オプション）

アップグレード処理中に新しいデータソースとして IDMS を選択した場合は、オプションで XIDIDM10 ジョブをサブミットします。このジョブは、システム IDMS のロードライブラリを、*hlq.IDMS.LOADLIB* および *hlq.IDMS.DBA.LOADLIB* という名前のこれらのライブラリの PowerExchange コピーにコピーします。

DBMOVER コンフィギュレーションファイルの SECURITY 文の最初のパラメータを 1 か 2 に設定した場合は、PowerExchange リスナが APF 許可を実行する必要があります。しかし、IDMS ロードライブラリは通常、APF 許可されていません。この状況に対処するには、以下のいずれかの方法を使用します。

- XIDIDM10 ジョブを実行して IDMS ロードライブラリをコピーしてから、コピーに APF 許可を与えます。次に、これらのライブラリが PowerExchange リスナの STEPLIB DD 文に指定されていることを確認します。
 - z/OS システムの DBMOVER 設定メンバで、PC_AUTH 文を Y に設定します。これにより、PowerExchange は、z/OS Program Call (PC) サービスルーチンを使用して、PowerExchange リスナが必要とする APF 許可を取得するようになります。IDMS ロードライブラリのコピーの保持および APF 許可を必要としない場合には、この方法を使用します。この方法は、セキュリティが有効な場合に推奨されます。
1. RUNLIB ライブラリで、JOB CARD メンバ内の JOB カードを XIDIDM10 JCL に追加します。
 2. XIDIDM10 ジョブをサブミットします。

詳細については、『*PowerExchange バルクデータ移動ガイド*』を参照してください。

手順 14. IMS 同期 CDC データソース用ソフトウェアのアップグレード

現在 IMS 同期 CDC と PowerExchange 提供の CRG.LOAD ライブラリを使用している場合は、IMS 同期 ECCR の DBRC の再設定が必要です。

IMS 同期 CDC の DBRC を設定する方法の詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)*』を参照してください。

段階 IV: アップグレード後の作業

PowerExchange のアップグレード後、開始タスクプロシージャをコピーし、RUNLIB メンバを更新します。その後、PowerExchange へのアクセスを再開します。

手順 15. 開始タスクプロシージャのコピーと RUNLIB メンバの更新

新しいデータセット名を使用してアップグレードした場合は、開始タスクの新規または変更済みプロシージャを PowerExchange アップグレード PROCLIB ライブラリからシステム開始タスク PROCLIB ライブラリにコピーする必要があります。

また、アップグレード PROCLIB ライブラリ内のプロシージャ JCL に含まれるいくつかの DD 文は、DBMOVER や CAPTDB2 などのアップグレード RUNLIB メンバを参照するため、以下の手順を実行してください。

1. 以前のリリースの RUNLIB メンバを確認して、カスタマイズが組み込まれているかどうかを判断します。
2. 以前のリリースのカスタマイズをアップグレード RUNLIB メンバに確実に組み込むには、以下のいずれかのアクションを実行します。
 - アップグレード RUNLIB メンバを編集して、以前のリリースのカスタマイズをすべて組み込みます。
 - アップグレード RUNLIB メンバを以前のリリースのカスタマイズされたメンバに置き換えます。新しいパラメータを追加したり、RUNLIB メンバから廃止されたパラメータを削除したりする際は、『*PowerExchange リリースガイド*』を確認してください。

手順 16. PowerExchange へのアクセスの再開

PowerExchange へのアクセスを再開するには、アップグレードされた PowerExchange 環境でバルクデータ移動および CDC のタスクを開始する必要があります。

1. PowerExchange バルクデータ移動を使用している場合は、以下のタスクを起動します。
 - すべての PowerExchange リスナアドレススペース
 - PowerExchange との間でデータの抽出または書き込みを行うすべての PowerCenter ワークフロー
2. PowerExchange CDC を使用している場合は、以下のタスクを起動します。
 - すべての PowerExchange リスナアドレススペース
 - すべての PowerExchange エージェントアドレススペース
 - すべての PowerExchange ロgger (z/OS 用) のアドレススペース
 - すべての ECCR アドレススペース (CDC が必要な、該当するデータソース用)
 - すべての PowerExchange Condense アドレススペース
 - PowerExchange との間でデータの抽出または書き込みを行うすべての PowerCenter ワークフロー

DB2 ECCR 起動時の考慮事項

DB2 ECCR のウォームスタート、コールドスタート、または特殊スタートを実行します。

次の基準に従って、どのスタートタイプを実行するかを決めてください。

- 「[手順 12A：SETUDB2U または SETDB2UE ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード](#)」 (ページ 128) を実行した場合、DB2 ECCR をウォームスタートします。
- 「[手順 12B：SETUPDB2 ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード](#)」 (ページ 129) を実行した場合、DB2 ECCR をコールドスタートします。
- 次の状況では、DB2 ECCR の特殊スタートを実行します。
 - PowerExchange 8.6.1 HotFix 14 より前のリリースからのアップグレードであり、アップグレード前に PowerExchange を使用して DB2 for z/OS のデータを処理していた場合。
 - DB2 ECCR キャプチャディレクトリテーブル (TCAP*) を不注意で削除してしまい、DB2 ECCR のウォームスタートを実行できない場合。「[手順 12B：SETUPDB2 ジョブの実行による DB2 データソースのソフトウェアのアップグレード](#)」 (ページ 129) を実行すると、これらのテーブルが存在している場合、削除されます。

DB2 ECCR の特殊スタートを実行するには、REPLOPT データセットを編集することによって、「[手順 1。PowerExchange へのアクセスの停止](#)」 (ページ 115) で保存したメッセージ PWXEDM177268I および PWXEDM177021I から、STARTLOC パラメータおよびログの位置と RBA の値を指定します。以下に例を示します。

```
*START WARM
*START COLD
START STARTLOC=00000000047F56A7B2DB USEDIR,USESTAT
```

ECCR の特殊スタートを実行した後は、次のようにしてコントロールカードをリセットしてウォームスタートします。

```
START WARM
*START COLD
*START STARTLOC=00000000047F56A7B2DB USEDIR,USESTAT
```

DB2 ECCR の特殊スタートの実行に関する詳細は、『[z/OS 用 PowerExchange CDC ガイド](#)』を参照してください。

z/OS でアップグレードした後に

z/OS でアップグレードしたら、新機能と変更に関する情報について、PowerExchange の最新のマニュアルを確認してください。

以下のドキュメントを参照してください。

- 新機能および変更内容の概要については、『PowerExchange リリースガイド』を参照してください。
- アップグレード後のタスクと考慮事項については、『PowerExchange インストールおよびアップグレードガイド』を参照してください。
- 以前のリリースからのデータマップの移行、キャプチャ登録、および抽出マップの詳細については、『PowerExchange インストールおよびアップグレードガイド』を参照してください。
- **[新しいデータセット名を使用したアップグレード]** オプションを選択して、他のデータソースを設定した場合、そのデータソースをバルクデータ移動または CDC に使用する前に、PowerExchange を設定する必要があります。

バルクデータ移動を設定する際は、『PowerExchange バルクデータ移動ガイド』を参照してください。

CDC を設定する際は、『PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)』を参照してください。

DBMOVER 構成文の詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。

z/OS へのホットフィックスのインストール

PowerExchange ホットフィックスを適用するには、z/OS Installation Assistant を実行します。

ホットフィックスは既存の PowerExchange バージョン用にする必要があります（例: PowerExchange 9.6.1 の場合は 9.6.1 HotFix 3 など）。このようになっていない場合は、アップグレードを完了して、最新ホットフィックスを含む PowerExchange バージョン用ソフトウェアを取得してください。

ホットフィックスは、既存の PowerExchange 環境にインストールする PowerExchange ソフトウェアのサブセットを提供します。PowerExchange では、ホットフィックスをインストールしても、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップなどの新しいデータライブラリは作成されません。したがって、これらのデータセットの内容を移行する必要があるため、インストール処理が簡単になります。

ホットフィックスを適用する場合、既存の PowerExchange 環境に新しいデータソースを追加することはできません。新しいデータソースを追加するには、フルインストールまたはアップグレードを実行する必要があります。

PowerExchange のホットフィックスは累積的であるため、インストールするのは利用できる最新のホットフィックスだけです。

関連項目：

- [「z/OS へのフルインストールの実行」 \(ページ 91\)](#)

z/OS にホットフィックスをインストールする前に

z/OS に PowerExchange のホットフィックスを適用する前に、ライセンスキーが有効であることを確認します。ライセンスキーは、現在のリリースの InstParm ファイルに含まれています。ホットフィックスのインストールの一部として、ホットフィックス用に作成した一時ディレクトリに InstParm ファイルをコピーします。

また、z/OS Installation Assistant が 64 ビット Windows システムにインストールされていることを確認します。32 ビットシステムで z/OS Installation Assistant を実行しようとするとインストールは失敗します。

z/OS へのホットフィックスインストールのタスクフロー

z/OS 上の PowerExchange にホットフィックスを適用するには、PowerExchange のホットフィックスをインストールし、特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアをアップグレードします。

既存の PowerExchange インストール先にホットフィックスを適用するには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了 チェ ック	タスク	必須またはオプション
	段階 I：PowerExchange のホットフィックスのインストール	必須
	「手順 1. PowerExchange へのアクセスの停止」 (ページ 134)	必須
	「手順 2. ホットフィックス用の BINLIB および RUNLIB ライブラリの割り当て」 (ページ 134)	必須
	「手順 3. HotFix インストールのための z/OS インストールファイルの Windows システムへの解凍」 (ページ 135)	必須
	「手順 4. z/OS Installation Assistant の実行によるホットフィックスの適用」 (ページ 136)	必須
	「手順 5. PRESTLIB ジョブの実行」 (ページ 137)	必須
	「手順 6. 既存のライブラリのバックアップ (オプション)」 (ページ 137)	オプション
	「手順 7. PowerExchange ライブラリの更新」 (ページ 137)	必須
	段階 II：特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアのアップグレード	一部のデータソースでは必須
	「手順 8. DB2 データソースの DB2 プランと DB2 パッケージの再バインド」 (ページ 138)	ホットフィックスに更新された DBRM ライブラリが含まれている場合、DB2 for z/OS データソースでは必須
	「手順 9. IMS データソースのソフトウェアの更新」 (ページ 139)	IMS 同期 CDC および PowerExchange CRG.LOAD ライブラリを使用する場合は必須
	段階 III：ホットフィックスインストール後のタスクの実行	必須
	「手順 10. PowerExchange へのアクセスの再開」 (ページ 139)	必須
	「手順 11. インストールのテスト (推奨)」 (ページ 139)	推奨

段階 I：z/OS へのホットフィックスのインストール

ホットフィックスインストールのこの段階で、z/OS システム上でライブラリを割り当て、Windows システム上で z/OS インストールファイルを解凍し、z/OS Installation Assistant を使用してホットフィックスを z/OS システムにインストールします。

z/OS Installation Assistant の実行後、z/OS システムで他のタスクを実行する必要があります。

手順 1. PowerExchange へのアクセスの停止

ホットフィックスを適用する前に、一部の PowerExchange および PowerCenter のタスクを停止する必要があります。

1. PowerExchange バルクデータ移動のみを使用している場合は、以下のタスクを停止してください。
 - PowerExchange との間でデータの抽出または書き込みを行うすべての PowerCenter ワークフロー
 - すべての PowerExchange リスナアドレススペース
2. PowerExchange CDC を使用している場合は、以下のタスクを停止してください。
 - PowerExchange との間でデータの抽出または書き込みを行うすべての PowerCenter ワークフロー
 - すべての PowerExchange リスナアドレススペース
 - すべての ECCR アドレススペース
 - すべての PowerExchange Condense アドレススペース
 - すべての PowerExchange ロgger (z/OS 用) のアドレススペース
 - すべての PowerExchange エージェントアドレススペース

注: PowerExchange ライブラリをすぐには更新しない計画の場合、手順 6 および 7 で PowerExchange ライブラリのバックアップをとり更新する直前この手順は延期できます。

手順 2. ホットフィックス用の BINLIB および RUNLIB ライブラリの割り当て

z/OS システムでは、PowerExchange ホットフィックスのファイルを受け取る BINLIB および RUNLIB ライブラリを割り当てる必要があります。

これらのライブラリには、初めてのインストールまたは前回のアップグレードで割り当てたライブラリと同じ属性が必要です。ただし、完全修飾されたライブラリ名は、以前のライブラリのものとは異なっている必要があります。

割り当てるライブラリには、BINLIB および RUNLIB の定義済みの PDS 名が必要です。既存の PowerExchange 環境の高位修飾子 (HLQ) と異なる HLQ を使用してください。

- ▶ z/OS システム上で、次のいずれかの方法で、BINLIB ライブラリと RUNLIB ライブラリを割り当てます。
 - ISPF Option 3.2 を使用する。
 - 次のサンプルに示すような、RUNLIB ライブラリ割り当て用 JCL を使用する。

```
//ALLOC      EXEC PGM=IEFBRI4
//DS1 DD DSN=&HLQ..RUNLIB,
//          DISP=(NEW,CATLG,DELETE),SPACE=(CYL,(20,10,50),RLSE),
//          DCB=(BLKSIZE=nn,RECFM=FB,LRECL=80,DSORG=PS),
//          VOL=SER=volume_serial_number
```

使用する HLQ はメモしておいてください。z/OS Installation Assistant の【ホットフィックスデータセット】グループ (【データセットグループの詳細】ページ) で、この値を HLQ 値として入力する必要があります。

以下の表に、3390 DASD 上の BINLIB ライブラリおよび RUNLIB ライブラリの割り当てに使用するパラメータを示します。

ライブラリ	説明	領域単位 (3390)	領域量 (プライマリ、セカンダリ)	ディレクトリ ブロック	DCB 特性
BINLIB	TSO/E 送信形式のソフトウェアライブラリを含む PDS。	CYLS	(160, 10)	10	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE (任意の有効値を指定可能。LRECL 値の倍数を指定することが多い)
RUNLIB	PowerExchange をインストールするジョブ、PowerExchange を設定および実行するジョブ、設定データを含む PDS。 AAINDEX メンバは、RUNLIB 内の各メンバを記述します。	CYLS	(10,1)	50	RECFM FB LRECL 80 BLKSIZE (任意の有効値を指定可能。LRECL 値の倍数を指定することが多い)

注: ホットフィックスインストールでは、他に以下のライブラリも割り当てられる場合があります。

- DBRMLIB、DTLMSG、LOADLIB、および SRCLIB ライブラリ
- CRG.LOAD、LOAD、および SAMPLIB ライブラリ

手順 3.HotFix インストールのための z/OS インストールファイルの Windows システムへの解凍

PowerExchange for z/OS は、自己解凍式実行可能ファイルとして出荷されます。このファイルを Windows システム上の一時ディレクトリに解凍します。

1. Windows のコマンドプロンプトから、ホットフィックスインストールファイルの解凍先となる一時ディレクトリを作成します。例えば、pwx_mvsn_hotfix という名前の一時ディレクトリを作成するには、以下のコマンドを実行します。

```
mkdir pwx_mvsn_hotfix
```

2. PowerExchange が CD イメージの patches/mvsn ディレクトリにホットフィックスとして用意している zip 形式の自己解凍型実行可能ファイルに移動します。次に、この zip ファイルをダブルクリックします。

zip ファイル名のフォーマットは以下のとおりです。

```
pwxvrm_hotfixn_zos.exe
```

vrm 変数は、*version.release.modification* 番号、*n* はホットフィックス番号です。特定のファイル名については、PowerExchange ホットフィックスの『PowerExchange リリースノート』を参照してください

[WinZip Self-Extractor] ダイアログボックスが表示されます。

3. **[WinZip Self-Extractor]** ダイアログボックスで、**[参照]** をクリックします。
4. **[フォルダの参照]** ダイアログボックスで、作成した一時ディレクトリを特定します。次に、**[OK]** をクリックします。
5. **[WinZip Self-Extractor]** ダイアログボックスで、**[解凍]** をクリックします。

WinZip Self-Extractor により、いくつかのファイルがルートディレクトリに配置され、ファイルも含む pbinary および prunlib サブディレクトリが作成されます。ファイルが正常に解凍されたことを示すメッセージボックスが表示されます。

6. メッセージボックスで、**[OK]** をクリックします。
7. **[WinZip Self-Extractor]** ダイアログボックスで、**[閉じる]** をクリックします。
8. InstParm ファイルを Windows 上の現在の製品インストールディレクトリから、ホットフィックス用に作成した一時ディレクトリにコピーします。InstParm ファイルに、カスタマイズされた設定が格納されます。

手順 4.z/OS Installation Assistant の実行によるホットフィックスの適用

ホットフィックスを適用すると、z/OS Installation Assistant によって、変更済みソフトウェアライブラリのバイナリファイルがホットフィックスの BINLIB ライブラリに転送され、新規および変更済み RUNLIB メンバがホットフィックスの RUNLIB ライブラリに転送されます。

z/OS Installation Assistant の任意のページで、**[保存]** をクリックすると、入力内容を InstParm ファイルに保存できます。

重要: 64 ビット Windows システム上で z/OS Installation Assistant を実行する必要があります。32 ビットシステム上でウィザードを実行しようとすると、インストールは失敗します。

注: 後でアップグレードを実行したり、ホットフィックスを適用する際に使用できるように、z/OS Installation Assistant によって作成された InstParm ファイルを Windows 上に保持しておいてください。

1. pwx_mvs_hotfix ディレクトリで、**MVS_Install.exe** を右クリックして **[管理者として実行]** を選択します。
z/OS Installation Assistant が開始されます。
2. **[ホットフィックスインストール]** を選択し、**[次へ]** をクリックします。
[ホットフィックスインストール] ページが表示されます。詳細については、[「\[ホットフィックスインストール\] ページ」 \(ページ 175\)](#)を参照してください。
3. **[次へ]** をクリックします。
[グローバルパラメータ] ページが表示されます
4. グローバルパラメータを確認します。
詳細については、[「\[グローバルパラメータ\] ページ \(ホットフィックス\)」 \(ページ 175\)](#)を参照してください。
[データセットグループの詳細] ページが表示されます。
5. ホットフィックス用の高位修飾子 (HLQ) を入力します。
詳細については、[「\[データセットグループの詳細\] ページ \(ホットフィックス\)」 \(ページ 176\)](#)を参照してください。
[Runlib JCL の作成] ページが表示されます。
6. ホットフィックスの RUNLIB および BINLIB ライブラリに関する情報を入力します。これらのデータセット名が、現在の PowerExchange 環境のデータセット名と一致していないことを確認してください。詳細については、[「\[Runlib JCL の作成\] ページ」 \(ページ 164\)](#)を参照してください。
[次へ] をクリックします。
[メインフレームへのファイルの転送] ページが表示されます。また、z/OS Installation Assistant によって、PXRunlib フォルダも作成されます。このフォルダには prunlib フォルダのファイル (z/OS Installation Assistant で入力した値でカスタマイズされたもの) が格納されます。
7. **[メインフレームへのファイルの転送]** ページで、ファイルの転送先の z/OS システムに関する情報を入力します。

詳細については、[「\[メインフレームへのファイルの転送\] ページ」 \(ページ 165\)](#)を参照してください。

[次へ] をクリックします。

[ファイル転送ステータスの表示] ページに、ファイル転送操作のステータスが表示されます。

8. ファイル転送が完了したら、[OK] をクリックします。

9. [完了] をクリックします。

注: インストール処理で入力した内容は、Windows のルートインストールディレクトリに InstParm ファイルとして保存されます (まだ保存されていない場合)。また、対応する INPARM nn ファイルが Windows の XRunlib ディレクトリに作成され、FTP で z/OS 上の RUNLIB ライブラリに転送されます。RUNLIB ライブラリ内の INPARM nn メンバのうち、最大の nn 値を持つメンバが、このメンバの最新バージョンです。

z/OS Installation Assistant の実行後、z/OS システム上で少なくとも PRESTLIB ジョブを手動でサブミットする必要があります。

手順 5. PRESTLIB ジョブの実行

z/OS システム上で、PRESTLIB ジョブをサブミットして、ホットフィックス RUNLIB ライブラリからホットフィックスライブラリにホットフィックスをインストールします。

1. ホットフィックス RUNLIB ライブラリ内の PRESTLIB メンバに JOB カードを追加します。
2. PRESTLIB ジョブに必要な変更を加えます。スペース割り当てパラメータを確認して、それらが十分であるかどうかを判断します。
3. PRESTLIB ジョブをサブミットします。

手順 6. 既存のライブラリのバックアップ (オプション)

必要に応じて、現在の PowerExchange 環境の既存ライブラリをバックアップします。

► 以下のライブラリをバックアップします。

- CRG.LOAD
- DBRMLIB
- DTLMSG
- LOAD
- LOADLIB
- RUNLIB
- SAMPLIB
- SRCLIB

手順 7. PowerExchange ライブラリの更新

ホットフィックスの変更を実装するには、ホットフィックスライブラリの内容を現在の PowerExchange 環境のライブラリにコピーする必要があります。

ホットフィックスライブラリには、新規または変更されたメンバのみが含まれている場合と、すべてのメンバが含まれている場合があります。

ホットフィックスライブラリはすべてパーティション化データセット (PDS) ですが、DTLMSG のみはシーケンシャルデータセットです。

JCL で、PowerExchange エージェント、PowerExchange ログガー（z/OS 用）、および ECCR のライブラリを連結することもできます。

- ▶ 次のいずれかの方法を使用して、PDS およびシーケンシャルデータセットをコピーします。
 - PDS とシーケンシャルデータセットをコピーするには、ISPF Option 3.3 を使用します。
 - PDS をコピーするには、IBM IEBCOPY ユーティリティを使用します。
以下の例の JCL 文は、IEBCOPY ユーティリティを実行して 1 つのライブラリを別のライブラリにコピーしています。

```
//COPY      EXEC PGM=IEBCOPY
//SYSPRINT DD SYSOUT=*
//INDD1     DD DISP=SHR,DSN=hlq.hf.LOAD          HotFix LOAD
//OUTDD1    DD DISP=SHR,DSN=hlq.LOAD              Current Execution LOAD
//SYSIN     DD *
COPY INDD=((INDD1,R)),OUTDD=OUTDD1
/*
```

この例で、*hlq_hf* 変数はホットフィックスライブラリ用に指定した HLQ で、*hlq* 変数は現在の PowerExchange 環境の HLQ です。

- シーケンシャルデータセットをコピーするには、IBM IEBGENER ユーティリティを使用します。
以下の例の JCL 文は、IEBGENER ユーティリティを実行して 1 つシーケンシャルデータセットを別のライブラリにコピーしています。

```
//IEBGENER EXEC PGM=IEBGENER
//SYSPRINT DD SYSOUT=*
//SYSUT1   DD DISP=OLD,DSN=hlq_hf.DTLMSG        HotFix DTLMSG
//SYSUT2   DD disp=OLD,DSN=hlq.DTLMSG           Current Execution DTLMSG
//SYSIN    DD DUMMY
/*
```

段階 II：特定のデータソースの PowerExchange ソフトウェアの更新

DB2 for z/OS または IMS 同期 CDC データソースを選択した場合は、ホットフィックスインストールのこの段階で PowerExchange ソフトウェアをアップグレードする必要があります。

該当しない場合は、[「段階 III：ホットフィックスインストール後の作業」](#)（ページ 139）に進んでください。

手順 8。DB2 データソースの DB2 プランと DB2 パッケージの再バインド

ホットフィックスに更新された DBRM ライブラリが含まれている場合は、PowerExchange 関数の DB2 プランと DB2 パッケージの一部またはすべてを再バインドする必要があります。

ホットフィックスに DBRMXMIT ファイルが含まれている場合は、XIDDB210 ジョブを使用して、バルクデータ移動の DB2 プランと DB2 パッケージを再バインドします。ホットフィックスに DBRM ファイルが含まれていて、z/OS Installation Assistant の **【データソース】** ページで **【DB2 CDC】** オプションを選択した場合は、XIDDB225 ジョブを使用して DB2 ECCR の DB2 プランと DB2 パッケージを再バインドします。ホットフィックスに DBRMXMIT ファイルも DBRM ファイルも含まれていない場合は、DB2 プランと DB2 パッケージを再バインドしないでください。

1. 必要に応じて、XIDDB210 ジョブ、XIDDB225 ジョブ、またはその両方を編集します。ジョブカードを追加し、DBRMLIB 連結の DBRM ライブラリ（1 つまたは複数）のホットフィックスバージョンを指定します。
2. ジョブ（1 つまたは複数）をサブミットします。

XIDDB210 ジョブを実行するには、DB2 BINDADD 許可が必要です。XIDDB225 ジョブを実行するには、SYSCtrl 許可が必要です。

手順 9。IMS データソースのソフトウェアの更新

IMS 同期 CDC と PowerExchange 提供の CRG.LOAD ライブラリを使用している場合は、IMS 同期 ECCR の DBRC の再設定が必要です。

IMS 同期 CDC の DBRC を設定する方法の詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)*』を参照してください。

段階 III：ホットフィックスインストール後の作業

PowerExchange にホットフィックスをインストールした後、PowerExchange へのアクセスを再開し、ホットフィックスのインストールをテストする必要があります。

手順 10。PowerExchange へのアクセスの再開

PowerExchange へのアクセスを再開するには、ホットフィックスが適用された PowerExchange 環境で、PowerExchange および PowerCenter のバルクデータ移動用および CDC 用のタスクを開始します。

1. PowerExchange バルクデータ移動のみを使用している場合は、以下のタスクを起動します。
 - すべての PowerExchange リスナアドレススペース
 - PowerExchange との間でデータの抽出または書き込みを行うすべての PowerCenter ワークフロー
2. PowerExchange CDC を使用している場合は、以下のタスクを起動します。
 - すべての PowerExchange リスナアドレススペース
 - すべての PowerExchange エージェントアドレススペース
 - すべての PowerExchange ロgger (z/OS 用) のアドレススペース
 - すべての ECCR アドレススペース (CDC が必要な、該当するデータソース用)
 - すべての PowerExchange Condense アドレススペース
 - PowerExchange との間でデータの抽出または書き込みを行うすべての PowerCenter ワークフロー

手順 11. インストールのテスト (推奨)

z/OS に PowerExchange をインストールした後、インストールをテストします。

- ▶ PowerExchange のバージョンがインストールされたホットフィックスのレベルに一致することを確認するには、RUNLIB ライブラリで DTLINFO ジョブを実行します。

z/OS Installation Assistant リファレンス

z/OS 上で PowerExchange のフルインストール、アップグレード、またはホットフィックスインストールを実行するには、z/OS Installation Assistant ウィザードを使用します。このリファレンスでは、ウィザードの各ページについて説明します。

z/OS Installation Assistant を実行したときに表示されるウィザードのページおよびそれらのページで使用可能なフィールドは、インストールタイプ、ソースタイプ、および CDC を使用しているかどうかによって異なります。

z/OS Installation Assistant は、ユーザーの入力した内容に応じて、z/OS システムのインストールディレクトリにある InstParm ファイルを更新し、対応する INPARM nn ファイルを Windows システムの XRunlib ディレ

クトリに作成します。このリファレンスでは、ウィザードの入力フィールドに対応する INSTPARM ファイルの変数を明示しています（対応する変数がある場合）。

注: インストールの設定を変更する際には、入力ミスが起きないように、INSTPARM ファイルを直接編集することは避け、z/OS Installation Assistant を使用することをお勧めします。z/OS Installation Assistant を使用すると、大半の入力値が検証されます。また、入力内容に応じて一部の INSTPARM 変数値も生成されます。

[PowerExchange z/OS Installation Assistant へようこそ] ページ

実行するインストールのタイプを選択します。フルインストール、アップグレード、またはホットフィックスインストールを実行できます。

次のいずれかのオプションをクリックします。

- **フルインストール。** 現在 PowerExchange がインストールされていない場合は、このオプションを選択してフルインストールを実行します。
- **新しいリリースへのアップグレード。** PowerExchange の旧バージョンがインストールされている場合は、このオプションを選択してアップグレードインストールを実行します。
- **ホットフィックスインストール。** 最新の PowerExchange *version.release.modification* レベルがインストールされている場合に、最新のバグフィックスを適用する場合は、このオプションを選択してホットフィックスインストールを実行します。

この設定は、INSTPARM ファイルの<installtype>変数に対応しています。有効な変数値は、フルインストールの場合は 1、アップグレードの場合は 2、ホットフィックスインストールの場合は 3 です。

[次へ] をクリックして続行します。

[フルインストール] ページ

次のような状況では、フルインストールを実行します。

- PowerExchange を z/OS に初めてインストールするか、または別の場所にインストールする
- 既存のインストールを更新して、CDC ソフトウェアを追加する

[次へ] をクリックして続行します。

[グローバルパラメータ] ページの選択（フルインストール）

インストールのタイプに基づき、グローバルパラメータを入力と確認を行います。

このページの [デフォルト値] 領域に入力するデフォルト値に基づいて、z/OS Installation Assistant は [データセットグループの詳細] ページの各データセットグループのデフォルト値を設定します。

ログオン ID

z/OS システムへの接続を有効にする z/OS のユーザー ID。

この設定は、INSTPARM ファイルの<loginid>変数に対応します。

PowerExchange エージェント/ロッガーのプレフィックス

アップグレードまたはホットフィックスインストールでの読み取り専用。PowerExchange エージェントおよび PowerExchange ロggerのベースプレフィックス。

長さが 1 から 3 文字の英数字を入力します。デフォルトは、PWX です。

z/OS Installation Assistant により、次の文字がこのプレフィックスに付加されます。

- **A。** PowerExchange エージェントの場合。

- **L**。PowerExchange ロggerの場合。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zalpref>変数に対応します。

HLQ

PowerExchange データセットのデフォルトの高位修飾子 (HLQ)。

必要に応じて修飾子レベルをいくつでも使用できます。例えば、以下は有効な HLQ です。

- PWX.SYSTEMA.PROD
- SYS3.SYSA.PWX.TEST.A1

デフォルトは、PWX です。

最大長はピリオドを含めて 26 文字です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dfthlq>変数に対応します。

ストレージクラス

SMS のみ。PowerExchange データセットのデフォルトの SMS ストレージクラス。

SMS ストレージクラスを指定した場合、ボリュームまたは単位の値を指定する必要はありません。

注: インストール済み環境の SMS 自動クラス選択 (ACS) ルーチンでは、SMS クラスの指定が無効であったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dfthsmssc>変数に対応します。

ボリューム

PowerExchange ライブラリをインストールする z/OS システム上の DASD ボリュームシリアル番号 (VOLSER)。

デフォルトは VOLSER です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dfthvol>変数に対応します。

管理クラス

SMS のみ。PowerExchange データセットのデフォルトの SMS 管理クラス。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dfthmsmc>変数に対応します。

単位

PowerExchange をインストールする z/OS システム上の汎用または非公式の単位名。

デフォルトは 3390 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dfthunit>変数に対応します。

データクラス

SMS のみ。PowerExchange データセットのデフォルトの SMS データクラス。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dfthmsdc>変数に対応します。

ライセンスキー

インストール用のライセンスキー。

この設定は、INSTPARM ファイルの<license>変数に対応します。

データセットグループの詳細ページの選択

データセットグループの情報を入力または確認します。

データセットグループ

プロパティを表示または変更するデータセットグループを選択します。グループに対して選択するプロパティにより、**[グローバルパラメータの選択]** ウィンドウのデフォルト値が上書きされます。次のいずれかのグループを選択します。

- **ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)**。RUNLIB、BINLIB、SAMPLIB、および DTLDEMO が含まれます。
- **読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB**。LOAD、LOADLIB、DBRM、および DBRMLIB が含まれます。
- **VSAM ファイル**。アーカイブデータセット以外の VSAM ファイルが含まれます。
- **アーカイブデータセット**。PowerExchange のアーカイブログデータセット PRILOG.DS01、PRILOG.DS02、PRILOG.DS03、SECLOG.DS01、SECLOG.DS02、および SECLOG.DS03 が含まれます。
- **ログファイル**。LOG および CDCLOG データセットが含まれます。
- **Condense データセット**。PowerExchange Condense データセットが含まれます。

HLQ

選択したデータセットグループに使用する高位修飾子 (HLQ)。

以下の表に、各グループのデフォルト HLQ を示します。

データセットグループ	Default HLQ	最大長
ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)	PWX	26
読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB	PWX	26
VSAM ファイル	PWX.V1	23
アーカイブデータセット	PWX.V2	17
ログファイル	PWX	26

最大長の値にはピリオドが含まれます。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **[ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)]** を選択した場合、この設定は<libname>変数に対応します。
- **[読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB]** を選択した場合、この設定は<libnameloadlib>変数に対応します。
- **[VSAM ファイル]** を選択した場合、この設定は<libnamevsm>変数に対応します。
- **[アーカイブデータセット]** を選択した場合、この設定は<libnamearc>変数に対応します。
- **[ログファイル]** を選択した場合、この設定は<libnamelogfiles>変数に対応します。

Condense データセットの場合、このフィールドは表示されません。

ストレージクラス

SMS のみ。データセットグループの SMS ストレージクラス。

SMS ストレージクラスを指定した場合、ボリュームまたは単位の値を指定する必要はありません。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)】** を選択した場合、この設定は<znonvssc>変数に対応します。
- **【読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB】** を選択した場合、この設定は<zloadstcl>変数に対応します。
- **【VSAM ファイル】** を選択した場合、この設定は<zvsamstcl>変数に対応します。
- **【アーカイブデータセット】** を選択した場合、この設定は<zarchstcl>変数に対応します。
- **【ログファイル】** を選択した場合、この設定は<zlogfilesstcl>変数に対応します。

Condense データセットの場合、このフィールドは表示されません。

ボリューム

データセットをインストールする z/OS システム上の DASD ボリュームシリアル番号 (VOLSER)。

Condense データセットでは、このパラメータは PowerExchange Condense コンフィギュレーションファイルの CONDF_VOL パラメータにマップされます。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)】** を選択した場合、この設定は<valid>変数に対応します。
- **【読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB】** を選択した場合、この設定は<volload>変数に対応します。
- **【VSAM ファイル】** を選択した場合、この設定は<validvsm>変数に対応します。
- **【ログファイル】** を選択した場合、この設定は<vollogfiles>変数に対応します。
- **【Condense データセット】** を選択した場合、この設定は<condfvol>変数に対応します。

アーカイブデータセットの場合、このフィールドは読み取り専用です。

管理クラス

SMS のみ。データセットグループの SMS 管理クラス。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)】** を選択した場合、この設定は<znonvsmc>変数に対応します。
- **【読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB】** を選択した場合、この設定は<zloadmgcl>変数に対応します。

- **[VSAM ファイル]** を選択した場合、この設定は<zvsammgcl>変数に対応します。
- **[アーカイブデータセット]** を選択した場合、この設定は<zarchmgcl>変数に対応します。
- **[ログファイル]** を選択した場合、この設定は<zlogfilesmgcl>変数に対応します。

Condense データセットの場合、このフィールドは表示されません。

単位

データセットをインストールする z/OS システム上の汎用または非公式の単位名。

デフォルトは 3390（必要な場合）

アーカイブデータセットでは、このパラメータはアーカイブログGINGを制御する PowerExchange ロガーの EDMUPARM パラメータです。Informatica では、アーカイブログデータセットの書き込みに DASD を使用することをお勧めします。詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)*』を参照してください。

Condense データセットでは、このパラメータは PowerExchange Condense コンフィギュレーションファイルの CONDF_UNIT パラメータにマップされます。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **[ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)]** を選択した場合、この設定は<unit>変数に対応します。
- **[読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB]** を選択した場合、この設定は<unitload>変数に対応します。
- **[アーカイブデータセット]** を選択した場合、この設定は<unitarc>変数に対応します。
- **[ログファイル]** を選択した場合、この設定は<unitlogfiles>変数に対応します。
- **[Condense データセット]** を選択した場合、この設定は<condfunit>変数に対応します。

VSAM ファイルの場合、このフィールドは読み取り専用です。

データクラス

SMS のみ。データセットグループの SMS データクラス。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

PowerExchange Condense コンフィギュレーションファイルの CHKPT_VOLSERS パラメータにマップされます。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **[ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)]** を選択した場合、この設定は<znonvsdc>変数に対応します。
- **[読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB]** を選択した場合、この設定は<zloaddtcl>変数に対応します。
- **[VSAM ファイル]** を選択した場合、この設定は<zvsamdtcl>変数に対応します。
- **[アーカイブデータセット]** を選択した場合、この設定は<zarchdtcl>変数に対応します。
- **[ログファイル]** を選択した場合、この設定は<zlogfilesdtcl>変数に対応します。

Condense データセットの場合、このフィールドは表示されません。

チェックポイントボリューム

[Condense データセット] グループを選択した場合は、チェックポイントデータセットのボリュームシリアル番号 (VOLSER) を入力します。

これらの設定は、INSTPARM ファイルの<chkptvol1>変数、<chkptvol2>変数、<chkptvol3>変数に対応します。

[全般的なパラメータ] ページ

全般的なパラメータの入力または確認を行います。

LE 実行時ライブラリ

LE 実行時ライブラリのデータセット名。

デフォルトは SYS1.SCEERUN です。

アップグレードまたはホットフィックスインストールでは、このフィールドは読み取り専用です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<sceerunlib>変数に対応します。

インストールメンバの削除

XIZZZ999 ジョブを実行するには、このチェックボックスを選択します。このジョブは、XIZZZ998 ジョブが RUNLIB ライブラリから他のライブラリに移動したメンバを削除します。

これらのメンバを RUNLIB ライブラリに保持するには、このチェックボックスをオフにします。このチェックボックスはデフォルトでオフです。

アップグレードまたはホットフィックスインストールでは、このフィールドは読み取り専用です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<delinst>変数に対応します。

自動サブミットをオン

初期ジョブをサブミットした後、PowerExchange インストールジョブを自動的にサブミットするには、このチェックボックスをオンにします。

このチェックボックスをオンにする場合は、[「手順 4. RUNLIB ライブラリの JOBCARD メンバの編集」\(ページ 106\)](#)で設定する JOB カードで TYPRUN=HOLD も指定します。すべてのジョブは戻りコード 4 未満で終了する必要があります。

インストールジョブを手動でサブミットする場合は、このチェックボックスをオフにします。ジョブが正しいシステムで正しい順序で実行されていることを確認できるように、インストールジョブを手動でサブミットすることをお勧めします。

デフォルトでは、このチェックボックスはオフです。

警告: PowerExchange for DB2 または PowerExchange CDC をインストールしている場合は、このチェックボックスをオンにしないでください。PowerExchange のインストール中に、DB2 プランをバインドするジョブを実行する必要があります。該当する DB2 許可がない場合、BIND ジョブは失敗します。PowerExchange CDC コンポーネントのインストールでは、各種インストールジョブの実行の間に手動による入力が必要です。

注: [JES3 インストール] チェックボックスをオンにすると、[自動サブミットをオン] チェックボックスはクリアされ、使用不可になります。

アップグレードまたはホットフィックスインストールでは、このフィールドは読み取り専用です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<qikinst>変数に対応します。

ライトインストール

PowerExchange ライブラリのサブセットをインストールするには、このチェックボックスをオンにします。

このチェックボックスをオンにすると、次のライブラリはインストールされません（特定のオプションを選択した場合を除く）。

ライブラリ	説明	注意事項
CRG.LOAD	IMS 同期 CDC のロードモジュールを含むロードライブラリ	IMS 同期 CDC を選択した場合にのみインストールされます
DATAxMIT	デモンストレーションデータ	インストールされていません
DBRM	DB2 CDC 用の DB2 DBRM モジュールを含む一時ロードライブラリ	DB2 CDC を選択した場合にのみインストールされます
DBRMLIB	バルクおよび CDC 用の PowerExchange DB2 DBRM を含む PDS	DB2 を選択した場合にのみインストールされます

デフォルトでは、このチェックボックスはオフです。

注: [JES3 インストール] チェックボックスをオンにすると、**[ライトインストール]** チェックボックスはクリアされ、使用不可になります。

この設定は、INSTPARM ファイルの<liteinstall>変数に対応します。<exclcrgl>、<excldataxmit>、<exclldb2>、<exclcrglx>、<excldataxmitx>、<exclldb2x>、<adassor>、<adawork>、<adadatasto>の各変数にも値が設定されます。

リスナポートの変更

PowerExchange リスナにより、デフォルトポート以外のポートで待ち受けを行う場合は、このチェックボックスをオンにしてポート番号を入力します。

デフォルトでは、このチェックボックスはオフになっており、ポート番号 2480 が使用されます。

アップグレードまたはホットフィックスインストールでは、このフィールドは読み取り専用です。

このポート番号は、INSTPARM ファイルの<port>変数に対応します。

テープの使用/GDG Netport

Netport ジョブを使用して、テープまたは生成データセット（GDG）を処理する計画である場合は、このチェックボックスをオンにして、これらの Netport ジョブが待ち受けを行うポート番号を入力します。Netport ジョブは、テープストレージや IMS タスクなどの長時間実行されるタスクと一緒に使用することがよくあります。

デフォルトでは、このチェックボックスはオンになっており、ポート番号 32480 が使用されます。

注: 複数の Netport ジョブを指定するには、RUNLIB ライブラリの DBMOVER コンフィギュレーションメンバを手動で編集します。

アップグレードまたはホットフィックスインストールでは、このフィールドは読み取り専用です。

このポート番号は、INSTPARM ファイルの<netport>変数に対応します。

CDC Netport の使用

Netport ジョブを CDC ソースに使用する計画である場合は、このチェックボックスをオンにして、これらの CDC Netport ジョブが待ち受けを行うポート番号を入力します。Netport ジョブは、テープストレージや IMS タスクなどの長時間実行されるタスクと一緒に使用することがよくあります。

デフォルトでは、このチェックボックスはオンになっており、ポート番号 22480 が使用されます。
アップグレードまたはホットフィックスインストールでは、このフィールドは読み取り専用です。
このポート番号は、INSTPARM ファイルの<cdcport>変数に対応します。

ICU

International Components for Unicode (ICU) カスタムコンバータを生成するには、このチェックボックスをオンにします。

デフォルトでは、このチェックボックスはオフになっており、ICU カスタムコンバータは生成されません。
アップグレードまたはホットフィックスインストールでは、このフィールドは読み取り専用です。
この設定は、INSTPARM ファイルの<uss>変数に対応します。

tar ファイルプログラムをアンパックする USS ディレクトリ

ICU インストールの tar ファイルをコピーおよびアンパックする対象 USS ディレクトリ。このフィールドを使用可能にするには、**[ICU]** チェックボックスをオンにする必要があります。

アップグレードまたはホットフィックスインストールでは、このフィールドは読み取り専用です。
この設定は、INSTPARM ファイルの<ussunpackdir>変数に対応します。

ICU CNV ファイルを配置する USS ディレクトリ (DTLCFG ICUDATADIR パラメータ)

ICU CNV ファイルを配置する USS ディレクトリ。このフィールドを使用可能にするには、**[ICU]** チェックボックスをオンにする必要があります。

このディレクトリを指定する場合は、PowerExchange DBMOVER 構成ファイルで ICUDATADIR 文の定義も行います。

アップグレードまたはホットフィックスインストールでは、このフィールドは読み取り専用です。
この設定は、INSTPARM ファイルの<ussicudatadir>変数に対応します。

JES3 インストール

JES3 環境で PowerExchange をインストールする JCL をカスタマイズするには、このチェックボックスをオンにします。このチェックボックスをオンにすると、**[自動サブミットをオン]** オプションと **[ライトインストール]** オプションは使用不可になります。

デフォルトでは、このチェックボックスはオフです。

この設定は、INSTPARM ファイルの<jes3inst>変数に対応します。値を 0 にするとオフになり、1 にするとオンになります。

詳細パラメータ

詳細パラメータを定義できます。

詳細パラメータ値を変更するには、以下の手順を実行します。

1. **[値]** カラムで、パラメータのセルをクリックします。

ヒント: パラメータをソートするには、カラムヘッダをクリックします。例えば、パラメータ名でソートするには、**[パラメータ名]** ヘッダをクリックします。

2. パラメータ値を入力し、**[OK]** をクリックします。

注: 詳細パラメータを定義した場合、**[デフォルトの復元]** ボタンを使用して詳細パラメータをデフォルト値に戻すことはできません。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[データソース] ページ

バルクデータ移動操作と CDC 操作に使用するデータソースを選択または確認します。

CDC データソースを選択するには、まず対応するバルクデータ移動のデータソースを左のカラムから選択します。そうすることで CDC データソースは選択できるようになります。

選択内容により、z/OS Installation Assistant でこの後に表示されるページが決まります。

注: 既存のデータセット名を使用するアップグレードおよびホットフィックスインストールでは、これらのフィールドは読み取り専用です。

以下の表に、このページのオプションを示します。

オプション	説明
Adabas	Adabas ファイルをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<adaexec>変数に対応します。
Adabas CDC	Adabas ファイルを CDC のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<adacdc>変数に対応します。
DB2	DB2 for z/OS テーブルをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<db2exec>変数に対応します。
DB2 CDC	DB2 for z/OS テーブルを CDC のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<cdcdb2>変数に対応します。
Datcom	CA Datcom テーブルをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomexec>変数に対応します。
Datcom テーブルベース CDC	CA Datcom テーブルをテーブルベースの CDC のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomtblbasedcdc>変数に対応します。
IDMS	CA IDMS データベースをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<idmsexec>変数に対応します。
IDMS CDC	CA IDMS データベースをログベースの CDC のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<idmscdc>変数に対応します。
IMS	IMS データベースをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<imsexec>変数に対応します。
IMS ログベースの CDC	IMS データベースをログベースの CDC のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<cdcims>変数に対応します。
IMS 同期 CDC	IMS データベースを同期 CDC のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<cdcimssync>変数に対応します。
VSAM	VSAM データセットをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<vsmexec>変数に対応します。

オプション	説明
バッチ CDC	VSAM データセットをバッチ CDC のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<vsambcdc>変数に対応します。
CICS CDC	VSAM データセットを CICS/VSAM CDC のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<vsamccdc>変数に対応します。
MQ Series へのアクセス	MQ Series メッセージキューをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。 この設定は、INSTPARM ファイルの<mqexec>変数に対応します。

[CDC 共通パラメータ] ページ

CDC 操作に使用する共通パラメータに関する情報を入力または確認します。

Logger ID

PowerExchange ロgger ID の値。

この値は、以下の規則に準拠している必要があります。

- 1～4 文字の長さの文字を指定する
- 英字、#、@、\$のいずれかで始める
- 英数字および#、@、\$の文字のみ含める

デフォルトは PWXL です。

Logger ID の値は、PowerExchange ロggerの EDMUPARM オプションモジュールの LOGGER_NAME パラメータおよび PowerExchange エージェントの EDMSDIR オプションモジュールの LOGGER パラメータにもマップされます。これらのパラメータの詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)*』を参照してください。

このフィールドは、新しいデータセット名を使用するアップグレードのみで読み取られます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zlogger>変数に対応します。

ロgger開始タスク ID

PowerExchange ロgger開始タスクの名前。Logger ID の値と同じであっても異なってもかまいません。

デフォルトは PWXL です。

このフィールドは、新しいデータセット名を使用するアップグレードのみで読み取られます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zllgname>変数に対応します。

エージェント名

PowerExchange エージェント ID の値。

この値は、以下の規則に準拠している必要があります。

- 4 文字の長さ。
- 英字または#、@、\$のいずれかの文字で開始する
- 英数字および#、@、\$の文字のみ含める
- 既存の z/OS サブシステム名と異なっている

各 PowerExchange エージェントが別個の z/OS システムで実行される限りは、複数の PowerExchange エージェントに対して同じエージェント ID 値を使用できます。

デフォルトは PWXA です。

エージェント名の値は、PowerExchange エージェントの AGENTCTL メンバ内の AgentID オプションおよび EDMSDIR オプションモジュール内の AGENTID パラメータにもマップされます。これらのパラメータの詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)*』を参照してください。

このフィールドは、新しいデータセット名を使用するアップグレードのみで読み取られます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zagent>変数に対応します。

エージェント開始タスク ID

PowerExchange エージェント開始タスクの PROC の名前。[**エージェント名**] の値と同じであっても異なってもかまいません。

デフォルトは PWXA です。

このフィールドは、新しいデータセット名を使用するアップグレードのみで読み取られます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zagentstartid>変数に対応します。

ロッガーのデータセットサイズ (シリンダ)

PowerExchange ロggerのプライマリログ、セカンダリログ、およびアーカイブログデータセットのプライマリ領域に割り当てるシリンダ数。

アクティブログデータセットが DSPSERV CREATE 関数で許可される値より大きいと、Log Format ユーティリティ (EDMLUTL0) からエラーメッセージ PWXEDM172782E が発行されます。

最大サイズは、2912 シリンダ (3390 デバイスの場合) または 3495 シリンダ (3380 デバイスの場合) です。

このフィールドは、新しいデータセット名を使用するアップグレードのみで読み取られます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zlogdssz>変数に対応します。

変更キャプチャエラー

DB2、IMS 同期、パッチ VSAM、または CICS/VSAM ECCR でソースの変更をキャプチャできない場合に PowerExchange で取られる措置を指定します。

次のいずれかのオプションを選択します。

- **続行。** 変更キャプチャは停止しますが、ジョブまたはトランザクションは続行します。ソースの変更はキャプチャされません。
- **異常終了。** ジョブまたはトランザクションが異常終了します。トランザクションでソースを更新することはできません。

このオプションは、EDMSDIR オプションモジュールの CCERR パラメータにもマップされます。EDMSDIR オプションの詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)*』を参照してください。

このフィールドは、新しいデータセット名を使用するアップグレードのみで読み取られます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zccerr>変数に対応します。有効な変数の値は、CONT と ABEND です。

ログ作成後の結合の使用

PowerExchange ロggerのログ作成後の結合環境を有効にします。

ログ作成後の結合の設定の詳細については、『*PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)*』を参照してください。

このフィールドは、データセット名が新しいアップグレードのみで読み取られます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<plm_loggrp>変数に対応します。有効な変数の値は N と Y です。

サフィックス (1~9)

ログ作成後の結合グループ内の PowerExchange ロgger メンバの一意のサフィックス。

サフィックスは、USERLIB のデータセット名および PowerExchange ロgger で作成される XCF メンバで使用されるのと同じ要領で使用されます。

有効な値は 1~9 までの 1 つの数字です。

デフォルトは 1 です。

このフィールドは、新しいデータセット名を使用するアップグレードのみで読み取られます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<plm_suffix>変数に対応します。

TIME_CHKPT_FREQ (5~60)

ログ作成後の結合環境で PowerExchange ロgger が時間ベースのチェックポイントレコードを作成する頻度を定義します。値は、TIMER_INTERVAL 期間に指定された数値になります。

有効な値は 5~60 です。

デフォルトは 30 です。

このフィールドは、新しいデータセット名を使用するアップグレードのみで読み取られます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<plm_time_chkpt_freq>変数に対応します。

TIMER_INTERVAL (50~6000)

PowerExchange ロgger が内部管理操作（未使用の仮想ストレージの開放、再アクティブ化を必要とする非アクティブなタスクの検出など）を実行する頻度を定義します。この値は、100 分の 1 秒単位で指定されます。

有効な値は 50（0.5 秒）~6000（1 分）です。

デフォルトは 100 です。

このフィールドは、新しいデータセット名を使用するアップグレードのみで読み取られます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<plm_timer_interval>変数に対応します。

[Adabas パラメータ] ページ

バルクデータ移動操作と CDC 操作に使用する Adabas ファイルに関する情報を入力または確認します。

Adabas

Adabas ファイルをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<adaexec>変数に対応します。

Adabas CDC

Adabas ファイルを CDC のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<adacdc>変数に対応します。

ロードライブラリ

Adabas ロードライブラリの名前。

デフォルトは ADABAS.LOADLIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<adaload>変数に対応します。

データベース ID

Adabas の DBID。

デフォルトは 1000 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<adadb>変数に対応します。

OUSP

Adabas データソースにセキュリティを使用するかどうかを制御します。OUSP と PowerExchange セキュリティを有効にすると、PowerExchange で Adabas ユーザ用に UNIX ユーザーセキュリティパッケージ (USP) が作成され、Adabas でユーザセキュリティアクセスを検証できるようになります。

デフォルトでは、このオプションはクリアされています。

この設定は、INSTPARM ファイルの<adasecu>変数に対応します。

アソシエータ

Adabas CDC のみ。データベース ID に対応するアソシエータデータセット。

デフォルトは PWX.DB.ASSOR です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<adassor>変数に対応します。

作業

Adabas CDC のみ。特定のデータベース ID に対応する作業データセット。

デフォルトは PWX.DB.WORK です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<adawork>変数に対応します。

データ記憶領域

Adabas CDC のみ。特定のデータベース ID に対応するデータストレージデータセット。

デフォルトは PWX.DB.DATA です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<adadatasto>変数に対応します。

単位

Adabas CDC のみ。指定されたデータベース ID の Adabas 単位名。PowerExchange では、ADARUN カードでこの値が使用されます。

デフォルトは 3390 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<unitada>変数に対応します。

詳細パラメータ

詳細パラメータを定義できます。

詳細パラメータ値を変更するには、以下の手順を実行します。

1. **【値】** カラムで、パラメータのセルをクリックします。

ヒント: パラメータをソートするには、カラムヘッダをクリックします。例えば、パラメータ名でソートするには、**【パラメータ名】** ヘッダをクリックします。

2. パラメータ値を入力し、**[OK]** をクリックします。

注: 詳細パラメータを定義した場合、**[デフォルトの復元]** ボタンを使用して詳細パラメータをデフォルト値に戻すことはできません。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[Datacom パラメータ] ページ

バルクデータ移動操作と CDC 操作に使用する Datacom テーブルに関する情報を入力または確認します。

Datacom

CA Datacom テーブルをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomexec>変数に対応します。

テーブルベースの CDC

CA Datacom テーブルをデータベーステーブルベース CDC のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomtblbasedcdc>変数に対応します。

ロードライブラリ

Datacom ロードライブラリのデータセット名。

デフォルトは DCOM.V10.TARGET.CAILIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomload>変数に対応します。

カスタマイズされたロード

カスタマイズされた Datacom ロードライブラリのデータセット名。

デフォルトは DCOM.V10.CUST1.CUSLIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomcust>変数に対応します。

サービスパックライブラリ

Datacom サービスパックライブラリのデータセット名（存在する場合）。

デフォルトは DCOM.V10.SP01LOAD です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomspl>変数に対応します。

IPC ライブラリ

Inter-Product Component (IPC) ライブラリのデータセット名。このライブラリは CA90 や TNG フレームワークのような共通ルーチンの集まりで、製品を環境から隔離して開発スピードの向上を可能にします。

デフォルトは CAI.IPC.CAILIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomipc>変数に対応します。

CA90/TNG ライブラリ

CA90 または TNG ライブラリのデータセット名。

デフォルトは CAI.CAILIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomcai>変数に対応します。

CXX ディレクトリ

Datcom CXX Communication ライブラリのデータセット名。

デフォルトは DCOM.V10.CXX です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomcxx>変数に対応します。

Datcom のテーブルベースのクリーンアップ

Datcom テーブルベース CDC クリーンアップを有効にします。

デフォルトでは、このオプションはクリアされています。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomcleanup>変数に対応します。

Datcom クリーンアップの間隔

[Datcom のテーブルベースのクリーンアップ] を選択した場合、クリーンアップサブタスクが、Datcom CDC テーブルから変更を削除する前に待機する秒数。

デフォルトは 300 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomcleanupinterval>変数に対応します。

Datcom CDC ベース

変更データを含むデータベースの ID。

デフォルトは 2009 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomcdcbase>変数に対応します。

Datcom MUF 名

Datcom MUF の名前。PowerExchange テーブルベース CDC は、変更データをここから取り込みます。

デフォルトは MUFNAME です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dcomdbid2>変数に対応します。

詳細パラメータ

詳細パラメータを定義できます。

詳細パラメータ値を変更するには、以下の手順を実行します。

1. **[値]** カラムで、パラメータのセルをクリックします。

ヒント: パラメータをソートするには、カラムヘッダをクリックします。例えば、パラメータ名でソートするには、**[パラメータ名]** ヘッダをクリックします。

2. パラメータ値を入力し、**[OK]** をクリックします。

注: 詳細パラメータを定義した場合、**[デフォルトの復元]** ボタンを使用して詳細パラメータをデフォルト値に戻すことはできません。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[DB2 パラメータ] ページ

DB2 for z/OS のバルクデータ移動では、以下のパラメータを入力または確認します。

DB2

DB2 for z/OS のテーブルをバルクデータ移動のデータソースとして使用するには、このオプションを選択します。

この設定は、INSTPARM ファイルの<db2exec>変数に対応します。

DB2 サブシステム ID

データソースに関する DB2 サブシステム ID (SSID) またはデータ共有グループ名

デフォルトは DSN1 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<ssid>変数または<ssid4>変数に対応します。<ssid4>の値にはスペースがパディングされます。

ロードライブラリ

DB2 SDSNLOAD ロードライブラリのデータセット名。この値は、z/OS LNKST 連結に DB2 ロードライブラリが含まれている場合はオプションです。

デフォルトは DSN910.SDSNLOAD です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<db2load>変数に対応します。

DB2 出口

DB2 SDSNEXIT ロードライブラリのデータセット名。

z/OS LNKST 連結に DB2 出口ライブラリが含まれている場合、この値はオプションです。

デフォルトは DSN910.SDSNEXIT です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<db2exit>変数に対応します。

バルクプラン名

PowerExchange バルクデータ移動用の DB2 プランの名前。この名前は、8 文字以内にすることができます。

デフォルトは PWXBKV xn で、PowerExchange のバージョンに対応する文字を x に、数字を n に指定します。例えば、PowerExchange 10.1 の場合、デフォルトの名前は PWXBKVA1 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<db2plan>変数に対応します。

バルクプラン所有者名

PowerExchange が、DB2 プランとパッケージをバインドしてインストールプロセス中にバルクデータ移動を行うために使用する所有者名。

デフォルトは、[グローバルパラメータの選択] ページの [ログオン ID] 値です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zcreator>変数に対応します。

パッケージコレクションサフィックス

BIND 制御メンバの BIND PACKAGE 文で DB2 パッケージコレクション ID に PowerExchange が追加するサフィックス。このサフィックスは、最大で 62 文字の長さにすることができます。環境で複数バージョンの PowerExchange を実行する計画がある場合は、サフィックスを使用して、インストールするバージョンのパッケージを区別することができます。

注: InstParm ファイルに以前のインストールのフィールドの値が含まれていて、フルインストールまたはアップグレードインストールを実行する場合、デフォルト値は InstParm ファイルから取得されます。この値は、必要に応じて編集できます。ホットフィックスインストールを実行する場合も、デフォルト値は InstParm ファイルから取得されます。ただし、値を編集できるのはホットフィックスに DBRMXMIT ファイルが含まれている場合のみです。この場合は、DB2 プランと DB2 パッケージの再バインドが必要です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<db2pkgsuffix>変数に対応します。

[DSNTEP2] グループボックス:

名前

DSNTEP2 プログラム名。

デフォルトは DSNTEP2 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<db2dsntep2name>変数に対応します。

プラン

DSNTEP2 プラン名。

デフォルトは DSNTEP91 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<db2instplan>変数に対応します。

DB2 RUNLIB

DSNTEP2 プログラムが含まれるロードライブラリのデータセット名。PowerExchange では、DB2 コマンドの実行に DSNTEP2 プログラムを使用しています。

デフォルトは DSN910.RUNLIB.LOAD です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<db2runlib>変数に対応します。

詳細パラメータ

詳細パラメータを定義できます。

詳細パラメータ値を変更するには、以下の手順を実行します。

1. **【値】** カラムで、パラメータのセルをクリックします。

ヒント: パラメータをソートするには、カラムヘッダをクリックします。例えば、パラメータ名でソートするには、**【パラメータ名】** ヘッダをクリックします。

2. パラメータ値を入力し、**【OK】** をクリックします。

注: 詳細パラメータを定義した場合、**【デフォルトの復元】** ボタンを使用して詳細パラメータをデフォルト値に戻すことはできません。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[DB2 CDC パラメータ] ページ

DB2 for z/OS の変更データキャプチャ（CDC）では、以下のパラメータを入力または確認します。

DB2 変更データキャプチャ

このオプションを選択して CDC を有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<cdcdb2>変数に対応します。

プラン

DB2 ECCR プラン名。この値は、最大で 8 文字の長さにすることができます。

デフォルトは PWXCPV xn で、PowerExchange のバージョンに対応する文字を x に、数字を n に指定します。例えば、PowerExchange 10.1 の場合、デフォルトの名前は PWXCPVA1 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zccdb2plan>変数または<zccdb2plan8>変数に対応します。
<zccdb2plan8>変数値には 8 バイトがパディングされます。

パッケージコレクション名

DB2 ECCR パッケージに使用されるコレクション ID。この値は、最大で 70 文字の長さにすることができます。

デフォルトは、プランの名前です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zcccollid>変数に対応します。

キャプチャデータベース名

DB2 ECCR キャプチャのディレクトリテーブルを含む DB2 データベースの名前。

デフォルトは PWXCCDDB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zccdbname>変数に対応します。

STOGROUP

DB2 ECCR キャプチャのディレクトリテーブル、テーブルスペース、およびインデックスの DB2 STOGROUP。既存の STOGROUP 名を選択できます。STOGROUP を指定しない場合、DB2 のデフォルトが適用されます。

デフォルトは SYSDEFLT です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zstogroup>変数に対応します。

CDC プラン所有者名

PowerExchange が、DB2 プランとパッケージをバインドして DB2 ECCR を作成するためにインストール時に使用する所有者名。

デフォルトは、[グローバルパラメータの選択] ページの [ログオン ID] 値です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zdb2owner>変数に対応します。

TCAP テーブル所有者名

PowerExchange がインストール時に PowerExchange キャプチャディレクトリ (TCAP) テーブルとインデックスを作成するために使用する所有者名。これらのオブジェクトは、CDC には必須です。

デフォルトは、[グローバルパラメータの選択] ページの [ログオン ID] 値です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zdb2tcapowner>変数に対応します。

TCAPWORK バッファプール名

DB2 ECCR TCAPWORK テーブルスペースに使用される DB2 バッファの名前。

このバッファプールには、最低でも 16 KB が必要です。バッファプールサイズに基づいて、以下のいずれかのバッファプール名を入力します。

- 16KB のバッファプールの場合は、BP16K n と入力します。ここで、 n 変数は 0～9 の数字です。
- 32KB のバッファプールの場合は、BP32K または BP32K n と入力します。ここで、 n 変数は 1～9 の数字です。

デフォルトは BP16K0 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zbufpool>変数に対応します。

CA 名

DB2 ECCR の名前。PowerExchange ロgger に対して DB2 ECCR を識別します。この値は RUNLIB ライブラリの REPDB2CT メンバ内の CA NAME 文で設定します。

DB2 ECCR ではこの名前を使用してグローバルリソースロックを要求するため、この値はシンプレックス内で一意である必要があります。

デフォルトは PWXDB201 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zdb2caname>変数に対応します。

詳細パラメータ

詳細パラメータを定義できます。

詳細パラメータ値を変更するには、以下の手順を実行します。

1. **【値】** カラムで、パラメータのセルをクリックします。

ヒント: パラメータをソートするには、カラムヘッダをクリックします。例えば、パラメータ名でソートするには、**【パラメータ名】** ヘッダをクリックします。

2. パラメータ値を入力し、**【OK】** をクリックします。

注: 詳細パラメータを定義した場合、**【デフォルトの復元】** ボタンを使用して詳細パラメータをデフォルト値に戻すことはできません。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[IDMS パラメータ] ページ

バルクデータ移動操作に使用する CA IDMS テーブルに関する情報を入力または確認します。

IDMS

CA IDMS データベースをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<idmsexec>変数に対応します。

プライマリライブラリ

プライマリ IDMS ライブラリのデータセット名。

デフォルトは IDMS.LOADLIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<idmsload>変数に対応します。

DBA ライブラリ

IDMS DBA ライブラリのデータセット名。

デフォルトは IDMS.DBA.LOADLIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<idmsdba>変数に対応します。

SYSCTL ライブラリ

SYSCTL ライブラリのデータセット名。

デフォルトは IDMS.SYSCTL です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<idmsctl>変数に対応します。

サードパーティライブラリ

IDMS サードパーティライブラリのデータセット名。

この設定は、INSTPARM ファイルの<idms3pty>変数に対応します。

DMCL メンバ

IDMS DMCL メンバのデータセット名。

デフォルトは GLBLDMCL です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<dtldmcl>変数に対応します。

モード

【データソース】 ページの 【IDMS】 オプションを選択したが 【IDMS CDC】 オプションを選択していない場合は、次の 【モード】 オプションを選択できます。

- **中央**。中央で定義されたデータベースおよび SYSCTL データセットを使用します。
- **ローカル**。PowerExchange RUNLIB ライブラリの IDMSDICT および IDMSFILE メンバで指定する、IDMS ディレクトリおよびデータベースファイルエントリを使用します。この情報は、SYSCTL データセットのデータを上書きします (CV モード)。

デフォルトは 【ローカル】 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<idmslcm>変数に対応します。有効な変数値は、Central (C)または Local (L)です。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[IDMS CDC パラメータ] ページ

CDC 操作に使用する CA IDMS テーブルに関する情報を入力または確認します。

IDMS CDC

CA IDMS データベースを CDC のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<idmscdc>変数に対応します。

IDMS CV 名

IDMS 中央バージョン (CV) 名。

この設定は、INSTPARM ファイルの<idmscvname>変数に対応します。

ログ位置

IDMS ログファイルを格納する場所を指定します。

デフォルトは LOCAL です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zidmsloglocn>変数に対応します。

この場所は、z/OS システムの PowerExchange DBMOVER 構成ファイルの NODE 文と LOGSID 文でも指定します。LOGSID 文では、第 2 パラメータ *listener_node* でこの場所を指定します。これらの文の詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』および『PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)』を参照してください。

LOGSID

DBMOVER コンフィギュレーションファイル内の LOGSID 文の最初のパラメータ、*registration_logsid* に対応する IDMS LOGSID の名前。LOGSID 文の詳細については、『PowerExchange リファレンスマニュアル』を参照してください。

デフォルトは PWXLGSID です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zidmslogsid>変数に対応します。

メディアの種類

メディアの種類。選択可能なオプションは、以下のとおりです。

- **ディスク**。IDMS ログがディスクに存在します。

- **テープ。** IDMS ログがテープに存在します。

デフォルトは **【ディスク】** です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<idlmediatype>変数に対応します。有効な変数値は、D（ディスク）および T（テープ）です。

詳細パラメータ

詳細パラメータを定義できます。

詳細パラメータ値を変更するには、以下の手順を実行します。

1. **【値】** カラムで、パラメータのセルをクリックします。

ヒント: パラメータをソートするには、カラムヘッダをクリックします。例えば、パラメータ名でソートするには、**【パラメータ名】** ヘッダをクリックします。

2. パラメータ値を入力し、**【OK】** をクリックします。

注: 詳細パラメータを定義した場合、**【デフォルトの復元】** ボタンを使用して詳細パラメータをデフォルト値に戻すことはできません。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

関連項目：

- [「手順 18.IDMS データソースのソフトウェアのインストール（オプション）」（ページ 111）](#)

[IMS パラメータ] ページ

バルクデータ移動操作に使用する IMS データベースに関する情報を入力または確認します。

IMS

IMS データベースをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<imsexec>変数に対応します。

ODBA を介したアクセス

Open Database Access（ODBA）メソッドを介して IMS データにアクセスできるようにします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<imsodba>変数に対応します。

IMS 領域

IMS 領域の IMS ID。

デフォルトは IMS です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<imsreg>変数に対応します。

PSB メンバ

プログラム指定ブロック（PSB）メンバのデータセット名。

デフォルトは PSB1 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zimspsbmb>変数に対応します。

プロシージャライブラリ

DLIBATCH PROC を含む IMS プロシージャライブラリのデータセット名。

デフォルトは IMS.PROCLIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zimsproc>変数に対応します。

PSB ライブラリ

DBMOVER コンフィギュレーションファイルの IMS NETPORT 文で指定された PSB ライブラリのデータセット名。z/OS Installation Assistant では、この名前を使用して RUNLIB ライブラリの IMS JCL メンバがカスタマイズされます。

デフォルトは IMS.PSBLIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zimspsb>変数に対応します。

RESLIB

IMS SDFSRESL ライブラリのデータセット名。z/OS Installation Assistant では、この名前を使用して RUNLIB ライブラリの IMS JCL メンバがカスタマイズされます。

デフォルトは IMS.RESLIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zimsres>変数に対応します。

DBD ライブラリ

データベース説明 (DBD) ライブラリのデータセット名。z/OS Installation Assistant では、この名前を使用して RUNLIB ライブラリの IMS JCL メンバがカスタマイズされます。

デフォルトは IMS.DBDLIB です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<zimsdbd>変数に対応します。

IMS Netport

IMS Netport ジョブが待ち受けを行うポートのポート番号。

デフォルトは 12480 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<imsport>変数に対応します。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[IMS CDC パラメータ] ページ

CDC 操作に使用する IMS データベースに関する情報を入力または確認します。

IMS ログベースの CDC

IMS データベースをログベースの CDC のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<cdcims>変数に対応します。

IMS 同期 CDC

IMS データベースを同期 CDC のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<cdcimssync>変数に対応します。

IMS バージョン

インストールされた IMS システムのバージョン。

有効な値は 10~14 です。

デフォルトは 14 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<imsversion>変数に対応します。

データセット 1

IMS ログベース CDC のための IMS データベースリカバリ制御 (DBRC) の RECON データセット。

デフォルトは PWX.V1.IMSDEMO.RECON1 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<imsreconds1>変数に対応します。

データセット 2

IMS ログベース CDC のための IMS DBRC RECON データセット。

デフォルトは PWX.V1.IMSDEMO.RECON2 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<imsreconds2>変数に対応します。

データセット 3

IMS ログベース CDC のための IMS DBRC RECON データセット。

デフォルトは PWX.V1.IMSDEMO.RECON3 です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<imsreconds3>変数に対応します。

IMS 同期 ECCR DFSESL データセット

IMS 同期 CDC のみ。IMS 従属領域または IMS 制御領域内の既存の DFSESL DD 文に連結するデータセット。

最大 5 つのデータセット名を入力します。

注: z/OS Installation Assistant により、これらのデータセット名が EDMSDIR オプションモジュールの ESSLIB オプションに追加されます。このオプションは、IMS 従属領域または IMS 制御領域内の既存の DFSESL DD に連結するデータセットを指定します。これらのデータセットの詳細については、『*PowerExchange CDC Guide for z/OS*』を参照してください。

これらの設定は、INSTPARM ファイルの<zesllibparm1>、<zesllibparm2>、<zesllibparm3>、<zesllibparm4>、<zesllibparm5>の各変数に対応します。

詳細パラメータ

詳細パラメータを定義できます。

詳細パラメータ値を変更するには、以下の手順を実行します。

1. **【値】** カラムで、パラメータのセルをクリックします。

ヒント: パラメータをソートするには、カラムヘッダをクリックします。例えば、パラメータ名でソートするには、**【パラメータ名】** ヘッダをクリックします。

2. パラメータ値を入力し、**【OK】** をクリックします。

注: 詳細パラメータを定義した場合、**【デフォルトの復元】** ボタンを使用して詳細パラメータをデフォルト値に戻すことはできません。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[MQ Series パラメータ] ページ

バルクデータ移動操作に使用する MQ Series メッセージキューに関する情報を入力または確認します。

MQ Series へのアクセス

IBM Websphere の MQ Series メッセージキューをバルクデータ移動操作のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<mqexec>変数に対応します。

MQ ロードライブラリ 1

Websphere MQ への接続を提供する SCSQLOAD MQ ロードライブラリのデータセット名。

デフォルトは CSQ.SCSQLOAD です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<mqload1>変数に対応します。

MQ ロードライブラリ 2

Websphere MQ への接続を提供する SCSQANLE MQ ロードライブラリのデータセット名。

デフォルトは CSQ.SCSQANLE です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<mqload2>変数に対応します。

MQ ロードライブラリ 3

Websphere MQ への接続を提供する SCSQAUTH MQ ロードライブラリのデータセット名。

デフォルトは CSQ.SCSQAUTH です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<mqload3>変数に対応します。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[VSAM パラメータ] ページ

VSAM のバルクデータ移動操作と CDC 操作のオプションを入力または確認します。

VSAM

VSAM データセットをバルクデータ移動のデータソースとして有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<vsmexec>変数に対応します。

バッチ変更データキャプチャ

バッチ VSAM CDC を有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<vsambcdc>変数に対応します。

CICS 変更データキャプチャ

CICS/VSAM CDC を有効にします。

この設定は、INSTPARM ファイルの<vsamccdc>変数に対応します。

詳細パラメータ

詳細パラメータを定義できます。

詳細パラメータ値を変更するには、以下の手順を実行します。

1. **[値]** カラムで、パラメータのセルをクリックします。

ヒント: パラメータをソートするには、カラムヘッダをクリックします。例えば、パラメータ名でソートするには、**[パラメータ名]** ヘッダをクリックします。

2. パラメータ値を入力し、**[OK]** をクリックします。

注: 詳細パラメータを定義した場合、**[デフォルトの復元]** ボタンを使用して詳細パラメータをデフォルト値に戻すことはできません。

[Runlib JCL の作成] ページ

RUNLIB JCL を作成するための情報を入力します。

RUNLIB

RUNLIB ライブラリの完全修飾名。z/OS Installation Assistant は、インストール JCL をここに転送しますが、既存のデータセット名を使用するアップグレードは例外です。このライブラリは事前に割り当てる必要があります。z/OS Installation Assistant は、インストール JCL を作成するとき、この RUNLIB 名を使用して JCL をカスタマイズします。

初めてのインストールでは、デフォルト値は PWX.RUNLIB です。

既存のデータセット名を使用するアップグレードでは、このライブラリは現在実行中の PowerExchange 環境にある RUNLIB ライブラリにする必要があり、ステージング RUNLIB データセット名とは別にする必要があります。z/OS Installation Assistant は、JCL を作成してステージング RUNLIB ライブラリに書き込むとき、この名前を使用して JCL をカスタマイズします。z/OS Installation Assistant では、このライブラリは更新されません。

新しいデータセット名を使用するアップグレードでは、デフォルト値は *hlq*.RUNLIB です。*hlq* は【**データセットグループの詳細**】ページで入力された値となります。

ホットフィックスインストールでは、デフォルト値は PWX.SP.RUNLIB です。このデータセット名が、現在の PowerExchange 環境で使用されている RUNLIB データセット名と一致していないことを確認してください。

フルインストールまたはアップグレードの場合、この設定は、INSTPARM ファイルの<runlib>変数に対応します。ホットフィックスインストールの場合、この設定は、INSTPARM ファイルの<patchrunlib>変数に対応します。

BINLIB

BINLIB ライブラリの完全修飾名。z/OS Installation Assistant はモジュールとロードライブラリをここに転送しますが、既存のデータセット名を使用するアップグレードは例外です。z/OS Installation Assistant は、この名前を使用してインストール JCL をカスタマイズします。このライブラリは事前に割り当てる必要があります。

初めてのインストールでは、デフォルト値は PWX.BINLIB です。z/OS Installation Assistant は、インストール JCL を作成するとき、この名前を使用して JCL をカスタマイズします。

既存のデータセット名を使用するアップグレードでは、このライブラリは現在実行中の PowerExchange 環境の BINLIB ライブラリである必要があり、ステージング BINLIB データセット名とは異なる必要があります。z/OS Installation Assistant では、このライブラリは更新されません。

新しいデータセット名を使用するアップグレードでは、デフォルト値は *hlq*.BINLIB です。*hlq* は【**データセットグループの詳細**】ページで入力された値となります。

ホットフィックスインストールでは、デフォルト値は PWX.SP.BINLIB です。このデータセット名が、現在の PowerExchange 環境で使用されている BINLIB データセット名と一致していないことを確認してください。

フルインストールまたはアップグレードの場合、この設定は INSTPARM ファイルの<binlib>変数に対応します。ホットフィックスインストールの場合、この変数は INSTPARM ファイルの<patchbinlib>変数に対応します。

以下のページが不完全であるか、データ検証エラーがあります...

このメッセージボックスには、不完全であるか検証エラーが発生しているウィザードページの名前が表示されます。

エラー発生先ページに移動

検証エラーメッセージウィンドウでページ名を選択すると、検証エラーのあるページに移動します。

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[メインフレームへのファイルの転送] ページ

ファイルの転送先の z/OS システムに関する情報を入力します。

IP アドレス/ノード

PowerExchange をインストールする z/OS システムの IP アドレス。

この設定は、INSTPARM ファイルの<ipaddress>変数に対応しています。

大文字と小文字が混在するパスワード

大文字と小文字が混在するパスワードを使用します。

ファイルの転送先の z/OS システムで大文字と小文字が混在するパスワードがサポートされている場合は、このチェックボックスをオンにします。この場合は大文字と小文字の違いに注意してパスワードを入力します。

z/OS システムで大文字と小文字が混在するパスワードがサポートされていない場合は、このチェックボックスをオフにします。入力したパスワードは自動的に大文字に変換されます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<allowmixed>変数に対応しています。

ログオン ID

z/OS システムへの接続に使用されるユーザー ID。

この設定は、INSTPARM ファイルの<logonid2>変数に対応しています。

パスワード

z/OS システムへの接続に使用されるパスワード。

この設定は、INSTPARM ファイルには保存されません。

ファイル転送完了の通知

転送の完了時に、ポップアップ通知ウィンドウを表示します。

通知を表示しないようにするには、このオプションをクリアします。

この設定は、INSTPARM ファイルには保存されません。

FTP パッシブモード接続

FTP をパッシブモードを使用してファイルを z/OS システムに転送します。

フルインストールまたはアップグレードの場合、この設定は、INSTPARM ファイルの<passive_mode>変数に対応しています。ホットフィックスインストールの場合、このフィールドは表示されません。

Runlib

FTP を使用して、フルインストールまたはアップグレード用の XRunlib フォルダ、またはホットフィックスインストール用の PXRunlib フォルダの内容を、指定された RUNLIB ライブラリに転送します。

既存のデータセット名を使用したアップグレードの場合は、このデータセット名が **[Runlib JCL の作成]** ページに表示される RUNLIB のデータセット名と異なっていることを確認してください。このライブラリは、一時ステージング RUNLIB ライブラリです。このライブラリの高位修飾子 (HLQ) は、**[ステージングデータセットの HLQ]** ボックス (**[データセットグループの詳細]** ページ) に入力したものです。

新しいデータセット名を使用するアップグレードの場合、このライブラリは z/OS Installation Assistant が RUNLIB データセットを転送する先の新しい RUNLIB ライブラリです。[データセットグループの詳細] ページで、このライブラリの HLQ 値とユーザーが変更可能なデータセットを入力しています。

この設定は、INSTPARM ファイルの次の変数に対応しています。

- フルインストールまたはホットフィックスインストールの場合は、<ftprunlib>変数
- 既存のデータセット名を使用したアップグレードの場合は、<upgrdeftprunlib_e>変数
- 新しいデータセット名を使用したアップグレードの場合は、<upgrdeftprunlib_n>変数

バイナリ

FTP を使用して、フルインストールまたはアップグレード用の binary フォルダー、またはホットフィックスインストール用の pbinary フォルダーの内容を、指定された BINLIB ライブラリに転送します。

既存のデータセット名を使用するアップグレードの場合は、このデータセット名が [Runlib JCL の作成] ページに表示される BINLIB のデータセット名と異なっていることを確認してください。このライブラリは、一時ステージング BINLIB ライブラリです。[データセットグループの詳細の選択] ページの [ステージングライブラリの HLQ] ボックスに、このライブラリの HLQ 値を入力しています。

新しいデータセット名を使用するアップグレードの場合、このライブラリは z/OS Installation Assistant が BINLIB データセットを転送する先の新しい BINLIB ライブラリです。[データセットグループの詳細] ページで、このライブラリの HLQ 値とユーザーが変更可能なデータセットを入力しています。

この設定は、INSTPARM ファイルの次の変数に対応しています。

- フルインストールまたはホットフィックスインストールの場合は、<ftpbinlib>変数
- 既存のデータセット名を使用したアップグレードの場合は、<upgrdeftpbinlib_e>変数
- 新しいデータセット名を使用したアップグレードの場合は、<upgrdeftpbinlib_n>変数

デフォルトの復元

デフォルト値に戻します。

[ファイル転送ステータスの表示] ページ

z/OS システムへのファイル転送のステータスメッセージを確認します。

上部のテキストボックスには、ファイルの転送元となる Windows 上のディレクトリ、およびファイルの転送先となる z/OS 上のパーティション化データセット (PDS) の完全修飾名が表示されます。

中央のリストボックスには、ファイル転送のステータスメッセージが表示されます。

下部のボックスには、ファイル転送の成否および z/OS システムに送信されたファイルの数を示す完了メッセージが表示されます。

[新リリースへのアップグレード] ページ

既存のデータセット名または新しいデータセット名のどちらを使用してアップグレードするのを選択します。

既存のデータセット名を使用したアップグレード

メッセージ、サンプル、およびロードライブラリにに対して、既存のインストールと同じ名前を使用します。このオプションを選択した場合、データソースの追加や変更はできません。

このオプションを選択すると、z/OS Installation Assistant によって次のタスクが実行されます。

- ステージング用の RUNLIB および BINLIB ライブラリの入力

- 既存の実行ライブラリ、サンプルライブラリ、およびロードライブラリのバックアップ
- 既存のライブラリ名へのアップグレードライブラリのコピー
- VSAM ファイル、USERLIB データセット、PowerExchange ロgger（z/OS 用）のログ、PowerExchange Condense のデータセット、および PowerExchange エージェントのキャッシュデータセットの既存のデータセット名の管理

このオプションを選択した場合、既存の JCL を変更する必要はありません。

新しいデータセット名を使用したアップグレード

メッセージ、サンプル、およびロードライブラリに対して、新しいデータセット名を使用します。データソースの追加または変更も可能です。

このオプションを選択すると、z/OS Installation Assistant によって次のタスクが実行されます。

- 新しいロードライブラリおよびサンプルライブラリの作成
- VSAM ファイル、USERLIB、PowerExchange ロgger（z/OS 用）のログ、PowerExchange Condense のデータセット、および PowerExchange エージェントのキャッシュデータセットの既存のデータセット名の管理
- 新しい PROCLIB ライブラリでのカスタマイズされた新しいバージョンの PowerExchange プロシージャの提供

このオプションを選択した場合、新しいライブラリ名を指定するように既存の JCL を編集する必要があります。

この設定は、INSTPARM ファイルの<xbackupuseexisting>変数に対応しています。有効な変数値は 0（新しいデータセット名を使用したアップグレード）または 1（既存のデータセット名を使用したアップグレード）です。

[既存のパラメータのインポート] ページ

アップグレードを実行するときに、Windows の現在の PowerExchange インストールディレクトリのカスタマイズ済み InstParm ファイルから、アップグレードインストールディレクトリのデフォルトの InstParm ファイルに、パラメータをインポートできます。パラメータをインポートすると、最後に入力したカスタマイズが保持されます。現在のインストールディレクトリから新しいアップグレードインストールディレクトリに InstParm ファイルを手動でコピーした場合は、既存の InstParm パラメータをインポートしないでください。

カスタマイズ済み InstParm ファイルが Windows で使用できない場合は、FTP または別のファイル転送手段を使用して、z/OS システムの RUNLIB ライブラリから最新の INPARM nn メンバを取得します。最新の INPARM nn メンバは、名前に含まれる nn の数字が最も大きいものです。また、PowerExchange 10.1 以降で作成された INPARM nn メンバでは、コンテンツの最初の行に、そのメンバが作成された日付と時刻が示されます。

使用中のバージョン

現在の PowerExchange インストールのバージョン。ここから InstParm ファイルをインポートします。

アップグレードジョブにより、バックアップデータセットの高位修飾子の末尾に、以下の形式でこのバージョンが付加されます。

`.Vversion`

この設定は、INSTPARM ファイルの<fromversion>変数に対応します。

アップグレードバージョン

アップグレード対象の PowerExchange バージョン。

既存のパラメータのインポート

最新のカスタマイズを含む既存の InstParm ファイルから新しいアップグレードインストールディレクトリにパラメータをインポートするには、次の手順を実行します。

1. **【既存のパラメータのインポート】** をクリックします。
ダイアログボックスが表示されます。
2. 現在の PowerExchange バージョンの最上位のインストールディレクトリにある、カスタマイズ済み InstParm ファイルの場所を参照します。
注: カスタマイズ済み InstParm ファイルには、InstParm 以外の名前が付いていることがあります。
3. **【OK】** をクリックします。
z/OS Installation Assistant は、カスタマイズ済み InstParm ファイルからパラメータをインポートし、アップグレードインストールディレクトリの新しい InstParm ファイルに保存します。

[パラメータの確認] ページ

このページでは情報提供のみが行われます。

【次へ】 をクリックして続行します。

[グローバルパラメータ] ページの確認（既存のデータセット名を使用したアップグレード）

グローバルパラメータを確認または入力します。**【ログオン ID】** パラメータと **【ライセンスキー】** パラメータのみが編集可能です。

ログオン ID

z/OS システムへの接続を有効にする z/OS のユーザー ID。

この設定は、INSTPARM ファイルの<loginid>変数に対応します。

PowerExchange エージェント/ロッガーのプレフィックス

読み取り専用です。PowerExchange エージェントおよび PowerExchange ロッガーのベースプレフィックス。

デフォルトは、PWX です。

z/OS Installation Assistant により、次の文字がこのプレフィックスに付加されます。

- **A**。PowerExchange エージェントの場合。
- **L**。PowerExchange ロッガーの場合。

HLQ

読み取り専用です。既存のインストールに対して入力した高位修飾子（HLQ）。

ストレージクラス

読み取り専用です。SMS 専用であり、PowerExchange データセットのデフォルト SMS ストレージクラスです。

注: インストール済み環境の SMS 自動クラス選択（ACS）ルーチンでは、SMS クラスの指定が無効であったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

ボリューム

読み取り専用です。PowerExchange ライブラリをインストールする z/OS システム上の DASD ボリュームシリアル番号（VOLSER）。

デフォルトは VOLSER です。

管理クラス

読み取り専用です。SMS 専用であり、PowerExchange データセットのデフォルト SMS 管理クラスです。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

単位

読み取り専用です。PowerExchange をインストールする z/OS システム上の汎用または非公式の単位名。

デフォルトは 3390 です。

データクラス

読み取り専用です。SMS 専用であり、PowerExchange データセットのデフォルト SMS データクラスです。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

ライセンスキー

インストール用のライセンスキー。新しいライセンスキーがある場合は、それを入力します。そうでない場合は、以前のライセンスキーを受け入れます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<license>変数に対応します。

[グローバルパラメータ] ページの確認（新しいデータセット名を使用したアップグレード）

グローバルパラメータを確認または入力します。[ログオン ID] パラメータと [ライセンスキー] パラメータのみが編集可能です。

ログオン ID

z/OS システムへの接続を有効にする z/OS のユーザー ID。

この設定は、INSTPARM ファイルの<loginid>変数に対応します。

PowerExchange エージェント/ロッガーのプレフィックス

読み取り専用です。PowerExchange エージェントおよび PowerExchange ロッガーのベースプレフィックス。

デフォルトは、PWX です。

z/OS Installation Assistant により、次の文字がこのプレフィックスに付加されます。

- **A**。PowerExchange エージェントの場合。
- **L**。PowerExchange ロッガーの場合。

HLQ

読み取り専用です。既存のインストールに対して入力した高位修飾子（HLQ）。

ストレージクラス

読み取り専用です。SMS 専用であり、PowerExchange データセットのデフォルト SMS ストレージクラスです。

注: インストール済み環境の SMS 自動クラス選択 (ACS) ルーチンでは、SMS クラスの指定が無効であったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

ボリューム

読み取り専用です。PowerExchange ライブラリをインストールする z/OS システム上の DASD ボリュームシリアル番号 (VOLSER)。

デフォルトは VOLSER です。

管理クラス

読み取り専用です。SMS 専用であり、PowerExchange データセットのデフォルト SMS 管理クラスです。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

単位

読み取り専用です。PowerExchange をインストールする z/OS システム上の汎用または非公式の単位名。

デフォルトは 3390 です。

データクラス

読み取り専用です。SMS 専用であり、PowerExchange データセットのデフォルト SMS データクラスです。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

ライセンスキー

インストール用のライセンスキー。新しいライセンスキーがある場合は、それを入力します。そうでない場合は、以前のライセンスキーを受け入れます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<license>変数に対応します。

データセットグループの詳細ページの選択（既存のデータセット名でのアップグレード）

データセットグループの情報を入力または確認します。

データセットグループ

プロパティを表示または変更するには、データセットグループを選択します。次のいずれかのグループを選択します。

- ステージングデータセット
- バックアップデータセット
- 既存のロードライブラリ

HLQ

ステージングデータセットまたはバックアップデータセットの高位修飾子 (HLQ)。必要に応じて修飾子レベルをいくつでも使用できます。

ステージングデータセットのデフォルト値は、*VversionSTG* です。この *version* 変数は、新しい PowerExchange リリースのバージョン番号です。

例えば、ステージングデータセットの HLQ は以下の値になります。

PWX.V100STG

バックアップデータセットのデフォルト値は、*Vbackup_version* です。この *backup_version* 変数は、バックアップするリリースのバージョン番号です。

例えば、バックアップデータセットの HLQ は以下の値になります。

PWX.V961

最大長は 26 文字です。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ステージングデータセット】** を選択した場合、この設定は <libnameupgrade> 変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は <bkuphlq1> 変数に対応します。

既存のロードライブラリの場合、このフィールドは読み取り専用です。

ストレージクラス

SMS のみ。データセットグループの SMS ストレージクラス。

SMS ストレージクラスを指定した場合、ボリュームまたは単位の値を指定する必要はありません。

注: インストール済み環境の SMS 自動クラス選択 (ACS) ルーチンでは、SMS クラスの指定が無効であったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ステージングデータセット】** を選択した場合、この設定は <smsscupgrade> 変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は <bkupsmssc> 変数に対応します。

既存のロードライブラリの場合、このフィールドは読み取り専用です。

ボリューム

データセットをインストールする z/OS システム上の DASD ボリュームシリアル番号 (VOLSER)。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ステージングデータセット】** を選択した場合、この設定は <volupgrade> 変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は <bkupvol> 変数と <bkupvolvsm> 変数に対応します。

既存のロードライブラリの場合、このフィールドは読み取り専用です。

管理クラス

SMS のみ。データセットグループの SMS 管理クラス。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ステージングデータセット】** を選択した場合、この設定は <smsmcupgrade> 変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は <bkupsmmc> 変数に対応します。

既存のロードライブラリの場合、このフィールドは読み取り専用です。

単位

データセットをインストールする z/OS システム上の汎用または非公式の単位名。

デフォルトは 3390（必要な場合）

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ステージングデータセット】** を選択した場合、この設定は<unitupgrade>変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は<bkupunit>変数に対応します。

既存のロードライブラリの場合、このフィールドは読み取り専用です。

データクラス

SMS のみ。データセットグループの SMS データクラス。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ステージングデータセット】** を選択した場合、この設定は<smsdcupgrade>変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は<bkupsmsdc>変数に対応します。

既存のロードライブラリの場合、このフィールドは読み取り専用です。

データセットグループの詳細ページの選択（新しいデータセット名でのアップグレード）

データセットグループの情報を入力または確認します。

データセットグループ

プロパティを表示または変更するには、データセットグループを選択します。次のいずれかのグループを選択します。

- **ユーザーが変更可能なデータセット（VSAM 以外）。** RUNLIB、BINLIB、SAMPLIB、および DTLDEMO が含まれます。
- **読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB。** LOAD、LOADLIB、DBRM、および DBRMLIB が含まれます。
- **バックアップデータセット。**

HLQ

ステージングデータセットまたはバックアップデータセットの高位修飾子（HLQ）。必要に応じて修飾子レベルをいくつでも使用できます。

最初の 2 つのグループのデフォルトは *hlq.NEW* です。ここで、*hlq* は **【グローバルパラメータ】** ページの高位修飾子の値です。

バックアップデータセットのデフォルトは *hlq.Vbackup_version* です。ここで、*hlq* は **【グローバルパラメータ】** ページの高位修飾子の値で、*backup_version* はバックアップするリリースのバージョン番号です。

最大長は 26 文字です。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)】** を選択した場合、この設定は<libname>変数に対応します。
- **【読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB】** を選択した場合、この設定は<libnameloadlib>変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は<bkuphlq1>変数に対応します。

ストレージクラス

SMS のみ。データセットグループの SMS ストレージクラス。

SMS ストレージクラスを指定した場合、ボリュームまたは単位の値を指定する必要はありません。

注: インストール済み環境の SMS 自動クラス選択 (ACS) ルーチンでは、SMS クラスの指定が無効であったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)】** を選択した場合、この設定は<znonvssc>変数に対応します。
- **【読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB】** を選択した場合、この設定は<zloadstcl>変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は<bkupsmssc>変数に対応します。

ボリューム

データセットをインストールする z/OS システム上の DASD ボリュームシリアル番号 (VOLSER)。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)】** を選択した場合、この設定は<volid>変数に対応します。
- **【読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB】** を選択した場合、この設定は<volload>変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は<bkupvol>変数に対応します。

管理クラス

SMS のみ。データセットグループの SMS 管理クラス。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ユーザーが変更可能なデータセット (VSAM 以外)】** を選択した場合、この設定は<znonvsmc>変数に対応します。
- **【読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB】** を選択した場合、この設定は<zloadmgcl>変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は<bkupsmsmc>変数に対応します。

単位

データセットをインストールする z/OS システム上の汎用または非公式の単位名。

デフォルトは 3390（必要な場合）

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ユーザーが変更可能なデータセット（VSAM 以外）】** を選択した場合、この設定は<unit>変数に対応します。
- **【読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB】** を選択した場合、この設定は<unitload>変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は<bkupunit>変数に対応します。

データクラス

SMS のみ。データセットグループの SMS データクラス。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

選択したデータセットグループに応じて、この設定は INSTPARM ファイルの次の変数のいずれかに対応します。

- **【ユーザーが変更可能なデータセット（VSAM 以外）】** を選択した場合、この設定は<znonvsdc>変数に対応します。
- **【読み取り専用データセット、ロードライブラリ、および DBRMLIB】** を選択した場合、この設定は<zloaddtcl>変数に対応します。
- **【バックアップデータセット】** を選択した場合、この設定は<bkupsmsdc>変数に対応します。

[データセットのバックアップ] ページ

バックアップするデータセットを選択します。

バックアップするデータセットの選択

すべてのデータセットをバックアップするには、**【すべて】** チェックボックスをオンにします。このチェックボックスは、INSTPARM ファイルの xkupds 変数に対応しています。

特定のデータセットをバックアップするには、当該データセットの名前の横のチェックボックスをオンにします。

これらのチェックボックスは、INSTPARM ファイルの以下の変数に対応しています。

チェックボックス	INSTPARM 変数
すべて	xbkupds
CCT	xbkcct
DTLCAMAP	xbkcmap
DBRMLIB	xbkdbrm
LOADLIB	xbklldlib
CDCT	xbkcdct
CRG LOAD	xbkcrg

チェックボックス	INSTPARM 変数
DTLMSG	xbkmsg
SAMPLIB	xbksamp
CDEP	xbkcdep
DATAMAPS	xbkdmap
LOAD	xbkload
SRCLIB	xbksrc

ヒント: アップグレード後、フォールバックが必要な場合に、PowerExchange 環境をアップグレード前の状態に戻すことができる、**【すべて】** オプションを選択することをお勧めします。

関連項目：

- [「手順 8.PowerExchange の基本ソフトウェアのジョブのサブミット」 \(ページ 125\)](#)

[ホットフィックスインストール] ページ

このページでは情報提供のみが行われます。

ホットフィックスをインストールする前に、z/OS システム上で RUNLIB および BINLIB ライブラリを割り当てる必要があります。ホットフィックスをインストールすると、z/OS Installation Assistant により、Windows 上の prunlib および pbinary ディレクトリから z/OS システム上で割り当てたライブラリにファイルが転送されます。

【次へ】 をクリックして続行します。

[グローバルパラメータ] ページ (ホットフィックス)

グローバルパラメータを確認または入力します。**【ログオン ID】** パラメータと **【ライセンスキー】** パラメータのみが編集可能です。

ログオン ID

z/OS システムへの接続を有効にする z/OS のユーザー ID。

この設定は、INSTPARM ファイルの<loginid>変数に対応します。

PowerExchange エージェント/ログガーのプレフィックス

読み取り専用です。PowerExchange エージェントおよび PowerExchange ログガー (z/OS 用) のベースプレフィックスです。

デフォルトは、PWX です。

z/OS Installation Assistant により、次の文字がこのプレフィックスに付加されます。

- **A。** PowerExchange エージェントの場合。
- **L。** PowerExchange ログガーの場合。

HLQ

読み取り専用です。既存のインストールに対して入力した高位修飾子 (HLQ)。

ストレージクラス

読み取り専用です。SMS 専用であり、PowerExchange データセットのデフォルト SMS ストレージクラスです。

注: インストール済み環境の SMS 自動クラス選択 (ACS) ルーチンでは、SMS クラスの指定が無効であったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

ボリューム

読み取り専用です。PowerExchange ライブラリをインストールする z/OS システム上の DASD ボリュームシリアル番号 (VOLSER)。

デフォルトは VOLSER です。

管理クラス

読み取り専用です。SMS 専用であり、PowerExchange データセットのデフォルト SMS 管理クラスです。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

単位

読み取り専用です。PowerExchange をインストールする z/OS システム上の汎用または非公式の単位名。

デフォルトは 3390 です。

データクラス

読み取り専用です。SMS 専用であり、PowerExchange データセットのデフォルト SMS データクラスです。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

ライセンスキー

インストール用のライセンスキー。新しいライセンスキーがある場合は、それを入力します。そうでない場合は、以前のライセンスキーを受け入れます。

この設定は、INSTPARM ファイルの<license>変数に対応します。

[データセットグループの詳細] ページ (ホットフィックス)

データセットグループの情報を入力または確認します。

ホットフィックスデータセット

ホットフィックスデータセットのプロパティの表示または変更を行うには、このデータセットグループを選択します。

HLQ

ホットフィックスデータセットの高位修飾子 (HLQ)。必要に応じて修飾子レベルをいくつでも使用できます。

デフォルトは PWXSP です。

最大長は 26 文字です。

この設定は、INSTPARM ファイルの<patchlibname>変数に対応します。

ストレージクラス

SMS のみ。データセットグループの SMS ストレージクラス。

SMS ストレージクラスを指定した場合、ボリュームまたは単位の値を指定する必要はありません。

注: インストール済み環境の SMS 自動クラス選択 (ACS) ルーチンでは、SMS クラスの指定が無効であったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

この設定は、INSTPARM ファイルの<patchsmssc>変数に対応します。

ボリューム

データセットをインストールする z/OS システム上の DASD ボリュームシリアル番号 (VOLSER)。

この設定は、INSTPARM ファイルの<patchvol>変数に対応します。

管理クラス

SMS のみ。データセットグループの SMS 管理クラス。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

この設定は、INSTPARM ファイルの<patchmsmc>変数に対応します。

単位

データセットをインストールする z/OS システム上の汎用または非公式の単位名。

デフォルトは 3390 (必要な場合)

この設定は、INSTPARM ファイルの<patchunitl>変数に対応します。

データクラス

SMS のみ。データセットグループの SMS データクラス。

注: インストール済み環境の SMS ACS ルーチンでは、SMS クラスを指定できなかったり、指定した値が上書きされたりすることがあります。

この設定は、INSTPARM ファイルの<patchsmsdc>変数に対応します。

付録 A

アップグレードに関する考慮事項

この付録では、以下の項目について説明します。

- [アップグレードに関する考慮事項の概要, 178 ページ](#)
- [PowerExchange と PowerCenter のアップグレードの連携, 179 ページ](#)
- [アップグレードに関する考慮事項 PowerExchange 10.5.1 に関する, 181 ページ](#)
- [PowerExchange 10.5 のアップグレードに関する考慮事項, 181 ページ](#)
- [アップグレードに関する考慮事項 PowerExchange 10.4 に関する, 183 ページ](#)
- [PowerExchange 10.2 HotFix 2 のアップグレードに関する考慮事項, 183 ページ](#)
- [PowerExchange 10.2 HotFix 1 のアップグレードに関する考慮事項, 184 ページ](#)
- [PowerExchange 10.2 のアップグレードに関する考慮事項, 185 ページ](#)

アップグレードに関する考慮事項の概要

この章では、PowerExchange および PowerCenter のアップグレードに関する考慮事項について説明します。

以下の表に、アップグレードの考慮事項と、該当するユーザーを示します。

トピック	適用対象
「PowerExchange と PowerCenter のアップグレードの連携」 (ページ 179)	PowerExchange または PowerCenter をアップグレードする PowerExchange ユーザー
「アップグレードに関する考慮事項 PowerExchange 10.5.1 に関する」 (ページ 181)	以前のリリースから 10.5.1 にアップグレードする PowerExchange ユーザー
「PowerExchange 10.5 のアップグレードに関する考慮事項」 (ページ 181)	以前のリリースから 10.5 にアップグレードする PowerExchange ユーザー
「アップグレードに関する考慮事項 PowerExchange 10.4 に関する」 (ページ 183)	以前のリリースから 10.4 にアップグレードする PowerExchange ユーザー
「PowerExchange 10.2 HotFix 2 のアップグレードに関する考慮事項」 (ページ 183)	以前のリリースから 10.2 HotFix 2 にアップグレードする PowerExchange ユーザー

トピック	適用対象
「PowerExchange 10.2 HotFix 1 のアップグレードに関する考慮事項」 (ページ 184)	以前のリリースから 10.2 HotFix 1 にアップグレードする PowerExchange ユーザー
「PowerExchange 10.2 のアップグレードに関する考慮事項」 (ページ 185)	以前のリリースから 10.2 にアップグレードする PowerExchange ユーザー

PowerExchange をアップグレードする場合は、表の最初の 2 つのトピックを確認してください。また、アップグレードプロセス時にスキップするリリースについてのトピックも確認します。

例えば、PowerExchange 10.1 から 10.4 にアップグレードして 10.2 リリースおよび 10.2 ホットフィックスリリリースをスキップする場合は、次のトピックを確認してください。

- PowerExchange 10.4 のアップグレードに関する考慮事項
- PowerExchange 10.2 HotFix 2 のアップグレードに関する考慮事項
- PowerExchange 10.2 HotFix 1 のアップグレードに関する考慮事項
- PowerExchange 10.2 のアップグレードに関する考慮事項

PowerExchange と PowerCenter のアップグレードの連携

PWXPC は、PowerCenter と PowerExchange を接続する PowerCenter のコンポーネントです。PWXPC は、PowerExchange と PowerCenter のインタフェースを使用してこれらの製品を統合します。PowerCenter と PowerExchange は非常に緊密に統合されるため、PowerExchange と PowerCenter のアップグレードは慎重に計画する必要があります。

PowerExchange または PowerCenter のアップグレードを計画する際は、次の点を考慮します。

- PowerExchange のみ、または PowerCenter のみをアップグレードする場合は、PowerCenter と PowerExchange の相互運用性に関する考慮事項を確認します。
- CDC セッションを実行する場合は、PowerCenter のアップグレード後にセッションのコールドスタートが必要になることがあります。その場合、アップグレード前に CDC セッションの最終リスタートトークンを保存する必要があります。これにより、最終リスタートトークンを使用して、中断した時点から変更データの読み取りを開始できます。

CDC セッションのリスタートに関する考慮事項

PowerCenter 8.6.1 ホットフィックス 3 以降からアップグレードした後は、CDC セッションをウォームスタートして、中断した時点からセッションをリスタートできます。

以前のリリースから PowerCenter 8.6.1 ホットフィックス 3 以降にアップグレードした後は、CDC をコールドスタートする必要があります。セッションをコールドスタートする前に、セッションが中断した時点からリスタートするようにリスタートポイントを確立する必要があります。

PowerCenter をアップグレードする前のリスタートトークンの保存

PowerCenter をアップグレードする前に CDC セッションのリスタートポイントをキャプチャするには、次の手順に従います。

PowerCenter をアップグレードする前にリスタートトークンを保存するには:

1. すべての CDC セッションを正常にシャットダウンします。
2. すべての CDC セッションの最終リスタートトークンファイルが保存されていることを確認します。
移行元の PowerCenter リリースに応じて、次のように、PWXPC によってリスタートトークンが記録されるか、手動でリスタートトークンをリカバリします。
 - 8.1.1 SP2 より前の PowerCenter リリースから移行する場合は、CDC セッションの終了時に、PWXPC によって最終リスタートトークンがリスタートトークンファイルに書き込まれます。
 - PowerCenter 8.1.1 SP2～SP5 から移行する場合に、拡張リスタートを有効にしなかったときは、CDC セッションの終了時に、PWXPC によって最終リスタートトークンがリスタートトークンファイルに書き込まれます。
 - PowerCenter 8.1.1 SP2～SP5 から移行する場合に、拡張リスタートを有効にしたときは、すべての CDC セッションに対してリカバリを実行します。PWXPC によって、リスタートトークンを含むバックアップのリスタートトークンファイルがタイムスタンプ付きで作成されます。
 - PowerCenter 8.5 以降から移行する場合は、すべての CDC セッションに対してリカバリを実行します。PWXPC によって、リスタートトークンを使用してリスタートトークンファイルが更新されます。
3. 念のため、CDC セッションのターゲットであるすべてのリレーショナルテーブルをバックアップします。また、PowerCenter リカバリテーブルをバックアップします。
4. PowerCenter をアップグレードします。

重要: PowerCenter をアップグレードする前に最終リスタートトークンファイルを保存しなかった場合、セッションログを使用して、リスタートトークンファイルを手動で作成する必要があります。

PowerCenter 8.1.1 SP2 以降で実行されるセッションで、拡張リスタートが有効な場合は、NRDBCDC_RDR_12075 メッセージまたは PWXPC_12075 メッセージからのリスタートトークンを使用します。メッセージからのリスタートトークンを特別なオーバーライド文と共に使用して、CDC セッションのすべてのソースのリスタートトークンを取得できます。8.1.1 SP2 より前の PowerCenter リリースで実行されるセッションの場合、または拡張リスタートが有効でない場合は、リスタートトークンファイルのリスタートトークンを使用します。サポートが必要な場合は、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。

PowerCenter のアップグレード後における CDC セッションのリスタートポイントの確立

PowerCenter のアップグレード後に CDC セッションを開始する前に、リスタートポイントを確立します。

重要: PowerCenter のアップグレード前に、リスタートトークンを保存しておく必要があります。PowerCenter のアップグレード前にリスタートトークンを保存しなかった場合、対応については、Informatica グローバルカスタマサポートにお問い合わせください。

PowerCenter のアップグレード後に CDC セッションのリスタートポイントを確立するには:

1. すべての CDC セッションのリスタートトークンファイルにリスタートトークンが含まれていることを確認します。
移行元の PowerCenter リリースに応じて、次のように、PWXPC によってリスタートトークンが保存されます。
 - 8.1.1 SP2 より前の PowerCenter リリースから移行する場合は、セッションの終了時に、PWXPC によって最終リスタートトークンがセッションのリスタートトークンファイルに保存されます。
 - PowerCenter 8.1.1 SP2～SP5 から移行する場合に、拡張リスタートを有効にしなかったときは、セッションの終了時に、PWXPC によって最終リスタートトークンがセッションのリスタートトークンファイルに保存されます。

- PowerCenter 8.1.1 SP2～SP5 から移行する場合に、拡張リスタートを有効にしたときは、セッションリカバリ操作の終了時に、PWXPC によってリスタートトークンがタイムスタンプ付きのバックアップのリスタートトークンファイルに保存されます。各 CDC セッションのバックアップのリスタートトークンファイルをそのセッションのリスタートトークンファイルにコピーします。
 - PowerCenter 8.5 以降から移行する場合は、セッションリカバリ操作の終了時に、PWXPC によってリスタートトークンがリスタートトークンファイルに保存されます。
2. CDC セッションまたはワークフローをコールドスタートします。
- PWXPC によって、リスタートトークンファイルを使用して CDC セッションがリスタートされます。

アップグレードに関する考慮事項 PowerExchange 10.5.1 に関する

PowerExchange の旧リリースから PowerExchange 10.5.1 にアップグレードする場合は、アップグレードプロセスを開始する前にこれらのアップグレードに関する考慮事項を確認してください。

IBM i での PowerExchange へのアップグレードに関する考慮事項

IBM i で PowerExchange をアップグレードした後、PowerExchange リスナを開始する前に、次のコマンドを発行して、現在のリリースとの互換性を確保するためにオブジェクトを更新します。

```
CRTDTLENVF DTLLIB(DTLLIB) DATALIB(DATALIB)
```

説明:

- *DTLLIB* は、PowerExchange ソフトウェアライブラリです。
- *DATALIB* は、設定ソースファイル、ストアードプロシージャ、キャプチャ登録および圧縮ファイルのデータファイル、メッセージログファイル、メッセージキューなどのオブジェクトを含む PowerExchange ライブラリです。

PowerExchange 10.5 のアップグレードに関する考慮事項

PowerExchange の旧リリースから PowerExchange 10.5 にアップグレードする場合は、アップグレードプロセスを開始する前にこれらのアップグレードに関する考慮事項を確認してください。

CICS TS 5.6 をサポートする CICS/VSAM ECCR プログラムの新しい SAMPLIB メンバ

PowerExchange 10.5 では、新しくサポートされるようになった CICS Transaction Server (TS) バージョン 5.6 用の CICS/VSAM ECCR プログラムおよびトランザクションの定義のための SAMPLIB ライブラリの #CICS73 メンバが追加されました。

CICS/VSAM ECCR プログラムおよびトランザクションの定義が変更されたため、PowerExchange 10.5 にアップグレードした後に CICS 領域を再起動する必要があります。

IMS 同期 CDC 用の PowerExchange ECCR CRG.LOAD ライブラリの更新されたコンポーネント

PowerExchange 10.5 には、BMC Software CHANGE RECORDING FACILITY および BMC AMI Database Integrity for IMS 製品のコンポーネントが含まれています。PowerExchange は、これらのコンポーネントの利用可能な最新バージョンを提供します。

注: これらのコンポーネントは、BMC AMI Fast Path Online Restructure for IMS（以前の Fast Path Online Restructure/EP）、BMC AMI Online Reorg for IMS（以前の BMC MAXM Reorg/Online for IMS）、CONCURRENT REORG などの他の BMC ソフトウェア製品の一部でもあります。

PowerExchange が提供する CRG ソフトウェア、または CRG コードを含むこれらの BMC ソフトウェア製品のいずれかを使用できます。

重要: いずれかの BMC ソフトウェア製品のサポート対象バージョンがある場合、CRG ソフトウェアの代わりに BMC ソフトウェア製品を使用することをお勧めします。

- BMC ソフトウェア製品のいずれかを使用する場合、『*z/OS 用 PowerExchange CDC ガイド*』の「IMS 同期変更データキャプチャ」の章に記載されているとおり、製品が PowerExchange で IMS 同期 CDC に求める最小バージョンを満たしていることを確認してください。

また、現在の PowerExchange バージョンは、CRG コードを提供する次の BMC 製品バージョンで認定されていることに留意注意してください。

- CHANGE RECORDING FACILITY: バージョン 5.1.00 レベル 2101
- BMC AMI Database Integrity for IMS: バージョン 5.1.00 レベル 2101
- BMC AMI Fast Path Online Restructure for IMS: バージョン 4.1.00 レベル 2101

認定バージョンより前の製品を使用している場合は、認定バージョンへの製品のアップグレードを検討してください。

- CRG ソフトウェアを使用する場合は、PowerExchange をアップグレードした後に、*hlq.SAMPLIB* ライブラリの CRGUMOD または CRGCLINK ジョブをもう一度実行し、DBRC 変更をインストールします。そうしない場合、IMS 同期 ECCR がソースセグメントの変更をキャプチャしようとするときに、DLIODDCx モジュールで、異常終了などのイベントによって変更キャプチャが失敗することがあります。CRGUMOD または CRGCLINK ジョブを実行した後、IMS 制御領域を再起動します。

IMS 同期 CDC ソースを使用したセッションのターゲットの再実体化

ソースが 255 を超えるエリアを持つ高速バスデータベースであり、次の条件のいずれかに該当する場合、PowerExchange 10.5 をインストールした後に IMS 同期 CDC ソースを持つ CDC セッションでターゲットを再実体化する必要があります。

- キーまたは一意キーのないセグメントセグメントからデータをキャプチャしている。
- データベース階層内でキーまたは一意キーのないセグメントの下位にあるセグメントからデータをキャプチャしている。
- データベースに対して定義されたデータマップのいずれかで GetDatabaseKey 関数または GetIMSRBByLevel 関数を使用している。

PowerExchange 10.5 のインストール後にターゲットを再実体化しない場合、IMS 連結キー、または GetDatabaseKey 関数あるいは GetIMSRBByLevel 関数の結果に依存するターゲットを更新する際に変更適用プロセスでエラーが発生する可能性があります。

アップグレードに関する考慮事項 PowerExchange 10.4 に関する

PowerExchange の旧リリースから PowerExchange 10.4 にアップグレードする場合は、アップグレードプロセスを開始する前にこれらのアップグレードに関する考慮事項を確認してください。

IMS 同期 CDC 用の PowerExchange ECCR CRG.LOAD ライブラリの更新されたコンポーネント

PowerExchange 10.4.0 により、IMS 同期 CDC 用の PowerExchange CRG.LOAD ライブラリが更新され、BMC ソフトウェアの CHANGE RECORDING FACILITY コンポーネント、DATABASE INTEGRITY PLUS コンポーネント、または Fast Path Online Restructure/EP コンポーネントの入手可能な最新バージョンが提供されます。

PowerExchange が提供する CRG ソフトウェア、または CRG コードを含むこれらの BMC ソフトウェア製品のいずれかを使用できます。

重要: いずれかの BMC ソフトウェア製品のサポート対象バージョンがある場合、Informatica では、CRG ソフトウェアの代わりに BMC ソフトウェア製品を使用することをお勧めします。

- BMC ソフトウェア製品のいずれかを使用する場合、『*z/OS 用 PowerExchange CDC ガイド*』の「IMS 同期変更データキャプチャ」の章に記載されているとおり、製品が PowerExchange で IMS 同期 CDC に求める最小バージョンを満たしていることを確認してください。

注: IMS 15 の場合、PowerExchange 10.4.0 では、BMC ソフトウェア製品の次の最小バージョンが必要です。

- CHANGE RECORDING FACILITY : バージョン 5.1.00 レベル 1907、BMC 修正 BQQ4590 を含む
- DATABASE INTEGRITY PLUS : バージョン 5.1.00 レベル 1907、BMC 修正 BQQ4590 を含む
- Fast Path Online Restructure/EP: バージョン 4.1.00 レベル 1907、BMC 修正 BQQ4590 を含む

以前の製品バージョンを使用する場合は、サポート対象の最小バージョン以降にアップグレードしてください。

- CRG ソフトウェアを使用する場合は、PowerExchange をアップグレードした後に、*hlq.SAMPLIB* ライブラリの CRGUMOD または CRGCLINK ジョブをもう一度実行し、DBRC 変更をインストールします。そうしない場合、IMS 同期 ECCR がソースセグメントの変更をキャプチャしようとするときに、DLIODDCx モジュールで、異常終了などのイベントによって変更キャプチャが失敗することがあります。CRGUMOD または CRGCLINK ジョブを実行した後、IMS 制御領域を再起動します。

PowerExchange 10.2 HotFix 2 のアップグレードに関する考慮事項

PowerExchange の旧リリースから PowerExchange 10.2 HotFix 2 にアップグレードする場合は、アップグレードプロセスを開始する前にこれらのアップグレードに関する考慮事項を確認してください。

CICS/TS 5.5 をサポートする CICS/VSAM ECCR プログラムの新しい SAMPLIB メンバ

PowerExchange 10.2 HotFix 2 では、新しくサポートされるようになった CICS Transaction Server (TS) バージョン 5.5 用の CICS/VSAM ECCR プログラムおよびトランザクションの定義のための SAMPLIB ライブラリに #CICSV72 メンバが追加されました。

CICS/VSAM ECCR プログラムおよびトランザクションの定義が変更されたため、PowerExchange 10.2 HotFix 2 にアップグレードした後に、CICS 領域を再起動する必要があります。

PowerExchange ロgger CDCT ファイルに追加されたチェックサム

PowerExchange 10.2 HotFix 2 以降、PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) の CDCT ファイル内にあるレコードのチェックサムテストを実行し、破損したレコードを検出して、CDCT ファイルから情報を読み取りながら潜在的なエラーを回避しています。

CDCT ファイルへのチェックサムの追加によって、PowerExchange リリース 10.2 HotFix 2 より前のバージョンとの互換性がなくなります。10.2 HotFix 2 を適用する前に、既存の CDCT ファイルのバックアップを取ってください。そうすれば、10.2 HotFix 2 より前のリリースにフォールバックする必要がある場合に、バックアップから CDCT ファイルを復元できます。

PowerExchange 10.2 HotFix 1 のアップグレードに関する考慮事項

PowerExchange の旧リリースから PowerExchange 10.2 HotFix 1 にアップグレードする場合は、アップグレードプロセスを開始する前にこれらのアップグレードに関する考慮事項を確認してください。

IMS 同期 CDC 用の PowerExchange ECCR CRG.LOAD ライブラリの更新されたコンポーネント

PowerExchange 10.2 HotFix 1 が含まれます。これにより、IMS 同期 CDC 用の PowerExchange CRG.LOAD ライブラリが更新され、BMC ソフトウェアの CHANGE RECORDING FACILITY コンポーネントおよび DATABASE INTEGRITY PLUS コンポーネントの入手可能な最新バージョンが提供されます。

CRG ソフトウェアを使用する場合は、PowerExchange をアップグレードした後に、*hlq*.SAMPLIB ライブラリの CRGUMOD または CRGCLINK ジョブをもう一度実行し、DBRC 変更をインストールします。そうしない場合、IMS 同期 ECCR がソースセグメントの変更をキャプチャしようとするときに、DLIODDCx モジュールで、異常終了などのイベントによって変更キャプチャが失敗することがあります。CRGUMOD または CRGCLINK ジョブを実行した後、IMS 制御領域を再起動します。

重要: BMC Software の CHANGE RECORDING FACILITY、DATABASE INTEGRITY PLUS、または Fast Path Online Restructure/EP 製品のサポートされているバージョンがある場合は、CRG ソフトウェアではなく BMC ソフトウェア製品を使用します。この場合、CRGUMOD または CRGCLINK ジョブを実行する必要はありません。BMC ソフトウェアの製品バージョンは、PowerExchange 10.2 HotFix 1 がお使いの IMS バージョンをサポートする最も古い BMC バージョンと同じか、それ以降のバージョンになるようにします。

CICS/TS 5.4 をサポートする CICS/VSAM ECCR プログラムの新しい SAMPLIB メンバ

PowerExchange 10.2 HotFix 1 では、新しくサポートされるようになった CICS Transaction Server (TS) バージョン 5.4 用の CICS/VSAM ECCR プログラムおよびトランザクションの定義のための SAMPLIB メンバ #CICSV71 が追加されました。

CICS/VSAM ECCR プログラムおよびトランザクションの定義が変更されたため、PowerExchange 10.2 HotFix 1 にアップグレードした後で CICS リージョンを再起動する必要があります。

PowerExchange 10.2 のアップグレードに関する考慮事項

PowerExchange の旧リリースから PowerExchange 10.2 にアップグレードする場合は、アップグレードプロセスを開始する前にこれらのアップグレードに関する考慮事項を確認してください。

i5/OS での PowerExchange へのアップグレードに関する考慮事項

既存の PowerExchange インストールを、i5/OS でバージョン 10.2 にアップグレードする場合、製品をアップグレードしてから PowerExchange リスナを起動する前に次のコマンドを実行して、PowerExchange が使用するメタデータオブジェクトを再構築します。

```
ADDLIB LIB(DTLLIB) POSITION(*FIRST)  
CRTDTLENVF DTLLIB(DTLLIB) DATALIB(DATALIB)
```

説明:

- *DTLLIB* は、PowerExchange ソフトウェアライブラリです。
- *DATALIB* は、CCT ファイル、PowerExchange 構成パラメータファイル、LISTENER および DTLOS_MSQG メッセージキューなどのデータファイルが含まれる PowerExchange ライブラリです。

リモートの DB2 for i5/OS データベースにアクセスする必要がある場合は、次のように CRTDTLENVF コマンドで追加のパラメータを指定する必要があります。

```
CRTDTLENVF DTLLIB(DTLLIB) DATALIB(DATALIB) RMTREDDIRE(DATABASE_NAME) RMTSYSNAME(HOST_NAME) RMTASPDV(*)  
OSLEVEL(OS_LEVEL)
```

IMS 同期 CDC 用の PowerExchange ECCR CRG.LOAD ライブラリの更新されたコンポーネント

PowerExchange 10.2 バージョンにはパッチ P802235 が含まれます。これにより、IMS 同期 CDC 用の PowerExchange CRG.LOAD ライブラリが更新され、BMC ソフトウェアの CHANGE RECORDING FACILITY コンポーネントおよび DATABASE INTEGRITY PLUS コンポーネントの入手可能な最新バージョンが提供されます。

CRG ソフトウェアを使用する場合は、PowerExchange をアップグレードした後に、*hlq*.SAMPLIB ライブラリの CRGUMOD または CRGCLINK ジョブをもう一度実行し、DBRC 変更をインストールします。そうしない場合、IMS 同期 ECCR がソースセグメントの変更をキャプチャしようとするときに、DLIODDCx モジュールで、異常終了などのイベントによって変更キャプチャが失敗することがあります。CRGUMOD または CRGCLINK ジョブを実行した後、IMS 制御領域を再起動します。

重要: BMC Software の CHANGE RECORDING FACILITY、DATABASE INTEGRITY PLUS、または Fast Path Online Restructure/EP 製品のサポートされているバージョンがある場合は、CRG ソフトウェアではなく BMC

ソフトウェア製品を使用します。この場合、CRGUMOD または CRGCLINK ジョブを実行する必要はありません。BMC ソフトウェア社の製品のバージョンが、ご使用の IMS のバージョンに関して PowerExchange 10.2 でサポートしている最低限の BMC バージョンと同じかそれ以降であることを確認してください。

付録 B

PowerExchange 環境

この付録では、以下の項目について説明します。

- [PowerExchange 環境の概要, 187 ページ](#)
- [i5/OS 上の PowerExchange 環境, 188 ページ](#)
- [Linux、UNIX、および Windows 上の PowerExchange 環境, 190 ページ](#)
- [z/OS 上の PowerExchange 環境, 193 ページ](#)

PowerExchange 環境の概要

PowerExchange 環境には、PowerExchange ソフトウェアと PowerExchange データファイルが含まれています。PowerExchange データには、PowerExchange が処理する設定データ、PowerExchange データオブジェクト、およびソースデータが含まれます。

PowerExchange データの例は以下のとおりです。

- コンフィギュレーションファイル
- ライセンスファイル
- データマップ
- 抽出マップ
- キャプチャ登録
- PowerExchange ロggerログファイル
- PowerExchange Condense 要約ファイル

次の節で、各オペレーティングシステムの PowerExchange 環境について詳しく説明します。この情報を使用して以下を実行します。

- 初めてインストールを実行する前に PowerExchange 環境を計画する
- 新しいリリースへの移行時に既存の PowerExchange 環境をコピーする
- バックアップ戦略を計画または実装する

i5/OS 上の PowerExchange 環境

この節では、i5/OS 上での PowerExchange データライブラリとデータファイルおよび PowerExchange に対するそれらのデータの場所の指定方法について説明します。コピーするデータファイル、それらのデータファイルの保存場所、およびそれらのデータファイルを指す設定パラメータと PowerExchange 起動コマンドを指定する方法を計画するときに、この情報を使用します。

i5/OS 上での PowerExchange 環境の詳細については、以下のガイドを参照してください。

- 『PowerExchange バルクデータ移動ガイド』
- 『PowerExchange CDC ガイド (i5/OS 版)』

i5/OS 上の PowerExchange データライブラリとデータファイル

i5/OS に PowerExchange の新しいリリースをインストールするたびに、PowerExchange ソフトウェアおよびデータの新しい場所を指定します。PowerExchange データライブラリの場所は、そのライブラリに応じて、インストール前またはインストール時に指定します。

以下の表に各ライブラリの作成方法を示します。

ライブラリ	作成元
<i>condlib</i>	CONDLIB パラメータで指定された CRTPWXENV インストールコマンド
<i>cpplib</i>	CPPLIB パラメータで指定された CRTPWXENV インストールコマンド
<i>datalib</i>	DATALIB パラメータで指定された CRTPWXENV インストールコマンド。 インストールプロセスによって、このライブラリに DBMOVER および CAPTPARM 構成ファイルがインストールされます。
<i>dtllib</i>	PowerExchange をインストールする前のユーザー。 インストールプロセスによって、このライブラリに LICENSE(KEY)ライセンスファイルがインストールされます。
STDATAMAPS	PowerExchange をインストールする前のユーザー。ライブラリ名を選択できません。デフォルトは STDATAMAPS です。

以下の表に、i5/OS 上の PowerExchange データファイルとメンバの概要を示します。

ライブラリ	ファイルまたはメンバ	説明	バルク	CDC
<i>condlib</i>	PARTIAL	部分圧縮ファイル。ファイルスイッチごとに、独立したメンバが作成されます。	-	X
<i>condlib</i>	FULLnnnn	完全圧縮ファイル	-	X
<i>condlib</i>	CHKPT	チェックポイントメンバを含むファイル。各メンバには、Vn という名前が付けられます。この n は、0 から 9 までの数値になります。	-	X
<i>condlib</i>	CDCT	圧縮制御テーブル。要約ファイルに関する情報が含まれます。	-	X

ライブラリ	ファイルまたはメンバ	説明	バルク	CDC
<i>condlib</i>	CDEP	ODBC 接続を使用する各抽出プロセスに関する情報が含まれます。	-	X
<i>condlib</i>	CFGCOND (CAPTPARM)	PowerExchange Condense で使用されるパラメータが含まれます。	-	X
<i>condlib</i>	PWXJRNLCCK (PWXJRNLCCK)	ジャーナルのロックレコードを書き込む PowerExchange ロックファイル	-	X
<i>cpplib</i>	D3instance instance は登録グループの作成時に指定されるコレクション ID。	PowerExchange 抽出マップ	-	X
<i>datalib</i>	CFG	DBMOVER および CAPTPARM 構成メンバが含まれるライブラリファイル	X	X
<i>datalib</i>	CFG(DBMOVER)	PowerExchange 構成メンバ	X	X
<i>datalib</i>	CFG(CAPTPARM)	PowerExchange Condense のサンプル構成ファイル	-	X
<i>datalib</i>	CCT	キャプチャ登録を含むファイル	-	X
<i>dtllib</i>	LICENSE(KEY)	ライセンスキーメンバ	X	X
STDATAMAPS	<i>schema(mapname)</i> 説明: - <i>schema</i> はデータマップ名のスキーマ名部分を表す。 - <i>mapname</i> はデータマップ名のマップ名部分を表す。	PowerExchange データマップ	X	-

i5/OS 上の PowerExchange データを指す設定パラメータ

設定パラメータを使用して、製品をインストールしたときに PowerExchange データの保存先として選択した場所を指定します。

以下の表に、コンフィギュレーションファイル、ファイル内のパラメータ、およびそれらのパラメータが指すデータを示します。

構成ファイル	パラメータ	指すデータ
DBMOVER	CPX_DIR	抽出マップ
DBMOVER	DMX_DIR	データマップ

構成ファイル	パラメータ	指すデータ
CAPTPARM	CHKPT_BASENAME	PowerExchange Condense チェックポイントファイル
CAPTPARM	COND_DIR	PowerExchange Condense 要約ファイル

i5/OS 上の PowerExchange 起動コマンドのファイルパラメータ

PowerExchange Listener または PowerExchange Condense を起動するときに、構成ファイルとライセンスファイルの場所を指定するパラメータを含めることができます。

以下の表に、PowerExchange Listener または PowerExchange Condense の起動時に含めることができるオプションのパラメータを示します。

プログラム	目的	パラメータ	指すデータ
DTLLST	PowerExchange Listener	CONFIG	DBMOVER メンバ
DTLLST	PowerExchange Listener	LICENSE	ライセンスキー
DTLCACON	PowerExchange Condense	CONFIG	DBMOVER メンバ
DTLCACON	PowerExchange Condense	CS	CAPTPARM メンバ
DTLCACON	PowerExchange Condense	LICENSE	ライセンスキー

Linux、UNIX、および Windows 上の PowerExchange 環境

この節では、Linux、UNIX、および Windows 上での PowerExchange データディレクトリとデータファイルおよび PowerExchange に対するそれらのデータの場所の指定方法について説明します。コピーするデータファイル、それらのデータファイルの保存場所、およびそれらのデータファイルを指す環境変数、起動コマンドオプション、設定パラメータを指定する方法を計画するときに、この情報を使用します。

Linux、UNIX、および Windows 上での PowerExchange 環境の詳細については、以下のガイドを参照してください。

- *PowerExchange バルクデータ移動ガイド*
- *Linux、UNIX、Windows 用 PowerExchange CDC ガイド*

Linux、UNIX、および Windows 上の PowerExchange データファイルとディレクトリ

以下の表に、Linux、UNIX、および Windows 上の PowerExchange データディレクトリとファイルの概要を示します。

ディレクトリ	内容	バ ル ク	CDC
CAPT_PATH パラメータで指定されたディレクトリ	キャプチャ登録を含む CCT ファイル。	-	X
CAPT_PATH パラメータで指定されたディレクトリ	ODBC 接続を使用する PowerCenter 抽出用のアプリケーション名を含む CDEP ファイル。	-	X
CAPT_PATH パラメータで指定されたディレクトリ	CDCT ファイル。PowerExchange ロggerのログファイルとリスタートポイントに関する情報が入っています。	-	X
CAPT_XTRA パラメータで指定されたディレクトリ	抽出マップ。	-	X
DMX_DIR で指定されたディレクトリ	データマップ。	X	X
EXT_CAPT_MASK パラメータで指定されたディレクトリ	PowerExchange ロggerログファイル。	-	X
installation_directory	ライセンスキーと以下のファイルのサンプルを含む PowerExchange ソフトウェア。 <ul style="list-style-type: none">- dbmover.cfg。PowerExchange コンフィギュレーションファイル。- pwxcl.cfg。PowerExchange ロggerコンフィギュレーションファイル。- pwxclgrp.cfg。PowerExchange ロggerグループ定義のコンフィギュレーションファイル。- ディレクトリ例 (Windows のみ)。データマップ、抽出マップ、キャプチャ登録、パーソナルメタデータ、およびその他の PowerExchange データ例のサブディレクトリを含みます。- パッケージディレクトリ (Windows のみ)。Microsoft SQL Server 管理オブジェクト (SMO) のフレームワーク、関連パッケージおよびネイティブクライアントを提供するサブディレクトリを含みます。	X	X

注: 製品のインストール時にインストールディレクトリを指定します。他のディレクトリは選択した名前の下に作成する必要があります。

Linux、UNIX、および Windows 上の PowerExchange ファイルを参照する設定パラメータ

PowerExchange を初めてインストールした後や新しい PowerExchange 環境の新しいリリースに移行した後は、PowerExchange ファイルのディレクトリを作成する必要があります。次に、該当する設定パラメータで、それらのディレクトリを参照します。

以下の表に、dbmover および新しいファイルの場所を参照するように設定する PowerExchange ログガーの設定パラメータを示します。

コンフィギュレーションファイル	パラメータ	参照先
dbmover.cfg	CAPT_PATH	次の制御ファイルが含まれるディレクトリ - キャプチャ登録が含まれる CCT ファイル - アプリケーション名および実行された抽出処理に関するおよび情報が含まれる CDEP ファイル - PowerExchange ログガーの CDCT ファイル これらのファイルは NAS または SAN ストレージにありません。
dbmover.cfg	CAPT_XTRA	抽出マップ
dbmover.cfg	DMX_DIR	データマップが含まれるファイル
pxxccl.cfg	EXT_CAPT_MASK	PowerExchange ログガーログファイル

Linux、UNIX、Windows で、PowerExchange のライセンスファイル、構成ファイル、メッセージログファイルをポイントする環境変数

PowerExchange インストールプログラムにより、インストールディレクトリにコンフィギュレーションファイルとライセンスファイルがインストールされます。新しい PowerExchange バージョンへのアップグレードを可能な限り簡単に実行できるようにするには、これらのファイルを別の場所に移動します。

PowerExchange では、デフォルトで現在の作業ディレクトリにメッセージログファイルも作成されます。現在の作業ディレクトリとは別のディレクトリにメッセージログファイルを作成し、メッセージログファイルの検索をさらに簡単にすることができます。

DBMOVER ファイル、ライセンスキーファイル、メッセージログファイルの新しい場所を指す環境変数を使用できます。

以下の表に、環境変数とそれらが指すファイルを示します。

環境変数	指すデータ
DETAIL_LOGPATH	PowerExchange のメッセージログファイル
PWX_CONFIG	PowerExchange DBMOVER 構成ファイル
PWX_LICENSE	PowerExchange ライセンスキー

注: Linux、UNIX、Windows システムでは、DBMOVER 構成ファイルに LOGPATH 文を定義して、PowerExchange メッセージログファイルの一意的パスとディレクトリを指定することもできます。また、DETAIL_LOGPATH 環境変数に値を指定する場合、この環境変数は LOGPATH 文を上書きします。

Linux、UNIX、および Windows 上のデータファイルを指す起動コマンドパラメータ

PowerExchange Listener または PowerExchange ロgger を Linux、UNIX、または Windows で起動すると、デフォルトファイルをオーバーライドするコンフィギュレーションファイルとライセンスファイルを指すパラメータを含めることができます。

以下の表に、PowerExchange Listener または PowerExchange ロgger を起動するために含めることができるオプションのパラメータを示します。

コマンド	目的	パラメータ	指すデータ
dtllst	PowerExchange Listener の起動	config	DBMOVER 構成ファイル
dtllst	PowerExchange Listener の起動	license	ライセンスキー
pwxcl	PowerExchange ロgger の起動	config	DBMOVER 構成ファイル
	PowerExchange ロgger の起動	cs	PowerExchange ロgger 構成ファイル
pwxcl	PowerExchange ロgger の起動	license	ライセンスキー

z/OS 上の PowerExchange 環境

この節では、z/OS 上での PowerExchange データセットおよび PowerExchange に対するそれらのデータセットの場所の指定方法について説明します。コピーするデータファイル、それらのデータファイルの保存場所、およびそれらのデータファイルを指す DD 文と設定パラメータを指定する方法を計画するときに、この情報を使用します。

z/OS 上での PowerExchange 環境の詳細については、以下のガイドを参照してください。

- 『PowerExchange バルクデータ移動ガイド』

- 『PowerExchange CDC ガイド (z/OS 版)』

z/OS 上の PowerExchange データセット

製品のインストール時に PowerExchange データ環境を設定します。z/OS Installation Assistant でシーケンシャル/PDS、VSAM、およびアーカイブデータセットのデータセットプレフィックスを指定します。z/OS Installation Assistant ではこの情報を設定情報とともに使用して、JCL をカスタマイズし、その JCL を実行してライブラリを作成します。

以下の表に、z/OS 上の PowerExchange データを含むデータセットの概要を示します。

データセット	説明	作成元	バルク	CDC
AGENTREP	キャプチャ登録サブタスクの制御に関連する PowerExchange エージェントパラメータを指定するシーケンシャルデータセット。	RUNLIB の SETUPCC1 メンバ。	-	X
アーカイブログ	PowerExchange ロggerのアーカイブログデータセット。	RUNLIB で SETUPCC2 メンバによって作成された EDMUPARM を使用する PowerExchange ロgger。このメンバは、ARCHIVE_OPTIONS 値を指定します。	-	X
C1.CACHE C2.CACHE	PowerExchange エージェントのキャッシュデータセット。	RUNLIB の SETUPCC1 メンバ。	-	-
CCT	キャプチャ登録を含む VSAM KSDS データセット。	RUNLIB の SETUPVSM メンバ。	-	X
CDCT	PowerExchange Condense 情報を含む VSAM KSDS データセット。	RUNLIB の SETUPVSM メンバ。	-	X
CDEP	キャプチャ抽出履歴情報を含む VSAM KSDS データセット。	RUNLIB の SETUPVSM メンバ。	-	X
チェックポイントファイル	要約処理のチェックポイントを含む VSAM KSDS データセット。	PowerExchange Condense で必要な場合に作成されるチェックポイントファイル。データセットプレフィックスは、CAPTPARM コンフィギュレーションファイルの CHKPT_BASENAME パラメータで指定されます。	-	X
要約ファイル	圧縮ジョブによって発見されたアクティブな登録に対する変更データが含まれるファイル。PowerExchange Condense は、部分圧縮を指定するキャプチャ登録のシーケンシャルデータセットと、完全圧縮を指定するキャプチャ登録の VSAM KSDS データセットを作成します。	PowerExchange Condense で必要な場合に作成される要約ファイル。データセットプレフィックスは、CAPTPARM コンフィギュレーションファイルの EXT_CAPT_MASK パラメータで指定されます。	-	X
DATAMAPS	PowerExchange データマップを含む VSAM KSDS データセット。	RUNLIB の XIBLK100 または SETUPVSM メンバ。	X	X

データセット	説明	作成元	バルク	CDC
DTLCAMAP	抽出マップを含む VSAM KSDS データセット。	RUNLIB の SETUPVSM メンバ。	-	X
ERDS01 ERDS02	PowerExchange ロggerが再起動情報とアクティブログとアーカイブログのデータセット名を記録するために使用する緊急リスタートデータセット (ERDS) と呼ばれる VSAM KSDS データセット。	RUNLIB の SETUPVSM メンバ。	-	X
LOGSCAT	IDMS ログベース ECCR の PowerExchange ログカタログ。	RUNLIB の SETUPVSM メンバ。	-	-
PCAT	Adabas ECCR で使用される VSAM KSDS データセット。	RUNLIB の SETUPVSM メンバ。	-	X
PRILOG.DS01 PRILOG.DS02 PRILOG.DS03	プライマリアクティブログデータセットとして PowerExchange ロggerで使用する VSAM ESDS データセット。	RUNLIB の SETUPVSM メンバ。	-	X
PROCLIB	PowerExchange 開始タスクプロシージャを含む PDS。	RUNLIB の SEUPBLK メンバ。 RUNLIB の XIZZZ998 メンバによって設定されます。	X	X
RUNLIB	PowerExchange をインストールするジョブ、PowerExchange を設定および実行するジョブ、および以下のコンフィギュレーションメンバとライセンスメンバを含む PDS。 - AGENTCTL。PowerExchange エージェント設定パラメータを含みます。 - CAPTxxxx。データソースのサンプルの PowerExchange Condense CAPTPARM パラメータを含みます。 - DBMOVER。PowerExchange 設定パラメータを含みます。 - LICENSE。ライセンスキーメンバ。	製品をインストールする前にユーザーによって割り当てられます。z/OS Installation Assistant によって設定されます。	X	X
SECLOG.DS01 SECLOG.DS02 SECLOG.DS03	セカンダリアクティブログデータセットとして PowerExchange ロggerで使用する VSAM ESDS データセット。	RUNLIB の SETUPVSM メンバ。デュアルアクティブロギングは、RUNLIB の SETUPCC2 メンバによって作成された EDMUPARM で指定されます。	-	X
SR2TOTAL	IDMS ログベースの CDC が選択された場合は、IDMS CDC 情報を含むシーケンシャルデータセット。	RUNLIB の SETUPCC1 メンバ。 DTLUCSR2 ユーティリティで設定されます。	-	X

データセット	説明	作成元	バルク	CDC
SR2OUT	IDMS ログベースの CDC が選択された場合は、キャプチャ用に登録された IDMS データベースの SR2/SR3 リンク情報を含むシーケンシャルデータセット。	RUNLIB の SETUPCC1 メンバ。 DTLUCSR2 ユーティリティで設定されます。	-	X
USERLIB	以下のメンバを含む PowerExchange CDC 用の制御パラメータを含むロードライブラリ。 - EDMSDIR。PowerExchange CDC の設定パラメータを含みます。 - EDMUPARM。PowerExchange ロガーの設定パラメータを含みます。	RUNLIB の SETUPCC1 メンバ。 RUNLIB の SETUPCC2 および XICDC600 メンバによって設定されます。	-	X

z/OS 上の PowerExchange データを指す DD 文

PowerExchange コンポーネントの JCL には、PowerExchange データを指す DD 文が含まれます。

以下の表に、DD 文、JCL に DD 文が含まれるコンポーネント、および DD 文が指すデータセットまたはメンバを示します。

DD 文	PowerExchange コンポーネント	指すデータ
DTLCACDC	PowerExchange Condense、 PowerExchange リスナ	CDCT データセット
DTLCACDE	PowerExchange Condense、 PowerExchange リスナ	CDEP データセット
DTLADKSD	Adabas ECCR	PCAT データセット
DTLAMCPR	PowerExchange Condense、 PowerExchange リスナ	CCT データセット
DTLCACFG	PowerExchange Condense、 ECCR	PowerExchange Condense の CAPTPARM パラメータ、 一部の ECCR の設定パラメータ
DTLCAMAP	PowerExchange Condense、 PowerExchange リスナ	データマップ
DTLCFG	PowerExchange エージェント、 PowerExchange Condense、 PowerExchange リスナ、 ECCR	DBMOVER 構成メンバ
DTLKEY	PowerExchange エージェント、 PowerExchange Condense、 PowerExchange リスナ、 ECCR	LICENSE メンバ

DD 文	PowerExchange コンポーネント	指すデータ
EDMPARMS	PowerExchange エージェント、PowerExchange Condense、ECCR、PowerExchange リスナ、PowerExchange ロgger	EDMSDIR モジュールオプションを含む USERLIB ライブラリ
EDMSCTL	PowerExchange エージェント	EDMSCTL の AGENTCTL パラメータおよび LOGSCAT の IDMS ログベースの ECCR
ERDS01	PowerExchange ロgger	プライマリ ERDS データセット
ERDS02	PowerExchange ロgger	セカンダリ ERDS データセット
LOGSCAT	IDMS ECCR	IDMS ECCR の PowerExchange ログカタログ

付録 C

IBM i への手動インストール

この付録では、以下の項目について説明します。

- [IBM i 手動インストールの概要, 198 ページ](#)
- [IBM i へのフルインストールの実行, 198 ページ](#)
- [PowerExchange の IBM i でのアップグレード, 207 ページ](#)
- [IBM i へのホットフィックスのインストール, 210 ページ](#)

IBM i 手動インストールの概要

この付録では、PowerExchange IBM i インストーラーを使用せずに、IBM i に PowerExchange を手動でインストールする手順について説明します。この付録では、フルインストール、アップグレード、およびホットフィックスのインストールの手順について説明します。

IBM i へのフルインストールの実行

PowerExchange を初めてインストールする場合、または新しい場所にインストールする場合は、フルインストールを実行します。

IBM i に PowerExchange をインストールする前に

PowerExchange をインストールする前に、インストール前の要件が満たされていることを確認します。

一般的なインストール前の要件

以下のタスクを実行するには、このガイドの情報を確認してください。

- PowerExchange で、使用しているオペレーティングシステムおよびデータソースのバージョンおよびリリースレベルがサポートされていることを確認します。
- 有効なライセンスキーを取得します。
- 新しい PowerExchange リリースが PowerCenter インストールで動作できることを確認します。
- 以前のリリースからアップグレードして PowerExchange の複数のリリースを実行する場合は、新しい PowerExchange リリースが既存の PowerExchange インストールで動作できることを確認します。

- 以前のリリースからアップグレードする場合は、インストール前に必要なアップグレード作業を実行します。

ユーザー ID の要件

オプションで、PowerExchange のインストールの所有者または管理者のユーザー ID を作成します。IBM i プラットフォームの異なる場所からソースデータとターゲットデータにアクセスするのに十分な権限と特権がユーザー ID に付与されていることを確認します。

この製品をインストールするには、必要な権限を持つユーザープロファイルでログインしている必要があります。以下のいずれかのユーザープロファイルを使用します。

- IBM が提供する QSECOFR ユーザープロファイル
- *SECOFR に設定された USRCLS パラメータおよび*USRCLS に設定された SPCAUT パラメータにより定義されるユーザープロファイル
- USRCLS パラメータが*SECOFR に設定されていない場合、少なくとも以下の SPCAUT 値を含んでいるユーザープロファイル: *SECADM、*ALLOBJ、および*JOBCTL

ディスク容量の要件

十分なディスク領域があることを確認します。PowerExchange には、約 140MB のディスク領域が必要です。送受信されるファイルの数とデータベースの数に応じて、追加のディスク容量が必要になる場合があります。

IBM i システム値の要件

PowerExchange では、PowerExchange バルクデータ移動または CDC セッションの実行時に発生する可能性のあるランタイムエラーやその他の予期しないエラーを回避するために、IBM i システムで特定のシステム値を正しく設定する必要があります。

以下のシステム値を設定します。

QCCSID - コード化された文字セット ID

PowerExchange でメタデータ情報を正しく処理するには、IBM のガイドラインに従って QCCSID システム値を設定する必要があります。

システムにインストールされた言語に基づき QCCSID を設定します。2 バイトの文字セット (DBCS) システムでは、QCCSID を混合 CCSID に設定します。非 DBCS システムでは、QCCSID を 1 バイト文字セット (SBCS) の CCSID に設定します。詳細については、IBM Knowledge Center の Web サイトを参照してください。

QCCSID がシステムの正しい値ではなくデフォルト値の 65535 を使用できるようにした場合、DB2 テーブルにアクセスしようとすると、PowerExchange メタデータ要求が次のようなメッセージとともに失敗します。

SQL0332 - Character conversion between CCSID 1200 and CCSID 65535 not valid.

このエラーは、マルチバイト値を格納できるように列を GRAPHIC として定義した場合に、マルチバイト CCSID システムで発生します。

QSHRMEMCTL - 共有メモリ制御

PowerExchange は、メモリマッピング機能を使用して実行中のタスク間で情報を受け渡します。この機能を使用するには、QSHRMEMCTL を 1 に設定します。

IBM i へのフルインストールのタスクフロー

IBM i で PowerExchange のフルインストールを実行するには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了 チェ ック	タスク	必須またはオプ ション
	「手順 1.PowerExchange ライブラリの IASP グループの設定」 (ページ 201)	IASP の使用に必須
	「手順 2.PowerExchange ライブラリの作成」 (ページ 201)	必須
	「手順 3.リストアのための保存ファイルの作成」 (ページ 201)	必須
	「手順 4.バイナリ実行可能ファイルの転送」 (ページ 201)	必須
	「手順 5.インストールライブラリのリストア」 (ページ 202)	必須
	「手順 6.ライセンスキーファイルの編集」 (ページ 202)	必須
	「手順 7.PowerExchange 環境の作成」 (ページ 202)	必須
	「手順 8.オブジェクトの所有権の変更 (オプション)」 (ページ 206)	オプション
	「手順 9.リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリの作成 (オプション)」 (ページ 206)	オプション
	「手順 10. PowerExchange ユーザー権限の設定」 (ページ 206)	必須
	「手順 11.インストールのテスト」 (ページ 207)	推奨

PowerExchange の IBM i へのインストール

IBM i で PowerExchange のフルインストールを行うには、以下の手順を実行します。

インストール手順では、次の変数を使用しています。

- *condlib* は、要約ファイルなどの PowerExchange Condense ファイルを含むライブラリです。
- *datalib* は、PowerExchange データライブラリです。
- *dtllib* は、PowerExchange ソフトウェアライブラリです。
- *pwxusr* は、PowerExchange を実行するユーザー ID です。

これらの変数をインストールで使用するライブラリの名前とユーザーに置き換えます。

すべてのライブラリは、System Auxiliary Storage Pool (ASP 1)、またはデバイス名によって識別される Independent Auxiliary Storage Pool (IASP) のいずれかに存在する必要があります。

ヒント: テストや本番稼働などで複数の PowerExchange リリースを実行する場合は、各リリースを別のライブラリにインストールします。このようにすると、複数のリリースが共存し、インストール中の新規リリースで既存のリリースを上書きすることを防ぐことができます。

手順 1. PowerExchange ライブラリの IASP グループの設定

Independent Auxiliary Storage Pool (IASP) 内の PowerExchange を実行する場合、Auxiliary Storage Pool (ASP) グループに PowerExchange ライブラリが含まれるように指定する必要があります。

注: すべての PowerExchange ライブラリは、System Auxiliary Storage Pool (ASP 1)、またはデバイス名によって識別される Independent Auxiliary Storage Pool のいずれかに存在している必要があります。

```
SETASPGRP ASPGRP(asp_device)
```

手順 2. PowerExchange ライブラリの作成

この手順では、PowerExchange ソフトウェアの *dtllib* ライブラリを作成します。

dtllib ライブラリを作成するには、以下のコマンドを発行します。

```
CRTLIB LIB(dtllib) AUT(*CHANGE)CRTAUT(*CHANGE)
```

デフォルトでない場合は、CRTAUT(*CHANGE)を含めます。

フラットファイルまたはシーケンシャルファイルをデータのソースまたはターゲットとして i5/OS システムで使用する場合は、以下のコマンドを入力してデータマップのライブラリを作成します。

```
CRTLIB stdatamaps
```

注: データマップのライブラリに異なる名前を指定する場合は、*datalib* ライブラリの DBMOVER コンフィギュレーションファイルの DMX_DIR パラメータにその名前を指定する必要があります。

PowerExchange を Independent Auxiliary Storage Pool (IASP) の中で実行する場合は、代わりに以下のコマンドを発行します。

```
CRTLIB LIB(dtllib) AUT(*CHANGE) CRTAUT(*CHANGE) ASP(*ASPDEV) ASPDEV(asp_device)
```

手順 3. リストアのための保存ファイルの作成

この手順では、保存ファイルを作成して PowerExchange が配信する保存ファイルを格納します。

保存ファイルを作成するには、以下のコマンドを発行します。

```
CRTSAVF FILE(library/save_file_name)
```

このファイルは、QGPL/libres など任意のライブラリに作成できます。

注: 以前のリリースの PowerExchange では、コードページのサポートに必要な ICU オブジェクトが含まれる個別の保存ファイルが配信されました。現在は、これらの ICU オブジェクトは PowerExchange ソフトウェアと同じ保存ファイルに含まれます。PowerExchange でのコードページのサポートの詳細については、『*PowerExchange* リファレンスマニュアル』を参照してください。

手順 4. バイナリ実行可能ファイルの転送

この手順では、Windows マシンのターゲットディレクトリから、前の手順で作成した IBM i の保存ファイルに IBM i 保存ファイルを転送します。

PowerExchange では、PowerExchange for IBM i インストールのために以下の自己解凍式 zip ファイルが提供されます。

```
pwxxvrm_i5os.exe
```

vrm 変数は、PowerExchange のバージョンおよびリリース番号を表します。

zip ファイルを解凍する場合は、Windows マシンでファイルを解凍するターゲットディレクトリを指定する必要があります。Windows で zip ファイルを解凍すると、ターゲットディレクトリには以下のオブジェクトが作成されます。

```
pwxxvrm_i5os
```

このオブジェクトは、PowerExchange ソフトウェアが含まれる IBM i 保存ファイルです。

バイナリモードの FTP を使用して、Windows マシンのターゲットディレクトリから、前の手順で作成した IBM i の保存ファイルに IBM i 保存ファイルを転送します。

手順 5. インストールライブラリのリストア

この手順では、前の手順で FTP を使用して IBM i に転送した保存ファイルをリストアします。

バイナリ保存データを転送した後、以下のコマンドを使用して、FTP プロセスによって更新された保存ファイルを表示します。

```
DSPSAVF FILE(library/save_file_name)
```

保存されたライブラリに表示された値を以下のコマンドの SAVLIB パラメータに使用して、前の手順で IBM i に転送した保存ファイルをリストアします。

```
RSTLIB SAVLIB(DTLvrmm) DEV(*SAVF) SAVF(library/save_file_name) RSTLIB(dtllib) MBROPT(*ALL) ALWOBJDIF(*ALL)
FRCOBJCVN(*YES)
```

DTLvrmm は、保存ファイルが含まれるライブラリです。vrmm は、そのライブラリのバージョン、リリース、変更レベルです。変更レベルには、GA (general availability) または HF*n* (hotfix) などのリリースタイプを含めることができます。SAVLIB パラメータに、リリースタイプを含む完全な名前を含める必要があります。

IASP を使用して PowerExchange をインストールおよび実行することができます。そのためには、RSTASPDEV パラメータを使用して、オブジェクトをリストアする IASP の詳細を指定する必要があります。以下の例は、RSTASPDEV パラメータを持つ RSTLIB 構文を示します。

```
RSTLIB SAVLIB(DTLvrmm) DEV(*SAVF) SAVF(library/save_file_name) RSTLIB(dtllib) MBROPT(*ALL) ALWOBJDIF(*ALL)
FRCOBJCVN(*YES) RSTASPDEV(asp_device)
```

RSTLIB コマンドが完了した後、以下のコマンドを使用して保存ファイルを削除できます。

```
DLTF File(library/save_file)
```

手順 6. ライセンスキーファイルの編集

ライセンスキーファイルを編集して、新しくインストールした PowerExchange ソフトウェアにキーを追加します。PowerExchange を実行するには、ライセンスキーが必要です。

dtllib/LICENSE(KEY)ファイルのライセンスキーを入力します。ファイルは PowerExchanger リスナプログラム dtllst と同じライブラリにあります。ファイルの単一レコードメンバを 64 バイトのライセンスキーを使用して更新し、ライセンスキーは 4 バイトごとにハイフンで区切ります。以下に例を示します。

```
1234-ABCD-1234-EF01-5678-A9B2-E1E2-E3E4-A5F1-A9B2-1234-E3D4-95F1
```

手順 7. PowerExchange 環境の作成

この手順では、CRTPWXENV コマンドを使用して PowerExchange 環境を作成します。

PowerExchange 環境には以下のライブラリが含まれます。

- *dtllib*。PowerExchange ソフトウェアライブラリ。
- *datalib*。キャプチャ登録のための CCT ファイルなどのデータファイルが含まれるライブラリ、PowerExchange 構成パラメータ、および LISTENER、DTLOS_MSQG の各メッセージキュー。
- *condlib*。PowerExchange Condense による CDC 専用のライブラリ。このライブラリには、PowerExchange Condense 要約ファイル、ロックファイル、CFGCOND(CAPTPARM)コンフィギュレーションメンバ、および CHECKPOINT、CMDHANDLER、COLLECTOR、CONDENSE、CONTROLLER、DUMP の各メッセージキューが含まれます。PowerExchange では、通常の操作の間に、このライブラリのファイルが削除されます。このため、Informatica グローバルカスタマサポートに問い合わせずにこのライブラリに自分のファイルを置かないでください。

- *cpplib*. 抽出マップが含まれているライブラリ。このライブラリは、CDC 処理の場合にのみ必要です。

C RTPWXENV コマンドが、必要な権限を持つユーザープロファイルで実行されることを確認します。詳細については、「[ユーザー ID の要件](#)」 (ページ 44) を参照してください。CDC のリモートジャーナルを使用する場合は、ユーザープロファイルがローカルシステムとリモートシステムの両方で必要な権限を持つことを確認します。

1. 次のコマンドを発行します。

```
ADDLIB LIB(dtllib) POSITION(*FIRST)
```

2. C RTPWXENV コマンドを発行して PowerExchange 環境を作成します。C RTPWXENV コマンドで指定するパラメータは、CDC 処理を使用するのバルクデータ移動機能のみを使用するの、および *dtllib* を IASP にリストアしたかどうかによって決まります。

DB2 データベースと同じシステム上のジャーナルレシーバから変更データをキャプチャする場合は、以下のコマンド構文を使用します。

```
C RTPWXENV DESC('user_description')
DATALIB(datalib) CONDLIB(condlib)
ASPDEV(*NONE) CRTSYSOBJ(*YES) CPXLIB(cpplib)
JRNEXTSEQ(nnnn) RMTOSLEVEL(*LOCAL)
```

リモートジャーナルレシーバから変更データをキャプチャする場合は、以下のコマンド構文を使用します。

```
C RTPWXENV DESC('user_description')
DATALIB(datalib) CONDLIB(condlib)
ASPDEV(*NONE) CRTSYSOBJ(*YES) CPXLIB(cpplib)
JRNEXTSEQ(nnnn) RMTASPDEV(*NONE)
RMRDBDIRE(database_name)
RMTSYSNAME(host_name) RMTOSLEVEL(os_level)
```

バルクデータ移動操作のみを実行する場合は、以下のコマンド構文を使用します。

```
C RTPWXENV DESC('user_description')
DATALIB(datalib) CONDLIB(*NONE)
ASPDEV(*NONE) CRTSYSOBJ(*YES)
```

dtllib を IASP にリストアした場合、C RTPWXENV コマンドの ASPDEV パラメータに ASP デバイスの名前を指定します。以下に例を示します。

```
C RTPWXENV DESC('user_description')
DATALIB(datalib) CONDLIB(condlib)
ASPDEV(asp_device) CRTSYSOBJ(*YES)
CPXLIB(cpplib) JRNEXTSEQ(nnnn)
RMTOSLEVEL(*LOCAL) EXTPGMLIB(exitlib)
```

以下の表に、C RTPWXENV コマンドのパラメータを示します。

パラメータ	有効な値	説明
ASPDEV	1～10 文字	<i>dtllib</i> が存在する ASP デバイスの名前。すべての PowerExchange ライブラリが同じ ASP デバイスに存在する必要があります。 デフォルトは *NONE です。
CONDLIB	1～10 文字	構成ソースファイル、チェックポイントのデータファイル、圧縮ファイル、メッセージキュー、および PowerExchange ジャーナルレシーバの削除出口プログラムとそのジャーナルなどのオブジェクトが含まれる PowerExchange Condense ライブラリ。
CPXLIB	1～10 文字	抽出マップファイルが含まれる PowerExchange キャプチャライブラリ。 デフォルトは *NONE です。

パラメータ	有効な値	説明
CRTSYSOBJ	次の表を参照。	-
DATALIB	1～10 文字	構成ソースファイル、キャプチャ登録のデータファイル、圧縮ファイル、メッセージログファイル、メッセージキュー、および PowerExchange ジョブの説明などのオブジェクトが含まれる PowerExchange データライブラリ。
DESC	1～25 文字	PowerExchange で <i>datalib</i> 、 <i>condlib</i> 、および <i>cpxlib</i> の各ライブラリを作成するときに使用される簡単な説明。
EXTPGMLIB	1～10 文字	PowerExchange ジャーナルの削除出口プログラムライブラリを指定します。 デフォルトは*NONE です。ASPDEV パラメータも指定しない場合は、デフォルトが使用されます。
JRNEXTSEQ	1000～9999	出口点 QIBM_QJO_DLT_JRNRV について PowerExchange ジャーナルレシーバの削除出口プログラムの登録に使用される一意の 4 桁の数字。 システムで使用されていない値を指定します。出口点に対して現在登録されている数を決定するには、WRKREGINF コマンドを使用してからオプション 8 を選択します。 デフォルトは 1000 です。
RMTASPDEV	最大長は 10 文字	リモートジャーナル環境で、CRTPWXENV コマンドが、ソーステーブルメタデータにアクセスするための SQL パッケージおよび SQL ビューが含まれる dtllib および datalib ライブラリのみを作成する ASP デバイスの名前。この ASP デバイスは、CRTPWXENV コマンドを実行する場所から離れたところにあり、プライマリ PowerExchange 環境を作成します。 CDC のリモートジャーナルレシーバを使用する予定があり、ローカルシステムで ASP を使用してリモートの PowerExchange リスナがテーブルメタデータにアクセスするために必要なファイルを格納する場合のみ、このパラメータを含めます。 デフォルトは*です。
RMTOSLEVEL	*LOCAL V7R1M0 V7R2M0 V7R3M0	リモートマシンで実行される IBM i バージョンを指定します。取得するメタデータがリモートマシンにあるライブラリに格納されているテーブル用である場合のみ、このパラメータを含めます。このコマンドが実行されているマシン上にメタデータがある場合は、オペレーティングシステムのリリースレベルが特定されます。 このパラメータにより、システムメタデータテーブルに対してソフトウェアが構築するビューを制御します。

パラメータ	有効な値	説明
RMTRDBDIRE	最大長は 18 文字	リモートジャーナル環境で、CDC の DB2 ソーステーブルが含まれるローカルシステム上の DB2 データベースの名前。この値は、"Work with Relational Database Directory Entries"関数 (WRKRDBDIRE) を使用して、IBM i に定義されている必要があります。 CDC にリモートジャーナルレシーバを使用する予定の場合のみ、このパラメータを含めます。 デフォルトは*LOCAL です。
RMTSYSNAME	最大長は 68 文字	リモートジャーナル環境で、CDC 用の DB2 ソーステーブル、ローカルジャーナルおよびローカルジャーナルレシーバが含まれる IBM i ホストの名前。ローカルシステムとも呼ばれます。この値は、"Work with TCP/IP Host Table Entries"関数を使用して、IBM i に定義されている必要があります。 CDC にリモートジャーナルレシーバを使用する予定の場合のみ、このパラメータを含めます。 デフォルトは*NONE です。

以下の表に、PowerExchange を自身のサブシステムで実行できるように CRTSYSOBJ パラメータによって作成されるオブジェクトを示します。

オブジェクトタイプ	説明	オブジェクト名	ライブラリ
*CLS	PowerExchange ジョブのランタイム属性を定義するクラス。	DTLLIST	<i>datalib</i>
*OUTQ	PowerExchange ジョブからスプールされるすべてのファイル出力を格納する出力キュー。	<i>datalib</i>	QGPL
*SBSD	この環境ですべての PowerExchange ジョブの実行に使用されるサブシステムの説明。	<i>datalib</i>	QGPL
*JOBQ	サブシステムの説明に関連付けられたジョブキュー。	<i>datalib</i>	QGPL
*JOBQ	この環境で作成されたすべてのシステムオブジェクトおよびライブラリを使用するジョブを示したジョブの説明。	DTLLIST	<i>datalib</i>

3. QGPL ライブラリでデフォルトで作成されたオブジェクトをほかのライブラリに移動する場合は、該当するコマンドを使用します。

IASP の代替ライブラリにオブジェクトを移動できない場合があります。IBM i では、出力キューやジョブキューなど、特定のオブジェクトタイプが IASP 内のライブラリに常駐することは許可されません。

以下の例に、代替ライブラリ *newlib* にオブジェクトを移動するために使用できるコマンドを示します。

```
ENDSBS SBS(datalib)
MOVOBJ OBJ(save_file_library/datalib) OBJTYPE(*OUTQ) TOLIB(newlib)
MOVOBJ OBJ(save_file_library/datalib) OBJTYPE(*JOBQ) TOLIB(newlib)
MOVOBJ OBJ(save_file_library/datalib) OBJTYPE(*SBSD) TOLIB(newlib)
CHGJOB JOB(datalib/DTLLIST) JOBQ(newlib/datalib) OUTQ(newlib/datalib)
RMVJOBQ SBSD(newlib/datalib) JOBQ(save_file_library/datalib)
ADDJOBQ SBSD(newlib/datalib) JOBQ(newlib/datalib) MAXACT(*NOMAX)
SEQNBR(1) MAXPTY1(*NOMAX) MAXPTY2(*NOMAX)
MAXPTY3(*NOMAX) MAXPTY4(*NOMAX) MAXPTY5(*NOMAX) MAXPTY6(*NOMAX)
MAXPTY7(*NOMAX) MAXPTY8(*NOMAX) MAXPTY9(*NOMAX) STRSBS SBSD(newlib/datalib)
```

注: CRTPWXENV コマンドで CRTSYSOBJ(*NO)を指定する場合は、PowerExchange リスナを実行するサブシステムおよびジョブキューが複数のコンカレントジョブをサポートできることを確認します。CDC を使用している場合、サブシステムおよびジョブキューは、少なくとも 6 つのコンカレントジョブをサポートしている必要があります。

手順 8.オブジェクトの所有権の変更（オプション）

出荷されたライブラリから作成され、PowerExchange ソフトウェアおよびライブラリをインストールしたユーザー ID によって所有されるオブジェクトの所有権を変更できます。PowerExchange を実行するユーザー ID とは異なるユーザー ID を使用してインストールする場合はこの手順を実行します。

dtllib ライブラリおよび *datalib* ライブラリのユーザー ID を変更するには、以下のコマンドを入力します。

```
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('dtllib' 'pwxusr')
call pgm(datalib/chgallobj) parm('datalib' 'pwxusr')
```

PowerExchange CDC で使用される *condlib* ライブラリおよび *cpxlib* ライブラリのユーザー ID を変更するには、以下のコマンドを入力します。

```
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('condlib' 'pwxusr')
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('cpxlib' 'pwxusr')
```

手順 9.リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリの作成（オプション）

この手順は、DB2400C DB2 Call Level Interface (CLI) アクセスメソッドを使用する場合にのみ実行します。

以下のコマンドを使用して、リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリまたは作業するエントリを指定します。

WRKRDBDIRE

リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリは、PowerExchange Listener を実行している IBM i システム上のローカルデータベースまたはリモートデータベースです。このコマンドは、*LOCAL を含む、IBM i システム上のすべてのローカルおよびリモートエントリを指定します。

リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリが存在しない場合は、作成する必要があります。CLI アクセス方法では、リレーショナルデータベースのディレクトリのエントリが、アクセスするデータベースの名前を取得する必要があります。

手順 10. PowerExchange ユーザー権限の設定

PowerExchange リスナとユーザーのセキュリティオプションを設定します。

PowerExchange リスナを対話式で実行する場合は、このトピックで示すコマンドを実行する前に、現在のジョブのライブラリリストに *dtllib* および *datalib* ライブラリが含まれていることを確認します。

セキュリティのためにリモートプラットフォームから提供されるユーザー ID およびパスワードを PowerExchange リスナで使用する場合は、DBMOVER 構成ファイルの SECURITY 文の最初のパラメータをゼロ以外の値に変更します。

ジョブを実行する前に、*pwxusr* ユーザー ID に以下のオブジェクトの *EXECUTE 権限があることを確認します。

- QSYGETPH
- QSYRLSPH
- QWTSETP
- QCLRPGLMI

これらのオブジェクトに EXECUTE 権限を付与するには、次のコマンドを実行します。

```
GRTOBJAUT OBJ(QSYGETPH) OBJTYPE(*PGM) AUT(*EXECUTE) USER(pwxsusr)
GRTOBJAUT OBJ(QSYRLSPH) OBJTYPE(*PGM) AUT(*EXECUTE) USER(pwxsusr)
GRTOBJAUT OBJ(QWTSETP) OBJTYPE(*PGM) AUT(*EXECUTE) USER(pwxsusr)
GRTOBJAUT OBJ(QCLRPGMI) OBJTYPE(*PGM) AUT(*EXECUTE *READ) USER(pwxsusr)
```

また、PowerExchange Listener を実行するには、*pwxsusr* ユーザー ID はすべてのユーザープロファイルに対する *READ 権限を持っている必要があります。*READ 権限を付与するには、以下のコマンドを実行します。

```
GRTOBJAUT OBJ(remote_id) OBJTYPE(*USRPRF) AUT(*READ) USER(pwxsusr)
```

手順 11. インストールのテスト

インストールをテストするには、IBM i インストーラで指定した PowerExchange ソフトウェアライブラリにある PowerExchange DTLINFO ユーティリティを使用します。

DTLINFO ユーティリティを実行するには、以下のコマンドを入力します。

```
CALL DTLINFO
```

以下の情報が、現在の PowerExchange のインストールについて表示されます。

- バージョン
- リリースおよびリリースレベル
- ビルドの日付と時刻

DTLINFO の詳細については、『*PowerExchange ユーティリティガイド*』を参照してください。

IBM i に PowerExchange をインストールした後に

PowerExchange のインストールが完了したら、以下のインストール後の作業を実行します。

- 以前のリリースからアップグレードする場合、新機能および変更内容については『*PowerExchange リリースガイド*』を参照してください。
- 必要に応じて、前回のリリースから PowerExchange のデータファイルと構成ファイルをコピーします。
- バルクデータ移動または変更データキャプチャ (change data capture: CDC) を行う前に、PowerExchange を構成します。

PowerExchange の設定の詳細については、以下の文書を参照してください。

- バルクデータ移動の設定については、『*PowerExchange バルクデータ移動ガイド*』を参照してください。
- CDC の設定については、『*PowerExchange 変更データキャプチャガイド for i5/OS*』を参照してください。
- DBMOVE コンフィギュレーションファイルのパラメータについては、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照してください。

PowerExchange を設定し、オプションで PowerExchange データをコピーしたら、PowerExchange Listener、および必要に応じて PowerExchange Condense を開始できます。PowerExchange タスクの起動および停止の詳細については、『*PowerExchange コマンドリファレンス*』を参照してください。

PowerExchange の IBM i でのアップグレード

IBM i にインストールされている既存の PowerExchange をアップグレードするには、フルインストールの手順に従います。詳細については、『[IBM i へのフルインストールの実行](#)』（ページ 198）を参照してください。また、以下の事前準備タスク、アップグレードの考慮事項、事後の必須タスクも確認してください。

アップグレードする前に IBM i で PowerExchange を

IBM i で PowerExchange をアップグレードする前に、以下の事前準備タスクを実行します。

1. PowerExchange のすべてのタスクを停止します。
2. PowerExchange インストールライブラリ *dtllib* をバックアップします。このライブラリには、PowerExchange のプログラム、メッセージ、およびライセンスキーが含まれます。CFG ファイルの DBMOVER メンバで DMX_DIR 文を指定した場合は、指定される場所にライブラリをバックアップします。
3. CDC を使用する場合は、以下のライブラリをバックアップします。
 - データライブラリ (*datalib*)。インストールプロセス時に CRTPWXENV コマンドを実行すると、PowerExchange によってこのライブラリが作成されます。このライブラリには、CFG ファイル、キャプチャ登録を含む CCT ファイル、および PowerExchange Condense ファイルに関する情報を含んでいる CDCT ファイルが含まれています。
 - 抽出ライブラリ (*cpplib*)。このライブラリには、抽出マップが含まれています。CFG ファイルの DBMOVER メンバの CPX_DIR 文は、このライブラリを指します。
4. PowerExchange Condense を使用する場合は、CFG ファイルの CAPTPARM メンバで以下のパラメータにより参照されるディレクトリをバックアップします。
 - CHKPT_BASENAME。PowerExchange Condense がチェックポイントファイルの生成に使用するライブラリとベースファイルの名前。
 - COND_DIR。このパラメータで指定されるライブラリには、PowerExchange Condense によって作成された要約ファイルが含まれています。

注: PowerExchange Condense をコールドスタートする場合は、CHKPT_BASENAME パラメータおよび COND_DIR パラメータで指定されるライブラリをバックアップする必要はありません。

PowerExchange の IBM i でのアップグレード

PowerExchange には IBM i のアップグレードインストールオプションはありません。フルインストールを実行する必要があります。フルインストールを実行する場合、以下のライブラリの新しいコピーを含めた新しい PowerExchange 環境を作成します。

- STDATAMAPS。データマップのデフォルト PowerExchange ライブラリ名。DBMOVER 構成ファイルで DMX_DIR 文を使用して、データマップライブラリの名前を上書きできます。
- ソフトウェアライブラリ (*dtllib*)。PowerExchange ソフトウェアおよびリソースファイルを含んでいるライブラリ。IBM i インストーラの実行時に、既存のライブラリを使用するかまたはライブラリを作成できます。
- データライブラリ (*datalib*)。IBM i インストーラを実行すると、PowerExchange によってこのライブラリが作成されます。このライブラリには、CFG ファイル、キャプチャ登録を含む CCT ファイル、および PowerExchange Condense ファイルに関する情報を含んでいる CDCT ファイルが含まれています。
- 抽出ライブラリ (*cpplib*)。CDC 抽出マップの PowerExchange ライブラリ名。IBM i インストーラを実行すると、PowerExchange によってこのライブラリが作成されます。CFG ファイルの DBMOVER メンバで CPX_DIR 文を定義して、抽出ライブラリの名前を上書きできます。
- Condense ライブラリ (*condlib*)。要約ファイルを含んでいる PowerExchange Condense ライブラリ。IBM i インストーラを実行すると、PowerExchange によってこのライブラリが作成されます。CFG ファイルの CAPTPARM メンバで COND_DIR パラメータを定義するかまたはインストーラで、PowerExchange Condense ライブラリの名前を上書きできます。PowerExchange Condense は、変更データをこのライブラリの要約ファイルに書き込みます。
- チェックポイントファイル。PowerExchange Condense のチェックポイントファイル。ライブラリおよびこれらのファイルのファイル名プレフィックスを指定するには、CFG ファイルの CAPTPARM メンバで CHKPT_BASENAME パラメータを指定します。

IBM i で PowerExchange をアップグレードした後に

PowerExchange のアップグレードが完了したら、以下のインストール後の作業を実行します。

- 新機能および変更内容については『*PowerExchange リリースガイド*』を参照してください。
- 必要に応じて、前回のリリースから PowerExchange のデータファイルと構成ファイルをコピーします。
- 必要に応じて、バルクデータ移動または変更データキャプチャ（change data capture: CDC）を行う前に PowerExchange を構成します。

IBM i への前回のリリースからのデータファイルと構成ファイルのコピー

PowerExchange のインストールが完了した後で、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップ、構成ファイル、および PowerExchange Condense のチェックポイントファイルと要約ファイルを、以前のリリースから新しい PowerExchange 環境のライブラリにコピーまたは移行できます。この情報をコピーすることにより、既存のすべてのバルクおよび CDC マップの定義、および変更データを含む要約ファイルを維持します。

バルクデータ移動の場合、*datalib*/CFG ファイルの DBMOVER メンバを以前のリリースのインストールから新しいインストールにコピーします。

CDC では、PowerExchange Condense をウォームスタートして使用する場合、次のライブラリ、ファイル、およびメンバを以前のリリースのインストールから新しいインストールにコピーします。

- *datalib*/CFG ファイルの DBMOVER メンバ。
- *condlib* ライブラリの FULL および PART で始まるすべてのファイル（変更データを含む要約ファイルを含む）。
- PowerExchange Condense チェックポイントファイル。CFG ファイルの CAPTPARM メンバの CHKPT_BASENAME パラメーターが参照します。

新しい環境で PowerExchange Condense をコールドスタートする場合、*datalib*/CFG ファイルの DBMOVER メンバをコピーするだけです。新たなファイルをコピーする必要はありません。

DTLURDMO ユーティリティを使用して、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップを移行できます。詳細については、[「データマップ、キャプチャ登録、および抽出マップの移行」](#)（ページ 38）を参照してください。

PowerExchange の構成

必要に応じて、バルクデータ移動または変更データキャプチャ（change data capture: CDC）を行う前に PowerExchange を構成します。

構成情報の詳細については、以下の文書を参照してください。

- バルクデータ移動の設定については、『*PowerExchange バルクデータ移動ガイド*』を参照してください。
- CDC の設定については、『*PowerExchange CDC ガイド (i5/OS 版)*』を参照してください。
- DBMOVER コンフィギュレーションファイルのパラメータについては、『*PowerExchange リファレンスマニュアル*』を参照してください。

PowerExchange を設定した後、PowerExchange Listener、および必要に応じて PowerExchange Condense をリスタートできます。PowerExchange タスクの起動および停止の詳細については、『*PowerExchange コマンドリファレンス*』を参照してください。

追加のリスナの構成

PowerExchange for IBM i を使用すると、複数のリスナを同じ環境から同時に実行できます。デフォルトでは、PowerExchange リスナは、インストールプロセス中に作成する LISTENER と呼ばれるメッセージキューを介

してサーバーと通信します。追加のリスナでは、リスナを開始する前にメッセージキューを作成する必要があります。

次のコマンドをテンプレートとして使用して、メッセージキューを作成します。

```
CRTMSGQ MSGQ(DATALIB/MYMSGQNAM) TEXT('My PWX Listener Message Queue') FORCE(*NO) SIZE(3 1 *NOMAX) AUT(*CHANGE)
ALWALR(*NO) CCSID(*HEX) MSGQFULL(*SNDMSG)
```

メッセージキューは、インストールプロセス中にデータライブラリに指定されたものと同じライブラリに作成する必要があります。Windows 上の IBM i インストーラまたは CRTPWXENV コマンドのいずれかを使用して作成します。

IBM i へのホットフィックスのインストール

IBM i の既存の PowerExchange 環境にホットフィックスをインストールして、修正と拡張機能のバンドルを取得します。ホットフィックスのバージョンとインストールされた PowerExchange のバージョンは同じである必要があります。

PowerExchange では、ホットフィックスをインストールしても、データマップ、キャプチャ登録、抽出マップなどの新しいデータライブラリは作成されません。したがって、これらのデータセットの内容を移行する必要がないため、インストール処理が簡単になります。

PowerExchange ホットフィックスは累積的であるため、利用可能な最新のホットフィックスをインストールすると、同じ PowerExchange バージョンの以前のホットフィックスでの変更を取得できます。

IBM i にホットフィックスをインストールする前に

ホットフィックスをインストールする前に、以下の事前準備タスクを実行します。

1. PowerExchange のすべてのタスクを停止します。
2. PowerExchange ソフトウェアライブラリ (*dtllib*) をバックアップします。このライブラリには、PowerExchange のプログラム、メッセージ、およびライセンスキーが含まれます。CFG ファイルの DBMOVER メンバで DMX_DIR 文を指定した場合は、指定される場所にライブラリをバックアップします。
3. CDC を使用する場合は、以下のライブラリをバックアップします。
 - データライブラリ (*datalib*)。IBM i インストーラまたは CRTPWXENV コマンドを実行すると、PowerExchange によってこのライブラリが作成されます。このライブラリには、CFG ファイル、キャプチャ登録を含む CCT ファイル、および PowerExchange Condense ファイルに関する情報を含んでいる CDCT ファイルが含まれています。
 - 抽出ライブラリ (*cpplib*)。このライブラリには、抽出マップが含まれています。CFG ファイルの DBMOVER メンバーの CPX_DIR 文は、このライブラリを指します。
4. PowerExchange Condense を使用する場合は、CFG ファイルの CAPTPARM メンバで以下のパラメータにより参照されるディレクトリをバックアップします。
 - CHKPT_BASENAME。PowerExchange Condense がチェックポイントファイルの生成に使用するライブラリとベースファイルの名前。
 - COND_DIR。このパラメータで指定されるライブラリには、PowerExchange Condense によって作成された要約ファイルが含まれています。

注: PowerExchange Condense をコールドスタートする場合は、CHKPT_BASENAME パラメータおよび COND_DIR パラメータで指定されるライブラリをバックアップする必要はありません。

IBM i へのホットフィックスのインストールのタスクフロー

IBM i に PowerExchange のホットフィックスをインストールするには、以下のタスクチェックリストを使用します。

完了 チェ ック	タスク	必須またはオプション
	「手順 1. Windows での保存ファイルの抽出」 (ページ 211)	必須
	「手順 2. IBM i システムへの保存ファイルの転送」 (ページ 211)	必須
	「手順 3. 保存ファイルのリストア」 (ページ 212)	必須
	「手順 4. ライセンスキーファイルの確認」 (ページ 212)	必須
	「手順 5. インストールされたプログラムの署名の更新」 (ページ 212)	ホットフィックスのリリース ノートで提示されている場合 のみ必須
	「手順 6. リモートジャーナル用の DB2 パッケージの更新」 (ページ 213)	リモートシステム上の DB2 for IBM i メタデータにアクセ スして CDC を実行するよう IBM i を設定した場合は必須
	「手順 7. オブジェクトの所有権の変更 (オプション)」 (ページ 213)	オプション
	「手順 8. ホットフィックスがインストールされていることの確認」 (ページ 213)	推奨
	「手順 9. PowerExchange タスクの再起動」 (ページ 213)	必須

IBM i へのホットフィックスのインストール

IBM i に PowerExchange のホットフィックスをインストールするには、次の手順を完了します。

手順 1. Windows での保存ファイルの抽出

PowerExchange では、ホットフィックスの保存ファイルを含む単一の自己解凍式実行可能 zip ファイルが提供されます。zip ファイルは、CD イメージの patches/i5os ディレクトリにあります。zip ファイル名のフォーマットは以下のとおりです。

```
pxwvrm_hotfixn_i5os.exe
```

変数 *vrm* は、バージョン、リリース、変更レベル、および変数 *n* はホットフィックスの番号です。具体的なファイル名の詳細については、PowerExchange のホットフィックスの『*PowerExchange* リリースノート』を参照してください。

自己解凍式 zip ファイルを Windows コンピュータの一時ディレクトリに解凍します。

手順 2. IBM i システムへの保存ファイルの転送

IBM i システムで以下の IBM i コマンドを入力して、ホットフィックスインストールファイルを格納する保存ファイルを作成します。

```
CRTSAVF library/save_file
```

次に、FTP を使用して、ホットフィックスインストールファイルを BINARY モードで IBM i システムの保存ファイルに転送します。

手順 3.保存ファイルのリストア

以下の IBM i コマンドを入力して、PowerExchange インストールライブラリ *dtllib* に保存ファイルをリストアします。

```
RSTOBJ OBJ(*ALL) SAVLIB(DTLvrm) DEV(*SAVF) SAVF(library/save_file) RSTLIB(dtllib) MBROPT(*ALL) ALWOBJDIF(*ALL)
FRCOBJCVN(*YES)
```

以下の表に、RSTOBJ コマンドの一部のパラメータに入力する必要のある変数を示します。

パラメータ	説明
<i>DTLvrm</i>	保存されたライブラリの名前。 PowerExchange では、DTL に PowerExchange の version.release.modification 番号を付けたものが使用されます。ライブラリ名を表示するには、DSPSAVF コマンドを使用します。
<i>library/ save_file</i>	ホットフィックスインストールファイルを格納したライブラリおよび保存ファイルの名前。
<i>dtllib</i>	PowerExchange インストールライブラリの名前。

手順 4.ライセンスキーファイルの確認

PowerExchange インストールディレクトリにライセンスキーを格納する場合は、ライセンスキーが適切であることと、ホットフィックスのインストールによる影響を受けていないことを確認します。必要に応じて、バックアップから LICENSE ファイルの KEY メンバをコピーします。

新しいリリースへの移行を簡単に行うには、PowerExchange インストールライブラリ以外のライブラリにライセンスキーを格納します。起動コマンドのオプションを使用して、ライセンスキーおよび DBMOVER ファイルの場所を指定できます。PowerExchange の起動コマンドのオプションの詳細については、「[i5/OS 上の PowerExchange 起動コマンドのファイルパラメータ](#)」(ページ 190)を参照してください。

手順 5.インストールされたプログラムの署名の更新

UPDPWXENV コマンドを実行すると、PowerExchange プログラムの各 IBM i 署名が、サービスプログラムの署名と一致するように更新されます。ホットフィックスの『PowerExchange リリースノート』に、コマンドを実行する必要があるかどうかが記載されています。

- ▶ PowerExchange プログラムの署名を更新するには、以下のコマンドを発行します。

```
UPDPWXENV PWXLIB(dtllib) DATALIB(datalib) SAVF(library/save_file)
```

以下の表に、UPDPWXENV コマンドのパラメータに入力する必要のある変数を示します。

変数	変数の説明
<i>dtllib</i>	PowerExchange インストールライブラリの名前。
<i>datalib</i>	PowerExchange データライブラリの名前。
<i>library/save_file</i>	ホットフィックスインストールファイルを格納したライブラリおよび保存ファイルの名前。

手順 6. リモートジャーナル用の DB2 パッケージの更新

CDC のためにリモートシステム上の IBM i メタデータの DB2 にアクセスするように IBM i システムを構成した場合は、リモートジャーナル用に DB2 パッケージを更新します。

- ▶ パッケージを更新するには、IBM i コンソールから CRTPWXPKG コマンドを発行します。

以下の構文を使用します。

```
CRTPWXPKG DTLLIB(dtllib) DATALIB(datalib) RMTRDBDIRE(database_name)
```

手順 7. オブジェクトの所有権の変更（オプション）

フルインストールの実行時にオブジェクトの所有権を変更した場合は、手順 7 のフルインストールで使ったコマンドを再度実行して、ホットフィックスによって提供されるオブジェクトの所有権を変更する必要があります。

dtllib ライブラリおよび *datalib* ライブラリのユーザー ID を変更するには、以下のコマンドを実行します。

```
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('dtllib' 'pwxusr')  
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('datalib' 'pwxusr')
```

condlib ライブラリおよび *cpxlib* ライブラリのユーザー ID を変更するには、以下のコマンドを実行します。

```
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('condlib' 'pwxusr')  
call pgm(dtllib/chgallobj) parm('cpxlib' 'pwxusr')
```

CHGALLOBJ プログラムを実行してオブジェクト所有者を変更する場合は、WRKREGINF 出力を確認し、ADDEXITPGM コマンドを使用して、CHGALLOBJ 呼び出しで指定されたものと同じユーザープロファイルを出口プログラムで指定してください。

手順 8. ホットフィックスがインストールされていることの確認

DTLINFO ユーティリティを実行して、PowerExchange の現在のバージョンとホットフィックスレベルが一致することを確認します。

DTLINFO ユーティリティの詳細については、『PowerExchange ユーティリティガイド』を参照してください。

手順 9. PowerExchange タスクの再起動

ホットフィックスのインストール前に停止した PowerExchange タスクを再起動します。

このようなタスクには、PowerExchange Listener タスクや PowerExchange Condense タスクなどがあります。

詳細については、『PowerExchange コマンドリファレンス』を参照してください。

索引

A

*ALLOBJ 権限 (i5/OS) [44](#), [199](#)
Adabas
 メンテナンス要件 [24](#)
 [Adabas パラメータ] ページ
 z/OS Installation Assistant [151](#)
AIX
 サポートされるデータソース [18](#)
 サポートされるバージョン [18](#)
Amazon RDS
 サポートされるデータソース [22](#)
APF リスト
 PowerExchange LOADLIB ライブラリの追加 [107](#), [126](#)

B

BINLIB ライブラリ
 アップグレード [115](#)
 フルインストール [97](#)
 ホットフィックス [134](#)
BKUPDSUE ジョブ
 データセットをバックアップするには [126](#)
BKUPDSUN ジョブ
 データセットをバックアップするには [125](#)

C

CCT ライブラリ [93](#), [194](#)
CDCT ライブラリ [93](#), [194](#)
[CDC 共通パラメータ] ページ
 z/OS Installation Assistant [149](#)
CDC セッション
 リスタートポイントの確立 [179](#)
CDC セッションのリスタート [179](#)
CDEP ライブラリ [93](#), [194](#)
CRTPWXENV コマンド (IBM i) [202](#)

D

Data Archive
 PowerExchange ODBC バージョンとの相互運用性 [33](#)
[Datacom パラメータ] ページ
 z/OS Installation Assistant [153](#)
DATAMAPS ライブラリ [93](#), [194](#)
DB2 for z/OS
 メンテナンス要件 [24](#)
[DB2 CDC パラメータ] ページ
 z/OS Installation Assistant [156](#)
[DB2 パラメータ] ページ
 z/OS Installation Assistant [154](#)
DBRMLIB ライブラリ [93](#)
DBRM ライブラリ [93](#)

DD 文 [196](#)
DS01 VSAM データセット [93](#), [194](#)
DTLCAMAP ライブラリ [93](#), [194](#)
DTLDATA ライブラリ [93](#)
DTLDEMO ライブラリ [93](#)
DTLEXPL ライブラリ [93](#)
dtlinfo.exe
 Windows [87](#)
DTLINFO ジョブ
 z/OS [139](#)
dtlinfo ユーティリティ、UNIX [75](#)
DTLLOG ライブラリ [93](#)
DTLMSG ライブラリ [93](#)

F

FTP バイナリファイル (IBM i) [201](#)

H

HP/UX
 サポートされるバージョンとデータソース [19](#)

I

i5/OS
 PowerExchange 環境 [188](#)
 ライセンスキーファイル [202](#)
IASP (IBM i) [202](#)
IBM i
 *ALLOBJ 権限 [44](#), [199](#)
 *SECADM 権限 [44](#), [199](#)
 CRTPWXENV コマンド [202](#)
 IASP [202](#)
 PowerExchange ライブラリの IASP グループの設定 [201](#)
 PowerExchange ライブラリの作成 [201](#)
 QSECOFR 権限 [44](#), [199](#)
 インストールのテスト [53](#), [207](#)
 インストールライブラリのリストア [202](#)
 オブジェクトの所有権の変更 [52](#), [206](#)
 サポートされるデータソース [17](#)
 サポートされるバージョン [17](#)
 ユーザーの認証 [52](#), [206](#)
 ライブラリ保存ファイルの作成 [201](#)
 リレーショナルデータベースディレクトリエントリの作成 [52](#), [206](#)
[IDMS CDC パラメータ] ページ
 z/OS Installation Assistant [159](#)
[IDMS パラメータ] ページ
 z/OS Installation Assistant [158](#)
IMS
 メンテナンス要件 [24](#)
[IMS CDC パラメータ] ページ
 z/OS Installation Assistant [161](#)

[IMS パラメータ] ページ
z/OS Installation Assistant [160](#)
IMS 同期 CDC
10.4.0 での CRG.LOAD ライブラリ更新 [183](#)
CRG.LOAD ライブラリ [184](#), [185](#)
Independent Auxiliary Storage Pool (IASP) [202](#)
Informatica Intelligent Cloud Services データ統合
PowerExchange のバージョンとの相互運用性 [31](#)
Informatica サービス
PowerExchange との相互運用性バージョン [31](#)

J

JOB CARD メンバ
RUNLIB ライブラリで [106](#), [125](#)

L

LD_LIBRARY_PATH 環境変数、UNIX [66](#)
LIBPATH 環境変数、UNIX [66](#)
Linux
PowerExchange 環境 [190](#)
サポートされるデータソース [19](#), [20](#)
サポートされるバージョン [19](#), [20](#)
LOADCRG ライブラリ [93](#)
LOADLIB ライブラリ [93](#)
LOGGERNAME ライブラリ [93](#)

M

[MQ Series パラメータ] ページ
z/OS Installation Assistant [162](#)
MySQL CDC
CDC 用の MySQL の設定 [68](#)

O

ODBC ドライバ [82](#)
Oracle
環境変数 [66](#)

P

PATH 環境変数、UNIX [66](#)
PowerCenter
PowerExchange との相互運用性バージョン [30](#)
アップグレード [179](#)
PowerExchange
IBM i でのユーザーの認証 [52](#), [206](#)
IBM i へのインストール [44](#)
IBM i への手動インストール [198](#)
Linux へのインストール [61](#)
ODBC ドライバのインストール [82](#)
UNIX へのインストール [61](#)
Windows でのアンインストール [88](#)
Windows でのインストール [78](#)
アップグレード [35](#)
概要 [12](#)
環境 [187](#)
複数のバージョンの使用 [33](#)
PowerExchange 10.2 HotFix 1
アップグレードに関する考慮事項 [184](#)

PowerExchange 10.2 HotFix 2
アップグレードに関する考慮事項 [183](#)
PowerExchange 10.4
アップグレードに関する考慮事項 [183](#)
PowerExchange 10.5
アップグレードに関する考慮事項 [181](#)
PowerExchange 10.5.1
アップグレードに関する考慮事項 [181](#)
PowerExchange CDC Publisher
PowerExchange のバージョンとの相互運用性 [32](#)
PowerExchange for IBM i
インストールの概要 [43](#)
PowerExchange for z/OS
アップグレード [112](#)
インストールの概要 [90](#)
フルインストール [91](#)
PowerExchange Navigator
サポートされる Windows のバージョン [22](#)
PowerExchange ODBC と
Data Archive バージョンとの相互運用性 [33](#)
PowerExchange 10.2
アップグレードに関する考慮事項 [185](#)
PowerExchange LOADLIB ライブラリ
APF リストへの追加 [107](#), [126](#)
PowerExchange コンポーネント
PowerExchange ECCR [13](#)
PowerExchange Navigator [14](#)
PowerExchange エージェント [13](#), [14](#)
PowerExchange リスナ [13](#)
PowerExchange ロgger (z/OS 用) [14](#)
PowerExchange ロgger (Linux、UNIX、Windows 用) [14](#)
PowerExchange と
Informatica サービスのバージョンとの相互運用性 [31](#)
PowerCenter のバージョンとの相互運用性 [30](#)
PowerExchange CDC Publisher のバージョンとの相互運用性 [32](#)
現在の Informatica Intelligent Cloud Services データ統合との相互運用性 [31](#)
PowerExchange のインストール
IBM i [44](#)
IBM i (手動インストール) [198](#)
Linux [61](#)
UNIX [61](#)
Windows [78](#)
PowerExchange のコンポーネント [12](#)
PRILOG ライブラリ [93](#), [194](#)
PROCLIB ライブラリ [93](#), [194](#)
PWX_HOME 環境変数
UNIX [66](#)

Q

QSECOFR 権限 (i5/OS) [44](#), [199](#)

R

RACF プロファイル、MVS セキュリティ [90](#)
[Runlib JCL の作成] ページ
z/OS Installation Assistant [164](#)
RUNLIB ライブラリ
JOB CARD メンバの編集 [106](#), [125](#)
アップグレード [115](#)
フルインストール [97](#)
ホットフィックス [134](#)

S

*SECADM 権限 (i5/OS) [44](#), [199](#)
SAMPLIB ライブラリ [93](#)
SECLOG ライブラリ [93](#), [194](#)
SETUBL1E ジョブ
 バルクデータ移動ライブラリをインストールするには [125](#)
SETUBL1N ジョブ
 バルクデータ移動ライブラリをインストールするには [125](#)
SETUCC1E ジョブ
 CDC のデータセットを割り当てるには [126](#)
SETUCC1N ジョブ
 CDC のデータセットを割り当てるには [126](#)
SETUPBLK JCL ジョブ
 サブミット [106](#)
SETUPCC2 ジョブ
 PowerExchange ロgger の EDMUPARM の作成 [110](#)
 アクティブログデータセット定義 [110](#)
 実行 [110](#)
SHLIB_PATH 環境変数、UNIX [66](#)
Solaris
 サポートされるデータソース [20](#)
 サポートされるバージョン [20](#)
SR2OUT ライブラリ [93](#)
SR2TOTAL ライブラリ [93](#)
SRCLIB ライブラリ [93](#)

T

TAR ファイル
 UNIX への転送 [64](#), [74](#)
TAR ファイルの転送
 UNIX [64](#), [74](#)

U

UDB
 環境変数 [66](#)
UNIX
 PowerExchange 環境 [190](#)
 サポートされるバージョン [18](#)
UNIX インストール
 コードページ [66](#)

V

VSAM データセット [93](#), [194](#)
[VSAM パラメータ] ページ
 z/OS Installation Assistant [163](#)

W

Windows
 PowerExchange Navigator でサポートされるバージョン [22](#)
 PowerExchange 環境 [190](#)
 z/OS コンポーネントの準備 [97](#), [116](#), [135](#)
 環境変数 [81](#)
 サポートされるデータソース [21](#)
 サポートされるバージョン [18](#), [21](#)
 ディスク容量の要件 [79](#)
Windows へのインストール
 概要 [77](#)

Z

z/OS
 PowerExchange 環境 [193](#)
 サポートされるデータソース [23](#)
 サポートされるバージョン [23](#)
 セキュリティ [90](#)
z/OS Installation Assistant
 [Adabas パラメータ] ページ [151](#)
 [CDC 共通パラメータ] ページ [149](#)
 [Datacom パラメータ] ページ [153](#)
 [DB2 CDC パラメータ] ページ [156](#)
 [DB2 パラメータ] ページ [154](#)
 [IDMS CDC パラメータ] ページ [159](#)
 [IDMS パラメータ] ページ [158](#)
 [IMS CDC パラメータ] ページ [161](#)
 [IMS パラメータ] ページ [160](#)
 [MQ Series パラメータ] ページ [162](#)
 [Runlib JCL の作成] ページ [164](#)
 [VSAM パラメータ] ページ [163](#)
 アップグレード [117](#)
 [既存のパラメータのインポート] ページ [167](#)
 [グローバルパラメータ] ページ [140](#)
 [グローバルパラメータ] ページ (既存のデータセット名を使用したアップグレード) [168](#)
 [グローバルパラメータ] ページ (ホットフィックス) [175](#)
 参照 [139](#)
 [新リリースへのアップグレード] ページ [166](#)
 [全般的なパラメータ] ページ [145](#)
 [データセットグループの詳細] ページ [142](#), [170](#), [172](#), [176](#)
 [データセット名] ページ (新しいデータセット名を使用したアップグレード) [169](#)
 [データソース] ページ [148](#)
 [バックアップデータセットの選択] ページ [174](#)
 [パラメータの確認] ページ [168](#)
 [ファイル転送ステータスの表示] ページ [166](#)
 フルインストール [98](#)
 [フルインストール] ページ [140](#)
 ホットフィックスインストール [136](#)
 [ホットフィックスインストール] ページ [175](#)
 [メインフレームへのファイルの転送] ページ [165](#)
z/OS コンポーネントの準備
 Windows [97](#), [116](#), [135](#)
z/OS 上の PowerExchange
 フルインストール [92](#)
 ホットフィックスインストール [133](#)
 ホットフィックスのインストール [132](#)
 前提条件となるタスク [91](#)

あ

新しいデータセット名
 z/OS のアップグレード [123](#)
アップグレード
 PowerExchange for z/OS [112](#)
 z/OS Installation Assistant [117](#)
 シナリオ [36](#)
 計画 [35](#)

い

インストールのテスト
 IBM i [53](#), [207](#)
 UNIX [69](#)
 Windows [83](#)
 z/OS [139](#)

インストールファイル
ダウンロードしたインストールファイルの構成 [33](#)
インストールライブラリのリストア (IBM i) [202](#)

お

オブジェクトの所有権の変更 (IBM i) [52](#), [206](#)
オペレーティングシステムの要件 [17](#)

か

環境変数
LD_LIBRARY_PATH、UNIX [66](#)
LIBPATH、UNIX [66](#)
Linux、UNIX、および Windows [192](#)
PATH、UNIX [66](#)
PWX_HOME、UNIX [66](#)
SHLIB_PATH、UNIX [66](#)
パス (Windows) [81](#)

き

[既存のパラメータのインポート] ページ
z/OS Installation Assistant [167](#)
起動コマンド
i5/OS [190](#)
Linux、UNIX、および Windows [193](#)

く

[グローバルパラメータ] ページ
z/OS Installation Assistant [140](#)
[グローバルパラメータ] ページ (新しいデータセット名を使用したアップグレード)
z/OS Installation Assistant [169](#)
[グローバルパラメータ] ページ (既存のデータセット名を使用したアップグレード)
z/OS Installation Assistant [168](#)
[グローバルパラメータ] ページ (ホットフィックス)
z/OS Installation Assistant [175](#)

こ

コードページ、UNIX [66](#)
コンフィギュレーションファイル
i5/OS [189](#)

さ

サブミット
SETUPBLK JCL [106](#)
サポートされるデータソース
AIX [18](#)
Amazon RDS [22](#)
HP/UX [19](#)
IBM i [17](#)
Linux [19](#), [20](#)
Solaris [20](#)
Windows [21](#)
z/OS [23](#)
サポートされるバージョン
AIX [18](#)

サポートされるバージョン (続く)

Amazon RDS [22](#)
Db2 for i [17](#)
HP/UX [19](#)
Linux [18–20](#)
Solaris [20](#)
UNIX [18](#)
Windows [18](#), [21](#)
z/OS [23](#)

し

実行
SETUPCC2 ジョブ [110](#)
[新リリースへのアップグレード] ページ
z/OS Installation Assistant [166](#)

せ

セキュリティ、MVS [90](#)
設定パラメータ
i5/OS [189](#)
Linux、UNIX、および Windows [192](#)
設定ファイル
Linux、UNIX、および Windows [192](#)
[一般的なパラメータ] ページ
z/OS Installation Assistant [145](#)

つ

追加
APF リストへの PowerExchange LOADLIB ライブラリ [107](#), [126](#)

て

ディスク容量の要件
Windows [79](#)
データ、PowerExchange [187](#)
[データセットグループの詳細] ページ
z/OS Installation Assistant [142](#), [170](#), [172](#), [176](#)
[データセットソース] ページ
z/OS Installation Assistant [148](#)
データソースの要件 [17](#)

は

パス環境変数
Windows での検証 [81](#)
[バックアップデータセットの選択] ページ
z/OS Installation Assistant [174](#)
[パラメータの確認] ページ
z/OS Installation Assistant [168](#)
バルクデータ移動ライブラリ
インストール [125](#)

ふ

[ファイル転送ステータスの表示] ページ
z/OS Installation Assistant [166](#)
フルインストール
PowerExchange for z/OS [91](#)
z/OS Installation Assistant [98](#)

フルインストール (続く)
z/OS 上の PowerExchange [91](#), [92](#)
[フルインストール] ページ
z/OS Installation Assistant [140](#)

へ

編集
RUNLIB の JOBCARD メンバイブラリ [106](#), [125](#)

ほ

ホットフィックス
z/OS 上の PowerExchange へのインストール [132](#)
ホットフィックスインストール
z/OS Installation Assistant [136](#)
z/OS 上の PowerExchange [133](#)
[ホットフィックスインストール] ページ
z/OS Installation Assistant [175](#)

め

[メインフレームへのファイルの転送] ページ
z/OS Installation Assistant [165](#)
メンテナンス要件
Adabas [24](#)
DB2 for z/OS [24](#)
IMS [24](#)

ゆ

ユーザーの認証
IBM i [52](#), [206](#)

よ

要件
オペレーティングシステム [17](#)
データソース [17](#)

ら

ライセンスキー [29](#)

ライセンスキーファイル (i5/OS) [202](#)
ライセンスファイル
i5/OS [188](#)
Linux、UNIX、および Windows [192](#)
z/OS [194](#)

ライブラリ (z/OS)
BINLIB [97](#), [115](#), [134](#)
CCT [93](#), [194](#)
CDCT [93](#), [194](#)
CDEP [93](#), [194](#)
DATAMAPS [93](#), [194](#)
DBRM [93](#)
DBRMLIB [93](#)
DTLCAMAP [93](#), [194](#)
DTLDATA [93](#)
DTLDEMO [93](#)
DTLEXPL [93](#)
DTLLOG [93](#)
DTLMSG [93](#)
ERDS01 [93](#)
ERDS02 [93](#)
LOAD [93](#)
LOADCRG [93](#)
LOADLIB [93](#)
PRILOG [93](#), [194](#)
PROCLIB [93](#), [194](#)
RUNLIB [97](#), [115](#), [134](#)
SAMPLIB [93](#)
SECLOG [93](#), [194](#)
SR2OUT [93](#)
SR2TOTAL [93](#)
SRCLIB [93](#)
USERLIB [93](#), [194](#)
ライブラリ保存ファイル (IBM i) [201](#)
ライブラリ保存ファイルの作成 (IBM i) [201](#)

り

リレーショナルデータベースディレクトリエントリ
作成 [52](#)
リレーショナルデータベースディレクトリエントリの作成 [52](#), [206](#)

ろ

ロードライブラリ [93](#)
ログファイル
Linux、UNIX、および Windows [192](#)